

魔法科高校の絹旗最愛

型破 優位

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

科学と魔術が入り交じる第三次世界大戦末期。忍び込んだ魔術師に勝負を挑んだ少女はその人生の幕を閉じることになる。

そして、願った。

——1度だけでも学校に行ってみたい、と。

2023年6月13日 本編完結

2023年12月10日 ダイジェスト、IFルート随時投稿

目次

入学編

願い	1
突然転移	4
学校生活	9
入学式	14
二科生	20
争い	33
追跡者	47
風紀委員	58
新入部員勧誘	69
隠密	78
少女探偵団	89

邂逅	101
冷戦	116
接触	126
授業	137
襲撃	145
抹殺	156
九校戦編	
休息	172
テスト	181
謀略	192
交渉	202
練習試合	212
承諾	222

クラウド・ボール	367
快進撃	356
知らない実力	344
新人戦開幕	332
根性勝負	319
観察	309
九校戦開幕	299
温泉	288
老師	279
懇親会	263
出発	253
九校戦準備会合	243
人気者	234

決勝トーナメント	385
戦略	399
意地	411
決着	425
真実と虚実編	
もう一つの決着	438
虚像と現実	450
突然の来訪	465
ターニングポイント	483
絹旗最愛	496
過去	515
愛	530
横浜騒乱	542

呂剛虎

557

親愛なる友へ、最上の愛を込めて

572

ダイジエスト

来訪者編く邂逅と吸血鬼く

588

入学編

願い

学生が人口の八割を占め、超能力の開発を進めている科学の最先端都市、『学園都市』の閑散な研究所群の一つ。その中には少女が、本来その年齢ではなるはずもない満身創痍で横たわっていた。四肢はまともに動かせず、何処も動かせない。痛みはないが全身骨折以上の損傷を受けたのは間違いない。まさしく虫の息。

「これは……超まずい……ですな……」

息も絶え絶え。だが、呼吸の早さと心臓の鼓動が比例していない。心臓が酸素を欲しがるが、彼女の口からは普段よりも少量の酸素しか供給してくれなかった。周囲には誰もおらず、誰か来る望みもない。

「ですが……超私らしいです……」

だが、彼女はいつかはこうなることを自覚していた。彼女は学園都市でも七人しかない超能力者^{レベル5}の中でも最強の能力者の防御能力を継承する大能力者^{レベル4}にして、暗部の一人。幼少の頃から生きるためにその地位に身を委ね、抗い、生きた。

そして今日。学園都市に侵入した『科学』と相反する『魔術』側の魔術師を倒せと上からの指令があり、ここに向かった彼女だったが、結果は惨敗。本当に手で払われただけ。たったそれだけなのに、彼女は立つことすらもままならない瀕死のダメージを負った。

しかし、それは仕方のないことだ。彼女が対峙したのは自分よりレベルが一つ上の超能力者、それこそ自分のオリジナルの能力を持つ都市最強の能力者を瞬殺するほどの実力者だ。勝てという方が無理である。

精一杯生きた結果だ。彼女の今のこの状況に後悔は無かった。しかし、一つだけ。一度でも良いから体験してみたいことを、口に出した。

「学校に……超行ってみたかった……です……」

幼少の頃の事件によって暗部にならざるを得なかった彼女にとって、表の世界にある

学校はどうしても羨望の眼差しを向けてしまう存在だった。それも学生が八割を占める学園都市ならば、尚更だ。

彼女の意識が朦朧としてくる。もう声を出すのも、呼吸することすら億劫だ。あれだけ酸素を欲していた心臓も、その鼓動はゆつたりと、だが確実に弱くなつていく。だけでも、気持ち的には悪くはない。運命から解放される気がしたからだ。

彼女の名前は絹旗最愛^{きぬはたさいあい}。最も愛し、最も愛されるという意味が込められた名前だが、誰からも愛されることもなく、勝手に敷かれた闇へのレールを足掻きながら走り抜け、最後は誰にも看取られず、誰にも知られることなく、静かに息を引き取った。

突然転移

——眠い。

仕事のある日ならこれを無視して起きなければいけないのだが、今日は休日。身体にムチ打ってまで起きる必要は無い。昨日の魔術師との死闘で気力も体力も消耗しているのだから、今は睡魔に任せてもう一眠りしよう。

そんな考えに至った最愛だが、ふと、違和感。

——何故、生きている。

睡魔は何処へやら、一気に意識が覚醒した絹旗は勢いよく起き上がり、周囲を見渡す。木造ならではの内装をしたそこは、暗部御用達の病院ではなかった。綺麗に片付けられ、寂しいとは思わない程度には家具が置かれた部屋は、とても生活感のあるもの。

防御膜も展開している。生きている。ということは、誰かが助けてくれたということなのだろうか。

ベッドから起き上がり、助けてくれた恩人とはいえ初対面。警戒も怠らずに部屋を出る。チラッと見えた窓からの風景から分かったが、ここは二階。足音を立てれば下にいる誰かに気づかれるかもしれないため、慎重に、だが確実に捜索をしていく。

二階は誰もいない。なら一階。

警戒は崩さず、階段を降りていく。防御膜は常に展開しているから不意打ちは大丈夫なはずだが、魔術師の例があるため今では気休め程度だ。

一階に到着。まずは近くの部屋へ。ドアが閉まつてるため中は見れないが、人がいる気配はない。そつとドアを開け、中を見る。

キッチンと一人で使うなら丁度良いサイズのテーブル。そして椅子が一つ。助けてくれた人物は一人暮らしたと推察できる。

部屋の中を見渡し、再びテーブルに視線が移る。上に何か置いてあるのだ。

本来なら見ることを遠慮するものだが、彼女はそんな謙遜で生きていける場所に住んではいなかった。念のため隠れるような場所を把握してから、机の上に置いてある封筒を一つ取る。

どうやら取っても問題なかったようだ。

封筒には『最愛ちゃんへ』と書かれている。ここの住人が残してくれた線が高いが、そうなるこここの住人は暗部関連の人物である可能性が高い。

最大限の警戒をしつつ、身を潜めながら封を開け、中に入っている一枚の手紙を読んだ。



——意味が分からない。

持った感想はこれだ。

意味不明な点多過ぎて混乱している。

まず一つ目。手紙は確かに自分宛であり、差出人が誰なのか分からないのはよくあることだが、内容が不思議だった。

『最愛ちゃん一高入学おめでとう。お祝い金と今月分のお金は振り込んでおいたから、通帳確認しておいてね。最愛ちゃんにとっては知らないおじさんかも知れないけど、遠い親戚ではあるのだから遠慮なく家へ遊びに来てても良いんだよ？ 雫もほのかちゃんも、最愛ちゃんのことを歓迎するよ。』

北山潮』

一高入学おめでとう、だけなら潜入調査なのかと思えるのだが、どうやらそうでもない。お金の話は置いて、遠い親戚も何も自分には親戚がない。いたら暗部などに身を落としていない。そして雫とほのか。誰だこの二人は。

そして一つ分かったこともある。それは、ここは自分の家だということだ。どういうわけか分からないが、文章の内容からしてその可能性は高い。まさか同姓同名で、同性で、たまたまあの場所にいた私を拾ってくれるなんて何光年レベルの奇跡が起きるはずがないのだ。

次に二つ目。ここが何処なのか確認しようと外へ出たところ、すぐにここが学園都市とは似て非なる場所であることがわかった。科学的な意味ではほぼ同じかそれ以上の町並みではあるが、学園都市を象徴する『窓の無いビル』が無いことが証明してくれた。

三つ目。情報収集の途中で見つけた図書館に寄った時だ。まず年号。絹旗がいた時は二十一世紀初頭だったはずなのだが、今は2095年。二十一世紀の終わりだ。そして学園都市の存在。自分は間違いなく学園都市にいたはずなのだが、図書館からはその

一切の情報が取れず、魔術と同じ部類なのか分からない『魔法』についての記述のみだった。

この三点から導きだした絹旗の仮説はこうだ。

——自分が幻惑、精神系統の魔術に掛けられている。

あれほどの魔術師がいるのだ。このぐらいの魔術は難なく発動するだろう。そして、それを防ぐ術が自分には無いことも。しかし、こういうのは必ず糸口がある。今でいうならまず、一高という場所へ行くことだろうか。入学式は明日。それまでにもう少し一高について調べておかなければいけない。そうやって本を漁る最愛の表情は、年相応の表情を浮かべていた。

学校生活

何人もの生徒が校門を潜るなか、その前には他よりも明らかに身長が小さい少女が、だが周りと同じ制服を身に纏い立っている。

「ここが一高。魔術師にしては超悪くないセンスですね。だから制服のセンスについては超だまつといてあげますよ」

誉めて貶すを流れるように行った最愛は、周りに合わせるように校門を通りすぎた。家から駅まで徒歩数分、駅一つ先に一高はあった。

絹旗はあれからさらに調べを進めて、ここがどういう世界なのか、ある程度は把握することができた。どうやらこの世界には科学や魔術といったものはなく、『想子』^{サイオン}と呼ばれるものを流用して発動する『魔法』というものがあるらしい。そして今から行く一高とは、『国立魔法大学付属第一高校』と言い、日本で九つしかない魔法科高校の一つだ。

そして最愛はその二科生として入学させられていた。

そこまでの経緯は絹旗自身把握しておらず、魔法についての知識は無いがこれでも大能力者。軍隊で戦術的価値を見出だされるほどの実力者であり、それに伴って頭も良い。ある程度の理論については既に理解はしているため、授業も問題ないと考えている。一つ問題があるとすれば、魔法を行使するにあたり、その作業を円滑に行ってくれる『CAD』と呼ばれる物だろう。

CAD。術式補助演算機と呼ばれるもので、デバイス、アシスタンス、ホウキ法機など呼び方は様々であるが、勿論最愛はそんなものを持ち合わせていない。昨日の今日でそんなものが買えるはずなのだ。

というわけで最愛は勿論手ぶら。それこそ、本当に何も持ち合わせてはいない。なんとか見つけたネットカフェで一高の入学式の日時と経路は調べたが、持ち物は特に記載が無かったのが一に挙げられる。

CADをどうしようかと悩みながら生徒の波に流されている最愛。だが、突如立ち止まり、後ろを見た。見定めるような視線。それも二人ほどの視線を肌を感じたからだ。暗部ということもあり、人の気配や自分に向けられる視線にはとても敏感になっている。次々とやってくる生徒の中を注視。そして、見つけた。

隠すこともなく自分を見つめる二人の少女。一人は二つ縛りの茶髪の少女。もう一人は黒髪で無表情な少女。勿論面識などない。しかし二人は自分の顔を見るや否や、こちらへと小走りで向かってきた。意味がわからない。

「超誰ですか。私は貴女達を超知りませんけど」

あまり友好的な文言ではない。だが、何故か二人は顔を見合わせて頷いている。

「あの、絹旗最愛さんだよね？」

「……超そうですけど」

どうやら向こうは知っていたようだ。最愛自身も自分の名前と容姿さえ分かればこの中から自分を見つけることは容易いと分かっているが、如何せんこの「やつぱり！」という表情をしている二人が誰だか分からない。

「私は光井ほのかって言います」

「私は北山雫」

「潮^{うしお}さんから名前だけでも聞いていませんか？」

「あー、超分かりました」

理解した。昨日読んだ時に出てきた名前が三つ。間違えようがない。

「今日絹旗さんの家まで迎えに行つたのですが、居なかつたのでここで探していたんです。そしたらたまたま見かけたって感じです」

「でも、写真でしか見たこと無くて後ろ姿だけだから話しかけづらかつた」

あの見定めめるような視線は、まさしく見定めていたということだ。普段使う意味合いと少し違うが。

「超理解しました。知つてると思いますが、私は絹旗最愛。最も愛すると書いて最愛。まあ、超気軽に最愛と呼んでもいいですよ」

「分かつた。私もほのかでいいよ。よろしくね、最愛ちゃん」

「私も雫でいいよ。よろしく」

まさか初日から下の名前で呼び合える知り合いが出来るとは、予想外の幸運だ。高校から、というのは何処か納得はいかないが、こうやって学校生活が始まっていくという実感。今はそれだけでも、最愛には感慨深いものがあった。

「超よろしくお願ひします。ほのか、雫」

入学式

せっかく知り合ったほのかと雫だったが、無情にもすぐに別れることとなってしまった。

それは入学式が行われる講堂での席順に問題があった。

「どうしよう……」

その光景にほのかが思わず呟く。

講堂の席は前も後ろも空いている。

だが、前は一科生、後ろが二科生と綺麗に別れているのだ。見分ける判断は右肩に紋章があるかないかの違いだ。一緒に座るつもりだった三人——主に二人——には、あまりにも大きい障壁となる。そこで最愛がやることは一つ。

「どうするも何も、超決まってるじゃないですか」

一人で後方に座ること。迷うことなく座った絹旗に対して未だに戸惑っているのかと雫。はあ、と一つ溜め息。

「後で超会いましょう。講堂の出口で超待ってますよ」

「うん……ごめんね」

「ありがとう」

最愛に促され渋々といったところではあるが、前方の席に向かう二人を見て最愛は少し疑問に思った。二人が何故そこまでして自分のことを気にかけているのか、という点だ。最愛にとって全くの面識が無い人、それこそ先程会ったばかりのはつきり言う『他人』だ。そして向こうの口振りからして会ったことそのものが初めて。なのはどうしてそこまで気にかけているのか。表の世界ではこれが普通のことなのか。表情には出さないが、理解に苦しむ。

そこで、視線が移った。前方でこちらの方を気にしながら話しているのかと雫——の数列手前。二科生の席で女子二人と話している男子生徒。仕事柄人を見極める能力に長けている最愛の脳が、その男子生徒は一目で「警戒が必要」と警鐘を鳴らしていた。

何者かは、分からない。

だが、疑いの目を向けた瞬間にこちらへ振り向き、無表情でこちらを見つめてくる彼は、やはり警戒するべき対象なのは間違いないかった。



先程知り合った少女二人と他愛もないことを話していた司波達也は、突如として向けられた宜しくない視線の先を見つめた。その先にいたのは高校生とは思えない、それこそ小学生と言われても納得できるほどの小柄な体格をした少女。しかし、雰囲気、自分への警戒の仕方は、例え高校生だとしても纏ってはいけない不穏なもの。

「どうしたの？ 司波くん」

そこで喋りかけてきたのは先程まで一緒に喋っていたショートカットで明るい髪色をした少女、千葉エリカだ。

「いや、高校生にしては身長があまりにも小さいから目についてしまっただけだよ」

「あー、確かに。可愛いね。でもさ、私たちと喋っていたのをやめてあの子を気にするつて、司波くんつてもしかしてロリコン？」

「ちよつと、エリカちゃん！」

初対面の人に対してはかなり失礼な質問。隣の少女、柴田美月もそれは思ったらしく、少し強めの口調で制止をかけたが、それほどの質問で無礼だと思うほどの感情は持ち合わせていないし、彼女の性格からしてもただ気になったことを聞いただけなのだろう。

「もしそうだとしたら、俺はいろんな意味で今ここにいないだろうね」

「あは、そりやそうかも」

あえてノる形で答えた達也に対してエリカはニツと、美月は苦笑しながらこちらを見ており、達也もそれに合わせて少し口を綻ばせた。そこで、司会役の男子生徒が話し始めたため、合わせて静まり返る講堂内。一緒に消えた視線と共に、達也も意識を前へと向けた。



入学式は予想してたものより悪くなかった。補正がかかっているとかではなく、純粹に悪くなかった。最愛のイメージとしては、長々しい校長先生や堅苦しい祝辞が送られるのかと思っていたが、蓋を開ければどうだろう。生徒主体で行われ、一科生と二科生の壁があるとは思えないほどのなんともなごやかな式ではないか。特に印象が強かったのは新入生総代、司波深雪による挨拶。彼女は、自分を美少女と自負している最愛目線でも美少女というにふさわしく、比べられたくないと思ってしまうほどだ。というよりも、入学式の良かったという点の九割は彼女に占められている。勿論、忖度してだ。

そんな入学式を終えて講堂出口。ほのかと雫を待っているのだが、向けられる視線がなんだか気持ち悪かった。相手の視線が気持ち悪いかではなく、慣れない気持ち悪さだ。純粹な視線。どれほど久しぶりに受けたことだろうか。そんな視線のことで悩んでいる最愛を知る由もないほのかと雫は、約束通り講堂出口へとやってきた。

「最愛ちゃんお待たせ」

「別に超待ってませんよ」

「良かった。IDカード取りに行こう」

IDカードとは、学校施設を利用するために必要となるものだ。ついでにその自分のクラスが分かる——のだが、そこでも苦笑ものの出来事が起きていた。

IDカードはどの交付窓口でも手続き可能なのだが、二科生が一科生に譲るように並んでいるのだ。再び起きている差別問題に、ほのかと雫が困った表情で最愛を見つめ、最愛は気にしないとはばかりに流れに乗った。

「今は流れに逆らう必要が超ありませんので、従いましょう」

「うん。何度もごめんね」

「超気にしないでください」

暗部の中でも上位の組織にいた最愛だが、勿論その中でも上下関係があつた。加えて生きる術としてこういう時の対処法については把握している。

何度目かの申し訳なさそうな表情に手を振りつつ、雲行きが怪しくなってきた高校生活に、それでも胸を膨らませていった。

二科生

IDカードを貰った最愛はクラスを確認する。クラスはE組。盗み聞きしたところ、どうやらさつき目があつた男を含む一行もE組のようだ。はあ、と一つ溜め息。ほのかと雫の下へ向かう。

「二人は超何組ですか？」

「あ、最愛ちゃん！ 私たちはA組だよ。最愛ちゃんは？」

「E組です」

「そっか——あ、雫！ あれ見て！」

「うん？」

会話の腰を折つてまで指差された場所。雫と絹旗が同時にその方向を向くと、なるほど、深雪と会長、並びに生徒会役員にその他有象無象。生徒会は今後の予定を決めるといったところだが、有象無象に関してはただ近寄りたいただけだろう。権力者に庶民が媚びを売ると同じだ。

「ほらほのか。話しかけるチャンスだよ」

「ええ!!? あれはさすがに無理だよお……」

どうやらほのかは深雪と話してみたかったらしい。雫に背中を押されながらも、反発して腰を引くほのか。確かにあれは声をかけにくい。しかも、深雪の方はそちらの方で目的を持っている動き方をしている。というよりも、深雪はある一点しか見ていない。迷わず向かう彼女の先には——例の男と女二人のグループ。

「お兄様!」

「お兄様……?」

「お兄様って超言いましたね」

「でも、一科生には他に司波さんはいなかったから、上級生なのかも」

思わぬ単語にほのか、最愛、雫の順番でそれぞれコメントを残しつつ一緒に視線を動かす。なんとかその姿を見ようとぴよんぴよんするほのかと雫。そして隙間から覗いた深雪に直面している男、達也の顔を見てまず二人は「妹に対しては普通な感じ」と評し

たが、右肩の部分に視線を動かして——止まった。

この一高には右肩に花の紋章が施された制服を身に纏う一科生と、何も施されていない二科生があり、その事が原因で花の意味がある一科生と雑草の意味がある二科生という差別的な呼称がある。高校側は勿論禁句として扱っているのだが、そんなものはないも同然だった。

そして達也の肩には、何も施されていない。

新入生総代の兄は、二科生劣等生だったのだ。

最愛としては評価基準に適して居らず無能力者、という前例を知っているためにその系統だと見たときから察してはいたが、ほのかと雫、特にほのかは違う捉え方をしたようだ。

「あの人だ……」

「え？」

「入試の時、すごく無駄のない綺麗な魔法を使う人がいて……さすが魔法科高校だって思ったのよ」

「どうやら、最愛が予想していた二人の捉え方とはまた違ったらしい。」

「それがなんで……二科生ウイードなのよ……ッ」

少なくともショックを抱えたほのか。騒ぎを気にした生徒会長がその場を後にし、その騒ぎの大本である兄妹も何処かに行ってしまったためにその場は解散となったが、そのままA組に連れていくのは良くない、との雫の判断で自由参加のオリエンテーションには行かず帰路についた三人。

そこでふと、最愛が呟いた。

「携帯とCADを超買わないと」

そう、携帯とCADがない。昨日はいろいろ調べていたために手が回らなかったが、ある程度情報は集まったし入学した今急ぐ必要もない。となれば、次は持ち運び式の情報端末とCADだ。

「携帯とCAD?」

「携帯とCADです。連絡手段がないのは超不便ですし、CADがないと超授業できま

せんから」

情報端末がないのは心細い。科学の下で生活していた最愛には尚更だ。昨日確認した通帳には暗部で稼いでいた学園都市の時よりも多額のお金が入っていたため、そこで困ることはないだろう。それはCADを含めても言える。だが、問題は機種にある。正直なところなんでもいいが、少しでも便利な機能があったことに越したことはない。そしてCADについてはほぼ無知だ。そんな訳で、雫とほのかを見つめる最愛。

「……………」

「どうしたの、最愛ちゃん？」

「あ、ちよつと待ってね」

「超了解です?」

携帯とCAD買うのについてきて、という意味での視線だったが、どういう訳か雫がいきなり何処かに電話をかけ始めた。何をしだすのか分からないが、待っててと言われた手前待たないわけにはいかない。

「もしもし？ うん。最愛が携帯とCAD欲しいって。うん。分かった。ありがとう——お父さんが明日の朝までに両方とも家に届けるって」

「……え？」

これにはさすがの絹旗も動揺してしまった。見ず知らず——あくまでも最愛はそう思ってる——相手に対していきなり買つてと言われて携帯を買う人がいるだろうか。しかも、配送のサービス付きだ。

「いや、超ついてきて欲しかっただけなのですが……」

「そうだったの？ まあ気にしないで。CADの調整はまた後日ね」

奢ってもらうつもりは毛頭なく、自腹で買うつもりでいた最愛だったが、よく考えれば通帳のお金は全て雫の父、潮の物。決まった話を断るのも失礼なため、ここは乗っておくことにした。



次の日、昨日届いた携帯に入っていたほのかと雫の連絡先。そこに届いていたメールから家で待つてと言われたのでしつかりと待つていた最愛は、チャイムが鳴ったのを確認して必要最低限の荷物を持つて扉を開ける。

「おはよう、最愛ちゃん」

「おはよう」

「二人とも超お早う御座います」

いたのは勿論ほのかと雫。視界の端に見るからに高級車であろうものが見えることから、それで来たのだろう。外に出て鍵を閉め、雫に案内されて車の中へ。高校まで高級車で移動とはとても良い身分だな、と思いながらも、歩くのは面倒なため感謝しながら乗車。そして数分走り止まった場所は一高最寄りの駅前。校門前に停めると目立つからということなのだろう。最愛としてはここまで車でこれだけでもありがたいため、運転者に感謝の言葉を述べつつ車を降りた。

駅から一高は一本道。前を歩く人々は全員一高の生徒だ。その中に紛れ込むように、三人も歩みを進める。

「そういうえば、携帯とCAD超ありがとうございました。CADは超勝手がわかりませんでしたが」

「いいよ。でも今度家に来てね？ あれは最愛いないと調整ができないから」

「今度超行きます。というか、今日超行つてもいいですか？」

「分かった。なら一緒に帰ろう」

そして話はCADについて。携帯はともかく、CADは他人が買って渡されても調整ができてないため使えない。先に渡されたのは最愛が気に入るのか、という点と雫の家にそのまま直に持っていけるという点があったからだ。最愛としては本当に使うことが出来ればそれで良かったのだが、それはいろんな意味で潮が許さなかった。これにより最愛が北山家に行くことが潮に伝わり、計算通りいつて会えることが分かり大喜びしていたのは本人が知る話ではない。終わったタイミングで、あつと声を漏らしたほか。顔を最愛の方へと向け、

「それで最愛ちゃん、今日は学校内を見学するらしいけど、一緒にいかない？」

ありがたいお誘い。是非肯定したいお誘い。だがそのお誘いは他の一科生が許さな

いだろう。

「超嬉しいですけど、無理ですね。一科生と二科生は超一緒に回らない方が良いと思います」

「あ、そつか……ごめんね……」

一科生と二科生であることを意識させないための発言だとは最愛にも分かっていた。しかしその提案は他の一科生的に受け入れられない。ほのかにも昨日の一件でそれは分かっていた。分かっていたが故に誘ったのだ。結果として断るしかなかった最愛だが、内心は一緒に回ってみたかった。——別にこの二人とではなく、せつかくの学校生活だからという理由ではあるが。

それから若干気まずい雰囲気の流れたまま一高についてしまい、せめて昼食だけでも、と食い下がったほのかに首を縦に振ってから最愛はクラスへと向かった。クラスは既に雑然としており、昨日のオリエンテーションで仲良くなったであろう人と話している姿がポツポツとみられる。

だが最愛にそんな人はいない。自分の席に座るべく場所を確認すると、ガタイの良い男子生徒の前だということが判明した。見たところ、自分が知っている顔は例の男と一

緒にいた活発そうなショートカットの明るい髪色をした女子生徒と、この世界では珍しいらしいメガネをかけた少女。二人とも恨めしいほど立派なモノを持っているが、恨めしいと思えば思うほど自分が虚しくなってしまうため、心を落ち着かせ視線を戻して席へと着いた。

授業を受けるためには履修登録をする必要があるらしいのだが、生憎やり方はわからない。二科生に先生がつくはずもないので誰かに聞かなければいけないのだが……これまた生憎。そんな人はいない。

「おはよー」

「ッ!?!」

いきなり声をかけられた。絹旗の身体はビクッ！と跳ね上がり、声の位置とは真反対のところまで一気に距離を取ってしまった。

「わああ、すつごい身のこなし」

警戒心丸出しで見たその方向には、ゴメンゴメンというジェスチャーをして笑ってい

る明るい髪色の女子生徒と、オロオロしているメガネの女子生徒。どちらも今しがた確認したばかりの二人だ。

「驚かせるつもりは全くなかったの。いきなり声かけてゴメンね？ あ、私は千葉エリカよ。エリカでいいわ」

「……あ！ 私は柴田美月です。美月と呼んでください」

「……絹旗最愛。最愛でいいですよ」

「それじゃあ最愛と呼ぶね。美月と席が近かったから喋りかけちゃったんだけど、迷惑だった？」

「……超構いませんが」

言動が伴っていないような体勢ではあるが、エリカはエリカで自分に非があることは認めているらしいのであえて口に出すことはしない。ついで言うと、最愛は最愛で何故こんなな身構えているのか理解ができなかった。ここは魔法を行使する生徒がいるとはいえ、飽くまで学校だ。それこそ学園都市の学校となんら変わらない。学園都市の学生は、ほとんどが表の人間だ。しかも裏の人間には独特な雰囲気がある。この世界で言えば総代の兄が当てはまり、その妹が若干と言ったところだろう。それが目の前の二人か

らは感じられない。

ちやんと頭の中を整理すればするほど、今警戒しているのがバカらしくなってきた。肩の力を抜き席に戻る最愛。その様子を見てエリカはニコツと微笑む。

「警戒を解いてくれたようでよかったです！ 本当にゴメンね？」

「いえ。こちらが勝手に超反応しただけです。エリカに非はありません」

「あは、そう言ってくれると嬉しいな」

話してみるとただの活発な女子生徒ではないか。美月もホツと一息ついてから相槌を打つように会話に参加している。席は最愛の席から二つ後ろ、右に一つの場所らしいので、本当にただ近いから話しかけた——というわけでもないのは会話の雰囲気からして分かつている。

この二人はほのかや雫と同じ表の人間。力量はともかくとして、裏に触れていない純真な少女たちだ。そんな彼女らに裏を見分ける力などありはしないし、あるとしたら話しかけたりなどしなかつただろう。もつといえ、彼にも話しかけなかつたはずだ。

「あ、司波君オハヨー」

「おはようございます」

「ああ、おはよう二人とも」

最愛が唯一裏の住人と確信している人物。

今しがた教室に入ってきたクラスメイト、司波 達也には。

争い

何処の世界も、明確なレベル区分があると上の者はどうしてもその実力を誇示したくない。しかもそういう者に限って、中途半端に実力を持つてしまっている。勿論、目的があつてあえて誇示する者も居り、実際に学園都市にもいたが、それはその先にある自己保身という目的があつてだ。

「いい加減に諦めたらどうなんですか？ 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう。別に、深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんかしていないじゃないですか。一緒に帰りましたら、ついてくればいいんです。何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか」

ではこの状況はどちらだろうかと言えば、当然前者である。普段は大人しい美月と一科生の男子生徒が言い合いをしているこの状況。隣にいる雫は無表情で、ほのかは止めなければ、という意志が見え隠れしている状態だ。二科生である最愛が一科生側にいるこの状況は何とも摩訶不思議ではあるが、一科生側は深雪に執着しているためその違和

感に気がつかない。二科生の面子は、ちよくちよく視線を持つてきては戻している。

そもそも何故こんなことが起きてしまったのか。始まりは昼食の時だった。達也や最愛の後ろの席であった西城レオンハルトとの自己紹介を終え校内の見学をしばらく行つた後、最愛は約束通り雫とほのかと食事を取ろうとしていたのだが、そこに追加でいたのは深雪とその他大勢。ほのかと雫は深雪との座席の位置関係もあつて仲良くなつたらしいのだが、深雪を狙っているその他大勢の男子生徒が深雪を強制的に昼食へと誘い、仕方なく一緒に食堂へ。その移動中に最愛が疎ましい目で見られたの言うまでもないが、一行が食堂へと着いたとき幸か不幸かそこに居たのはエリカに美月、レオ、達也だった。当然深雪は達也の下へと駆け出してしまい、場を弁えているほのかと雫は別のところで食べることにしたのだが、あろうことか男子生徒はまだ食べている途中である達也たちに対して席を空けるように要求したのだ。そこに深雪の意思は介在しない。騒ぎになることを危惧した達也が席を空けたことによりその場はなんとか収まったが、この件はまだ終わらなかつた。

二回目は午後の授業見学中。通称『射撃場』と呼ばれる遠隔魔法用実習室では、生徒会長、七草真由美が所属する三年A組の実技が行われていた。

彼女は遠隔精密魔法の分野で十年に一人の英才と呼ばれ、その実技を見ようと大勢の

新入生が射撃場に詰め掛けたが、見学できる人数は限られており、一科生に遠慮する二科生が多い中で達也たちは堂々と最前列に陣取ったのだ。それに対して一科生が不満を覚えないはずがない。

そんな成り行きがあり、下校時刻。ついに両者の堪忍袋の緒が切れた。

美月が先程のような容赦ない正論を叩きつけるも、一科生は「彼女に相談することがある」とか「少し時間を貸してもらっただけ」など子供みtainなことを言うだけ。

「ハン！　そういうのは自活中にやれよ。ちゃんと時間がとつてあるだろうが」

「相談だったら予め本人の同意をとつてからにしたら？　深雪の意思を無視して相談も何もあつたもんじゃないの。高校生になつてそんなことも知らないの？」

その一科生の言い分に対し、レオは威勢良く笑い飛ばし、エリカは皮肉たつぷりの笑顔と口調で再び正論を叩きつけた。レオは普通に言い返しただけ。だが、エリカは違つた。明らかに相手を怒らせることが目的のようなセリフと態度。注文通り男子生徒が乗つてきた。

「うるさい！　他のクラス、ましてやウィードごときが僕たちブルームに口出しするな

「！」

差別的な呼称と共に感情論で返してきた男子生徒に、真つ向から反対するのは美月。どうやら彼女は見た目に反して物事は言うべきときはハッキリというタイプらしい。

「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというのですかっ?」

だが、今回はそれが裏目に出た。

決して張り上げていたわけではない。張り上げたわけではないが、その言葉は不思議と辺りに響いた。今の状況で今の言動は明らかに拙い。

「……どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」

「ハッ、おもしれえ!是非とも教えてもらおうじゃねえか」

まさに、売り言葉に買い言葉。最早両者ともにやる気満々だ。だが、最愛は止めない。止めることに意味は無いが、実際に魔法を見ることに対しては意味があるからだ。

「だったら教えてやる！」

学校内でCADの携帯が認められているのは生徒会の役員と一部の委員会のみ。だが、校外でCADの所持が制限されることはない。自衛のために使うのは正当防衛として認められるし、何よりも意味がないからだ。

故にCADを所持している生徒は授業開始前に事務室へ預け、下校時に返却される手続きとなっている。つまり、下校途中である生徒がCADを持っているのは特におかしなことではない。

「特化型?！」

だがそれが同じ生徒に向けられるとなれば、非常事態。向けられたCADが攻撃重視の魔法が入れられる傾向の強い特化型なら尚更だ。

CADには汎用型と特化型の二種類があり、汎用型は最大九十九種類の起動式を格納できる代わりに使用者に対する負担が大きく、特化型は起動式を九種類しか格納できない代わりに使用者の負担を減らすサブシステムがついており、魔法をより高速に発動する

ことを可能とする。

その拳銃の形をした特化型CADの銃口は、レオに突きつけられていた。

その生徒は口先だけではなかった。

初心者最愛から見てもCADを抜き出す手際、照準を定めるスピード、どちらも明らかに戦闘に慣れている者の動きだった。

「お兄様！」

深雪の言葉が終わるが先か、達也は右手を突き出していた。何かをしようとしていたのだろう。だが、その必要はなくなったようだ。

「ヒッ！」

悲鳴を上げたのは銃口を突きつけていた一科生の方だった。小型拳銃の形をした特化型は弧を描いて宙を舞っている。その眼前ではどこから出したのか、警棒らしきものを振り抜いた姿勢でエリカが立っていた。

「この間合いなら身体を動かした方が早いのよね」

「それは同感だがテメエ今、俺の手ごとブツ叩くつもりだったろ」

「あくらそんなことしないわよお」

「笑って誤魔化すんじゃないやねえ！」

敵の眼前でコントのような言い合いをする二人。これを見て一科生は舐められてい
ると感じたのだろう。次々とCADを構えて魔法を発動しようとする。

「やめなよー！」

「うるさいー！」

「きやつ」

魔法を発動しようとしていた男子生徒を止めようとしたほのかだったが、力の差もあつてか逆に突き飛ばされてしまった。丁度そこに雫がいたから良かったものの、居なければ軽傷を負っていたほどの飛ばされ方だ。最早二科生にしか目がいつていない。

そこではのかが何か強い意思を持った表情で、無言でCADを操作し始める。

「何する気!？」

「私の魔法で皆を止めるの!」

「ダメだよほのか!」

雫の制止を無視して魔法式を展開するほのか。他の一科生の攻撃を止めるべく何かしらの魔法を発動しようと手を滑らせ、淡い光が彼女の腕を包む。

これが魔法か、と最愛が心のなかで呟いた瞬間、遠方から強力な力を持った誰かがこちらを、主にほのかを狙っているのを感じて一歩前へと出た。

ほのかは一科生を止めるために、遠方からは恐らくほのかを止めるための魔法が発動されると最愛は理解している。よって、危険は普通に魔法に当たるより少なく良い実験になると判断した。

魔法を発動しかけているほのかの右手を左手で掴むように、案の定飛んできたサイオンの弾丸を右手で薙ぎ払うように、それぞれを甲高い金属音と共に打ち消した。

それを確認した者全員がそれぞれ別の意味で驚愕に目を見開いたのを横目で確認したが、今は後回し。遠方から攻撃し、こちらへ駆け足で向かってきている人物を見る。

「止めなさい! 自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行

為ですよ！」

声の主を認めて、魔法を発動しようとしていた生徒は一樣に顔を青ざめた。警告を發し、先ほどサイオンの弾丸を飛ばしてきたのは、生徒会長の真由美だった。

「事の経緯を聞きたいところだが、一つ確認だ。その女子。真由美の魔法が意図的ではあったが当たったな。大丈夫か？」

硬質な声で話しかけてきたのは、入学式の際に紹介があつた風紀委員長、渡辺摩利わたなべまだ。どうやら意図的だったのも見抜かれているようだ。気にしていたのか、真由美もこちらへと視線を向けている。

「超大丈夫です」

「そうか。なら良かった。では今回どのような経緯でこのような事になったのかを聞かせてもらおう。ついて来なさい」

未だに何が起きたか理解していない者ばかりだが、理解している者がいないわけでは

ない。その中の一人、達也が胸を張るわけでもなく、項垂れることもなく、泰然とした態度で摩利の前へと歩み出た。突然出てきた一年生に、摩利は訝しげな視線を向ける。

「すみません。悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ？」

唐突に思えるそのセリフに、摩利の眉が軽くひそめられる。

「はい。森崎家のクイックドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あまりにも真に迫っていたため身構えてしまっただけです」

「では、その後にI—Aの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ？」

視線を巡らせ、CADを操作しようとしていた一科生を確認した摩利は冷笑を浮かべながら達也を見た。その時主な対象となったのは、ヒツと小さく悲鳴を上げてしまったが、聞こえたのは雫と最愛だけだろう。

「彼女が発動しようと思図したのは目眩ましの閃光魔法です。それも、失明や視力障碍しょうがいを起こしたりする程のレベルではありませんでした」

誰かが息を呑む。

それに伴うように摩利の視線は興味深いものを見つけたとばかりに達也を注視しはじめた。

「ほう……どうやら君は、展開された起動式を読み取ることができるらしいな」

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

「……誤魔化すのも得意なようだ」

魔法式の存在は絹旗も勿論知っている。だが魔法式が読み取れるということがどれだけすごいのか、最愛には知識としては理解できるが経験的には理解できていない。だが周りの反応から察するに普通では有り得ないという理解は間違っていないと確信する。

「兄の申した通り、本当に、ちょっとした行き違いだったんです。先輩方のお手を煩わせ

てしまい、申し訳ありませんでした」

達也を庇うように一歩前へ出て、胡散臭い達也とは対照的に微塵の小細工もない真正面からの謝罪をしたのは深雪。これにはさすがの摩利も毒気を抜かれたのか、目を逸らしてしまった。

「摩利。もういいじゃない。達也くん、本当にただの見学だったのよね？」

救いの手だろうか。ニコニコと達也を見る真由美に対して、また胡散臭い表情で頷く達也。どうやら、達也の作戦は上手くいったみたいだ。

「確かに、生徒同士で教え合うことが禁止されているわけではありませんが、魔法の行使には、起動するだけでも細かな制限があります。このことは一学期の内に授業で教わる内容です。魔法の発動を伴う自習活動は、それまで控えた方がいいでしょうね」

「……会長がこう仰られていることでもあるし、今回は不問にします。以後このようなことの無いように」

真由美の言葉に、いまいち納得しないまま摩利がそう告げ、踵を返した。が、一步踏み出したところで足を止めて、背中を向けたまま問いかけを発した。

「君の名前は？」

首だけ振り向いたその視線の先には、達也がいる。

「一年E組、司波 達也です」

「覚えておこう。そして、その女子。君の名前も聞いておきたい」

そして向けられた視線。チラチラと気にしていたことに加え、名前を聞く流れだったため来るのはわかっていたが、厄介事に違いはない。そんなもの願い下げだ。

「答える義理は超ないですね」

「……………まあいい」

あまりに明確な否定に不満げな表情を浮かべながらも、再び歩き出した摩利。どうや

らこの世界、学園都市とは別の意味で面倒事が起きるだろうと、最愛は溜め息を一つ。座り込んでいるほのかの補助を行った。

追跡者

——見られている。

通学路を歩きながら絹旗は自分に向けられる、観察されているような視線を感じていた。何時からかと言えば、昨日の夜からだろう。見られているのは分かるが、何処から見られているのかが分からない。そんな視線をねっとり浴び続けていた。

間違いなく昨日のことが原因だろう。

あの騒ぎの後、最愛、ほのか、雫の三人は達也たちと一緒に帰ることになった。どうやらほのかは達也と深雪——深雪とは仲良くしたいという意味で——に気があるらしく、ちょうど良い機会だと雫に後押しされて達也と一緒に帰って良いか尋ねたところ、誰も反対しなかったため了承。さりげなくほのかが達也の横に陣取り、主にCADのことについて話し合っていた。最愛は後方で雫と共にただ話を聞いていただけなのだが、そこで話題になったのはやはりというべきか、先ほどの騒動について。エリカの警棒が実はCADということから派生したもので、やはりというべきか始まりはエリカの一言だった。

「そういえば最愛はあの時何したの？」

「あの時とは超どの時ですか？」

「光井さんが魔法を打とうとしたとき。あの時かなり甲高い音が鳴ったじゃない？」

「ああ、その時ですか」

ついに来た、この話題。この場で最愛のその時の行動を見ていなかった者はいない。位置的に見えてしまっていたのだ。だからこそ、意味がわからなかった。全員の視線が後方の最愛へと集まる。

「もしかして最愛もこのバカと同じ硬化魔法が得意だったりとか？」

「この女堂々と指差しやがって……」

流れるようにバカにされたレオはこめかみに血管を浮かばせながらワナワナと震えているが、エリカはそんなの何処吹く風か。興味を最愛にだけ寄せている。しかし最愛は本当に必要な時、必要な場所で、信用できると判断し、尚且つ教えても良いと思う人にだけ自分の能力を開示すると決めた。そして信用できると判断し、教えても良いと思えた人は妥協して二人だけ。その二人にも少なくとも今は教えるつもりはない。それ

に最愛は自分の能力がこの世界でどれだけ特殊な分類なのか、しっかりと把握している。

それをこの大勢の中で、しかも絶対に教えてはいけないと踏んでいる達也がいる中で教えるなど、愚行以外の何物でもない。

「エリカには超悪いのですが、他人の魔法についての詮索は超マナー違反です。時期が来たらということ、今回は超引いてもえませんか？」

「やっぱりダメだったか。時期が来たらってことはいつか教えてもらえるってことだよ。ね。ならいいや」

何度も言うが、最愛は暗部の中でも特に深い闇の住人だ。それでしか生きることが許されず、そこには生きるためだけにいた。そのためか最愛は特に生への執着が強い。よって今回、この世界で上手く生きていくために、一般常識的な情報はほどほどに、高校がどのようなところであるか、魔法とはどんなものなのか、能力者だとしても怪しまれない立場を見つけることに時間を費やした。そして、見つけた。BS魔法師という、別名で超能力者と呼ばれる存在を。

最愛もサイオンは見える。どのような魔法にもサイオンは付き物だ。では自分の能

力はどうかだろう。間違いなく能力は展開されている。だがサイオンは感知できない。普通の魔法師でそれだと緊急事態なのだが、BS魔法師となれば話は別だ。BS魔法師とは、魔法としての技術化が困難な異能に特化した超能力者のこと。そしてその異能が関係しているのか他の魔法は苦手であり、魔法科高校の水準で言えば二科生として扱われるレベルであることも特徴に挙げられる。

その時はちょうどそこで駅に着いたために解散となり、最愛はCADの調整を行ってもらうために雫の家へ。潮から手厚い歓迎を受けながら夕食まで一緒になった最愛が家に着いたのは日付が変わる前。

その時からだ。視線を感じるようになったのは。

そして朝起きても案の定感じた。何か害があるといけないためほのかと雫には一緒に登校するのを断ったが、正直なところかなりマズイ。視線に敏感になっていく絹旗をして位置を特定させないその技量。明らかに自分よりの人間で、間違いなく自分よりも強い。だが周囲に人がいないのに姿を現さないということとは、それだけ慎重な人物なのか、それともただ観察しているだけなのか。どちらにしろこの状況は周りに人が居た方が良い。戦闘にならないことを祈りながら、最愛は全力疾走で駅へと向かった。

それを物陰から覗くものが一人。

「うーん、やっぱり僕に気付いているね。となると昨日から既に気がついていたら……とか……情報も一切手に入らないし、警戒の仕方が常に命を狙われているかのような感じだね。一体何者だい？」

物陰をでてキラリと太陽光を反射させる頭をベタベタと触り、彼はその場を後にした。



コンパクトなサイズになりプライベートスペースと化した電車に乗りながら、最愛は息を整える。

全力疾走で駆け抜けてからすぐに視線は感じなくなった。結果的には観察が目的だったというわけだが、こうなると一体誰が、ということになる。今までいなかったのに昨日になっていきなり現れた観察者。関係性として一番有力なのは、昨日一緒に下校した面子。本命は達也だが、たとえばそうだったとしても観察者が達也本人ではないことは分かる。

「何にしても、超気を付けるに越したことはないですね」

自分に言い付けるように呟いた最愛はもうすぐ駅に着くことを確認して立ち上がり、少しだけ崩れた身だしなみを整える。今日からは授業が始まるのだが、最愛にとつてこれが楽しみの一つであり、心労の一つでもある。

楽しみなのは学校の授業が受けられること。心労は実技が壊滅的にできないことにある。CADを調整して貰った後に、当然というべきだが試しに魔法を使った。初めて使ったのだがそこはCADの性能故か、それとも調整が良かったのか魔法を使うことはできた。しかしそれは本当に使うことができたとしか言えないレベル。しかも魔法を使う際、能力を解除しないと能力に干渉して使えないという制約まであった。今のところ魔法を使うというメリットがない。

多数の生徒と共に駅から外へ。先ほどの視線が無いかの確認——無い。はあ、と溜め息をついて通学路へ。しかし、その歩みは再び視線によって止められてしまった。

「あ、最愛オハヨー」

「最愛ちゃん、おはようございます」

「おう、おはよう」

「絹旗さん、おはようございます」

「おはよう」

上からエリカ、美月、レオ、深雪、達也だった。視線からただ見つけたというだけの感じではあつたが、達也と深雪の視線から若干違和感。特に深雪は明らかに何か意図があるような視線だ。

「超おはようございます」

しかし先程に比べれば可愛いもの。一人でいるよりかは幾分か安全とそれを気にせずには輪に加わつた。エリカによると、そろそろ行こうかというところで偶然見かけたらしい。それじゃあ、と言って歩き始める一行。

まだ入学したばかりの彼らにはやはり昨日の事件は強く印象に残っていたらしく、すぐさまその話になった。

「しつかし昨日は大変だったな。光井さんと北山さんだっけ？ 一科生にも話が分かる子がいたのはよかったけどよ」

「ああ、そうだな」

「あの方たちとならお友達になれそうですね。あ、そういえば最愛ちゃんは二人とは幼馴染みなんですか？」

「……ッ」

——完全に見落としていた。

レオが呟くように言ったその言葉に反応したのは達也と美月。なんとも穏和な会話だったのだが、ふと思いついたように美月が問い掛けたことにより一部の空気が急変。

最愛はあの二人とどういう仲なのか、さっぱり分かっていない。いろいろと都合が良かったために何も触れずに流されるがままだったのが、ここでツケがきた。

どう答えればいいのか瞬間的に出てこず無言の最愛に達也の視線が刺さる。

だが、救いの手は全く関係ないところから突如として出された。

「達也くーん」

後方から聞いたことのある声音。それにより達也はすぐ視線を移した。その先には軽やかに駆けてくる小柄な人影。真由美だった。

「達也さん……会長さんとお知り合いだったんですか？」

「一昨日の入学式が初対面……の、はず」

「そうは見えねえけどなあ」

「わざわざ走ってくるくらいだもんね」

美月の疑問に、達也も一緒になって首を捻る。

なんにせよ最愛は彼女のおかげでなんとか逃げることができ、内心ほっとしつつも次からは答えを考えておかねば、と己の失策を認めて走ってくる真由美を見つめる。

「……深雪を勧誘に来ているんじゃないか？」

「……お兄様の名前を呼んでいらっしやいますけど」

それにしても目立っている。真由美が名前で、しかも大声で呼ぶものだから通行人の目という目が集まっている。

「達也くん、オハヨ。深雪さんもおはようございます」

「おはようございます、会長」

達也にだけなんともフランクな挨拶なのだろうか。達也に続いて深雪が丁寧に一礼。それに続くように他の四人も続くが、なんとも変な空気だ。対象が達也だと分かった最愛は一行から一応会話が聞き取れるレベルの距離まで下がり、後ろに続く。それに倣うかのようにエリカ、レオ、美月が下がってきた。考えることは同じのようだ。

聞こえる会話からだと、達也と深雪は生徒会室に招待を受けているらしい。深雪にとつてはお昼を達也と一緒に食べられるということでかなり乗り気だが、達也は否定的だ。そして何かに気がついたかのように、真由美が振り向く。

「あ、皆さんも来ていただいてもいいですよ。生徒会の活動を知っていただくのも、役員の務めですから」

真由美の社交的な申し出。しかしそれとは正反対の口調で謝絶した者がいた。

「せっかくですけど、あたしたちはご遠慮します」

しかも遠慮したという割にはかなりキツパリとした拒絶。元からこちら側の空気はなんとも言えないものだったが、それが気まずい方向へと流れていく。

「そうですか」

ただ真由美は笑顔を崩さなかった。

人の事情はしつかりと弁えているようだ。正直なところ、その気遣いができるならあんな大声で近付くところをもっとなんとかできないものかと思ってしまうが。

そして顔を前に戻し、視線を達也と深雪に向ける。

エリカがキツパリと断ったため更に気まづくなってしまい、数歩後退。結果会話が聞こえなくなってしまうが、真由美がスキップしながら校舎へ向かい、達也が溜め息をついたところを見ると生徒会室へ行くことは決定したようだ。

それにしても、と最愛も溜め息をつく。

この世界。厄介事が長い尻尾を引いてやってくる。

もう校舎は目の前。

しかし、彼らの足取りはとても重いものだった。

風紀委員

一高においての一科生と二科生の違いは、教師がいるかないかであり、当然一科生の方に教師は付く。その結果二科生は課題の提出が履修の目安になり、自ずと授業の内容は出された課題をやるということになる。

登校時から時は過ぎ、お昼休みが終わったE組は現在、実習授業を行っていた。

課題は、据置型の教育用CADを操作して三十センチほどの小さな台車をレールの端から端まで連続で三往復させる、というものだった。

言うまでもなく、台車には手を触れずに、である。

とはいっても、目的は授業に使うこの機械の操作を習得することであり、壁面モニターには使い方が表示されている。

「達也、生徒会室の居心地はどうだった？」

CADの順番待ちの列で、達也の後ろにいたレオが聞いた。最愛は食堂でお昼を済ませたが、達也は妹の深雪とともに約束通り生徒会室でお昼を取ったのだ。

「奇妙な話になった……」

「奇妙、って？」

レオの問い掛けに答えた達也だが、反応したのはその前に並んでいたエリカ。クルリと振り返って首を傾げている。

「風紀委員になれ、だと。いきなり何なんだろうな、あれは」

「確かにそりゃ、いきなりだな」

レオも唐突に感じたようだ。達也の後ろに並んでいる絹旗は絹旗で、ジャツジメント風紀委員のようなものだろうか、と思考を巡らせている。

「でも、すごいじゃないですか、生徒会からスカウトされるなんて」

ちょうど、そこでレオの前に実習をしていた美月が課題を終えて、再チャレンジ——失敗したわけではない——するために最後尾へ戻る足を止めて、感じ入った目を達也に

向けていた。

左右の列で小さなざわめきが起こっているのは、他のクラスメイトも美月と同じことを思ったからだろう。

「すごいかなあ？ 妹のオマケだよ」

しかし、達也は美月の称賛を素直に受け取らない。

頑固なまでに懐疑的な達也の態度に、エリカが軽く苦笑する。

「まあまあ、そう自虐的にならなくても。それで、風紀委員つて何をするの？」

「魔法使用に関する校則違反者の取り締まり、魔法を使用した争乱行為の取り締まりだそうだ。風紀委員長は懲罰委員会にも出席するらしいし、警察と検察を兼ねた組織だろうだ」

「そりやまた、面倒な仕事だな……」

今の会話からすると、学園都市の風紀委員とは似て非なる存在なのだろうと絹旗は推察した。あちらは警察の役割のみ。代わりに一つの管轄や人材に対して範囲は広いが、ジャッジメント

能力者のレベルが高いこともあり上手く回ってはいる。

しかし学園都市には深く広い闇がある。この世界はともかく、この学校は見たところそんなものは存在していない。こういう観点から言えば、こちらの風紀委員は知らず知らずの内に闇と関わってしまうということがないため、総合的に言えばこちらの風紀委員は比較的安全な位置にあるのかも知れない。

などとまるで他人事のように思考を深めていた最愛。確かに今までは他人事だった。しかしこの話、実は全くの他人事ではない。

「——聞いているか、最愛？」

「あ、超聞いてなかったです。なんて言いました？」

達也は最愛のことを「最愛」と呼ぶ。これは最愛自身がそう呼ぶように言ったからだ。別に名前を呼ばれたくない訳ではないし、何よりそんなことで面倒事に巻き込まれるのが嫌だからだ。だから最愛も同じように、達也のことは名前で呼ぶ。達也が名前呼びということとは、E組全員が勿論名前呼びだ。

そんな最愛だが、達也の様子から次に達也の口から出てくる言葉に嫌な予感しかしなかった。

「放課後に最愛も生徒会室に來いと風紀委員長から伝言だ」

ビンゴ。完全な面倒事だ。可能性として考えていない訳ではなかった。しかし確率としては低いと踏んでいた可能性だ。どちらにしろ答えは一つ。

「嫌ですよ。私は意地でも超行きませんから」

暗部の中でも深い暗闇に棲んでいた自分が風紀委員とか、冗談にしてもキツイ。これはつまるところ、風紀委員への勧誘だ。これは面倒事以前に、最愛自身が受け付けない事案だ。頭では確かにやってみたい気持ちはある。だが、自分は既に裏の人間。この頭ですら、裏の人間によって作られたに同義の物。裏の人間の仕事として風紀委員に参加するならともかく、完全な風紀委員として参加するのは最愛の身体が拒否してしまう。

「それよりも、達也の番ですよ」

少しトーンが下がった声での指摘。

上手く順番が回ってきたため、それを口実に遠回しにこの話は終わりだと告げる最愛に、達也は不満そうな、そして何処か懐疑的な顔をしながらも、

「ああ、ありがとう」

なんとか、逃げ切れそうだった。



少し覚悟していたのだが、絹旗はすんなりと帰ることができたという事実には困惑している。達也のあの様子から放課後にまた声をかけてくると思っていたのだが、一瞥してからエリカ達に別れを言っつてすぐにE組を出ていったのだ。

ありがたいのだが、何処か良い心地がしない。

「最愛、どうしたの？」

「あ、いえ。今日の授業の課題超上手くできなかつたので、改善点を考えていたところで
す」

「E組も台車の授業してるの？」

「してますよ」

思案に更けていた絹旗を見て声をかけたのは一緒に下校中の雫とほのか。最愛の言ったことは半分本当だ。今日の授業の課題。やはりというべきか、上手く出来なかった。

動くスピードはE組でも最下位と言って差し支えないレベル。もしかしたら学校生活を送るなかで一番の障害になるかもしれないと思うレベルには、最愛の魔法水準は低かった。

「じゃあまた家来てよ。魔法の練習しよ」

「……超良いんですか？」

「勿論。お父さんも喜ぶよ」

「あ、それなら私も一緒に手伝うよ」

願ってもいない申し出だ。

最愛としても魔法は有意義に使っていききたい。ある状況下に陥ったとき、今の手持ち

では魔法が彼女を守る唯一の手段だ。願わくばアレを作ることが出来れば——というのは追々。まずは返事を返さないといけない。

「では、お言葉に超甘えますね」

それから駅前で待っている車に乗り込む三人。

ほのかと雫に出会えて良かった。

最愛は心底、その出会いに感謝した。



その夜。

達也はとある人物に電話をかけていた。

「こんばんは、師匠」

『こんばんは。こんな夜更けにどうしたんだい、達也くん？』

相手は達也の師匠にして忍術使い、（このえやくも）九重八雲だ。

「師匠も人が悪い。内容はもう分かっているでしょう?」

『まあね。絹旗最愛のことだろ?』

「そうです」

昨夜、そして今日の登校時に最愛が感じた視線。それは達也の依頼によつて動いていた八雲のものだ。彼にかかればほとんどの情報が手に入る。それこそ、彼を撃退できる施設はこの国でも片手で足りるほどに。

『それが、全く情報は得られなかったよ』

「あの師匠が、全くですか?」

電話越しとはいえ、二人の目付きが変わる。

あの八雲が手に入れない情報。第一級レベルの超高度な、それこそ達也のような隠蔽されている戦略魔法師レベルの情報だ。敵国のスパイか、それとも何処かの組織の者か。どちらにしる現時点では危険な存在。

『それに昨夜から今日の登校するところまでを監視してみたけど、どうやら気づかれないみたいなんだよね。恐らく、昨夜の監視を始めた時点から』
「……そうですか」

そして八雲の監視を一瞬で看破したということは、そういう目に異常なまでの耐性が付いているということ。

狙いが分からない以上、迂闊には手を出せない。だがもし自分達の日常を脅かすようなら、たとえ同級生でも容赦はしない。それは何年も前から決めたことだ。

『達也くんから手を出さなければ今のところは問題なさそうだけど、何しろ情報がないからね。達也くんに言うのもなんだけど、気を付けたまえ』

「勿論です。ありがとうございます。おやすみなさい」
『うん、おやすみ』

別れの挨拶を済ませて電話を切った達也が思い浮かべるのは、昨日の一科生との騒動。あの時最愛は確かに何かしらの魔法を使っていた。だが達也をもつてしても、その

兆候、それどころか魔法そのものを視ることが出来なかった。

魔法で魔法を隠蔽したところで達也には何の意味もない。つまり最愛の能力が元々見えないもの、という可能性が高い。そして、魔法を消したときに生じていた妙な空間。

魔法を封じる見えない能力^{ナニカ}。それを知るためにも、最愛には風紀委員に入つて貰いかけた。風紀委員に入るということは、その能力を発動しなければならぬ場面がやってくるということ。だから達也は、最愛を風紀委員に推したのだから。

だが彼女は風紀委員という言葉を良く思つておらず、まだ何者かが特定できない彼女に強引な手引きは出来ないため、断られたときは一旦は手を引いた。

高校入学早々、大きな爆弾と出会ってしまった。

達也の高校生活は、早くも雲行きが怪しかった。

新入部員勧誘

ほのかや雫の話によると、今日から新入部員勧誘期間となるようだ。その規模と云えば、毎回風紀委員出勤必至、お祭り騒ぎの魔法が飛び交う無法地帯になるとのこと。

それをふうん、と他人事のように流していた最愛だったが、その評価を改めざるを得なかった。あちこちで新入生がもみくちやにされており、既に魔法が飛び交っている場所もある。そして何より、ほのかと雫は一科生の中でも特に成績が優秀な生徒である。

最初は最愛に連れられてなんとか人目が無いようなところを抜けて見学しようとしたのだが、校内全域で行われているためか、やはり人目についてしまうと出来てしまうし、何より見たい部活が見れないということもある。

そのためある程度の勧誘は覚悟でその中に飛び込んだのだが——現状が結果だ。

最愛はほのかと雫という喉から手が出るほど欲しい人材の隣にいたということに加え、二科生で小柄なためなんとか抜け出せたが、それでも能力は解除しての状態。心臓の鼓動が早くなる程度には苦勞をした。

だがたまたま合間から見える二人はあまりの強引な勧誘に若干迷惑そうな表情をしている。このままここで見ているわけにもいかなければ確かだった。この人の量なら多

少能力を使っただけで構わないだろう。ほぼ即決で決めた思考を行動に移そうとしたその時、運良くというべきだろうか、その集団の中に颯爽と割って入るジャージ姿の二人の女性。恐らく生徒ではない。

彼女らはほのかと雫を抱えると、そのまま走り去ってしまった。

「バイアスロン部だ!」

「取られた!」

周囲には優良な新入生を取られてしまい落胆する生徒ばかり。だが助けようと思っていた最愛にとっては非常にラッキーだ。人目を避けるために校内でどの部活がやっているかは網羅しているし、何より能力を見られる人数が減ったのだ。どうやらあの二人はバイアスロン部らしい。練習場所は校舎裏だ。

最愛は小走りでバイアスロン部の練習している場所へと先回りした。



校内では現在、カーチエイズならぬスケボーチエイズが行われていた。逃げるはほの

かと雫を抱えているジャージ姿の女性二人。追いかけるのは風紀委員長の渡辺摩利だ。魔法の技能的には摩利の方が上なのか、距離は少しずつ詰められていく。

だが二対一というのもあり、距離を詰めては離されるといのが続いて数分。追いかけているために遠回りにはなつたが、次の角を転回するように曲がればバイアスロンの下につく。

「あの角曲がるぞ」

「OK」

魔法による妨害により再び距離を離れた摩利を横目に、華麗なボード捌きで角を曲がる。身体を傾け上手く遠心力を発散させながら転回していく二人。そして視界にバイアスロンの部員の姿を捉えたことによる二人のご満悦な表情は、だが突然制服姿の少女が二人の前に飛び出してきたことにより驚愕のものへと変わる。

「不味いッ！」

「危ないッ！」

その差数メートルも無い。

自動車並みのスピードで滑走していた彼女らにそれを対処する術はなかったが、運良く二人の間を少女が通り抜けていった。内心ほっとする二人に、だが違和感。

先ほどまで有った人の温もり、重さが無い。

転回を終えて体勢を直しながら確認してみると

「——ッ!?!」

「あれっ!?!」

綺麗に二人ともいなくなっていた。

振り返ると少女の手には先ほど奪ってきた二人の少女が抱えられている。取り返そうか(?)と悩んだのだが、摩利がすぐそこまで来ているために取り返しに行く時間はない。仕方ない、とその勢いを保ったままバイアスロン部の下まで行き、

「あそこにいる新入部員、逃がすなよ!」

「ちやんと可愛がつてあげて!」

それぞれ一言ずつ、唾然としている現役バイアスロン部に残していき、OBである二人は勢いそのままに逃走していった。



「超大丈夫ですか、ほのか、雫？」

「あ、ありがとう最愛ちゃん……」

「……大丈夫」

明らかに疲れているほのかと何処か楽しげな雫を下ろしながら確認を取った最愛だが、普通に立てるほどには大丈夫なようだ。そして数秒後にやって来た風紀委員長。今回は「助かったぞあの時の女子！」とだけ言い残してバイアスロン部の下へ、部員と少し話した後直ぐ様逃げていったあの二人の後を追いかけていった。

「それにしてもよく分かったね」

「いえ、ほのかと雫の道案内ついでに覚えた地図が超役に立ちました」

二人が向かった方向から逆算して辿っていった訳だが、見事にビンゴだった。最愛としてもあの速度で突っ込まれるのは少し肝に來たが、生憎あの程度で冷えるほど肝は弱くない。冷静にほのかと雫だけを掴んで能力と身体全身をフルに活用して受け止めただけの話だ。

少しシワが出来てしまった制服を直しつつ、こちらに向かつてきているバイアスロン部の部員らしき女子生徒を見つめる。向こうは向こうで申し訳なさそうな感じだ。

「ごめんなさい、先輩たちが迷惑を掛けて。貴方たち、新入生よね？ バイアスロン部長の五十嵐 いがらし 亜実 つぐみ です——もしかして、光井 ほのかに北山 雫さん……えーつと……」

話しかけてきたのは、バイアスロン部の部長だった。彼女はほのかと雫の顔を見た瞬間ハツとして名前を呼んだが、次に目に入った最愛を見て言い淀んでしまった。

「絹旗最愛です」

「……ありがとう、絹旗さん。あの様子だと入部希望ってわけでもなさそうだけど、一応聞いてくれる？ 私たちはバイアスロン部。正式名称、SSボード・バイアスロン部よ」

「SSボード……バイアスロン部？」

「正式名称って言っても、SSボード自体が省略語なんだけどね——」

そこから部長の説明が始まった。どうやらスケートボードとスノーボードの頭文字を取ってSSらしいのだが、春夏秋はスケートボード、冬はスノーボードを使ってコースに設置された的を魔法で撃ち抜く競技らしい。

その撃ち抜くという部分に興味を持ったほのか。聞き返した瞬間に部長の目付きが変わった。声音は興奮した様子で、だが速度はなんとか保ちながら行われる説明。簡単に言えば、自分の色の的だけを移動しながら撃つ競技のようだ。

一通り説明を終えた五十嵐はほのかの手を掴み、勧誘をかける。そして更に追撃をかけるかのようにデモを進めてくる部長。ほのかが困惑しているため止めようかと思つた最愛だが、五十嵐の援護はまさかの身内から放たれた。

「ほのか、私ここ入りたい」

「ええ!？」

「ほんと!? 北山さん入ってくれるの!？」

目を輝かせながらそう言った雫。どうやら感化されるものがあったようだ。有力な新人が入ると言ってくれたことにより、五十嵐の目もキラキラと輝いている。

「ほのかと最愛がいいなら」

「えつと……」

決定権を委ねられたほのかは、言い淀んだ。向けられる、二方向からの期待の視線。逃げるように、チラツと絹旗を見る。困っているのは明らかなたため、最愛は道を作ることにした。

「私は魔法が超苦手なので競技はしませんが、数合わせ程度で良ければ超構いませんよ。あの勧誘から超逃げる口実にもなりますし」

「……私も雫と最愛ちゃんと一緒なら」

「ありがとうー！ やった期待の新人ゲットよー！」

最早諦めたかのような口調で答えたほのかに雫は目を輝かせ、五十嵐はサムズアップをしながら部員へと嬉しそうに報告を行っていた。それを他人事のように見つめる最

愛。彼女の表情は子供二人を見つめる保護者のようなものだった。

隱密

バイアスロン部に入った三人は、今から行うデモンストレーションをこれからどういう物をやるのかの詳細も含めてやる、とのことでデモンストレーション会場へと向かったのだが、そこには頭を抱えて、首あたりをおさえて、口をおさえてと様々な体調不良の体勢を形容している狩猟部の姿があった。

原因は強いサイオン波を受けたことによるサイオン酔いというものらしく、体調不良者は四人。無事な人は六人。保健室の先生により体調不良者を校舎内へ移動させた方が良いと言われたが、両者女子生徒のみ。一人につき一人が支えとなるのは少々忍びない。ということでバイアスロン部から二人人手を貸して欲しいとのことだが、生憎バイアスロン部はこれからデモンストレーションがある。だが、どうしようかと迷うことはなかった。自分たちはデモに関係ない、と雫が立候補しほのかがその後賛同したことにより人員は足りたのだ。

そして今、校舎内にいるのは二人。

一人は赤髪で狩猟部の一年B組の一科生、明智^{あけち}英美^{えいみ}。髪型から予想がつく日英のクォーターであり、正式の名前はアメリカⅡ英美Ⅱ明智Ⅱゴールデイというらしい。

「いやあ、本当に助かつちやった。ありがとね」

「礼には超及びませんよ」

そしてもう一人は最愛だった。

話せば長くなる——ということもなく、簡単な話。ほのかと雫はバイアスロン部の即戦力に対し、最愛ははつきりと言えばおまけ。二人を入れるための餌に過ぎない。それを重々承知している最愛が二人はデモを見るようにということとそれを一手に引き受けた。

最初は小柄な体型もあり周りからも止められたが、魔法で可能な旨を伝えると任せてくれた。一人で一人を支えられる人物が居れば、後は狩猟部員でカバーできるので。そしてその仕事を終えた最愛は現在、デモンストレーション会場にゆったりと戻りながらエイミイと談笑中だ。ちなみにエイミイは本人が望んだ呼称である。

「そういうえば、最愛の魔法ってどんなの？ CAD無しで使えるんでしょ？」

「魔法については超秘密ですが、CAD無しでも使えますよ」

「CAD無しで魔法使えるのに二科生なのはなんで？」

「その魔法以外が超苦手なんですよ。所謂BS魔法師って奴です」
「成る程ね。納得したよ」

エイミイはとても会話がしやすいというのが最愛の第一印象。他の一科生と違って、二科生という理由で虐げられたり嘲笑されたりはしない。むしろその逆だ。

最愛がこの世界に来て（？）から一、二を争うほどの饒舌を見せていることから、エイミイの明るさと人柄の良さを表せている。

その後デモンストレーション会場に戻った二人は、しかしそれも丁度終わった頃。ほかかと雫含めた両部から手厚い感謝の意と謝礼を受け取りつつ、下校の時間となる。

数分後に落ち合うことを約束してお互い各教室へと戻り、帰りの身支度。少し動いたため着替えをしてから集合場所へと向かった。

集合場所に向かうと、丁度反対側からこちらへと向かってくる二つの人影。ほかかと雫も今来たところのようだ。

「お、良いタイミングですね」

「最愛ちゃんも今来たみたいだね。丁度良かった。それじゃあ帰ろうか」

「……帰れるならね」

雫がボソリと呟いた言葉。それに疑問を持った最愛とほのかは雫の視線の先を見つめ、そして納得した。

校門前には下校する新入生を逃がさないとばかりに目をギラギラと光らせている上級生達。確かにあの中を普通に通れる訳もない。どうしようか、と思案に耽る三人に、人が近づくと気配。最愛はすぐに気がついて顔を上げたが、二人はまだ気がついていない。

エイミイはこちらに気がついて少し駆け足気味に近寄り、最愛はそれに手で応じた。雫も最愛の視線の先を見て気がついたようだが、唯一思案に耽っているほのかは気が付かない。そのほのかの肩を、エイミイはポンツと叩いた。

「三人とも今帰り？」
「ヒッ！」

最愛と雫からしたら予め知っていたため驚かなかつたが、ほのかは考えることに集中していた。いきなり声をかけられてさらに肩に手を乗せられたほのかは、身体を大きく弾ませ、前方へと飛び退いた。ほのかと雫がエイミイを知ってる理由はデモンストレー

シヨン帰りだ。時間は短かったが、三人はとても早く打ち解けていたのだ。最早普通の友人のやりとりをしている。そしてほのかの反応を見てかそれ以外からか、エイミイは頭に疑問符を浮かべている。

「どうしたの？」

「どうやって帰ろうかなって」

「ああ、なるほど。これは苦勞しそうだね。三人……雫もほのかも隠密系の術式は持っていないの？」

エイミイの疑問は二つ意味が取れるようなものだったが、雫は正しい方に理解していったらしい。納得しながら三人と言いかけて、ほのかと雫に対して問い掛けたエイミイ。最愛が持っていないことは分かっていたからだ。その質問に対して二人とも頭に疑問符を浮かべている。

「オンミツ系……？ 何それ」

「陰陽道系と密教系？ って……つまり古式魔法のこと？」

「やだなあ、隠密は隠密だよ。意識を逸らしたり姿を隠したりする術式」

「私は使えないけどほのかは得意。でも魔法を勝手に使うのはルール違反」

「今さらだよ。いつもなら守らなきゃだけど、今は魔法が飛び交ってるじゃん」

「それはそうだけど……」

「隠密、と言われて最愛はエイミーの言った通りの隠密を思い出していたのだが、ほのかと雫は違ったようだ。最愛はむしろ二人の言っていることに疑問符を浮かべてしまった。」

「そしてほのかは光井の家系もあり、光系統の魔法が得意。これは今日隠れながら動くときの参考として魔法を聞いたときに知ったことだ。」

「しかし当の本人は最近魔法のことであまり良い思い出がないため、何処か渋っている様子。」

「ほのか、今回は攻撃じゃないから」

「あのときだって攻撃じゃなかったよ！」

「大丈夫ですよ。今回は人に魔法を超向けるわけでもありませんから」

「んー……分かったよ二人とも」

「ほのかも屁理屈に近いとはいえ正論を言われては納得するしかない。実際攻撃ではないし、あの時と違って人に向けるわけでもない。今の上級生の状態と自己防衛という線で見れば、風紀委員もとやかく言えない——というよりも、そもそも言いにくる程時間を持て余しているのかも怪しい。」

「エイミイも一緒に帰る?」

「うん! ありがとう!」

「みんなで行った方が心強い」

そして、エイミイを含めた四人で帰路へとつくための上級生突破作戦は開始された。まずはほのかの光魔法を使って自分達と身の丈のあった木を自分達へと反射させながら昇降口を正面にいる上級生にバレないようにこっそりと抜け出し、その背後へ。ただ背後に回り込んだだけではこちら側の上級生にバレなくても道を挟んだ対面側の生徒にバレかねない。そのため魔法を少し変え、光を屈折させて鏡のように跳ね返すことにより向こう側からみても茂みの奥に人がいるように錯覚させ、さらに光の向きを調整することで振り向いても不自然なことがないように細工を施した。

— そのおかげで現在四人は難なく上級生の後ろ側を走っている。ほのかは魔法の維持

のため両手を前方に翳しながら、他の三人はできるだけ足音を立てず、尚且つ最速で駆け抜けていく。しかし、その順調な歩みもとある揉め事を風紀委員が取り締まろうとする光景が目に入ったことにより、止められてしまった。魔法に感心して横を向いていたエイミイはほのかへとぶつかってしまふ。

「どうしたの？」

「その二人、掴んでいる手を離してください」

「風紀委員？」

「深雪のお兄さんだ」

その風紀委員は達也だった。揉め事は魔法ではなく物理的なものでお互い手を組み合つて何か言い合つているようだが、様子がおかしい。いや、普通なら分からないのだろうが、揉め事をしている彼等——恐らく上級生——の表情はなんとというか、怒っている顔を作つて何か企んでいると言つたような感じだ。最愛は第一印象としてそう思つた。

最愛が見ていることなど知る由もない達也は二人の間に割つて入り、強制的に二人の手を離す——その瞬間、達也に魔法、空気弾エア・ブリットが飛来した。

雫が先に気がつき思わず声を上げてしまったが、かなり遠方からのため達也には聞こえない。だがその声に反応するかのように正確なタイミングで避けた達也の動きは、感嘆に値するものだ。しかし、避けたかどうかの問題ではない。

「今の……！」

「わざと……だね」

「間違いないですね。しかもあの二人も超グルみたいですよ？」

そう、今のは明らかにわざとだということに問題がある。それを示すかのように二人はエア・ブリットが放たれた方向へ達也が向かおうとするのを引き留めている。

しかし今の最愛にはどうでも良かった。いや、達也の動きを見て問題が少し上積みになったのは確かだが、今急接近している問題に対処する必要がある。

「やっぱり、生徒会に知らせた方がいいよね。でも証拠が無いと取り合つて貰えなさそうだし——」

「た、確かにそうだね」

「——だからさ。私たちが証拠を押さええない？」

「証拠を押さえにくいのは超構いませんが、そろそろ逃げますよ」
「え、逃げる？ 何から——」

そう、四人は今まで逃げていたのだ。魔法を使つてまで。しかし達也が襲われたことによりほのかは完全にそつちへと意識が行つてしまい、いつの間にか魔法を解除してしまつていた。

そしてそれなりの声量で会話をしていたのだ。生徒会に報告するかどうかについての話題が出たときには、もう時既に遅し。一気に視線がこちらへと集まつていた。

「——あ、忘れてた」

「ほら、行きますよ」

そして走り出す絹旗。それに合わせて三人が、数瞬遅れて大人数が走り出す。

「クラウド・ボール部です！」

「射撃やってみない!? スカツとするよ！」

「ま、まにあつてまゝす！」

そしてなんとか、四人は帰路につくことができた。

少女探偵団

次の日、自らを少女探偵団と名乗った——命名エイミイ——少女達四人は今屋上にいた。

彼女らの目的は達也に攻撃をする者の発見と生徒会への密告。これが三人の最優先目的。だがこの中で一人、それを副目的としている者がいた。

「さて、ターゲットは何処にいるかなつと」

「いたよ。実験棟の並木道」

「あつ、本当だ。最愛ちゃんは怪しそうな人見つけた？」

「まだ超いいです」

上からエイミイ、雫、ほのか、最愛。その内三人は達也の近辺、怪しい人物が居ないか目を凝らしており、その内一人は達也をジツと見つめている。

最愛には、達也の本当の素性を知る必要があつた。戦闘の動きひとつでその者が表の者か裏の者か瞬時に見分けられるくらいに彼女の目は、そしてその感性は鋭い。

その精度と言えば、達也が既にこちらの監視に気がついていながら無視していることを分かっている程度には、だ。その点だけでも達也、最愛両者グレーものだが、こちらは『達也を攻撃している犯人を見つかる』という大義名分があり、しかもほのかや雫、エイミィと一緒にいるためそれが嘘ではないことは明白。それを踏まえて行動する達也は、なんともやりにくいことだろうと最愛は他人事のように考えている。実際、他人事ではあるが。

「あつー！」

その時、ほのかが突然と声を上げた。当然達也を見ていた最愛にも見えたその兆候。魔法を発動する際に起こるサイオン波の兆候。だがそれは魔法になることが叶わず、霧散する。

「今の、キャスト・ジャミング……?」

「間違いないの?」

キャスト・ジャミングとは、アンティナイトという鉱石を使って魔法を無効化するこ

と。主に指輪を媒体としたものが多い。しかし、その鉱石は希少で軍事物質なため、一般民間人が手に入れることはまず出来ない。そのことは図書館の資料で魔法の対策を探していた最愛も知っている。

「うん。雫の家で見たのと同じ……あのときはアンティナイトの指輪をボディガードさんが使ったよね」

「でもお兄さんがアンティナイトを持っているようには見えないよ」

「そうなんだよねえ……」

そして雫の家は、一般人ではあっても普通ではなかった。雫は財閥の令嬢。父親が過保護なこともあり、対魔法師の護衛用としてボディガードがアンティナイトを持っている。何より、送迎車の運転手が常に身に付けている物だ。絹旗も達也がそれを身に付けていないことは分かっている。だからこそ今の現象は不可解と言っても差し支えないものだ。その時、達也はすぐに顔を横へと向けた。最愛達とは正反対の場所に、一人の逃走者がいる。

「あつ、逃げた！ 襲撃者だよ！ 右の木陰の方！」

最愛が視認したと同時に発せられるエイミーからの指示。それに素早く反応した雫はすぐにCADを起動して魔法を発動するも、既にその姿はない。

最愛も見てはいたが、後ろ姿のみだ。

「顔見た？」

ほのかの問い掛けに首を横に振る雫。だがその問い掛けは、別のところから肯定される。

「見たよ！ バッチリ！ あれは男子剣道部のキャプテンだったと思うー！」

「えっほんと!？」

それはエイミーだった。狩猟部に入っていることもあり、その視覚は裸眼、魔法使用時の視力共に良好のようだ。語尾に『思う』と付けたエイミーは、だがその自信の有り様からして剣道部のキャプテンという地位に対してのぼやかしであり、その周辺の人であると断言しているようであった。

「写真か何かで確かめてみなきゃだけど、多分間違いないよ」

「写真……」

「生徒会にならありそう」

確かに生徒会になら間違いないであろう。だが最愛はそこへは行きたくない。達也が話していたが、あそこには風紀委員長の摩利がいる。どうやら最愛を狙っている節があるらしく、達也に近い理由で風紀委員に勧誘してくると予想している。何にせよ話しかけられるのは間違いないため、もし行くとしたら拒否しなければならぬ。

「なら後で教室に行った時に深雪に聞いてみよう」

「あ、なら任せても良い?」

「私も超お願います」

「うん、任せて」

だが拒否するような流れは来なかった。ほのかと雫と深雪の仲は良好。普通に話しかける程度には良いのが幸いしたのか、ほのかと雫が請け負ってくれたのだ。そのため

ここは一度解散。最愛とエイミイで引き続き監視を続け、その間にほのかと雫が深雪の下へと向かう。二人が戻ってくる間に特に変わったことは起きなかったが、それでも走って戻ってきたほのかの達也に対する思いは素晴らしいものだと言えるだろう。

結果として生徒会へ行かなくても広報委員会の学内ページに掲載されていることが深雪から教えられたらしく、エイミイにより犯人が剣道部キャプテン、三年F組の司つかさ甲であることが判明。それを生徒会へと伝えようとした彼女は、しかし証拠が無いことに気がついて襲撃現場の写真を撮ることで合意。引き続き、達也の監視を続けた。

「どう？　いた？」

「うーん……今日はもう解散かなー」

だが、思ったように成果が出ない。ほのかの問いかけを肯定した者はおらず、うわあーと嘆くような声を漏らしながらエイミイが呟いた。

あれから、本当に平和だった。

達也は巡回を続けてはいたが、揉め事一つ起きない。各々双眼鏡を下げた帰ろうとしたその時、最愛が呟いた。

「超いました。達也から約二百メートル東の木陰に剣道部のキャプテンです」
「ほんと!？」

急いで双眼鏡とカメラを構える三人。最愛の指示通り、目測二百メートル程の木陰にCADを操作している甲の姿があつた。それはまさしく、今魔法を発動しようとしているということだ。カメラを構えてピントを合わせたのはエイミイ。その間に魔法を発動されてしまい逃げ出されてしまった。

エイミイを心配そうに見詰めるほのかと雫。対するエイミイも真剣な表情でカメラを操作し、その顔を破顔させた。

「やったね! 決定的証拠だよ!」

そして見せられたカメラには、後ろ姿とはいえバツチリと甲の姿が写し出されている。顔がぼぼ見えていないが、特定できないわけではない。彼女達はなんとか手に入れた戦果を、匿名で生徒会へと送った。



その日の夜。司波家ではその場で焙煎した珈琲片手にソファで隣同士に座る兄妹の姿があった。珈琲を嗜む達也の横で、顔を仄かに染めながら座る深雪。長くも居心地の良い沈黙を、達也の問い掛けが破る。

「そうだ深雪」

「なんででしょう」

「お前のクラス的光井さんと北山さん。あの二人とは親しくしているのか？」

「……！ はい。クラスメイトの中で最も親しくさせていただけますが……彼女達
が何か？」

達也が何の脈略もなく他の女子について触れることは滅多にない。少なくとも二人
でいるときは話の中で軽く話題に上がるぐらいだ。

「普通の子達なんだよな？ 異常な性癖がなく常識的な行動ができるという意味で
が」

「そういう意味でしたら……普通だと思います」

それが今日はかなり踏み込んだところまで問い掛けてくる。何があったのか、深雪の思考はそれで埋め尽くされていく。そこに余裕は無い。

「あの二人がお兄様に何かご迷惑でも……？」

「そういうわけじゃないさ。落ち着け」

問い詰めるような姿勢の深雪の背後には不穏な雰囲気。このまま続けば周りの物が氷漬けになってしまうため、達也は深雪の頬に手を当ててそれを沈める。

しばらく手を宛がったあと、そつと話した達也は

「見回り中の俺のことをたびたび見ているようだから、何が目的かと思つてね」

「あの二人がですか？」

「あの二人と更に二人。鮮やかな赤毛の女子生徒と……絹旗 最愛だ」

「……！」

最愛のことは勿論深雪にも伝わっている。エイミイの事は遠目で仲良く話している

のを見かけていたため脳内補完できたが、最愛は別だ。要注意人物。深雪ですら本気で監視にきた八雲の目を看破できる気がしないのに、それを一瞬で看破した者。八雲からの情報と現在の状況を照らし合わせて、こちら側から手を出さなければ問題ないという結論だったため油断していたが、予想以上に事態は深刻なこともかもしれないと深雪は察した。

「それで、何かあったのですか？」

「いや、心配されるようなことは特に無いが、どうやら写真を撮られているようだ」
「写真!?! お兄様のですか!?!」

だがそんな心配は何処へやら。達也の写真を撮っていると解釈した深雪は、思わず思考をひっくり返してしまった。即ちその写真が欲しいと。

しかし、その興奮にも似た思いは、次の達也の言葉で急激に冷える。

「いや、被写体は俺じゃない。自分が撮られていたらその場でなんとかしているよ。どうも、俺にちよつかいを出している相手の撮影を狙っている感じなんだ」

「本当ですか!?! まだお兄様に手出しする者が!?!」

冷えたのは興奮だけに留まらなかつた。深雪から冷気が珈琲を、机を、部屋全体を氷漬けにする勢いで発せられる。それを一瞬で解いた達也。我に返つた深雪は申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「……申し訳ございません」

「気にするな。それでまあ俺の方に実害はないんだが、彼女達が何を考えているのかと思つてな。高校生レベルの嫌がらせで済めば良いんだが、そうでないなら首を突っ込みすぎるのは……」

「お兄様……?」

「いや、考えすぎか」

考えすぎ、と一言で片を付けて再び珈琲を口へと含む達也。深雪は先ほどの達也の言葉を反芻しているのか浮かない顔をしているが、当の達也は今回ばかりは、最愛が付いていることに安心感を覚えている。

（最愛も引き際は心得ているだろうし、今回の目的は犯人探し。警戒する方が危ないか

もな)

むしろ警戒する方が危険。そう結論付けて、残りの珈琲を飲み干した。

邂逅

「あれから音沙汰無しか……せつかく頑張つて写真とつたのに」

「やっぱ匿名じゃ信用なかつたのかなあ」

「それもある」

証拠を撮つて生徒会に匿名で提出した四人ではあつたが、あれから特に変わったこともなく、達也の苦労は変わらずだ。

それに溜め息をついていたほのかとエイミイだが、何か含みのある言い方をした雫に對してエイミイは疑問を浮かべる。

「それも?」

「そもそも魔法は写真に写らない」

「あつ……」

そう、魔法は写真に写らない。

もし写るのなら非魔法師に魔法が見えない道理がない。

「しかも発動の瞬間じゃなかった」

「ああああ……」

「もつと言うと、超後ろからでした」

「何やってるんだらうね、私たち……」

「うん……」

完全なまでの蛇足にほのかとエイミーが再び溜め息をつく。

「やっぱり私たちだけじゃ無理だったのかなあ」

「でも卑怯なことがあったのは事実だし」

「襲った相手からなーんか嫌な感じがしたからそのまんまにはしたくないんだよね」

最愛は素直に感嘆した。

エイミーの言った嫌な感じというのは間違っていない。最愛が甲から感じたのは陰謀だ。しかも当の甲は途中からこちらを誘ってきている節があった。まだそこまであ

からさまではないが、何かが起こらないとも限らない。例えばそう——今みたいに。

「あつ」

「えつ、何？」

突如として声を上げたエイミー。それにほのかが若干驚いたような反応をしながら次を促す。

エイミーがつい言葉を発してしまったのも仕方のないことだろう。

「あそこホラ。剣道部の主将だよ」

「えっあの写真の？ ……あれ、でも今日剣道部は休みじゃないって教室で聞いたけど」

「そうなの!? 怪しい! なんかにピンときた。ちよつとつけてみようか？」

「そうだね、気になるし」

「私も異存はないよ」

最愛としてはやはり、と思ってしまうような事態になつてしまった。動いてきたか、というやはりと、ついていくのか、というやはりである。これは間違いなく、罠だ。

「私は超反対です。明らかに罨です」

だからここは止めなければならない。まだ日が浅いとはいえ、彼女らは表の、影のよい明るい道を通つて走っているだけだということとは十分理解できた。しかしここで寄り道をしたがために、闇へと引きずり込まれようとしている。今はそんな状況にあるのだ。ここは闇側から押し返すしかない。

「もしついていったら——」

「大丈夫だつて。少しでも危ないと感じたら逃るから」

「——あ、ちよつと」

だが制止の声は華麗に受け流される。目を輝かせているエイミイは音をたてないように甲の後ろへとついていき、ほのかと雫も一度最愛の方を見たが、溜め息をついただけでそれ以上強く言わなかった最愛を見て「これを逃すと達也さんへの嫌がらせは続くことになるし、もし危なくなつても私の魔法があるから」というほのかの言葉だけ残し、エイミイの後ろへとついていった。

そして一人残された最愛。押し返そうとしたら華麗に横を通り抜けられたようなものだ。溜め息しか出ない。よく分からない世界に放り込まれ、よく分からない出会いをして、よく分からない事態に巻き込まれ始めている。だがそれでも最愛は後ろを追うことにした。

「……まあ退路ぐらいいは超確保してあげましょう。恩もありますし」

たとえ彼女らがどんな状況に陥ったとしても必ず逃げ道が出来るように、最愛も行動を開始した。



最愛を置いて甲についていった三人。場所はもうすぐ学校の監視システムの外に出ようとしているところだ。家に帰るといふのなら納得出来るが、エイミーがキャビネットに登校をしているのを見たためにその可能性は消される。少しずつ怪しくなっていく雲行きに、最愛の言葉が頭を過る。

「なんか……ちよつとだけ不安かも」

「実は私も」

「えっエイミイも!？」

「完全に不安がないってわけじゃないけど、私達なら大丈夫」

ほのかが溢した不安は、その場の共通認識だった。雫の言葉で不安を拭いしつつも、後をついていく。そして甲は急に脇道へと入っていった。三人に若干の緊張が走る。どうやら甲は誰かと電話をしているようだった。気づかれないようにゆつくりと近づくと、三人。話し終えて携帯を切った甲。突然、走り出した。

「気づかれた!？」

「わかんないけど、とにかく追うよ!」

元々の距離に加えて反応が遅れた、男女の身体能力の差など様々な要素により離されていく距離。角を曲がった甲の後に十数秒空けてからついた三人は、だがその姿を見失う。

「あれ、いない……!?!」

「な、なんですかあなたたちは!」

それを確認した直後、三人の前方に四台のバイクが立ち塞がった。疑う余地もない。絹旗の言うとおりに、罨に掛かってしまった。あまりの突然の出来事について叫んでしまったほのかだが、それを抑えることも含め、雫が淡々とこの状況の打開策を伝えた。

「ふたりとも、合図したら走るよ」

「うん」

「CADのスイッチを」

今ほのかと雫はお互いに手を握っており、エイミーは胸の前で手をクロスさせている。傍らから見れば恐怖で身体を抱えているかのように見えるその姿勢は、隠し持ったCADのスイッチを入れるに十分な姿勢でもあった。ほのかと雫はお互いがお互いのCADのスイッチを入れる形にする。

「ふん。……そこそと嗅ぎまわって。我々の計画を邪魔するネズミは——」

「GO!」

「——! 逃がすな!」

相手が喋っている隙をついて後ろへとターンをし、逃走。だが男女の身体能力の差は大きい。実際にはすぐに肉薄してエイミイの制服を捕まえんと伸びる腕。だが捕まれる前にそれを振り切り、CADを操作しながら振り返る。

「ただの女子高生だと思ってなめないでよね!」

発動したのは加重の魔法。単純に身体にかかる重力量が増えた腕を伸ばした覆面ライダーとその隣にいた覆面ライダーは、地面を舐める結果となった。

「エイミイ!」

「自衛的先制攻撃ってやつだよ!」

だが、まだ二人残っている。魔法でやられた二人を置いてほのか達へと迫る。

「私も……！」

その二人も、ほのかの魔法により目を眩ませてしまった。

「しまった。目が……っ」

「くそ、化け物め！ これでも喰らえ！」

しかし、逃げ切ることはできなかった。

突如として三人に脳を揺さぶるような不快音が鳴り響く。特に感受性の高いほのかは、それで立ち上がることにすら困難な状態へと陥ってしまった。

「ふふ、苦しいか。司様からお借りしたアンテナイトによるこのキャスト・ジャミングがあるかぎり、おまえらは一切魔法は使えない……まだ効果が足りないようだな？」

ほのかは既にダウンしているが、エイミイと雫はまだなんとか平衡感覚を保っていた。しかしそれを見てさらにキャスト・ジャミングを強くされ、二人とも顔を地面につける。

「始末するか?」

「ああ、手はず通り。我々の計画を邪魔するものには、消えてもらう」

三人の頭の中では、先程の絹旗との邂逅が過る。あの時絹旗の忠告を聞こうとしなかった結果がこれだ。自分達は結局逃げることもすらもできず、目の前にいるナイフを持った覆面ライダーによって命を絶たれようとしている。

「この世界に魔法使いは必要ない!!」

そして振り下ろされたナイフは、だが一瞬で現れた目の前の手によって腕ごと破壊される。

「いっつ!」

「逃げることも超考えていると思つての行動だと思つていたのですが、まさか本当に四人だけとは可哀想なほど頭の弱い方達ですね」

聞き覚えのある声に特徴的な口癖。

三人は頭痛に耐えながらも、覆面ライダーと自分達の間にいる目の前にいる少女の姿を確認した。

「せめて一人は背後に回すなどをすべきです。まあおかげで超楽はできましたけど」

片手を横に流しただけでナイフとその腕までもを破壊した少女。エイミイは絞り出すかのように、その少女の名前を口した。

「最愛ちゃん……?」

「そうです。忠告は最後まで超聞くべきですよエイミイ」

「ぐおツ!」

ありえない方向へと腕を曲げたライダーを、その小柄な体型から出たとは思えない威力の蹴りを放ち、数メートルほど跳ばしながら最愛は静かに叱責をいれる。

「バカな! この状況下で魔法が使えるはずが……おい、もっと出力を上げろ!」

その力を魔法だと断定した覆面ライダーは、最愛にキャスト・ジャミングが効いていないことに戦きながらも、その効力を強くすることにより動きを封じようと試みる。更に強くなったキャスト・ジャミングに三人の意識が遠退きそうになる中、だが最愛は悠然と立っている。

「残念ながら超無駄ですよ。私にキャスト・ジャミングは超通用しませんから」
「どうせハツタリだ！ さっさと死ねこの化け物！」

それをハツタリと取った覆面ライダーの一人は、ナイフを片手に突っ込んだ。恐らく先程腕ごとナイフを壊した現象も魔法だと思ったのだろう。だが違う。

降り下ろされるナイフは、今度はただ立っているだけの最愛の顔の目の前で甲高い音と共にその原型を崩した。

「ぐっ——！ 腕がふっ！」

そして腕を抑える覆面ライダー。折れてはないにしても、恐らくヒビは入っている。

そして腕の痛みを声に表す間もなく、腹を殴られて吹き飛ばされるライダー。キャス
ト・ジャミングは機能しているのにも関わらず魔法を打ち消せず、半分の戦力を失った
彼らは恐怖のあまり後退を始める。

「ナイフでは私の^{オフエンス}装甲は超破れません。さて……私の友人に危害を加えたんです。
超覚悟してください。殺さないにしても、死の淵までは超送つてあげますよ」

恐怖に覆面ライダーの顔がひきつるが先か、最愛の地面を踏み砕いての突進はまさに
一瞬。その威力のまま放たれた拳は覆面ライダーをいとも容易く吹き飛ばし、後方のバ
イクへと激突させた。更に間を置かず、隣にいた最後の覆面ライダーをメキツという嫌
な音ともに蹴り飛ばす。

鎮圧は、あっという間だった。

そして身体を起こし始めている三人に近寄る最愛。

「最愛ちゃん……ごめんね……私達が最愛ちゃんの忠告を聞こうとしなかったから
……」

「全くです。以後超気を付けてください」

一人ずつ手を貸して起き上がらせる最愛は、若干むつとした表情でほのかの謝罪を受けとった。他の二人も面目無いと言った表情をしている。

「まあ大丈夫なら超良いです。という訳で、さっさと帰りますよ」

「えっ、でもこの人たち……」

「ここに来る前に警察に超連絡してあります。早く逃げないと面倒なことになりますよ」

「げっ、それはやだな。よし、さっさと逃げちゃおう！」

警察に取り調べを受ける未来を見たのか、あっさりと頷いた三人は最愛と共に来た道を走って戻っていく。それを物陰から見ている一つの人影。姿が見えなくなるのを確認して倒れている四人へと近づき、CADを操作して魔法を行使してから耳につけられた携帯とイヤホン一体型の機器に手をかけたところで、先程まで聞いていた声がかげられた。

「高見の見物とは超良い趣味してますね。司波深雪」

驚いたように振り返り、先程見送った人物の姿を視覚でも認め、更に目を見開く深雪。一歩ずつ近づいてくる最愛に冷や汗をかきつつ、深雪は迷わずにC A Dに手を添えた。

冷戦

深雪がこの場に居合わせたのは、偶然と言ってもよかつた。生徒会書記の中条 あずさが発注のミスをして、尚且つ次の配達は週明け、更にネットでは売っていないということ、深雪が直接買いに来たのだが、そこで偶々ほのか、雫、エイミーを見掛けたのだ。兄の言葉もあり、何処か怪しげな行動をしていた三人に胸騒ぎが起き、発注をささつと済ませ三人を探そうとしたのだが、そこで魔法の気配。

急いでその場へと向かうと、なんとアンティナイトを持った覆面ライダーのキャスト・ジャミングが辺りを覆っていたのだ。

急いでCADを起動させて覆面ライダーが持っているナイフを破壊しようと魔法をかけようとすると、それはまた別の場所からやってきた助っ人により、魔法を霧散させた。

魔法の兆候無しでナイフと共にその覆面ライダーの腕をも変形させた彼女は、まるでこういう状況が馴れているかのように相手を無力化させる。

更に強化させられたキャスト・ジャミングも、効いた様子は無い。先程までの行動は人間離れた運動神経の持ち主でまだなんとか納得できるが、この状況は納得できるは

ずもない。深雪は新入生の次席がほのか、三位が雫であることを知っている。そしてその二人は動けていない。これから考えられるのは、少なくともほのか達よりも事象干渉力が高いということになる。

そして聞こえてきた単語は、オフエンス・アーマーというもの。それが彼女の魔法だという。意味だけ取れば、攻撃性鎧。絹旗の怪力はこの能力によるものだと容易に察しがついた。

助けに入ること忘れ絹旗の観察へと入ってしまった深雪だが、オフエンス・アーマーの原理が全く分からない。BS魔法師だということは聞いていたが、少なくともその兆候は分かるはず。それなのに、である。

そしてあつという間に四人を殲滅させた絹旗は、三人に手を差し伸べた。結局何も分からなままではあつたが、結果的には良かったと言えるだろう。

だがホツとしたのも束の間。この事態を警察に連絡してあるというのだ。それだけには困る。三人がこの状況になったのは、兄である達也が原因なのは明白。そして襲ってきた暴漢はアンテナイトを持っていたのだ。事態は思っているよりも深刻なもの。

警察が来る前に逃げる、と言って三人は駆け出していったが、それはさせられないと倒れている四人に近づき、CADを操作してサイオンシールドと音波遮断を展開。

とある人物に電話をかけようと耳に手をかけたところで、突如声をかけられた。

「高見の見物とは超良い趣味してますね、司波 深雪」

心臓が止まるかと思った。

いや、実際に止まった気がした。

それだけショックが大きい声が、聞こえてきた。

振り返ってみると、そこにはゆっくりと近づいてくる絹旗の姿。先程一緒に逃げていったと思っていた彼女は、今日の前で深雪に敵対心を持って対峙している。

どう見ても、最悪の状況だった。

もしものために、既にスイッチが入っているCADに手を添え、深雪は臨戦態勢へと入った。



見えない何か、路地裏でぶつかり合う。魔法という超常現象が一般化されたこの世界でも不可解なぶつかり合い。即ち相手の動きを見逃さないその目力が、両者の間で均衡していた。

それでも歩みは止めない絹旗に、深雪も気丈に振る舞う。だが、その歩みは突如止まった。

「分かっていると思いますが、私は超怒っています」

それと同時に放たれた言葉は、現在怒っているということ。それも言外に深雪が原因とでも言いたげな様子で。

「……何故助けるそぶりすらも超見せなかったのですか？ そちらからしたら信用できない、魔法も不明の奴しかいなかったのにな？」

だんだんと雰囲気、そして何より口調が変わっていく。だが深雪に反論はできない。たまたま絹旗が力を持っていたから良かったものの、普通の二科生、またはキャスト・ジャミングに優れた能力じゃなければそのままダウンして状況はさらに悪化していた。というよりも、そもそも見ているという選択肢そのものがおかしい。

「ほのかと雫は言っていました……深雪はとても超優しくて良い人だって……もつと仲良

くなりたいって……それが！ それなのに！ オマエにとってほのか達は助けるよりも囿に使う程度の仲だったってことですか!？」

「……ッ」

何も言い返せない。

ただ深雪は、CADに添えた手を下ろした。

これは戦闘ではない。攻撃される可能性は否定できないが、絹旗は達也や深雪の今までの関係抜きで、叱責を入れているのだ。深雪のやったことは捉え方を変えればほのか達を囿にして絹旗の力を試した、とも取れる。

「何黙ってんだクソ野郎が！ こっちはもうキャパ越えそオナンだけど状況分かッてンのかオマエ!？」

その小柄な体型から出されているとは思えない、重圧。

これはただ喧嘩を吹っ掛けられているのではなく、絹旗はちゃんどほのかや雫、エイミイを仲間だと認識しており、彼女らを無下に扱った深雪にキレているのだ。

問題に関わったのはあの三人だが、今回の件で言えば絹旗に非はほとんどない。間違

いなく深雪が悪かった。

「……………ごめんささい」

「それは今言ったこと全部肯定したってエことでいいんだなア？」

「……………結果論としては間違いではないわ。今回彼女達を囚にして絹旗さんの力を測ろうとしたのも間違いではない——でも！　ほのかと雫は私の大切な友人です！」

「どの口でそんな事言ってるんだオイ！」

本当にどの口が言ってるんだ、だろう。だけど、深雪にも言い分がある。確かに深雪が悪いが十悪いわけではない。その監視に徹した原因は、他にもない絹旗にあるのだから。

「……………私たち兄妹は……………絹旗さんも知つての通り普通ではない。詳しい事情は言えないけど、とある理由でお兄様も視線には敏感なの。入学式の際に絹旗さんに向けられた視線から、絹旗さんがただ者では無いということに察して警戒しているわ」

「……………」

嘘ではないことは、絹旗が一番よく分かっている。達也からは同業者の臭いを感じているのだから。

「今回私がいたことに気がついていたらのなら、私が途中まで魔法を使おうとしていたのは分かっていたはず。でも動かなかったのは、できるだけ絹旗さんと関わらないようにしてお兄様から言われていたからよ。関わらなければ、何も起きないって……だから手を出すのを躊躇ったの。いることがバレなければ問題ないだろうって。勿論魔法はいつでも使えるようにしていたわ」

嘘ではない。事実でもないが。

その真意を見極め、顔を落とし、絹旗は何かに耐えるかのように拳を強く握って肩を震わせている。

「……誰に連絡を入れようとしてたんですか？」

「私達の師匠よ。アンティナイトを持っている暴漢なんて普通じゃないわ。つまり、それなりに規模のある組織が関わっているということ。その情報を探るのは、私達師匠の得意分野なの」

「つまり、あの時の視線はそいつからですか……」

かなりギリギリのラインを攻めながらも、重要な部分は隠した深雪は、よく頑張ったと評するに値するだろう。何かと葛藤するかのように肩を震わせる絹旗は、突然腕を振りかぶり、地面を殴り付けた。

「——!？」

殴り付けた、にしてはあまりにも高すぎる威力。深雪も目の前の惨情に目を見開いた。

ただ腕を放っただけで、そこには小さなクレーターが生成されており、一瞬ではあつたが地面が小さく揺れたのだ。それから分かったのは、あの覆面ライダーにはちゃんと手加減をしていたということ。

「……今回は偶然の重なりつてことで超見逃してあげます。ですが、次同じようなことをやった場合は、超覚悟しておいてください」

腕を引き抜いて深雪に背を向けてから、絹旗はそう言い放った。いつの間にか口調が戻っている。

「警察には連絡していません。あれはほのか達を離すための超嘘です。その師匠つて人にも超引き取ってもらつてください。私は帰ります」

来た道に戻る絹旗を、ただ見つめる深雪。絹旗の背中が表の大通りを出るまで、深雪は視線を外さずただ一点を見つめ続けていた。

そして、脱力。

未だに爆音を上げる心臓を抑えながら、なんとか乗り切ったという達成感に身を浸らせる。そして深雪は、突如喋りだした。

「今聞いた通りです、先生」

『これはよくやったとしか言いようがないね、深雪君』

深雪に答えたのはイヤホン越しの師匠、八雲だ。今の今まで、通話は繋ぎっぱなし。今の会話は全て駄々漏れだ。

『でもね深雪君。その割には有力な情報が手に入らなかつた訳だけど——君たち兄妹の
も含めて』

今回深雪は電話を繋いでから絹旗と相對していたのだが、これは深雪が意図したこと
ではない。本当に偶然だ。通話を切る仕事をすれば何をされるか分からないという判
断のもと、そのまま放置しただけ。そのため深雪は、八雲に隠していることをうっかり
話さないように気を付けながら喋る必要があつた。

『にしても彼女、引き際は心得てるみたいだね。相当手馴れているよ』

「……詳しいことは後日でよろしいですか？」

『うん、今日はちゃんと休むんだよ』

そう言つて頭を下げてから通話を切つた深雪。

ボロが出ていないことに内心ホツとしつつ、長居は無用のため深雪もその場所からそ
そくさと走り去つていった。

接触

その翌日の日曜日。絹旗は図書館へと出向いていた。理由は一つ、古武道について調べためだ。

暗部の経験である程度の武道の心得がある絹旗は、達也の動きが古武道に通ずるものであると分かつていた。そして深雪から教えられた、情報探索が得意という師匠、推察するにその道のプロであろう人の情報。これにより忍術の路線が有力だ。

その古武道——どうやら古式魔法というらしい——の忍術系列を手当たり次第に漁る絹旗。今回は魔法やその術式は全部無視しても良い。調べるのは人だ。勿論故人ではなく、今も生きている人でなければ意味がない。それが最低条件。場所については最悪学校は休むためできるなら近場で、と言ったところだ。

そう、絹旗はあの兄妹の師匠と接触しようとしている。目的は達也と深雪の素性——ではなく、いや、それも含まれはするのだが、一番はこの世界の魔術師の存在について。絹旗はこの世界に来てからの約二週間、大小はあれど常に警戒を怠らなかつた。だから達也の雰囲気ですぐ気がついたし、視線にもすぐに気がついた。先日の深雪についてもそうだ。つまり、絹旗は今精神的に参ってきている。

この世界にも魔法という異能が存在するが、絹旗が不意打ちで死ぬ危険性がある魔法は調べた限りではない。魔術師がないという情報だけでも、自分を脅かす仮想の存在が極端に減るのだ。というよりも、いるにしろいないにしろ、もう絹旗の精神が悲鳴を上げている。

先日の一件がその顕著な例だろう。

あの時は深雪に対して「何故助けることよりも監視することを選んだのか」という叱責を入れたが、これは元を辿ると絹旗とあの兄妹の関係性が原因だ。お互いに警戒をしていた中での、あの場面。迂闊に手を出したら敵対とも取られかねないあの状態で何故助けに来なかつたなど、はつきり言つて馬鹿げている。普通に考えれば助けようとする方がおかしい。助けたくても助けられない状態を作ってしまったのだから。

つまるところ、絹旗はその時から既に精神的余裕がなかつたのだ。誰かに当たらなければ、自分がおかしくなる。吐き出さなければ、自分が潰れる。

らしくもない、と頭を切り替えて開いていた資料を閉じる。探すのを諦めたのではなく、もう見つけたのだ。運良く近場に一人、恐らく本命だ。

「忍術使い、九重 八雲ですか」

どうやら九重寺の住職をしているようだ。住所も明白。他に有力な候補もないため、図書館を出て九重寺へと向かった。



達也が仕事でとある場所へ出掛けたため、深雪も達也に内緒でこっそりと家を出た。目的地はデパート。なんと言ってももうすぐ達也の誕生日。そのプレゼントを買うためだ。そうじゃなければこっそり外出などしない。

兄ならどういふのが好みか、いつそのことお揃いのを買うかと悩んでいた深雪。だがあちこち見ていたその目は、一点に集中することとなった。

そこにあつたのは、昨日の暴漢がつけていたのと同じヘルメット。顔の露出面積に加え目元しか視界が開いていないため、覆面としての機能もあるものだ。念のためその店員にそのヘルメットの売買履歴について聞いてみるも、一度も売れていないとの事。となると、手がかりは直接的なもののみ。

一度思い出すと引けなくなってしまうのか、深雪は迷わずに師匠がいる九重寺へと向かった。先日捕らえた暴漢にどうしても聞きたいことがあるからだ。

八雲からは任せなさいと言われたが、達也が関わっているとあつてもたつてもい

られなかった。というよりも、任せきりとはいかない。

距離もそこまで離れておらず、それこそ徒歩で行ける場所にある。ほんの数分ですいた深雪は、だが異変を感じた。

昼間なのに、誰もいないのだ。

「深雪君。任せておきなさいって言っただろう？」

突如、大声が響く。ただの大声ではない。

耳を塞いでも身体の中から大音量で流れてくるような、そんな声。

「今日のところは帰りなさい」

だが明らかに普通ではない。魔法によって改編された声だと容易に理解させられるほど、その声は威力を持っていた。

そして魔法と理解した瞬間、深雪は領域干渉を最大出力で放った。

それに反応するかのように、ぐにやと空間が歪む。すると目の前には、門下生達が修行をしているところだった。

小さく悲鳴を上げながらも稽古中だということは理解していたため意地で最小限に——意地で抑えても悲鳴は出てしまったぐらいには驚いたが——留めて、口を手で覆う。

ずっと、そこにいたということだ。

「弟子たちが驚くから、大声は出さないでね」

そして、いきなり耳元で囁かれた声に、だが今度は声は漏らさず身体を引かせる。深雪の先程までいた場所には、今までの犯人であろう八雲が立っている。

「先生、急に忍び寄るのはやめてくださいと……」

「いや、実はずっと後ろにいたよ。どうしても気になるっていうのかい？ でもその前に、珍客が来てしまったようだ」

珍客、と言われても八雲と深雪の位置関係で寺の入場門に死角ができてしまっており、その珍客がそこに立っているため深雪からは見えない。ヒョイツ、と身体を横にずらした覗き込む体勢でその珍客を視認し、

「!？」

驚きのあまり、声が出なかった。

深雪は何も情報を与えてはいなかった。場所どころか、名前すら出していなかった。気づいていないという可能性も否定はできないが、後ろをついてこられた訳でもない。実際、ついてきたわけではないみたいだ。なのに、門を潜ってこちらに歩いてきている人物は間違いなく――

「お、どうやら超大当たりのようですね。これはついています」

——絹旗 最愛だった。



絹旗は途中で深雪を見つけてその後を——ということは無く、そのタイミングは本当に偶然だった。キャビネットを使い、多少能力も使いながら走って時間短縮をした結果

が、この状況に繋がったと言っても良い。

門を潜るとたまたまそこに坊主頭の住職らしき人と誰かが喋っているのを見かけた。向こうもどうやら気がついたらしく、ヒョイツと身体を傾けてくれたおかげで、その誰かは深雪だということが分かった。

「お、どうやら超大当たりのようですね。これはついてます」

今回は深雪がいてくれたおかげで対面している人物が師匠であることを教えてくれた。面倒を考えれば、その点は感謝すべきところだろう。

門を潜り抜け、八雲へと近づいていく。それに応えるかのように、八雲もこちらへと身体を向けた。

「……そのいやらしい視線、超間違いないです。九重 八雲ですね？」

「正解。よく分かったね。深雪君についてきたのかい？」

「ついてきたわけではありませんが、まあ超運が良かったとでも言っておきますよ……：時間は超取らせません。本題に入りたいのですが」

深雪は驚いたようにこちらを見ているが、今回の目的は八雲なため無視。長居は無用だ。

「なるほどね。深雪君。すまないが少しだけ席を外してほしい」
「……分かりました」

絹旗の視線で深雪が邪魔だと理解した八雲は、少し席を外すように指示。深雪も頷いて、その場から離れたところへと行く。

「さて、僕と二人きりで話したいこととはなんだい？」

「単刀直入に聞きます。魔術師という存在を知っていますか？」

「魔術師ではなくてかい？」

「はい」

八雲の頭に、ハテナが浮かんだ。

八雲も全く知らない存在だ。

だが、目の前の少女が嘘を言っているようには見えない——というよりも、本気だ。

だから八雲も、真面目に答える。

「すまないが、特徴を教えてくださいませんか？」

「そうですね……彼らは戦うときに、魔法名というものを名乗ります。それは命を賭けて戦う時に使うものです」

「……そこまで具体的な情報があるのなら、答えは出ているんじゃないか？　僕が全く知らないのは気になるところだけど」

知らない。

魔術師のことを知っている人物は、魔法名がどういうときに使うものなのかを知っている。

でも、八雲は全く知らないと言った。

すつ、と重たい何かが降りた気がした。いや、実際に膝が崩れ落ちたのだ。それを八雲がギリギリのところまで支える。

「大丈夫かい？　本当に不思議な子だ」

「すみません……気が楽になったので力が超抜けてしまいました……」

「僕が嘘をついているとは思わないのかい？」

「今ここで嘘だったと言わない時点で嘘じゃないのは超わかってます」

対して絹旗は、なんとも疲れたような表情をしている。それもそうだろう。何故ならこの二週間の絹旗は常に仕事モード。やっと日常モードに切り替えることができたのだ。

あまりの変わりように、八雲ですら戸惑っている。警戒を解くだけならまだいいだろう。だが監視されていた相手を前にして魔法を発動する気配すらない。事実、絹旗の身体と八雲の腕は密着している。

それからすぐに絹旗は立ち上がり、グツと背伸びをする。

「はあー、超疲れました。やっと良い夢が見られそうです。貴方には超感謝してあげますよ」

「それでも僕年上なんだけど……」

「というわけで、私は帰ります。超お邪魔しました」

手をヒラヒラとさせながら帰っていく絹旗は、まるで無防備。それが達也なら八雲も

襲っていたところだが、今回はむしろ感心と言った様子だ。微笑みながら絹旗を見送っていると、サイドから近づく足音。深雪が来たのだ。

「深雪君。どうやらあの子は——」

「すみません……実は聞いてました」

「——感心しないねえ。まあ人のこと言えないけどさ」

「それで先生。昨日のことなんですけど……」

「安心しなさい。達也君には内緒にしておくよ」

「ありがとうございます」

「うん。それじゃあ行こうか」

達也が昨日の件を知ったら絹旗を牽制する可能性が高い。だが先程の彼女は、それこそそこらへんにいる普通の少女。まるで人が違うみたいに穏やかだった。

魔術師。達也に心当たりが無いが、深雪は聞いてみることにした。

授業

翌日。達也は戸惑いを隠せないでいた。

絹旗からの雰囲気が、見違えるほど変わっていたのだ。それこそ、本当に別人だと思うくらいには。

あまりの変わりように達也も「何か良いことがあったのか？」とつい聞いてしまったが、「そうですね。超最高の気分です」と敵対心などまるでない笑顔で言われてしまったため、何故か焦っている。

一昨日までは、自分を含めた十二人を警戒していた。しかし、今日はそこらへんにいる普通の少女のような雰囲気を漂わせている。いや、実際に普通の少女だ。

昨日に何かあったと思えない。

また変に警戒させる訳にはいかないので探りは入れないが、念のため師匠に聞いてみるか、と達也は同じく絹旗のあまりの変わりように戸惑っている友人達の輪へと加わった。



一週間にも及ぶ新入部員勧誘週間の終了で、入学関連のイベントは一段落。絹旗たちのクラスでも実習が本格化した。

入学試験に魔法実技が含まれているため生徒たちは基礎的な魔法スキルを身に付けてはいるのだが、絹旗は完全な付け焼き刃。ほのかと雫の助力により魔法のサイオンの扱いには多少慣れたが、練習し始めたときはほのかと雫が思わず苦笑してしまうくらいには酷かったものだ。

勿論それから比べてマシになったというだけであり、窒素装甲を発動できない状態に陥る危険への対処。そのため魔法の必要性は今のところない。

今日の課題は、基礎単一系魔法の魔法式を制限時間内にコンパイルして発動する、という課題を二人一組になってクリアするのがその内容だ。

制限時間は1000ミリ秒。一人前の魔法師なら500ミリ秒切るのがだが、当然二科生にそんな生徒はいるはずもなく。さらにその二科生でも魔法の技能レベルは最低の絹旗がそれを一発でクリアできるわけもなく。授業内でクリアもできず。授業を延長させてそれは昼休みまで及び、現在絹旗、レオ、エリカが絶賛居残り中となっている。

「1024ミリ秒。少しずつ早くなっている。最愛は大丈夫そうだな」

「むう……でも私よりレオやエリカの方が超ダメみたいです。私は超終わらせておきますから、そちらの二人の面倒を見てください」

「ああ。レオ、1060ミリ秒だ」

「よ、容赦ねえな最愛……それにしても、1秒がこんな遠いなんて知らなかったぜ……」
「バカね、時間は『遠い』とは言わないの。それを言うなら『長い』でしょ」

「エリカちゃん……1052ミリ秒よ」

「ああああ！ 言わないで！ せつかくバカで気分転換してたのに！」

「ご、ごめんなさい……」

「ううん、いいのよ美月。どんなに厳しくても、現実には直視しなくちゃいけないものね……」

「超直視してもそれだけでは何も変わりませんけどね」

「厳しいのは現実だけじゃなかった……」

「何言ってるんですかエリカは。私も超現実ですよ。というわけで、課題終わりです」

「ああ、996ミリ秒。合格だ」

「……最愛の意地悪」

「お、超現実見れているじゃないですか。超その通りです。いつも誰かさんと口喧嘩をしては負けなしで、たった今さっき現実逃避していた人から認められる程度には、超意

地悪ですよ」

「なあ達也、あの女が口で負けてるぞ……」

「これは珍しいものを見たな」

そしてそれに付き合っているのが達也と美月だ。絹旗はこの会話の間に終わらせてしまったが、レオとエリカは合格の兆しすら見えない。だがレオもエリカも、ある人物に、それぞれ別の意味で注目していた。

レオは今までの学校生活の中でエリカに口で勝つたことがない。だがそのエリカをして、絹旗には口で勝てないようだ。現に今も、ぐうの音も出ないと言ったところである。それに驚きを隠せないのは絹旗とエリカを除いた——エリカはそれどころではない——共通認識ではあるが、絹旗以外の全員の共通認識も一つあった。

「なあ達也。最愛つてあんなに饒舌なんだな」

「ああ、俺も驚きだよ。どちらかと言えば寡黙な方だと思っていたが」

「それになんていうか、かなり明るくなつたな」

「俺もそう思うよ。それはそうとレオ、そろそろ終わらせるぞ。レオは照準の設定に時間が掛かりすぎてるんだよ。こういうのは、ピンポイントに座標を絞る必要はないん

だ」

「そんなこと言われてもよお……」

その全員の認識を代弁するかのように話していた二人だが、彼らは居残りをしているのだ。達也もそれを忘れてはいるわけではなく、その話はこれが終わってから、と言外に告げて授業へと集中させた。

「そしてエリカは起動式を読み込むときにパネルの上で右手と左手を重ねてみてくれ」

「……それだけでいいの？」

「俺も確信があるわけじゃない。だから理由は、上手くいったら説明するよ」

「う、うん……やってみる」

レオの次はエリカへ。疑問は一時おいて、達也に言われたように両手を重ねて起動式を読み込むエリカ。

それを確認した達也は、再びレオの指導に入る。

「1010ミリ秒。エリカちゃん、一気に40も縮めたわよ！ 本当に、もう一息！」

「よ、よーし！ なんだか、やれる気になってきた！」

「1016。迷うな、レオ。的の位置は分かっているんだ。いちいち目で確認する必要はない」

「わ、分かったぜ。よし、次こそは」

達也のアドバイスによって急速的に成長を始めた二人。絹旗と比べると、やはりサイオンの扱いには慣れているようだ。絹旗は雫の家で練習を重ね、居残りしてようやく合格だ。達也があのだviceをもっと早くしていたら、あそこに立っていたのは絹旗だけだったかも知れない。もともと、達也はその方法を『裏技』と考えており、彼らのためにならないと渋るほど授業専門の対策であることは間違いない。

だがその光景は、絹旗の頬を緩ませるには十分だ。

かつては光を浴びることは許されても、その世界へと行くことは許されなかった。それが今はどうか。

魔術師はいない。不意打ちで死ぬ危険性も無い。個性豊かなクラスメイト。常に気にかけてくれるのかと雫。

この世界に来てから手に入れた『光』は、既にあの世界の遥か上を行っている。

まだ光に染まるには抵抗がある。あの世界に戻ったらまた闇に染まることも分かっ

ている。でも今この時だけは、十数年も闇に触れたその休憩ということで、光に染まることを許して欲しい。

ふと思考から戻ってみると、いつの間にか深雪、ほのか、雫がビニール袋を手に下げて来ていた。透けて見える中身を察するに、昼食だろう。

そして他方では、なんとか課題をクリアして歓声を上げているレオとエリカ。深雪も労いの言葉をかけている。

その光景が目の前にある。それだけでも絹旗にとつては十分なもののだが

「どうしたの、最愛ちゃん？　最愛ちゃんの分もあるから食べよう！」

そこへと手を差し伸ばしてくる友人がいる。そしてそこには、一昨日やつ当たりをした深雪のものまで。

「せつかくなのですから、ご一緒しませんか？」

「そうですね。お腹が超減っていたところなので、お言葉に甘えます」

「そうしてください。えーつと……最愛と呼んでも良いかしら？」

「是非そうしてください。私も深雪と超呼ばさせていただきますから」

「ええ、よろしくね、最愛」

「超よろしくしてあげますよ」

その仲の良さに達也が珍しく困惑していたが、深雪が「お兄様、女同士の秘密です」と笑顔で言ってしまったがために、さらにそれを加速させてしまったのはご愛嬌と言うべきか。何にせよ達也の忠告を無視する深雪ではない。あまり近づくなと言ったが、深雪は絹旗と裏表の無い笑顔で話している。

ということとは、深雪は絹旗のこの変化の理由を知っているということだ。

まさか八雲ではなく深雪が持っていることには驚きだが、家で何があつたのか聞いてみるか。そう決めながら、達也も深雪たちが持つてきたサンドイッチを摘まんのだ。

襲撃

放課後の現在、絹旗は不機嫌だった。

勿論日常モードでの不機嫌なため殺気などを放ったりはしていないが、ムツとした表情をしているのには変わり無い。

その理由は明確。うるさい、そしてしつこい、である。

今日の廊下はいつもの風景と打って変わって勧誘期間並の喧騒を醸し出していた。事の発端は昨日の放課後。突如として爆音で鳴り出した放送は、学内の差別撤廃を指すと謳った有志同盟による、実質放送室を占拠して行うという違反放送だ。

しかしそれをただの校則違反として終わらせるだけではしこりが残る。そのため明日、つまり明日、全校集会にて有志同盟と生徒会長による討論会が行われることになったのだ。

廊下前にいるのはその討論会前に少しでも仲間を増やそうと言う有志の生徒たち。人数的に裏でかなりの規模まで膨らんでいたようだ。見た顔も何人か有志と呼び掛けをしている。

そして彼らの狙いは言うまでもなく二科生。つまり、絹旗だ。課題を終わらせて帰路

につこうとした絹旗に教室の中から、廊下からと勧誘が飛ぶ。それから逃げるように絹旗が若干早足になるのも仕方のも無いだらう。

有志をなんとか掻い潜った絹旗は、いつもの待ち合わせの場所へ。チラホラ見かける有志同盟の生徒から紋章を隠すようにして、顔を背け、話しかけられないようにしながら二人を待った。

するとちようど一分ほど、絹旗にしてはなんとも有難いほど早くほのかと雫がやってきた。そこにふう、と一息。

「すごい賑やかだね。やっぱり明日の討論会かな」

「間違いないです。私は超行きませんけど」

「実は私たちもその話をしてた。五十嵐さんが明日は演習林が自由に使える貴重な日だからって」

「私たちも参加できるらしいからそっちにいこうかなって思ってるんだけど、最愛ちゃんはどう？」

「私もそっちの方が超良いですね。やりませんけど」

「えー、やろうよー」

一科生であるのかと雫と一緒にいたためか、それから勧誘されることもなくなつた絹旗。明日の討論会は行かないことで決定した三人は、普段のように、雑談をしながら帰路を歩いていった。



翌日。

達也は風紀委員のため討論会に出席することとなつたが、他のE組のメンバーは各々がやりたいことをやっていた。

例えば絹旗なら、部活動だ。

今は既に討論会が始まっている。しかし演習林を使うチャンスは思ったよりも取れないらしく、貸し切り状態である本日はかなりの吉日。先輩たちもウキウキとしているところだ。

ほのかや雫も同様に、絹旗は部活動のユニフォームは着ていれど遠距離の魔法など使つたことは皆無。CADにすらインストールされていない。予めBS魔法師と言つておいたために慣れるまでは、ということでは見学させて貰っている。

だが実際は、今日の空気がやけに殺気だっていることに勘づいたからだ。今の絹旗は

日常モードではあるが、周囲の警戒は行っている。

「はいはいみんな！ 今日には演習林が使える貴重な日だから、ガッツリ練習するわよ」
「はーい」

五十嵐の一言に陽気な返事を返しながら演習林の中へ入っていくバイアスロン部。しかし、その歩みは突如として鳴り響く爆発音によって止められる。

「えっ」

「なんの音?！」

爆発音だけではない。

校舎を見てみると実技棟から黒煙が立ち上っている。

五十嵐は無闇に動かないよう指示をし、情報端末で速やかに状況把握を図った。

そして――

「おおおお落ち着いて聞いてね？ 当校は今、武装テロリストに襲われているわ！」

「……マジですか部長!？」

「こんなこと冗談で言わないわよ!」

——第一高校が襲撃にあっていることを知った。

絹旗は、一点を見つめている。

「護身のために一時的に部活用CADの使用が許可されています。でもあくまで身を守るためだからね」

そう五十嵐が言い終わるが早いか、突如として木陰から人影が飛び出した。

ナイフを持っている。テロリストだ。

悲鳴が上がるなか、テロリストはほのかに向かつて突進。ほのかは恐怖のあまり足がすくんでしまい、動けない。

テロリストの刃が後少しでほのかに届く。ほのかが恐怖により腰を抜かしてしまっ
た。

その瞬間、唸るような声が両者の間から響いた。

「オイオマエ……それは超誰に向けてんですかね」

ほのかとテロリストの間に割り込んだのは絹旗。テロリストはそれに構わず突っ込むが、絹旗にナイフが刺さろうとした瞬間、ナイフは刃折れ。テロリストは巨大な壁にぶつかっただかのような衝撃を受けた。

「——グフツ!？」

「せっかく人が学校生活を超楽しんでたのに……」

テロリストは全身に受けた衝撃により身体中の息を吐き出した。対して絹旗は何もなかったかのように立ち止まって、何かをぶつぶつと言い始める。

瞬間、何処からともなく、メキツと嫌な音が鳴り響いた。

「——ツ!？」

「どの世界にも人の楽しみを奪う超クソ野郎がいるみたいですね……」

あろうことか、自分の頭二つ分ほど身長が高い男の顔を右手一つで鷲掴みにしている

のだ。口を塞がれているため、言葉を発することも出来ないテロリスト。しかし、その顔は苦痛に歪んでおり、絹旗の手を退かそうと両腕が必死に絹旗の右腕を掴んでいた。

「本当なら超殺して終わりですが、ほのかや雫にはまだ早いし……はあ……」

だがまるで何事もないかのように一人ぶつぶつと呟いている絹旗は、外から見ても不気味だった。

援護に入ろうとした雫、上級生である五十嵐でさえ、その異様な雰囲気にはただ見守ることしか出来ない。

「あなたは超運が良いようです。超半殺しで手を打ってあげますよッ！」

そして今度は明確に聞こえる声。

いつも通りと言って差し支えの無い声色。

だがそれと同時に放たれたのは、右腕一つで男の身体を浮き上がらせ、そのまま顔を地面へと叩きつける一撃。

叩きつけられた地面はボゴツという音とともに沈没。テロリストの顔半分が埋まるよ

うな形となった。

息はしているため生きているのは確認できるが、放置すれば命を落とす危険があるほどの致命傷を魔法を使わず、たった一撃で。

バイアスロン部の部員たちが思わず息を呑んだ。

それを行った本人は地面から男を引き出す様子もなく、ポケットから携帯端末を操作して周囲を見渡し始める。

そして、歩き始めた。

「最愛ちゃん、何処行くの……?」

「校門前辺りも超テロリストがいると思いますから、その応戦に向かいます。ほのかと雫は超ここにいてください」

ほのかの問いかけに振り向かずには答える絹旗の姿は、ここ最近見せていなかった入学式の時と同じような雰囲気を感じている。

この雰囲気は物事を冷静に把握してから動く、ということはこの一ヶ月ほどの付き合いで理解しているほのかと雫は、無闇に止めることはしない。

絹旗がそれを最善だと思つての行動だ。

この前はそれを信じないで命の危険に晒された。だから今回はそれを信じる事が、ほのかと雫の役目。

「最愛ちゃん！ 絶対に怪我しないでね！」

「む、誰が超怪我をするというのですか。これでもテロリスト程度なら超余裕で倒せますよ」

ほのかの見送りの言葉に絹旗は少し頬を膨らませながらも、少しだけ和らいだ表情でヒラヒラと手を振りながら歩いていく。

そして吞まれていた雰囲気からやっとなつと脱した五十嵐。

無闇に動かないようにと、絹旗を追いかけようとするも、ほのかから待ったがかかる。

「待ってください部長！」

「光井さん。何故止めるんですか？ 絹旗さんは貴女たちの親友でしょ？ 相手はテロ

リストなのよ？」

「親友だからです！ 最愛ちゃんは考えなしに行動する人じゃありません！」

俄然とした態度で言い切ったほのかに、この数日間の付き合いである程度ほのかの性格を知っていた五十嵐は戸惑いを隠せない。

「それに、最愛ちゃんはテロリストには絶対に負けません。ナイフも銃も、魔法すらも無効化させる。それが最愛ちゃんの能力です」

「そ、そんな魔法……いえ、でも絹旗さんはBS魔法師……それなら或いは……」

そして、今度は別のベクトルで戸惑うことになる。

しかし、五十嵐がここまで戸惑うのも無理はない。その言葉だけを聞いただけならそれこそ無敵。一切ダメージを受けずに敵を無力化できることに相違無いのだから。

その間にも、絹旗は歩みを進めている。

そしてついに、五十嵐は追うのをやめた。



閑散とした森の中。

一人の少女が歩みを進めていた。

「さて、見たところここが超怪しいと思ったのですが、どうやら超正解のようですね。銃火器の臭いがプンプンします」

絹旗の目の前には、廃工場。

外に見張りのような人はいないが、銃火器の臭い、そしてその場の空気からここがテロリストの本拠地だと断定した。

絹旗は襲撃してきたテロリストを撃退した後、すぐに周辺を地図で調べた。そして一ヶ所、つまりこの工場が怪しいと睨み、真っ先に駆け付けたのだ。

先程テロリストに言った運が良かった、というのは、誇張でもブラフでもなく本音だ。ほのかと雫がいなければ本当に命を奪っていたのだから。

「少し知りたい情報もありますし、超手短に終わらせますか」

正面から扉を破って入っていく絹旗。

第一高校では、テロリストをほぼ鎮圧し終えた頃だった。

抹殺

日中にも関わらず薄暗い廊下を歩く、一人の少女。だがその高校生にしては幼い顔には無表情。その容姿に似合わない雰囲気を漂わせ、その道の者ならそれこそ臨戦態勢に入らざるを得ないほど。

そこでふと、少女の、絹旗の足が止まる。

(……かなりの数いるみたいですね)

感じた、多数の人の気配。色濃くなる、銃器の臭い。確実にこの先に待ち構えていることが予想できた。警戒しながら歩みを——ということは無く、先程と変わらない歩幅で絹旗は歩いていく。

多数の人、多数の銃器。もしかしたら魔法師もいるかもしれない。

だからなんだと言うのだ。あの世界に比べたらそんなもの、生温いにもほどがある。絹旗の仲間ですら絹旗を即死させる程の能力者が、それもとこころ構わず即死能力を発動させる仲間がいたのだ。むしろ今の一人でやる状況の方が安全だ。

ふわっと風を感じる。

どうやらわざわざ広間で待ち構えているようだ。

気にはしていないが来る途中カメラもあった。恐らく分かったのはそれが理由だろう。

廊下の角には開き放たれたドア。

そこを曲がると――

「大歓迎ってどこですか」

「その通りだよ、絹旗最愛くん」

――銃で武装した多数のテロリストに、眼鏡をかけ芝居がかった口調の男性が待ち構えていた。

「私がブランシユ日本支部のリーダー、つかさどめ司一だ」

「超どうでもいいです。まあ探す手間を省いてくれたことだけは評価してあげなくもないですよ。せいぜい泣き喚めきながら超死んでください」

「そんなできもしないハッターで脅そうなんて、やっぱり子供だねえ」

ゲラゲラと笑うテロリストたち。

その光景に絹旗は溜め息一つ。

笑い続けているテロリストたちに一気に肉薄。その弾丸のような勢いそのままに、一の近くにいたテロリストを殴り飛ばした。

しんつとなる広間。

「ハッターリ？ 何言ってるのか超分かりません」

「……ッ!? は、早く撃て！」

絹旗の目は、本気だった。

現に殴り飛ばされた男は壁にめり込んでおり、首があらぬ方向へと曲がっている。

最早先程のような芝居があった口調ではなく、ただ焦りと恐怖に支配された震えた声音で指示した一に、テロリストたちは一斉に銃を構え、連射した。

「バカめ！ 我々に手を出すからこうなるのだ！」

嘲笑の意味が込められたその言葉は、その場の共通認識でもあった。手を出した結果、絹旗は死ぬ運命となった。撃ちはじめた頃は、誰もがこれで終わったと確信していた。

「バ、バカな……一体何が起きている……」

しかし撃つ時間が長くなるにつれて、その確信は恐怖へと変わっていく。

全ての弾丸は絹旗に当たる前に粉々となり、当の本人は何事もないかのように立っているだけ。それも、見下すような視線で。

足を一步踏み出した絹旗。一は無意識に、一步下がっていた。

「銃こときで私を超殺せると思っていたのですか。なめられたものですね」

銃声の中で放たれた嘲笑の色を濃くしたその言葉は、何故かその場にいた者全員の耳に届き、そして恐怖のどん底へと叩き落とした。

全員足が動かず、銃を撃つのがやつとのテロリスト。それに絹旗は歩きながら近づき、腕を掴んで握り潰した。

「ぎゃあああがッ!!」

あまりの激痛に顔を歪めながら叫ぶテロリスト。だがその後すぐに絹旗に喉を潰されたため、それすらも許されなくなった。

そしてそのまま横腹を蹴り飛ばされたテロリストは、壁に叩き付けられ、そのまま動くことはなくなった。

いつの間にか、銃弾の嵐は止んでいた。ただ恐怖だけがその場を支配している。

「ば、化物めー!」

一番初めに足が動いたのは、一だった。

仲間を置いて奥へと逃げ去っていく一を、だが絹旗は追わない。奥にも人が待ち構えているのを知っていたからだ。

向けていた視線を戻し、戦意喪失のテロリストたちへ。彼らはもう、銃を持つ気力すらなかった。

「さすがにリーダーに見捨てられ、銃を持たない相手をいたぶるのは可哀想ですね」
だからその言葉には、希望を持たざるを得なかった。

「そ、それじゃあ……！」

「ええ、一瞬で超楽にしてあげますから安心して死んでください」

「……ッ!？」



達也は走っていた。

当初はブランシユを壊滅させるために。

今はブランシユを助けるために。

勿論壊滅はさせる。だがそれは相手を全滅させることと同義ではない。その眼で状況を把握した達也は、深雪とともにもつとも早く広間に着くルートを選んだ。

「お兄様、そんなに急いでどうされたのですか？」

だがその状況を知るのは、本当に達也のみ。

だからあまりにも急いでいる達也に、深雪は疑問を持たざるを得ない。

「最愛が先についている。早くしないとテロリスト全員が死ぬ」

「え……」

それは、深雪を絶句させるには十分な理由だった。

やっと穏和な態度になった絹旗。それが今はあの裏路で会ったときのようなと言う
こと。

深雪の表情が引き締まる。

そして広間へと出た達也と深雪。

そこに広がる惨状に、深雪は目を伏せた。

「ダメージの大きさからして一発。恐らく手のみだな」

「そ、そんな……」

近くの凶器と遺体の状態を眼で確認した達也は、淡々とその攻撃手段を語る。だがその惨状に対して使われた凶器は、あまりにも現実離れしたもので、それでも今の彼女なら……と思えてしまう凶器だ。

壁には口から吐血している首があらぬ方向へと曲がっている男に腹部を中心に真つ二つに折れている男。

地面には首から上が無いものや身体が破裂しているもの、クレーターの中央で人の形をしていないものなど様々な形がある。

「奥にいるな。行くぞ、深雪」

「……………はい、お兄様」

あまりの遺体の惨状に気づかなかったが、正面には奥へと続く廊下があった。遺体もこのレベルまでくるとさすがの深雪にも少しくるものがある。

先へと進む達也に合わせて、遺体は視界にできるだけ入れないようにしながら深雪も走り出した。

「——これはッ！」

「少し距離があるが、少し先の広間でキャスト・ジャミングが使われている。それも複数人。一人一人がかなり強力だな」

深雪に焦りが生まれる。

まだ距離があるにも関わらず深雪ですら頭痛を覚える程の強さ。それを間近で受けているということだ。

さらに続いて、無数の銃声が鳴り響き、数秒後に地面が揺れた。

「お兄様！」

「……不味いな」

「——ッ！」

達也は、状況を完全に把握できる。

その達也が不味いと言った。

それが意味することの良い意味が無い。

そして次の達也の言葉により、別の意味で冷や汗が流れた。

「最愛が怒っている。早く行かないと全滅するぞ」

それはつまり、あのキャスト・ジャミングすらも超える干渉能力を持つているということ。そして先程から地面が鳴り響いていることから、もう既に絹旗の攻撃は始まっていることも分かった。

その現場まで後数十秒。

見えてきた光景は、手らしきものを投げ捨て、右手首を持ち上げている絹旗に、激痛に叫びを上げる男。そして、原型を留めていない遺体の数々。

再び起きた惨状に少し目を逸らした深雪に、あの時と同じ声音が聞こえてきた。

「勘違いすんなよオオマエ。こっちはすぐにでもオオマエを殺すことがアでキンだよ。手が滑る前に早く言った方が身のためだかなア？」

「ひいひいひい！ ほ、本当に知らないんだって！」

「そオですか……なら派手に死ね！」

「そこまでだ、最愛」

なんとか間に合った達也と深雪。

一の左肩から先は、無かった。

先程の状況と照らし合わせると、引きちぎられたということだ。

「あアン？　なんだ、オマエか。だいたいいる理由は予想ついているが、銃を向けてるってことはつまりはそオいうことでいいんだよなア？」

「俺はお前と殺り合うつもりは無い。ただその男を殺すのだけは待つて欲しいだけだ」
「こっちのメリットを教えてもらおうかア？」

そして今の絹旗は、いつになく好戦的だった。

あまりにも人の命を奪いすぎたのだ。

前の警戒心丸出しの絹旗、穏和な絹旗、そして今の好戦的な絹旗。この内の好戦的な絹旗は、また別の何かがある。達也は何処か確信に似たものを抱いた。

「今は提示できない。だが出来る限りの事は融通を利かせる」

「……本当だなア？」

「ああ。だからそいつは生かしておいてくれ」

懐疑的な目を向ける絹旗。

それに無表情で答える達也。

両者の間に起きた、短い邂逅。

その間が、一の運命を変えた。

絹旗の正面の扉に、突如として斬り込みが入り始める。その光景をじつと見詰める絹旗。四角を描いて開けられたその扉の先にいたのは、竹刀を携えた一高生徒の姿。

「な、なんだこの惨状は?！」

「司波。これはどういふことだ」

そして後ろから現れた大柄な男。部活動連盟会頭、十文字克人。十師族の十文字家の事実上の当主。

世間には鉄壁の名前を冠する家柄として有名で、その防御力は空素装甲すらも超えると絹旗自身も思っている相手。故に、ここでの戦闘は避けなければならない相手だ。

ここにいるということは達也と共に来た、つまり達也の仲間だ。達也への攻撃行動は、克人への攻撃行動に直結している。

「……チツ。命拾いしたなア、オマエ」

聞きたい情報に比べてこれでは割に合わない。

あくまで仕事として扱っている今回の突入の目的はほのかと雫の安全を脅かした者の排除。情報収集は二の次だ。

第一目的は達成している。潮時だった。

「この状況の説明は後で。今そこにいるのがリーダーの司一です」

「なんだと!?!」

そして他の介入は不味いと思った達也が、標的を変えるかのように一の存在を開示。それによりドアを蹴り破った男子生徒は、一気に沸騰した。

「テ……テメエのせいだ……ッ! 壬生みぶがどれだけ苦しんだか! 思い知れえええ!」

「ぎゃああああ!」

降り下ろされたのは竹刀。しかし振動魔法によって名刀さながらの切れ味を持つその刀は、顔を庇おうと反射的に掲げた一のもう片方の腕、右腕までも切り落とす。

左は肩から、右は肘から落とされた一は、それまでの出血もあつて既に意識を失いかけている。だがそこに無情と言うべきか自業自得と言うべきか、再び刀を構える男子生徒。その目は一しか映していなかった。

「これで終わりだ！」

「桐原ッ！」

しかし、その一刀はドスの利いた威厳のある声によつて制止させられた。

「そのくらいにしておけ。お前が手を汚すことはない」

「し、しかし……」

一般の生徒に人を殺めさせるのは不味い、という十師族としての判断を下した克人。桐原も納得はしていないが、引き下がった。

ギロツと一を見る克人。しかし一はこれから死の淵を彷徨うことになること確実の

重傷。死因の一端を握らせるのもまた、よろしくない。

克人は手際よくCADを操作して魔法を発動。

肉の焼ける臭いと共に、一はその場で気絶した。

静寂が、辺りを包む。

「待て」

そして、無言で帰ろうとした絹旗に待ったをかけた克人。彼はこの場の收拾をつける者として、ここまでの経緯を知る必要があった。

しかし、その呼び掛けに絹旗は応じない。

その胆力は対したものだ、今の克人にそこを褒める訳はない。

「お前には説明責任がある。それを放棄することは許されない」

「……友人を守るためにやった。超それだけです。そんなデカイ図体して言うことは超小物ですね」

「黙って聞いていればテメエ——ッ!？」

ここで沸騰した二年生の男子生徒、桐原。その心情を考えれば仕方のないことだろう。大切な人の心を弄ばれ、そして止めを刺すことも出来なかった。

そこに恩がある克人に対する侮辱行為ともなれば、黙っている方がおかしい。だから竹刀に高周波ブレードを纏って威嚇するくらいのは、むしろよく抑えた方だと言える。

しかし今回は、相手が悪かった。

「……次は無いですよ」

手で触れるなどその手をいらないと言っていているようなもの。それを絹旗は弾丸の勢いで桐原に肉薄し、竹刀を手で掴んだ。キィイーンという甲高い音と共に竹刀の魔法は霧散。そのまま竹刀をへし折られたのだ。

そしてまた無言で来た道に戻る絹旗。

克人も今度は止めることはせず、何かを見定めるかのように絹旗の後ろ姿をじつと見ていた。

九校戦編

休息

絹旗は今、憂鬱だ。

どれくらい憂鬱かと言えば、現在学校を休んで私服で街をブラブラと歩いている程度には、だ。

あの事件から数日経った本日、一高では九校戦出場をかけた中間テストへの意識が高まっているところだ。

全国魔法科高校親善魔法競技大会。

魔法師育成のため、魔法科高校九校を学校単位で競争させ、生徒の向上心を煽る舞台の一つ。

通称、九校戦。

スポーツ系魔法競技の中でも、魔法力の比重が高い種目で競われる。

ただし、剣術やマーシャル・マジック・アーツのような格闘技系競技、軽身体操やハイポスト・バスケットのような球技は別途大会が開催される。

八十五年度に、現在の形式で夏の定例行事となった。九十四年度までの優勝校は、一

高が五回、三高が二回、二高が一回、九高が一回となっている。

九十四年度までは、モノリス・コードとミラージ・バット以外の四種目の新人戦では男女一緒に試合が行われていたが、九十五年度から新人戦も男女別々になった。

採用競技は、大会一ヶ月前までに各校に通知する決まりとなっており、ここ十年間競技の変更はない。

一高では部活連ではなく生徒会が主体となつて行っている。

そして、この九校戦に選ばれるためには、中間テストで優秀な成績を収める必要がある。

だがこの九校戦、実のところ一科生のためにあるような大会だ。

過去に二科生の出場記録は一切無い、というよりも成績が良くないから二科生になっているのに、出場できる訳がないのだ。そのため盛り上がりを見せるのは主に一科生となる。

絹旗もその盛り上がりには一切触れない人物、というよりも魔法技能が無いため大会に出られず、そもそも出る気は毛頭無い。

正直自分の実力を全国に晒す意味を感じられない。

しかし大会には出たくないが、テストは受けなければならぬ。

そしてそこに付き纏うものが順位だ。

絹旗は学力面においては優秀な成績を収めている。それこそ一位を狙えるほどに。ではそこも手を抜くか、と言われれば否だ。

自分の命取りとなるような情報を晒すことはなく、一位が取れるのにも関わらず取らないのは阿呆のやること、というよりも達也や深雪、ほのかや雫にはやはり勝っておきたいのだ。

だからこそしばらくは気分転換として学校を休まなければならぬのだ。

そんなことで、絹旗は今都心へと単身で繰り出している。

目的はただ一つ、映画だ。

ブランシユ襲撃の日から何か気分転換できるものを、と数日いろいろ試したのだがあまり上手くは行かず、最終兵器として残していた映画を観にきたのだ。

機械化が進むこの世界でも女優の需要は未だあり、当然映画も存在している。しかも魔法がある世界だ。

期待を抱かない方がおかしいだろう。

やってきた映画館には大々的に広げられる大きな広告が一つ。他の映画に比べて大きすぎる程のその広告のされ方から察するに、どうやら大ヒット作のようだ。

絹旗はあまりこういう都心の映画館は好きではないが、映画の需要が無くなってきたのか近隣でサクツとではあるが調べてみた結果、ここしか見当たらなかったのだ。

探せばあるのだろうが、時間が惜しいのもまた事実。

探しあてたのに量が少なくてお目当てのものが——なんてことになったら気分転換どころの話ではない。

都心なら量が保証されているため安心なのだ。広告を暫く眺めてから見るものを決め、その映画館の中に入つてすぐさまチケットを買う。

その向かった先は広告で大々的発表されていた例の映画——ではなく、その隣にちよこんと書いてあった『今季最大級の大作！』と銘打つてあった作品だ。

これを見た瞬間ビビッとくるものを感じた絹旗は、即決でその映画を選んだ。

R指定があつた場合はまた面倒な手続きを踏まなければならないが、今回はそのようなことも無くすんなりとチケットを買うことが出来た。

チケットが出ない時にはこの機械どうしてやろうかと少しだけは考えたが、まあチケットは出たためスルー。

トイレだけ先に済ませ、ポップコーンと飲み物を手にいざ鑑賞へと誰もいない劇場に足を運んだ。



飽きた。

開始十数分と経たない内に絹旗が抱いた感想はこれだ。

今回の映画は宇宙人と人類の壮絶な戦いを描いたものらしく、始まりは壮大な音楽と共に素晴らしい魔法の演出の数々でおおっと思った絹旗。

しかし始まってみるとどうだろうか。

むしろ一番最初の演出が良すぎたがために、お世辞にも上手いとは言えない演技、Gを使った方が良かったのではないか、というなんとも見事な程に雑な宇宙人。

そして何故か通じる言葉。

何よりも展開が早すぎて伏線もあつたものじゃなく、淡々と意味のない話が進んでいくだけ。

序盤は確かにハリウッドも夢じやないクオリティだった。

だがこれではむしろ笑いのネタになること間違いないだろう。

上映時間は一時間半。

寝ることは流儀に反するためしないが、飽きが来ていることに変わりはない。

それから途中トイレに行きたくなるのも我慢してとにかく見続けて約一時間。映画が終わった。

終わったと同時に絹旗はトイレに駆け込み、一息ついてから外へ。近くの喫茶店へと

入った。

昼時だからか店内はほぼ満席なため、空いていたカウンターへと腰かけて適当にオレンジジュースを頼み先ほどの映画を思い出す。

宇宙人との戦いは確かに熾烈を極め、何よりCGを使わなかったことによりその女優の魔法力が顕著に出た。

結果として、エフエクト増し増しでようやく少し派手さが出た程度という悲しい盛り上がりを見せていたが、主人公の魔法師が最後にこのままでは無理だと悟って宇宙人ごと自滅したことには意外感を覚える内容だ。

結果的に絹旗の好みには合っていた。

だがこの映画、一つ気になることがあったのだ。

主人公が自爆をした際に巻き込んだ宇宙船は四つ。

その宇宙船は防御魔法が常時展開しており、不意打ちで集中砲火をしてやつと一つ破壊できた程の強度を誇った。

そんな宇宙船を巻き込む程の自爆魔法が実在するのか。

有り得ないと思うが、今後のためにも念には念を、調べておかなければならない。

「お嬢ちゃん、何か考え事かい？ あ、これオレンジジュースだ」

そこで、頼んだオレンジジュースがやってきた。

どうやら何か考え事をしていることが分かったようで、ダンディーな雰囲気を纏うマスターがニヤツと口角を上げながら話しかけてきた。

営業トークだ。

「あ、いえちよつと超駄作な映画を見てきたところで、何とか超微妙な気分になったんですよ」

「まさかあの宇宙人との奴か？」

「マスター超知っているのですか？」

「ああ、あれはCMの宣伝の仕方と開幕の演出が凄すぎて逆にネタになってしまったこととでその界限では有名だな。今は有り得ないことだが、開演当初は満員だったんだぜ？」

「そうなんですか？ やっぱり最初の超演出は今季最大級の大作を謳っているだけあって超良かったですが、終わってみると超残念感漂う作品でした」

「まあでも、最後の演出は頑張った方だけ。魔法師であんな力出せる奴なんて戦略級ぐらしいしかないが、あの主人公が戦略級クラスの魔法師ならそれまでのストーリーの動

きも意外と辻褃が合う」

「確かに、宇宙人が主人公の攻撃を回避している節がありましたね……まさかそういう伏線が何処かに——！」

「残念だが嬢ちゃん。俺は三回見てきたがそんな伏線何処にも無かったんだ。まあ結局はC級映画つてところだな」

まさかの強者がいた。

あの映画を三回も観る人がいるとは思いもしなかったのだ。

絹旗はマスターと何かしら近いものを感じた。

「マスター、今度またここに超来させて頂きます」

「おう、嬢ちゃんとは話が合いそうだ。今はこんな感じだが三時から四時の間は一気にいなくなるから、その時に来てくれたらサービスしてやるぜ」

「超話に分かりますねマスター。これは映画の楽しみを最大限引き出してくれたマスターへの超お礼です。また超来ますね」

「おっと嬢ちゃん。こんなには——」

「今度のサービス、超期待していますよ」

いろいろな意味で本当に話が分かるマスター、というのが絹旗の評価だ。

映画のこと然り、商売のこと然り、学校のこと然り。

オレンジジュースを飲んだだけ、にしてはあまりにも多すぎる量のお金を置いていった絹旗は、とても満足した顔で店を出ていく。

貰ったお金ではあるが気にせず使いなさい、と言われれば自分の使い方をするまで。今度は雫やほのかとこの店に来ることを考えながら、絹旗は上機嫌に帰路へとついった。

テスト

予期せぬ同志を見つけることとなつた翌日、絹旗は学校に姿を現した。

久し振り——とは言つても一週間程度は絹旗の仕事柄久し振りにはあまり入らないのだが、やはり学校という場所においての感覚としては久し振りになるのだろう。

E組の教室へ入つた絹旗を迎えたのは、大量の視線だった。

不変なものを見るような視線ではないものの、何処か安心したような雰囲気は漂つてゐるために逆に居心地が悪い。

絹旗はとりあえず外面は気にしていないように振るまい、席へと向かう——も途中で声を掛けられてしまった。

「オハヨー最愛。連休は楽しかった？」

「ちよつとエリカちゃん——」

「そうですね。超楽しかったですよ」

「それなら良かった」

エリカの質問が色々不味いと思ったのだらう。美月が止めようとするも、その前に絹旗が淡々と答えたがために徒労に終わってしまった。

だが美月の対応も、どうやら仕方の無いものらしい。

「いや最愛がテロの翌日から今までずっと休んでいたからさ、それが原因なんじゃないかな？　って皆心配していたんだよ」

「私がそんな超くだらない理由で休むわけないじゃないですか」

「まあそうだけだよ。最愛は達也並みに目立っているからな」

「目立つ……？　達也と超同じくらいですか？」

「そうね。達也君並みは少し言い過ぎだけど」

心配されていたのは有り難いしその考えからすれば納得がいくものだが、目立つ理由が分からない。

目立つようなことはしてないし、達也と比べられるような程目立っているとは思っていない。

だからレオから答えを聞いた時には――

「ほら、最愛の身長高校生とは思えないほどいででで！」

——ついつい能力を発動したまま手が出てしまった。

一気に近寄った最愛はレオよりも遥かに小さいその右手でレオの右手を掴み、ギチギチと音を立てて握っていく。

「その先を言ったらどうなるか、超分かっていますよね、レオ？」

「分かったというかギブギブ！ そんな身長で凄い握力だいででで！」

「何言ってるんですかレオ。私は超か弱い女の子ですよ。身長はこれから伸びるだけです」

「まあ最愛。そこまでにしておけ」

この様子を見てエリカは一人でお腹を抱えており、美月はオロオロと、ずっと静観を決めていた達也も少しレオが不憫に思えてきたのか救いの手を差し出した。

それにより悪ふざけだとばかりにすつと手を離れた。

レオは右手を激しく振っている。

相当痛かったようだ。

「サンキュー達也……」

「レオもあまりそういうことは言わない方が身のためだぞ」

「ああ、気を付けるぜ……」

「ちなみに達也君、それは実体験かしら？」

「…… ああ」

「大変なのね深雪も」

「何故そこで深雪が大変になるんだ……」

「確かに深雪も大変ですね。女心が超分からない兄がいて」

「その様子なら、本当に大丈夫みたいだな」

「…… 達也が心配するようなことは、何一つないですよ」

「…… そうか」

最後の会話は、含みがあるものだった。

しかしそれに気がついたのはエリカだけ。

しかも勘が鋭いのか、何やら宜しくない雰囲気にも気がついてしまった。

「ふーん……二人はそういう関係なんだ？」

「……ええそうですね。超仲良くさせていただけます」

「これは深雪に言わなくちゃね」

「誤解だしそれだけは勘弁してくれ」

だからエリカはあえてふざける方向で話を纏めた。

絹旗と達也もエリカがその雰囲気を感じてこの話題を切り出したのも分かっており、だからこそいつも通りの会話へと違和感無く変えることができた。

絹旗の久し振りのクラスメイトとの再会は、それこそただの再会を果たしたような雰囲気終始続くこととなったのだ。



テストが終わった。

絹旗の手応えは十分、後は結果を待つのみ。

結果は手元のデバイスで確認でき、その時間が近づくにつれてざわざわと騒がしくなっていく。

絹旗もいつものメンバーと一緒に達也のデスクに集まりその結果を待つ。そして、結果が届いた。

理論・実技を合算した総合点による上位者は、順当な結果となった。

一位 司波 深雪

二位 光井 ほのか

三位 北山 雫

ここまでA組の名前が続き、四位にB組の十三束という生徒、その後はまたA組の名前が続いた。

実技も総合順位に似たような結果となった。

だが、これが理論のみとなると、大番狂わせの結果になっている。

一位 E組 司波 達也

二位 A組 司波 深雪

三位 E組 吉田 幹比古

四位 E組 絹旗 最愛

五位 A組 光井 ほのか

そこから十位に雫、十七位に美月、二十位にエリカと上位陣に見慣れた名前がずらつと並ぶ。

問題は、実技ができなければ理論も理解出来ないはずなのに、実技ができない二科生が上位陣に複数人いることで、さらに達也は二位の深雪と平均点を十点以上引き離している状態だ。

「さすがだぜ達也」

「おめでとうございます達也さん」

「ありがとう」

「む、達也深雪がいるとしても最低三位には超入っていると思つていましたが、まさか同じクラスに超伏兵がいたとは……」

「それでもあれだけ休んで四位は普通にすごいですよ最愛ちゃん」

「それに比べて休みなしのあんただけ名前が見当たらないわね？」

「今回は何も言い返せねえ……」

達也としては当然といったところなのだろうが、この結果はあまりにも異常なことだ。

理論が理解できなければ実技はできないの、実技ができないから理論ができないというのはかなり等しい関係にある。

それなのに二科生がここまで上位に食い込んでいるのだ。それもE組だけがである。

「でもやつぱりすごいわね…… あ、まさか最愛はあの一週間ずっと勉強していたの？」

「超遊んでいました。まあ元々頭は超良いですから当然と言えば当然の順位ではあるのですが、雫の家でやるって言っていた勉強会に超参加すれば良かった、という後悔もありますね」

実はあの連休中、雫から安否確認のメールと共に勉強会のお誘いがあったのだ。

そんな気分では無かったため返事だけは返して断ったのだが、今となれば行っておけば良かったと思っ

た。結果的に悔っていたから四位、と言われれば絹旗としても言い返せないところだった。

「ん？」

「えっ？ いきなりどうしたの達也君？」

突如何かに気がついたかのように声を上げた達也。

今のやりとりを見守っていた側だけにいきなり声を上げられてエリカは少しオーバーなアクションと共に聞き返した。

「いや今メールが届いたんだが——どうやらお呼び出しのようだ。皆はここで待っていてくれ」

すつと立ち上がり、教室を出た達也。

絹旗はおおよその察しはついておりエリカも表情からしてある程度嫌な案件だとは理解しているようだ。

レオは戸惑ったように「お、おう」とだけ呟き、美月もレオと同じように、だが頷くだけで返事をした。

現在放課後。

今教室に残っているのは結果発表のためだけであり、熱が冷めれば次第に帰宅するなり部活をするなり移動を始める頃合いだ。

「さて、超行きましようか」

達也が教室を出てから十数秒程あと、絹旗も教室の出口へと向かった。

行きましようか、ということとは全員を誘っているわけだが、意味が分からなかったレオが聞き返す。

「行くつて何処に行くんだ？」

「生徒指導室ですよ。あの様子だと深雪にも超言つてないっほいですからまずはA組ですけどね」

「生徒指導室？ 達也さん指導室に呼ばれたんですか？」

「メール超盗み見したらそう書いてありました」

「盗み見つて…… まあいいわ。詳しい理由は確かに気になるし、深雪達も誘つて行きましよう」

レオと美月も呼ばれた場所からして良くない雰囲気を感じたようだ。

再び歩き始めた絹旗に、今度は後ろへとついていく三人。

その三人は達也が呼び出された理由を早く聞くために、そして絹旗は少しだけ黒い考えを持って笑みを浮かべながら、A組へと向かった。

謀略

深雪をA組から連れてきた最愛達は達也が指導を受けていると言われている指導室へと足を運んだ。その中でも特に最愛の足取りは非常に軽いものであり、非常にスツキリした印象を与えている。その様子を見かねた（？）のかエリカは分かりやすいため息を吐いた。

「最愛つて本当にいい性格しているわね」

「それは超褒め言葉ですね」

エリカがそう言うのにも当然理由がある。深雪達を呼ぶという大義名分を掲げた最愛は迷うことなくA組へと向かった。その後ろにはあまりにもやる気に満ちている最愛と少し距離を置くように――別に嫌っているわけではなく、嫌な予感がして――ついてきたエリカ達なのだが、彼女達は今一科生から見れば「理論で負けた集団」というわけだ。特に最愛に関しては深雪以外のA組は全員未満である。

怒りに震えている彼らは二科生ということもあり目敏くその姿を見つけて非難と怒

りの眼差しを向けられ、中には「カンニングして取れた上位は嬉しいか!」と直接野次を飛ばしてくる生徒までいるくらいだ。

だがこれは最愛の罠だった。

その野次を認めた最愛はニヤつと嘲笑い、あえて感情を逆なでするように言い放つた。

「カンニングで上位とは超良いギャグのセンスしていますね」

「なんだと!」

その煽りに一科生の生徒数人は一気に沸騰。最愛に迫るように罵倒を浴びせようとすするも、だがそれを許さない最愛の追撃により閉口を余儀なくされる。

「携帯端末は当然使えない。監視もいる。この状況下においてカンニングはつまり超他人の答案を見ることになるのですが、まさか超全部写せると思っているのですか?」

二科生とは言え授業のように教えるわけではないテストには一クラスにつき先生は一人で十分足りる。つまり彼らの主張は先生の管理不足を指摘しているのと同義だ。

「たとえ写せたとして、深雪と平均点を十点以上も突き放した一位の達也、三位の吉田幹比古、そして四位のこの私よりも超上の学力の持ち主が最低でも一人、いや席が全員離れているので最低でも三人はいるわけになるのですが、まさか自分達の順位をさらに三つも落としたいと皆さんが思っていたなんて超気が付きませんでした！ ごめんなさい！」

そしてカンニングは自分よりも学力が上の者にしか行わない。勿論今名前を挙げた者は誰一人としてカンニングなど行っていないが、もし行つたと仮定するとき、二位の深雪を大きく突き放した達也よりも上位の存在を認めることとなる。その事実を大げさな手振りとわざとらしい演技で一切の反省を無しに謝罪をした最愛の表情はいつそ清々しい程であり、兄に対する妬みを嫌というほど聞かされて不満を抱えていた深雪は素晴らしい笑顔で最愛達の元へと駆け寄つたのだ。おかげでほのかと雫は針のむしろもいいところだが彼女達は非難対象に入っていないのが幸いと言うべきだろう。

そして今の状況に至る訳で、エリカの言葉は多少の皮肉も込めた呆れだったのだが逆に胸を張られてしまったがために最早苦笑するしかない。しかも最愛はほのかと雫の連絡先は知っているし、深雪が九校戦の準備がある生徒会で忙しいためそもそも指導室

まで来れないことを知っている。つまり一科生を煽るためだけに深雪達を呼びに行ったのだ。誰だつてため息をつきたくなるだろう。

「一科生は一度超痛い目を見た方が身のためですよ。地頭は悪くないのにあんなクソみたいなプライドなんか持っているから私達に超後れを取るんです」

「最愛ちゃん、クソなんて言葉は女の子が使つていい言葉じゃないよ」

「すみません美月。でもそれ以外で彼らを超表せる言葉がなかったのが悪いんです」

「確かに達也さんへの妬みは酷かったけど……」

「でも意見には賛成」

しかも完全に無意味という訳ではなく、微量でも生産性がある煽りなのだから余計に質が悪い。美月の指摘が言葉遣いに留まったのもこれが原因であり、ほのかはあの嫌な雰囲気——達也や最愛への誹謗中傷とそれによる深雪の冷めた雰囲気——思い出すように呟いて雫は最愛に意見だけは賛同する形を取った。

そして絶妙な雰囲気のままたどり着いた指導室の前。最愛が立ち止まったところではのかと雫が駆け寄った。

「最愛ちゃん、大丈夫？」

「何がですか？」

「今日の最愛は何かを発散しきるような感じだった。もしかしてだけど……」

これには最愛も友人の感性に舌を巻いた。人を殺めたことによりしばらくブルーな気分だった最愛は休暇を設けてリフレッシュをした。これは学園都市においてルーティンみたいなものであり、これをやれば次の仕事に何も引きずることなく取り組むことが出来た。

「さすがですね、ほのか、雫。超正解です」

しかし今回、最愛はそのリフレッシュ方法を使っても完全にはリフレッシュすることが出来なかった。メリハリはしっかりと付ける最愛でも、あまりに現実離れしたこの世界の光に長い間当たってしまったために歯車が狂ってしまったのだ。その何とも言えない不快感を拭い去るため、ついでに今まで散々見下してきたその返礼も兼ねての今回の行動だった。

「何か心配ごとがあつたら遠慮なく相談してね？」

「今は超大丈夫ですが、もしそうなった時はお願いするかもしれません」
「全然構わないよ」

しかし八つ当たりを終わつた現在は完全に切り替えている辺り、最愛はメリハリが付いていると言えるだろう。

◆?◆?◆?

それと時間を同じくして部活連本部。

そこでは克人と真由美が密談を行なっていた。

「七草は絹旗最愛という生徒を知っているか？」

「ええ、知っているわ」

話題に上がっているのは最愛。だが二人の険しい表情からとても良い話題だとは思えない。

「絹旗さんの魔法は正直に言っただけで理解の範疇を超えているわ。魔法を打ち消しているのにその打ち消している魔法が分からないなんて」

「同感だ。しかしあいつは思っている以上に厄介のようだ」

「それはどういう意味？」

克人から不穏な雰囲気を感じた真由美は考えるように落としていた視線を上げた。

「七草は先日のテロの結末をどこまで知っている」

「そうね……十文字家が引き受けてくれたお陰で世間には広まらず一高生徒にも十文字君が解決したことになるけど、解決の本当の要因になったのは達也君と深雪さんってことぐらいね」

「そうか。間違いではない。だが正しくもない」

克人から返ってきた答えは真由美を驚嘆させることに十分な質量を含んでいた。

「まさか絹旗さんが一人で解決をしたの？」

話の繋ぎ的にはそう思うのも無理はない。だが現実はもつと複雑で、もつと悲惨だった。

「解決だったら良かったのだがな」

そして含みのある言い方に今度は閉口して次の言葉を待つ真由美。ただ単に介入していた訳ではないことが容易に想像できる。

「俺たちが突入した時にはリーダーの司一を除くブランチメンバーが既に全滅していた。それも無力化ではなく一方的な惨殺だ」

真由美に言葉はない。だが吃驚していることに間違いはなかった。あの克人をして惨殺が正しいと思わせるほど凄惨な様は高校生が行なって良いような、というよりも人として行なって良いものではない。

「魔法はもとより、キャストジャミング、銃、ナイフまでも効かないあいつの魔法は俺の

『ファランクス』と同レベルの防御力を持っていると言っても差し支えないだろう」

「十文字君がそこまで言うなんて……」

「それにあいつは人を殺すことに対して何の躊躇いもない。頭が吹き飛んでも、身体が真つ二つになっても、原型を留めていなくても、それが例えば自分の手で行われた物だとしても、あいつには関係がない。率直に言えば、あいつは危険だ」

そこまで言われたらこの次に続く言葉は容易に想像できる。そしてそれがバレた際にはどうなるか想像がつかない、最愛を逆撫でするようなことだ。だが確認も兼ねて真由美は問いかけた。

「まさか監視を付けるの?」

「いや、分かっているとと思うがそれはあいつを刺激するだけだ。だから俺たち自身が監視をする」

だがそれについては当然克人も分かっている。だから別の方向からアプローチをかけることにしたのだ。

若干の戸惑いを見せている真由美を真つ直ぐに見据えた克人は、こう告げた。

「あいつには九校戦に出て貰う」

交渉

達也が解放されたのは指導室に絹旗達が着いてから四半刻が過ぎてからだ。達也は指導室を出た直後にその姿を認めて困惑したような表情を浮かべていたが、自身を心配している——表面上だけという人物が少なくとも一名いたが——ことが分かったため指導室内で実技試験について訊問を受けてた事、実技は本当に苦手だということ話をしたら四校を勧められたことを丁寧に話した。

レオ達がそれについて憤慨したのは言うまでもないがいつもならこのまま帰路にくはずだった。

しかし今日はそのいつもとはいかない。

指導室の前ということもあり目立っていた一行だが、その二人、真由美と克人の登場により周囲の視線は一点に固定された。そして誰もが達也に用件があると思っていた。達也自身も理由は分からないが自分が用があると思っていたほどだ。

だからこそだろう。克人から話しかけられた対象が達也ではないことに全員が意外感を覚えたのは。

「絹旗だな」

「超そうですが」

「絹旗さん。話があるので生徒会室まで来てくださいますか？」

その対象は最愛。しかも意外なことは連続して起こるものだ。

いつもの最愛なら上級生だろうが十師族だろうが無関係に断る事案だ。実際通常なら最愛は断っている。

だからレオやエリカが呆けた表情を浮かべるのも仕方のないことだ。

「いいですよ。超手短にお願ひします」

「出来るだけ早く済ませよう」

真由美と克人に連れられる最愛を見て、唯一達也だけがその理由の根底にあるものに気が付いていた。

不満気な顔を一切隠そうとしないで二人についていく最愛は一言も話そうとはしない。最愛自身という切り口であれ最終的な目的は理解しているし、それがこの道中で

話していいようなものではないことも理解している。理解しているからこそ不満なのだ。

生徒会室へと入り真由美に案内された席へと腰を落ち着かせた最愛。たとえバレているとしてもあくまで今は何も分からないふりをして相手の出方を探る。

「急に連れてきてすまない。何か飲むか？」

「超お構いなく。それで何の御用ですか？」

まずは定型ともいえる社交辞令で迎えた克人だが、最愛は長居をするつもりはないと暗に告げて話を促す。

しかし真由美は単刀直入に話を進めることは無かった。

「絹旗さんは九校戦に興味がありますか？」

「超興味はあります」

「それでは——」

「それでは次はこちらから」

一問一答形式で話を進めようとする真由美に、だがそれは許さないと最愛が被せた。

「今日呼び出した用件は何ですか？」

質問をする側と受ける側ではする側の方が有利な立場にある。今回の場合特に黙秘は何か意図があることを示唆することになり、一度答えた場合も都合が悪いことで黙秘すれば意味は無い。全部答えるなど論外。

だから最愛はあくまでも対等な立場というスタンスを取ったのだ。

チラツと克人に視線を送った真由美。「どうすればいいの？」というものだったが、克人は最愛と真由美の質問に同時に答えてみせた。

「絹旗には九校戦にメンバーとして参加して欲しい」

「超お断りです」

即答の否定。だがそれくらいで折れる二人ではない。

「理由を聞かせては——」

「超回りくどいです」

これには質問をしようとした真由美も思わず顔を顰めてしまった。二度に渡って質問を遮られた無作法な振る舞いに対しても勿論だが、それ以上にやりづらい相手だと思っただのだ。

「素性を明かし、ついでに口を滑らせて能力についても超知りたい。はつきりと言ったらどうですか？」

そして何より性格が悪い。言いたいことを全部当てられた真由美は下手に出ることができないため心の中で舌打ちをすると、うささやかな抵抗しかできなかった。

十師族とはいえ長兄、次兄といる真由美にとってこういった駆け引きはあまり出会わないものであり、せいぜい一般家庭——魔法師を一般と言ってもいいのかもしれない。日常が、というよりもそもそも生きていくことそのものが駆け引きの世界で、下手を踏めば命を落とす危険もある闇に生きていた最愛とは潜ってきた修羅場の数、難易度、密度が段違い。場数以外にもスキルや捌め手などあらゆる点において歴然とした差が生まれていた。

「言いたいことが分かっているのなら話は早い。勿論見返りの融通は利かせるつもりだ」

だが克人は違う。高校三年生にして既に十文字家次期当主を与っている克人は十分な場数を踏んできている。開き直りも誘導も、この状況下において真由美にはできない芸当だ。

「なるほど。さすがは十師族の次期当主。話が超分かるみたいですね。考えているプランを教えてください」

だがある程度スキルがあるために立場的有利を取られてしまう。今最愛は任意でこの場にいるだけであり、向こうが最愛を無下に扱った瞬間に帰ることも可能。対話に依る姿勢を見せている限りは克人も従うしかない。

「まず先に言っておくが、俺が九校戦に誘う理由はその力が優勝に必要なものだとは本気で確信しているからだ。絹旗の今ある情報からしてアイス・ピラーズ・ブレイク、クラ

ウド・ボール、バトル・ボードの三種目が妥当だと思っている。それ以外の種目も含めて、まずはルールブックを確認して欲しい」

そう言って手渡されたルールブックを手に熟読する程十数分。しっかりと吟味した上で、最愛は口を開いた。

「一種目だけ出られますね。続きを超お願いします」

どの種目かは告げずに答えた最愛だが、それだけでも克人としては及第点だったのだろう。特に表情を変えることなく淡々と続ける。

「その競技で能力を使ったまま一度試合をして欲しい。相手は俺か七草で行おう。そこで最終的な適正を確かめさせてもらう」

「そこで超適正があればそのまま採用して優勝に近づける。超適正がなくても能力を目前で使ってくれれば自分たちとしては超問題ない。こちらも能力を超見せるだけで良いから分からなければ分からないまま、とこんな感じですか」

「その通りだ」

「なるほど、確かに超面白いプランです」

最愛はそれを本当に面白いプランだと思ってる。それこそ笑みを浮かべるくらいには面白いと思った。だから真由美も、克人ですら表情には出さずとも乗ってくると思っていた。

しかし最愛が笑顔のまま紡いだ言葉に、ついに克人までが言葉を失う。

「でも超足りませんね」

この条件、両方に利点があるようで全くそんなことはない。

「そもそも何故私が超利点もないプランに乗る必要があるんですか？ 能力のことを話さないというのは超利点ではなくて絶対条件です。それとも別の超利点を用意してくれているんですか？」

最愛はこの誘いにそもそも乗る必要がない。これは利点があるように思わせて相手を乗らせるための罠だ。だから最愛はあえて相手の言いたいことを全部言うことに

よって相手の足掻きを一切許さない。

「何が欲しいのだ」

よって克人は最愛の要求を聞くしかない。しかも克人が要求を先にしたがために最愛の要求はある程度呑まなければならない。

どう考えても最愛の交渉スキルは高校生の域を超えている。少なくとも真由美は勿論のこと、克人ですらその域には達していない程だ。

「超物分かりが良くて助かりますが、そんなに超身構えなくても平気ですよ」

だから必然的に克人、そして今は傍観に徹している真由美ですら思わず身構えてしまった。だからそういう意味では杞憂に終わったと言うべきだろうか。良い方向か悪い方向かどちらに転がっているのか克人と真由美には測りかねている。

「今から言うことを超手伝ってくれるだけで良いのですから」

だから意図が分からない答えに、克人は沈黙を余儀なくさせられてその手伝いと言う名の条件を聞くしかなかった。



深雪は生徒会、他全員は部活動のため電子媒体の図書を読み漁っていた達也に静かな着信音が流れる。無作法だとは思うが現代では個室形式になっている図書館では携帯の着信音もマナーモードがあたりまえだという風潮が残っているが、マナーと括られるほど大事な事でも無い。

確認するだけのつもりでチラッと見た達也は、だがその内容に目を奪われてしまった。考えること数秒。達也は全ての機器をシャットダウンして個室を出て行った。

メールの相手は真由美。内容はこうだ。

『今から私と絹旗さんでクラウド・ボールの試合を行います。達也くんにも立会人をして貰いたいので、添付した場所に来てください。絹旗さんの許可は貰っているので気にしないでね』

練習試合

もうすぐ九校戦ということもあつてクラウド・ボールのコートの使用許可はすぐ下りた。最愛は部活で使っているウェアをそのまま使用、真由美は制服でコート脇に座っている。

「ねえ絹旗さん。達也君を呼んでも本当に良かったの？」

「こちらに超融通利かせてくれたんです。こつちも譲歩はしないと超割に合いませんよ」

最愛は自分の能力である窒素装甲を試合中に使うことを約束した上で勝負を受けている。最愛が今回この試合を受ける上で合意したのは二つ。一つ目は当然のことながら試合中に必ず能力を使用すること。そして二つ目は達也に視て貰うことだ。前者は真由美と克人からの願いで本来はこれだけだったのだが、最愛が後者の条件も付けたしなのだ。

これには真由美だけではなく克人も目に見えて驚いた。自分の能力を秘匿している

最愛が魔法の分析に長けている達也の監督を認めると思っていなかったのだ。最愛にとってもかなりリスクのある行為。しかしそれだけ最愛が求めた条件は大きいものなのだ。

今回最愛が求めた条件は三つ。

一つ目に監視するような行動は以後全面的に禁止すること。もしするようなら最大限の抵抗を手段や場所は問わずに行うことも明言した。二つ目に特化型のCADを九校戦までに作ることに。最愛の得意魔法は奇跡的にといか必然的にといか収束魔法から始まって移動魔法となっている。これは最愛にとつて非常にありがたい事実であり、有効活用するためにも特化型CADは持つておきたいものだった。期限付きは保険だ。そして三つ目に最愛の魔法技能向上に助力すること。能力の有無にかかわらず最愛の魔法力は結局のところ二科生だ。実戦でも手札の一つとして使えるようであれば必要のない代物。

前者はともかく、後者二つには真由美も克人も確約できないということ、条件が曖昧ということと首を縦に振ろうとはしなかったが、その後には最愛は達也の監督という条件を付け、さらにあくまで魔法技能の向上が目的であつて魔法力の向上は望んでいない旨、CADも得意魔法は教えるからそれに特化したものを媒体だけでも作つて欲しいと伝えた。水面下での駆け引きが続いたために変に勘繰り深くなつているため仕方ない

と最愛は思っているが、それは正しく駆け引きは存在している。実際その状況下において最愛は駆け引きに勝利した。

真由美も克人も、まさか最愛が最初からこの場に達也を呼ぶことが目的だなんて思ってもいないのだから。

「そう……絹旗さんがそういうのならいいのだけど」

「来たみたいだな」

そんな思惑に気が付いていない二人は達也の到着を認めて顔を向ける。達也は制服姿の無の仮面を付けて小走りで近づいてくる。

「遅くなって申し訳ありません」

「いやこちらこそすまない」

「それでまずは経緯を教えて欲しいのですが」

達也の視線は真由美に向いているが別に理由はない。強いて言うならメールの送信者だからだが、真由美は頷いてから経緯を説明した。

「私たちが絹旗さんを九校戦にスカウトしたのだけど、魔法の適性を確かめるために一度試合をしようってなったの」

非常に簡潔だが達也にはそれだけで十分だった。それは内容の把握だけではなく、それに伴って契約が発生していることも理解しての十分だ。

「なるほど。しかしそれでは自分が呼ばれた理由が分かりません」

「絹旗が能力を見せる代わりに我々は魔法技能向上に助力すること、CADの制作を頼まれた。しかしそれでは平等ではないと司波の監視を絹旗が申し出たのだ」

これには達也も素直に驚いた。達也としては想子サイオンの兆候が見られないために真由美や克人が進言して最愛が渋々納得したものだと思っていたのだ。だからこそ達也は最愛にはめられたと考えた。最愛が進言してわざわざリスクだけ背負うとは到底思えないのだ。

「そういうことでしたか。自分としても絹旗の魔法には興味がありましたので良い機会

だとは思いますが、その魔法を必ずしも理解できるとは限りません」

「可能性があるだけで十分だ」

「……分かりました」

言いたいことは当然あるし、条件についてももう少し知りたい。その気持ちを全て抑えた達也は、試合を見ることに決めた。

「さっそく始めるとしよう。ルールは女子本戦クラウドと同じ一セット三分の三セットマッチ、インターバルはセット毎に三分。二十秒ごとにボールが追加され最終的には九個のボールを打ち合うことになる。バウンド一回につき一点、地面で転がるまたは静止したものは0・5秒につき一点だ」

「それで大丈夫よ」

どちらかといえば最愛に向けて確認するように説明されたルールは本番と全く同じものだ。真由美に続いて最愛も軽く頷いてコートに向かう。ぱっと見テニスみたいだが実態が全くの別物であることは最愛も理解している。

まず屋外なのに透明とはいえ天井と壁がある。そこにボールを当ててもポイントにはならないが四方八方から攻めることが可能になる利点がある。逆を言えば四方八方

から攻められるわけだ。そしてバウンドは許容してはならない。テニスで言うなら前衛で最大九個のボールを打ち合うことになる。ハッキリ言つて生身で打ち合うことはお互い不可能だ。

お互いにポジションンへと付きながら最愛は手に持つてゐる普通のラケットを見詰める。実は最愛、テニスは初心者ではない。富豪などの暗殺依頼の際に距離を詰める一環としてあらゆるジャンルを能力無しという条件付きではあるが平均的に出来るようにしているのだ。

静かに目を瞑つてその時を待つ真由美に対してグツと構える最愛。

「始め！」

お互いに準備ができたことを確認した克人の重量を持つた合図により最愛のコートに射出される低反発のボール。まずは能力を使わずに、しかし全力で球を返球する最愛。ボールはそれなりのスピードを持つて綺麗な軌道を描きながら真由美のコートへと向かつていくが、ネットを越えた瞬間——正確には五センチ——ボールは倍のスピードを伴つて最愛のコートへと戻つていく。ただ跳ね返したただけだが能力を使わない最愛にとってはネット際からスマッシュを打たれたに等しく、ボールは容赦なくコー

トへと突き刺さる。

テニスならこれで終わりだがクラウドは違う。透明な壁にバウンドしたボールは再び最愛のコートへと転がり始め、二点、三点と与えていく。

「何ですかこの超クソゲーは！」

それに舌打ちをしながらあくまでテニスの要領で打ち返していく最愛だが、この戦法は二十秒が過ぎたところで早々に破られた。二つ目のボールが真由美のコートに射出されたのだ。当然真由美は難なく返球するがあくまで普通のテニスをしていた最愛にとつては地獄でしかない。打つてもネットを越えた直後に返され、バラバラの方角に飛んでいるボールは低反発ボールということもあつてすぐに転がってしまう。

転がったとしてもフレームで掬ったりと対処方法はあるがそんなもの気休めにもならない。

それがさらに三球、四球、五球と増えていくにつれて真由美の得点ボードが目まぐるしく変化していき、一セット終了時の最終的なスコアは五百にまで上がっていた。当然真由美は無失点だ。

三分のインターバルのためコート脇に移動する二人だが、汗一つない真由美に対して

最愛は肩で息をするほど疲労している。あくまで全力で試合を行うあたり真面目と言
うべきだが、真由美にとっては罪悪感すら感じてしまうものだ。

「最初は魔法の温存か？」

「まずは超試合の感触を確かめるためですよ」

「体力が無くなってしまうては元も子もないと思うが」

「それを超考えていない程私も間抜けではありませんよ」

達也もオーバーペースだと思ったのかとりあえずは声をかけてみたのだが、思ったよ
り最愛は元気だった。忙しく動いていた肩はいつの間にか落ち着きを取り戻し、息遣
いもだいぶ静かになっている。

三分という時間、それも動き続けることが目的ではなかった今回の疲労は回復も早い
ものだった。

備え付けのベンチに座って居た最愛はすつと立ち上がり、グツと伸びをする。

「達也、次の試合は超良く視ることですね」

「ああ、良く視ておこう」

インターバルも終わりに近いためコートに向かった最愛から背中越しに放たれたのは、挑発だった。自分の能力を見破れるものだったから見破ってみると。達也もそれをしっかりと汲み取り、挑戦を真正面から受けた。

再びネット越しに対面する最愛と真由美。

先ほどと同じように真由美は目を閉じてその時を待っているが、今度の最愛は中々構えようとしない。ラケットを振ってみたり、ガットをいじったりしているがそうだし、でもあまりにも準備が長かった。

「絹旗、もう始めてもいいか？」

「おっと、超待たせているようですね。超始めて貰って構わないですよ」

それを訝し気に見つめる克人、真由美、達也だが準備が出来たのなら問い詰めることは出来ない。

「では第二セットだ。始め！」

再び克人によつて開始された試合は、今度は真由美のコートへと射出される。

それをすぐさま返球した真由美は今度は身構えた。先ほどの試合は最愛が魔法を使う気が無いことが初球で分かったためリラックスしていたが今回はそんなことは無い。勝つにしろ負けるにしろこのセットは魔法を使わなければならぬのだ。どんなボールが来てもいいようにボールを注視する真由美だったが、人影がボールに重なつたと認識した瞬間にボールが消えた。

「えっ!？」

その声が響くのが早いか、バチンと真由美の後方から音が鳴る。思わず振り返つた真由美だがそこにボールの姿は勿論、音の源となるようなものは何も無い。それと同時に今度はネット側からパシュツツという音が聞こえたためにそのまま視線を前に戻した瞬間、真由美は目を見開き固まつた。いや真由美だけではない。克人や達也ですら驚いたような表情でコートを見詰めている。

目に映るのはラケットを見つめながらも不敵な笑みを浮かべている最愛、一点、また一点と点数が加算されていく得点ボード。そして、ネット前に転がっているボールだった。

承諾

真由美が硬直を解いたのはボールを視認してから二秒程後、点数にして四ポイント分だがこれは真由美が悪いわけではない。不意打ちという効果も付加されたとはいえ視認できないレベルの球を打ってくるなど思わなかったのだ。

しかし猶予も無い。急いで移動魔法でボールを持ち上げ加速魔法とマルチキャストで最愛の居ない場所目掛けてボールを打ち込んだ真由美だが、魔法の兆候無しで弾丸のようにボールに追いついた最愛に動揺を隠しきれていない。そして最愛の二打目。先程と同じように移動の勢いそのままに打ち出されたように感じたが、少し手加減されたのだろうか。視認は出来た弾速で真由美の横を通り過ぎるボールだが、突如として声が上がったことにより真由美の意識はボールの行方から移動した。

「超申し訳ないですが、試合終了です」

「ああ、そのようだな」

「え？　え？」

それは試合終了の合図。最愛から発せられ、克人も認めたもの。状況を理解できていないのは真由美ただ一人だ。

「七草、絹旗のラケットを見てみる」

「えつと……ああ、そういうことなのね」

そして最後に真由美も言われて理解した。最愛の持っているラケットは既に原型を留めていないのだ。それも当然だろう。ライフル弾の如く放たれたボールの発射口となっているのだ。ガットは中心を避けるかのようにフレーム側へと広がっており、所々切れている。持ち手は最愛の能力に耐え切れずスクラップのようになっていた。二打目は単純にラケットが耐えられず威力が出なかつただけなのだ。

クラウドは真由美の勝利、試合は最愛の負けとなった。
しかし真由美の表情は浮かない。明らかに不機嫌だ。

「……絹旗さん、一ついいかしら」

「なんででしょうか」

そして不機嫌だということを隠そうともしていない。

「貴女、最初からこうなることを知っていたわね？」

「何言っているか超分かりませんが、私は約束を超守りましたからね」

理由は簡単。ものの見事に嵌められたからだ。最愛はしっかりと試合は行い、能力も使用した。達也の監視も当然ある。条件は全てクリアしているのだ。

口頭とはいえ相手が条件を守った、それもマナー違反である魔法の詮索まで行っていることを許容したというオマケ付きなのに真由美たちからその話を有耶無耶にすることは出来ない。試合には勝ったが駆け引きには大敗を喫したのだ。

「確かに絹旗は条件を守った。当然こちら側も守る義務がある。だが今回の試合の最優先事項はあくまで絹旗が九校戦を戦うに相応しい力を持っているかどうかだ」

「その通りです」

「俺と七草は今から審議に入る。明日朝一番に結果は報告しよう」

「そうですか。では私は超失礼します」

だから克人は最愛を帰すことにした。これ以上最愛のペースに持っていかれるのは非常に不味いからだ。しかも最愛にとってはこちらも都合が良い。

最愛が更衣室へ向かうのを見送った三人は、真由美の一言により意見を交わし始める。

「達也君、絹旗さんの魔法について何か分かった？」

「残念ですが本質的なものは全く分かりませんでした」

「些細なことでもいい。考えていることでもだ。何かあるか？」

結局達也は最愛の能力を見破ることは出来なかった。挑戦は見事失敗したわけだが、達也もただで起きる程可愛いわけでもない。

「そうですね。まず彼女の魔法に想子サイオンの兆候は全く感じられませんでした」
「俺もだ」

「そしてラケットを持つ手ですが、どうやら直接持っていない様に見えます」
「どういう意味だ」

達也の目はしっかりと捉えていたのだ。二試合目のラケットの持ち手部分と掌に一定間隔の空間があることに。

「持ち手部分と絹旗の手が密着していないということですよ。そして魔法や銃火器などが効かないことを加味すると、空間に何かしらの作用をもたらす魔法であることが推察されます」

「なるほど。俺も司波の考えが一番近いと思う」

大雑把なものだが一歩には違いない。しかし判断材料があまりにも少なかった。しかもこれは真由美や克人に限った話ではなく、達也にとつてもかなりの痛手だ。

今回この場に来たことにより最愛の魔法を直接第三者側から視る事が出来たわけだが、逆に最愛からの頼みごとに対して可能な限りは受け入れなければならなくなった。口約束だからと蔑ろに出来るほど最愛は甘くない。融通を利かせるとも言っていないため、依頼はかなり重いものになると達也は感じているのだ。

「だがこの話と九校戦の話はまた別だ。この試合を受けた時点で絹旗は九校戦メンバーに選ばれたらそれを受け入れる義務がある」

だが克人もそんな簡単に丸め込まれるほど浅い人生経験をしてはいない。先程も最優先事項と言ったように、目的は九校戦だ。これを最愛があやふやにするのなら前提条件が不成立となり条件は破綻する。

そしてこの結果を見るなら、結論は一つだろう。

「俺は絹旗の九校戦メンバー入りを支持する。七草はどうだ」

「ええ、私も賛成よ。自慢じゃないけど私がこの三年間クラウドで得点を取られたのは初めてだもの」

「そうか。司波はどう思う?」

ここで達也に振るあたり、克人は監督者として非常に優秀であることが伺える。

「そうですね。あのラケットの性能で人智の範囲を超えた速度の球を打てるというのは非常に大きなアドバンテージです。しかもまだ本気ではない可能性もあります。それとあまり良いことはありませんが、もし選手がその球に当たった場合怪我をしてしまいますので防壁魔法を展開しながら試合をしなければなりません。しかしクラ

ウドは複数の魔法式を使う必要がないため特化型を使う傾向にあります。そういう意味も含めて有効だと思います」

「決まりだな」

真由美のクラウドの實力は新人戦パーフェクト、前年の本戦パーフェクトと無類の強さを誇っていた。その真由美が初球というアドバンテージを含めたとしても反応できない球を打った最愛は九校戦三連勝を狙う真由美たち三年生にとつても是非とも欲しい人材だ。

それに達也と克人は気がついていた。打球は直角に壁に当たるのではなくスマッシュ気味の軌道でボールが破裂することを抑え尚且つネットに当てることでボールを転がすという技を見せていたことに。

「司波も今日はご苦労だった。突然呼び出してすまなかったな」

「いえ、では自分もこれで失礼します」

克人の労いを素直に受け取った達也は一礼したのち退席する。克人が言外に含んだ「今からの話は二人きりでいたい」という意味を汲み取ったからだ。

そして達也の内心はかなり複雑なものだ。同学年、同じクラスの少女が魔法、心理戦の両方に於いて十師族二人を相手に有利に進めているという事実。手札が多いというより、使い方が非常に上手い。

だからこそ裏に存在する事情がかなり闇の深いものということも理解している。時期が来たら踏み入れるか、それとも話してくれるのを待つか。前なら前者を選んだらうが、今の達也は後者を選ぶ。だからこそ複雑なのだ。

だが一つ言えることもある。非常に高度な心理戦と交渉戦を見た達也は、より一層緋旗最愛という脅威に興味を持ったということだ。

◆??◆??◆??

翌日最愛が教室に入ると騒がしかった話し声が急激に収まり、コソコソと噂するような声へと変化した。

その反応をされることに最愛は心当たりがある。

「おはよう、最愛」

「オハヨ、聞いたよ最愛！ 九校戦メンバーに選ばれたんだって!？」

達也とエリカに挨拶を返した最愛は苦笑気味だ。

その噂とは最愛が九校戦メンバーに選ばれたというもの。噂というものは本当に怖い。あの内密に行われた試合から半日ほどしか経っていないのにもう広まっているのだから。

しかも確証のないものに肯定するわけもいかない。

「そういう話は超ありますが、まだ分かりませんよ」

「でも二科生が選ばれるかもしれないっていうだけでも一大事だぜ。すごいな最愛」

だがレオの言う通り二科生にはそもそも選手としての話は舞い込んでこない。その話があるという事実を話したまでだが、最愛は九校戦についてそこまで知る余裕がなかったがためにその重大さに気がついていないのだ。

そしてその熱は、一人の来訪者によって更に加速する。

「絹旗さん、ちょっと良いかしら」

真由美だ。生徒会長が一年の、それも関わりがないはずの二科生に対して直々に出向く。これだけでも噂の信憑性は一気に高まる。

授業が始まるまで後十分程。話す場所は恐らく生徒会室だがそれでは授業に間に合わない。だがありがたい(?) ことに二科生は先生が居ないため、そんなこと気にするはずもなく最愛は教室を出て行つた。

生徒会室までの道のりは二人とも無言。社交的な真由美には珍しいことだがこれは下手に話して不利益を出さないための手段だ。実のところただただ会話のネタに困っているというだけなのだ。

結局何も話すことはなく生徒会室へと着いた二人はセキュリティを解除して中へ入り、適当な場所に腰をかけた。

「絹旗さん、噂は耳にしていますか？」

「そうですね。噂というのは超怖いです。いつの間にか超一人歩きしてますからね」

真由美はほんどね、と苦笑している。そして表情をキリツとした真面目なものに切り変えて、話題を切り出した。

「今日ここに来てもらった理由はもうお分かりだと思いますが、私たち生徒会及び部活連、そして風紀委員は絹旗さんが九校戦のメンバーとして入ってもらうことを望んでいます。引き受けてくれますか？」

生徒会と部活連は分かっていたが、まさか風紀委員まで入れてくるとは最愛も思っていなかった。風紀委員を入れる意味はそこまでないが、それだけ最愛をメンバー入りさせることに本気だという証明になっている。

「超乗り気ではありませんが、仕方ありませんね。能力まで見せたのに話が無くなっただけは超損しかありませんから」

そして昨日のあの場においての駆け引きは最愛の圧勝だが、今後の事を考えるならまだ辛勝と言ったところだ。九校戦で勝つとは言われないが、手を抜くことは許されない。

結局能力はまた見せなければならぬのだ。その点で言えば真由美と克人は上手く交渉を終わらせたと言えるだろう。

「ありがとうございます。それではこれからよろしくお願いしますね、絹旗さん」

何事もなく了承が貰えたことに内心ホツとする真由美。最愛が九校戦メンバーに正式に選ばれたことはまだ秘密だ。しかしその日のうちに校内全体へと広がることになったというのは、ご愛嬌というべきだろう。

人気者

達也と最愛は事情は違えど同じ穴の貉と言っても過言ではない。それ故にお互いがお互いを出し抜こうと考えている。そして最愛と達也との競り合いは最愛が有利に事を進めている。

それは命をかけて守るべきものがあるのかいないのか、それだけの差だ。その差があるからこそこの停滞的な現状を作り出していると言える。

だから最愛が一つアクションを起こすなら達也も起こす。つまり今日の試合を見た達也が既に手を一つ打っていたというのは必然というべきだろう。

達也にもまたBS魔法がある。

エレメンタルサイト
精霊の眼。

簡潔に言えば魔法式を視認する、疑似的に透視が出来るといった視覚視認に関して最強ともいえる能力だ。

普通の魔法師なら使われたとしても気づくことは無い程隠密にも長けたこの能力だが、八雲にすら見られていると気づいた最愛には気づかれる危険性がある。

よって今回達也は最愛と真由美の試合を能力は使わずに見ていた。BS魔法の副次

効果で達也は能力を使わなくても魔法式は読み取ることが出来るため、そこまでリスクを冒す必要は無いと判断したからだ。だが相変わらずとすべきかやはりとすべきか最愛の能力は分からず終い。

効果が似ている魔法は存在しているが、その魔法は殴っただけでクレーターを作ることなど出来ないし、銃弾を減速させて止める等ではなく銃弾を粉碎してしまう程の硬度を誇るような城壁ではない。加えるなら壁というのは比喻表現に近く、厳密には膜と言った方が正しい。

そもそも既存収束魔法——仮定ではあるが——において最愛のような攻守どちらかはクリアできて両方クリアすることが可能な魔法は無く、魔法の兆候が無いという最大のメリットに対してデメリットは今のところ最愛の周囲でしか発動できない点のみだろう。

正直なところデメリットは使い方次第でまだなんとかなる範疇に収まっており、限界強度にもよるが対人においては無類の戦闘能力を誇っている。

「お兄様、深雪です。お茶をお持ちしました」

「開いているよ」

「あれこれと考えている達也だったが、それは深雪の入室によって全て流されることになった。時計に目をやると既に日付が変わろうとしている時間。かなり長い事考えていたようだ。」

「今日は紅茶だね」

「はい、先日のお買い物で寄った喫茶店のマスターが良いお茶の葉を分けてくださったので、せっかくですからいれてみました」

達也が普段デスクワークを始めるのは夜も更け始めた頃であり、日付が変わる頃になるとこのように深雪がお茶やコーヒーをいれてくれる。そのどれもが達也の好みの味だ。

「うん、とても美味しいよ。さすが深雪だ」

「それは良かったです。ところでお兄様は今考え事をしていましたね？」

「……深雪には敵わないな」

「少し楽しそうでしたから。それで何を考えていたのか教えてくださいませんか？」

深雪にとって最愛は現在最も自分達を脅かす可能性が高い存在であり、自分達と同じぐらいの闇を一人で抱えて生きている根はとても優しい友人だ。初めは明確な敵意から。しかし現在は達也の技術者としての側面からして、また深雪の同世代としての側面として、その二つの側面からそれぞれ好敵手と捉えられるようになってきている。

勿論敵意は無くなった訳ではない。ただ訳ありと理解できたが故に目に見えた干渉や警戒を控えるようになっただけだ。

少し前の深雪なら達也が直接視ても能力が分からなかったことに危惧を抱くだけだった。そして事の成り行きを聞いた深雪は以前と同じようにその状況に対して危惧を抱き――

「もしよろしければクラウドボールの相手を深雪がしてもよろしいでしょうか？ 来年もしかしたら選手として選ばれる可能性もありますから」

――以前とは違い積極的に関わるようになった。

むしろ大なり小なりぶつかり合った深雪の方が最愛の理解を得ており、理解されているかもしれない。

深く関わることは控えていることも事実であり、今回もあくまで最愛の能力を見極め

ることが目的だ。

よく言えば以前よりも強かに、悪く言えば狡猾になった妹に達也は口角を綻ばせながら——苦笑いとも言う——こう告げた。

「最愛が許してくれるなら、今度お願いしてみるよ」

◇?◇?◇?

「超疲れました」

「最愛すっかり人気者だからねえ……」

ぐでーと机に突っ伏している最愛に何処か含みのある言い方で答えたエリカ。最愛がここまで疲れているのは勿論理由がある。

九校戦の参加が決まってから、最愛の周りには小さな変化がポツポツと現れ始めた。た。

まずはクラスの立ち位置について。

当然だが最愛は達也やレオ、美月、エリカ以外のE組生徒と交流を持っていない。多

少同性と話す程度であり、交流があるとはとても言えない。

しかし九校戦の参加が決まった日から性別問わずクラスメイトが話しかけてくるようになったのだ。

そもそも最愛は傍らから見れば文武両道才色兼備といっても遜色がない存在であり、しかし本人から周りに関わりとうとしないため話しかけづらいという所謂高嶺の花の存在だ。その高嶺の花に話しかけることが出来る題材が九校戦であり、そのチャンスが足りないようにと取っている行動が積もったのが現状だ。一種のアイドル状態である。

「最愛も大変ね。あれから毎日別の人と話してるじゃん」

そしてその分だけ達也たちと関わる時間は減っていき、エリカは若干不満そうにしている。今は全く思っていないが、最愛との初対面の印象はそこまで良くはない。すぐ解いてくれたとはいえ、いきなり攻撃的な態度を取られたら当然だろう。

そういった相手には意外にもすぐに距離を取る性格のエリカだが、最愛の警戒の仕方を見た時に何処か思い詰めていることを感じ取ってしまったために離れることもできず、結果として非常に良好な関係を築き始めている。

「確かに最愛は話しかけづらい感じがあったからな」

「……それを達也くんが言ったらダメなんじゃない？」

「入学式で話しかけてきたエリカに言われてもな。でも俺もそう思ったよ」

「否定しないんですね……」

「俺はそうは思わないけどな、達也」

達也の感想にジト目で返したエリカ、その返答を認めた達也に対して苦笑する美月と共感できないレオ。レオと同じ感性だったのが癪に障ったのかエリカがうへえと顔を崩したが、そこは誰も触れることは無かった。

ちなみに今は実習室での授業中で、学期末ということもあり主に復習がメインとなっている。このように話す余裕があるということは全員が課題を終わらせている状態ということであり、お世辞にも魔法は優秀と言えないレオやエリカが終えたのは授業終了間際だ。しかし以前のように居残ることも無くなり、それだけ成長があったことが分かる。最愛に至っては雫やほのかとの練習の甲斐あって課題で詰まることは無くなった。そしてこの授業の後は昼休憩。普段は居残って練習をするのだが、今回は達也が生徒会室にお呼ばれされているため今達也を除いたメンバーでの昼食となる。

そこにクラスメイトから逃げ出した最愛が加わり、開口一番机へと突っ伏したのだ。

「まあ誰とも話さないよりはいいと思うけどな」

「私は超それでも構わないのですが」

入学当初は所謂話しかけるなオーラを発していた最愛だが、今は口では断っているもののそこに棘は感じられない。誰も本気でそう言つてるとは思つてないし、実際最愛も今回は軽口だ。

しかし最愛が突つ伏したのはそれまでの気疲れと共に、これから来る気疲れも含まれていた。

「それに話すことよりもこれからのことが超問題です」

「あー、確か部活連本部で集まりがあるんだよね」

実は今日の放課後に九校戦準備会合があるのだ。準備会合ということとは九校戦メンバーに正式に選ばれている最愛は当然参加しなければならず、蔑ろにした場合条件の一部が通じなくなる可能性もある。別にいるだけで良いのなら利害的に行かない理由はないのだ。

「超面倒なことになりますよ。お互いが超無法で一方的に仕掛けられるのであれば私も超歓迎しますが、話し合いの場となると超感情論だけで時間の無駄ですからね」
「それは確かに面倒だな」

その件について見識がある三人はレオが代弁する形で答えたが、もつとも反応を示していたのは美月だった。入学当初に起きたあの騒ぎは、美月の中で非常に大きな出来事となつているようだ。

それにしても最愛がここまで嫌がる素振りを見せるのは珍しいことであり、普段嫌がつてはいても本気ではないことを少なくとも達也たちは知っている。

これから起こることを予測したレオたちは心の中でそつと、手を合わせることにした。

九校戦準備会合

放課後、憂いていた時間がやってきてしまった。

部活連本部で行われる出場選手、エンジンア両メンバーの最終調整を行う九校戦準備会合。最愛も他の選手と同じように参加し、内定メンバーが座るオプザーバー席に座っていた。噂も流れてしまっているため席だけは違うところ、という騙し手が使えないのは痛いけどちらにしろこの会議で話題に挙がることは間違いなし。そして強引でも内定の流れへと持つて行くことが予想できる。

極めつけは隣に座る達也だ。どの道面倒事は避けられないだろう。面倒の度合いが十か十二か程度の違いだが、度合いが少ない方が良いのは間違いない。ちなみに度合いの最高値は十である。

「なんで達也までいるんですか。私だけでも超面倒なことになるって憂鬱だったのに、今までの仕返しですか。超苛める気ですか」

そして最愛は達也の存在を知らなかった。

いや正直なところ出場はしないにしろメンバーの会議には呼ばれると思っていた。先月のテロの際にその異常性を真由美や克人が検知していないはずは無く、眼めのことも知っている。

だがまさか内定組だとは予想できないだろう。面倒要因第一位の存在に恨み言の一つや二つは仕方ないことだ。

「俺だつて来たくて居る訳では無い。成り行きでこうなつてしまつたんだ」

しかし達也も来たくてここに居る訳では無い。ため息交じりに答えるその姿は達也にしては珍しく目に見えて憂鬱そうではあるが、ここでふと最愛は何か引つかかつた。

達也は成り行きでこうなつたと言っているが、今までの行動上達也だけで成り行きでこうなる可能性は極めて低い。達也だけならなんとか逃げ切ることはできるはずだ。加えて何か達也が面倒事を引き受ける際、そこには必ず深雪の存在がある。そして今日もまたいつものように生徒会室で昼食を取っていた。つい先日までは達也がメンバーに選ばれている話は聞いたことが無い。二科生で選ばれるのなら同じく噂になるだろうし、何より同じクラスでもある最愛の耳に入らないはずがない。

その瞬間、最愛の目が腫物を見るような目からジト目に変換された。

「……超シスコン」

達也は凶星故に何も言い返せない。この最愛に有利な状況で口で勝つなど不可能だ。加えて段々と席が埋まっている状態で言い合いをするのは非常に目立つ。戦略的敗北だ。

そんなこんなで席が全て埋まった会議室兼部活連本部。その議長席に真由美が腰を下ろした。

「それでは、九校戦メンバー選定会議を開始します」

最愛としては最近聞くことの多い、達也としてはむしろ珍しい凛とした真由美の声。その言葉と共に開始された会議は、異端分子を目敏く発見する者たちによつて真つ先に最愛と達也の話になる。

ほら面倒になった、とため息を吐きそうになったのだが、予想以上に好意的な意見が多いためその気持ちは数瞬の内に消え去る。

内定が早いうちに決まっていたこともあり、最愛に關してはいろいろな噂が広まっていた。良悪真実虚偽様々な噂が存在しており、全く気にしてはいないが最愛の耳にも勿論入ってきている。

ただその中で特にその場面を目撃したとして非常に信憑性の高い噂が存在している。曰く、真由美が触れられない球を打てる。

好意派と反対派は主にこれを真と捉えるか偽と捉えるかで議論が分かれるのだが、この場には当事者二人と見学者一人——達也が喋ると話が広がるので考慮しない——がいるのだ。反対派意見は実力不足を懸念とした建前で二科生であることを批判していたのだが、この話は真由美と克人が真実であることを告げたため建前を崩されてしまい、本音を言うこともできず誰も口出しをすることは出来なくなった。

実力がある——特定の分野にしる証明されている——ならこの学校において使わない理由は無い。

最愛の話は思った以上に平穩に終わったのだ。

だが問題児は一人——客観的に見れば最愛も問題児ではある——ではない。内定という話はなく、しかし何故かこの会合に出席しており、エンジニアとして名を連ねている生徒、司波達也。

これに關しても好意的な意見と反対意見で分かれていたのだが、最愛に比べるとその

比率は反対派がかなり多くなっている。加えて最愛の時は噂に対しての真偽を問うもの故に論理的な意見が多かったのだが、達也は風紀委員の活躍から推薦する上級生とそれが気に入らない反対派、主に同級生の感情的な意見がぶつかりドロドロと底なし沼の議論へと入っていた。

最愛は自分だけなら早く終わってたのに颯爽と現れてこの状況を生み出した問題児を睨みつけ、達也は気づいていながらもさすがに否定できないため、また意見することも許されなかったため疲れた表情で議論を見つめていた。深雪がいたら恐らく反対派の意見を黙らせていただろう。普段なら困ったものだがこういうときにこそ欲しかった救いの手だ。

「要するに」

しかし救いの手は他の場所から差し伸ばされた。

最愛の時も聞かれた場合のみ、達也に関しては静観を決めていた為決して大きくは無かった、しかしその重みのある声は不要な議論を止めさせた。

「司波の技能がどの程度のものか分からない点が問題になっていると理解したが、もし

そうであるならば、実際に確かめてみるのが一番だろう」

広い室内が静まり返った。

その方法は効率的かつ明確な判断を下せるものであり、多少なりともリスクを伴うために誰も口にしなかった方法だ。

「……もつともな意見だが、具体的にはどうやる?」

「今から実際にやらせてみればいい」

沈黙を破った摩利の問いかけに対しての克人の答えは、これまた単純明快なものだった。

「なんなら俺が実験台になるが」

その発言に少なからず室内がざわつく。

最愛もCADに触れて分かったが、CADの調整はその調整を行う魔工師の実績と信

頼関係によつて成り立つ。実力がある魔工師を充てられた最愛には分らないが、調整が狂うと魔法力の低下、頭痛や眩暈、精神的ダメージ等様々な弊害が生じることとなる。実力の分らない魔工師に調整をして貰うことは非常にリスクの高い事なのだ。

つまり克人のその行為は非常に勇気のあることだと言える。

「いえ、彼を推薦したのは私なのですから、その役目は私がやります」

そこで真由美が手を挙げた。責任感故ではあると思うが、これは信用が無いことの裏返しであるためむしろ悪手だと言える。最愛的に達也は魔工師という分野に対して天賦の才能があると考えている。その眼の異常性や頭脳、そして器用さから生み出されるその腕はもしかしたら一流の中の一流かもしれない。そうでなかったとしても信用されていないという可能性を感じさせた真由美の言動は達也にとつて気持ちの良いものではない。

「いえ、その役目、俺にやらせてください」

だがそれに続いた、一の腕を切り落とし最愛に高周波ブレードを握りつぶされた男、

桐原武明。その男子生徒と達也の間にあつたいざこざは有名であり、それだからこそ桐原が名乗りを上げたことは達也にとつて気持ちの良いものだったのだろう。これまた珍しく達也の口角が上がっている。

「では早速実験棟に向かうとしよう」

克人の一言で、全員が一斉に席を立つた。



最愛の目の前にはよく分からない文字列が上から下へ、または映つたり消えたりしていった。

今回調整するCADは競技用のものであり、調整器具も九校戦の本番で使うものだ。最愛が使わせてもらった機械とはまた別ものであり、またキーボードで打っているためこの世界にしては珍しくアナログよりだなど考えていたのだが、周りを見るにどうやら違ったようだ。

調整の方法が違うだけならエンジニア組の表情が固まっている理由が説明つかない。

一心不乱にキーボードを叩いている達也の姿、そして全く理解できない文字列、加えて生徒会書記であり一高エンジニアの第一人者でもある中条あずさがディスプレイを覗き込んだまま驚愕の表情で固まっている点から考えて、恐らく並外れた技術を使っていると容易に想像できた。

それを見て最愛は口が綻びそうになるのを必死に抑える。

恐らく達也は世界的に見てもトップレベルの魔工師。その魔工師に最愛は貸しを作っているのだ。

そして可能な限りなら達也も融通を利かせてくれると言っていた。そしてCADに關して達也はほとんどの融通を利かせてくれる。逆に達也が不可能なら実質不可能と考えても良いかもしれない。

可能なら勿論依頼するし、不可能でもそれが分かるだけ時間を浪費しなくて済むし、何よりそれで貸しは使われない。達也が何か言ってくる可能性もあるが、それは間違いない。一蹴できる。こちらは貸しに加えてわざわざ能力を見せびらかすという危険を冒しているのだ。

最愛の思案中に調整は終わったようで、現在はまた揉めているようである。今度は今見せた達也の技術を理解したエンジニアチームと、仕上がりそのものは平凡だったことを指摘している出場選手チーム。この構図は流石に、間抜けといふべきだろうか。

簡単に言えば専門家が支持しているが、それを見ていた素人が専門家に対してここは違うよね?と結果だけを見て如何にもそれっぽい指摘をして専門家を困らせているという構図。

しかし今度は泥沼化することなく、議論は終わりそうだった。

「俺は、司波のエンジニア入りに賛成します。当校の威信に関わる九校戦において肩書は関係ありません。たとえ平凡な仕上がりであろうとも、エンジニアは彼を強く推薦していますし、何より選り好みしている時間はありません」

達也と仲が一番悪い人は誰でしょう、という質問に森崎と並び真っ先に名前が上がるであろう生徒会副会長の服部。彼が達也を推したことは反対派の威勢を一気に削ぐものであり、克人の一押しもあって達也のエンジニア入りは正式に決定した。

出発

九校戦準備会合が終わってからというものの、最愛の学校生活はゆったりのおんびりとした日常から、授業が終わったら同じように選手に選ばれたほのかや雫と一緒に最終下校時刻まで競技の練習という絵面だけで見れば青春謳歌を全うしているようなものではない。実際のところそんなたいそうなものではない。

その合間合間に九校戦の発足式や学期の終わりを告げる終業式等を迎えた訳だが、結局学校には行かないといけないため内情は変わっていない。

だがそれも直近となれば、雰囲気はがらりと変わってくる。

八月一日、九校戦前々日の午前。

最愛はバスの中で一人映画鑑賞を行っていた。出発時刻はとつくに過ぎているのだが、真由美が家の事情で遅れているらしい。達也と摩利以外はバスの中で待機しており、最愛は出発しても見続けられるという理由で映画鑑賞を行っていたのだ。

本来は映画館で観たいのだが、今見ているのは過去作。劇場ではもうやっていないため仕方なく端末にレンタルして鑑賞している。

しかし最愛が見る映画はやはりというべきか知名度が低いものであり、最近見ている

ものは例の映画好きマスターと親交を深めているうちに出てきた名前の映画だ。マスターはネタバレや飽きるような言い方などせず、その続きが気になる、という部分であらずじの説明を終えてしまいがためにその全てが『見たい映画』に変換される訳だが、マスターの薦め方が上手すぎるが故に映画が残念に感じてしまう。

だが今回は見事に当たりを引いたようだ。主人公の母校が廃校になってから数年、そこは肝試しや探検に向かった人がいなくなるという神隠しの学校で、当時の同級生たちが集まって謎を解明するという案外なじみ深そうなものではあるが、役者の名演技に加えて臨場感あふれるカメラワーク、そして伏線が伏線を呼び完全に視聴者を惑わす物語、そして神隠しの犯人は主人公だったという突飛な展開でありながらも、それまでの謎との関連性や行動理念の辻褄が合い、全ての伏線が回収されるという衝撃的なラスト。

最愛が見た歴代映画の中でも最大級の出来栄えだろう。むしろ何故埋もれてしまったのか最愛には理解できなかった。たまにこういう当たりを見ることのできるからB級映画鑑賞はやめられないのだ。惜しむらくはこれを劇場で見ることができなかったことだろうか。

多分の満足感を胸に自分の世界から帰還した最愛は、既にバスが出発していたことを理解した。出発時刻から既に二時間が経過している。出発時刻から映画を見始め、三十

分程経ってからはのめり込んでいたためその間に出発したのだろう。

「最愛ちゃん……」

そこでふと、自分の名前を呼ばれていることに気が付いた。

横を確認すると、そこには涙目のほのかが懇願するかのように名前を連呼していたのだ。

「ど、どうしたんですかほのか。超乗り物酔いですか？」

「違うよ！ 隣見て隣！」

非常に呑気な最愛に対してほのかはもう耐えられないといった様子。よく見れば周りの空気も非常に重い。さらに最愛の隣から、物凄く不気味な雰囲気を感じ取ることができた。

首を百八十度回転させた最愛。そこには窓の外を眺めながらぶつぶつと何かを愚痴っている深雪の姿があった。

周りの反応を見るにどうやらずっとこの調子らしい。最愛自身この状態の深雪の真

隣でよく映画鑑賞を、そしてその余韻に浸れたなと思えるほどには、今の深雪は不機嫌だった。

「どうしてお兄様がこんな炎天下で待たないといけないんですか……別にお兄様がやらなくてもいいのに……」

どうやら深雪は達也が炎天下で真由美を待っていたことが気に入らないらしい。それも真由美を待っていたことに対してではなく、真由美が遅れて来ると分かっていたのにも関わらず何故外で待つ必要があったのか、という点について不満のようだ。

普段ならそこまで理解したところで他人事だと無関心を貫く最愛だが、今は非常に気分が良い。たまには深雪のご機嫌取りをやってしまおうかと思っている程度にはいい気分なのだ。

「確かに超その通りですよ、深雪」

ビクツと深雪の背中が揺れる。

どうやら独り言を聞かれているとは思っていないかったようだ。

こんな静かな車内での独り言はそれなりに響くものだが、そんなことですら抜けている程深雪は不機嫌だったということだろう。

「私や他の人のようにバスで超待っていて誰も何も言わないと思えますが、それでも達也は言われたことを超こなしていたのです。依頼されたことをやり通すことは当たり前ですが、完全に超やり通すということは意外と難しいものなんですよ」

最愛の言っていることはなんてことないはずなのだが、そこには妙な説得力があった。

「でも達也は超完璧にこなした訳です。私はこの炎天下で待つなんて超やりたくないです。私は達也のそういうところ、超高く評価していますよ?」

この最愛の言葉は深雪の雰囲気を感じ取っていた生徒全員が耳にしていた。

そして最後に言った評価している、という言葉は同年代に向かつて言えば自分が相手よりも上であることを示しているため説得に使うという意味では的外れも良いところの文言ではあるのだが、深雪の威圧感とも呼べる雰囲気は段々と鳴りを潜めていった。

「そ、そうよね……最愛に評価されているなんてお兄様ったら……」

達也と深雪、最愛の関係を知らない者にとつては何故深雪が段々ご機嫌になっていくのかは首を傾げざるを得ないが、深雪から見て最愛はどちらかと言えば敵対側であり、その実力は達也、師匠である八雲や十師族である真由美、克人も認めるもの。そして最愛はお世辞を言うような性格をしていない。そんな最愛が高く評価しているというのは、深雪にとつては大きな意味合いを持つのだ。

知らない者も何が起きたかは理解せずとも、状況が良くなったことは変わりない。誰もか心の中で最愛に最大限の賛辞を送り、ほのかはガッツポーズをしているそんな和やかな雰囲気の中バス車内。深雪の雰囲気も温和になったことにより深雪の周りには人が集まり始める。

そして隣にいる最愛にもまた声をかけ始める人、両者共に上級生が多く見受けられたが、それは狭いバスの車内では一種のパニック状態にもなっていた。

見かねた摩利が叱責を入れた後に深雪と最愛を自身の真後ろへ、そして深雪と最愛の後ろに克人がつくという事も起きたが、それ以外は非常に平和な時間が過ぎていた。

その車内に、一つの悲鳴が走る。

「危ない！」

一瞬にして全員がバスの外を覗いた。

その視線の先、対向車線には大型車が傾き火花を散らしていた。普通ならこちらへの被害を気にしてパニックになったりするものだが、ここは実戦魔法師の育成機関でもある第一高校の中でも特に精鋭の生徒達だ。その緊張感らしい緊張感はない。現在走行中のハイウェイは対向車線との間に堅固なガード壁が置いてあるのも一因となっている。

だがその大型車はあまりにも、不気味だった。

「これ超こつちにきますよ」

「それは——！」

証拠は無い。だが長年——実戦経験という面——の勘により確信を持って呟いた最愛に深雪が問いかけようとしたその瞬間、短い悲鳴が上がった。

大型車は突如としてスピンをし始め、ガード壁に激突し宙を舞いながら対向車線へと

入って来たのだ。

急ブレーキによってバスは止まる。

直撃は避けた。

だが車は炎を纏いながらバスへと一直線に向かっている。

「吹っ飛べ！」

「消えろ！」

「雫は超落ち着いてください」

「——ッ！」

この状況に陥って尚パニックにならなかつたことは大変褒められたことだろう。

だが魔法科高校で勉強に励んでいた最愛はその状況が悪手であることを理解しており、こうなることは大型車がこちらに来ると分かつた時からある程度は予想していた。

だから最愛は全体を見る余裕があり、そして魔法を行使しようとしていた雫を確認、案の定立ち上がったため何か言う前に雫の腕を掴んで正面に立ちふさがった。

「バカ、止めろ！」

そして摩利の叱責によって残りの二人も魔法をキャンセルするも、完全に魔法を止めた雫とは違い残りの二人は中途半端に魔法が発動している。無秩序に魔法を発動しているため、結果として無秩序な事象変化が起こるのだが、キャンセルされているため何も起こることは叶わず、しかしその場に魔法式の残骸があるためその魔法式を吹き飛ばす程の魔法力が必須となつてしまった。事実上のキャストジャミングである。

だがそれでも後発組は冷静に動いていた。

「私が火をー」

その言葉と同時に立ち上がったのは、既に魔法の発動準備を終えている深雪。それに呼応するように克人も防壁の魔法を構築した。

最愛のおかげで多少は弱くなつているとはいえ、それでも想子サイオンの嵐が吹き荒れる疑似的なキャストジャミングの最中。いくら飛びぬけた才能があるといえど魔法が発動できないのではという魔利の思考は、だがそれは錯覚だったという思考に切り替わつてしまふ。

無秩序に放たれていた魔法式が、突如として吹き飛んだのだ。

それと同時に発動された深雪の魔法により火は鎮火。運動エネルギーのみが残った車は克人が防壁魔法で受け止めたことにより難を逃れることは出来たが、摩利はうすら寒い何かを感じる結果となった。

懇親会

事件は接触はないにしろ接触しかけ急停車した九校戦選手乗車のバス、そして死者一名を出すという惨事。警察沙汰は避けられず事情聴取や現場の通行の補佐を行った結果時間は三十分を経過した。

一応午前に出発はしたのだが、出発時の遅れと含めて結局到着は昼過ぎとなった。

九校戦はその性格上そのまま軍に進む生徒も多い。軍としても優秀な生徒は是非とも欲しいところであり、九校戦には全面的に協力してくれる。選手が泊まるホテルもまた軍が保有しているものであるなど至れり尽くせりといった感じではあるが、実際そうでもない。

ホテルとはいえ軍の施設ではあるため専従のドアマンなどはいない。荷物も自分で積み下ろしする。

その積み下ろしを手早く終えた生徒達はこれからのことに胸を膨らませ談笑しているのだが、服部は一人浮かない顔をしていた。

「どうした服部。随分と不景気な顔だな」

そんな服部に背後から気さくな声がかけられる。

「桐原……いや、そんなことは無いさ」

その声の主は服部の予想した通りの友人だった。

振り向きながら反射的に返した声は、しかし自分でもびつくりするぐらい説得力のな
い言葉だった。

「いや、そんなに好調そうな顔には見えないけどな」

実際その通りだ。今服部は異常な程自信を無くしている。

それは先程のバスで起きた事件についてだ。

先ほどのバスで成功失敗あれど動いたのは達也の天敵と化している森崎、二年生の百
家で風紀委員の千代田花音ちよだかのん、雫とそれを止めた最愛、克人、深雪、想子の嵐を危惧して
あえて動かさず反射的に動いた者を鎮め克人に助力を求めた摩利、そしてバスが急停止す
る際に減速魔法をかけて素早い停止を促した三年生会計の市原鈴音いちばらすずね、そして最愛と深雪

以外は知らないが想子の嵐を消し飛ばした達也の計九名。

だが服部も咄嗟に魔法を放とうとするも魔法を止めた、むしろ状況判断ができていた部類であり、上記の成功の例としてカウントすることもできるだろう。

だがそれは服部の良しとするところではない。

解決したのが摩利や克人、真由美だったらまだ納得できていた。しかし実際解決のきっかけになったのは深雪だ。年下の女の子がそれぞれの得意分野を理解して冷静に対処してみせた。これが服部の自信を大きく損失させた。

服部は魔法力の優劣によってその人物の魔法師としての能力が決まると思っていた人種だが、それは深雪に咎められ、今尚達也によって証明され続けている。達也で例えるならまずはその眼。あれは危機回避能力を大きく上げる非常に大きい要素であり、アドバンテージになる。例えば判断能力。その眼から与えられた情報を瞬時に理解する理解力、テロ時に見せた克人をも使いこなす指揮力、剣道部数人を無傷で抑えた身体能力。

様々なものがあるが、魔法力が圧倒的に劣っている場合はその他の要素全てを含んだ判断能力が勝敗を分ける。そして今回、その判断能力の差も見せつけられたわけだ。

意気消沈といった服部の言葉に、だが桐原は仕方ないと言った感じな表情だ。

「そういうのは場数だからなあ。その点あの兄妹は特別だと思うぜ」
「兄妹？」

服部は「彼女」ではなく「兄弟」と言ったことが気になっているようだ。

「ああ。妹は分かんが兄貴の方は……多分ありや殺ってるな」
「ヤってる？」

突如として放たれた物騒な言葉に、服部は訝し気な声に驚きを混ぜていた。

「ああ、実際に人を殺しているな。それも一人二人じゃない」

「殺人という意味ではないよな。実戦経験があるってことか？」

「雰囲気かな……殺人で思い出した。服部、絹旗最愛を知っているよな」

突如して話題の方向性が変わることとは普通のことだが、その転換点があまりにも不穏だった。桐原が質問ではなく確認で聞いているのは最愛が二科生でありながら選手に選ばれていることや、その容姿が上級生でも噂になっているからである。

「ああ、知っている。彼女も冷静に行動していたからな。彼女がどうした」

「これはマジの話だが、あいつは気を付けろ」

服部が固まった。

その表情に冗談気はない。

「どういうことだ？」

「司波兄の方は恐らく実戦だが、絹旗は違う。あいつは人を殺すことを全く躊躇しない」

「……確かなのか、それは」

言葉を失った。

なんとか絞り出した質問は、だが一瞬で跳ねのけられる。

「ああ、この前のテロの時に俺もアジトへ突入したんだが、どうやったのか先に絹旗が来ていて司波兄を追い詰めていたんだ。そして俺が見た時には司波兄の左肩から先はなかった」

その後右腕を斬った桐原が言う事ではないが、あの倉庫の光景は地獄以外の何物でもない。

「中にいたテロリストは全滅だ。信じられるか？ あんな小柄な少女が人の身体を引き千切り、殴り潰し、全身血塗れで笑いながら司兄にトドメを刺そうとしていたんだぜ」

そこまで聞いても服部にその実感はない。

今の言い方ではそれらの全てが素手で行われたことになる。

あの小柄で見た目大人しめの少女にそこまでの残虐性があるとは到底信じられない。

「……彼女はあくまでも二科生だ。頭も良いと聞いている。たとえ実技が苦手と言っても人を殺めるような強力な魔法が扱えるのならば、他の分野が多少苦手でも問題なく一科生になれると思うが」

服部は最愛と面識がない。せいぜい顔を合わせた程度だ。故にどういう魔法を扱えるのかを知らないわけであり、それ程の強力な魔法が扱えるのにも関わらず二科生にい

ることが理解できない。

「あいつが使っているのは恐らく硬化魔法だな。だが司波兄が言うには単純な硬化魔法って訳でもないらしい」

「BS魔法ってことか？」

「BS魔法には間違いないらしいな。本人もそう答えているらしいし、それ程の硬化魔法が使えたら二科生じゃないぜ。司波兄も攻守一体の装甲兵器だって言ってたな」

「装甲か……ちなみに絹旗はクラウドの選手としてはどうなんだ？」

服部は生徒会副会長だ。同じ校舎の下で暮らす生徒が殺人を犯しているという事実は看過できないが、九校戦で活躍できるかどうかというのはまた別の問題である。一先ずは活躍できるのなら良しと気持ちを切り替えたのだ。

だがその質問をした服部は、先の話聞いたからか背後から聞こえた声に背筋を凍らせた。

「私と桐原の超勝負は私の全勝ですよ。それと本人の超居ないところであまり噂をしない方がいいですよ」

「……ッ!? お、おう絹旗。いつの間にそこにいたんだ」

「荷物置いていたら桐原が超見えたから来ただけです。ほら、昨日私に超完全敗北しましたから優しい優しい私が超慰めに来てあげました」

「お前なあ……」

「桐原ってお前、一応年上なんだから——」

「私に年上とか超関係のないことです。クラウド超一度も勝てなかったので超桐原は桐原です」

幸いにも最愛はその話を聞いてはいなかった。

だが服部は最愛が桐原を呼び捨てにしていると引っかけたみたいだ。元気が無さそうだがムツとはしていた。対して桐原は本当にその呼ばれ方で慣れてしまったのか、呼び方ではなく煽りに対して反応を返している。

「ちよつと待て、どういうことだ桐原」

「どういうことって、何がだ?」

「お前が一度もクラウドで勝てなかったのか?」

あまりにもあつさりと紡がれた言葉は、しかし服部のムツとした表情を驚愕に染め上げるのは容易だった。突然のことで頭に入つてこなかったが、先程服部がした質問は信じられない事実と共に返された。桐原に圧勝できる実力は男子でも新人戦優勝候補と言つても過言ではない程度には実力を有しているということだ。

そして何人も人を殺めていることを全く感じさせないあまりにもふざけたような口調。見た目やその雰囲気とその残虐性のギャップはなるほど、不気味としか言えない。

「桐原は強いですがそれ以上に私が超強いだけです——おっと、達也と深雪がいますね。私はこれで超失礼します」

胸を張つて憎たらしい程のどや顔を決めた最愛はバスで荷物を落としている司波兄妹を見つけて嵐のように去つていった。

達也、深雪、最愛。三人一緒にホテルの中へと入つていくが、この並びがどれほど不吉なものだろうか。桐原と服部は今起きた事柄を含めてお互いに苦笑いをするしかなかった。



「お飲み物は如何ですか？」

「あ、超エリカ。来ていたんですね。超コスプレですか？」

「え、エリカちゃん？　すごく可愛いね」

「ありがとうほのか。最愛はそう言うと思つてたよ……やつぱりコスプレに見えるのかな？」

九校戦が前日ではなく何故前々日に到着するのかと言えば、この懇親会に参加するためだ。

高校生のパーティーのためアルコールは無い。そして他校も当然参加しており、懇親というよりはプレ開会式という意味合いの方が大きい。相応に緊張感も漂っている。

最愛は雫やほのかと一緒に懇親会に参加しており、隣にはトレイ片手に何故か給仕係を行っているエリカがいた。そのフリフリしたスカートが特徴の黒いワンピースに白いエプロンは見ると人が見れば確かにコスプレになるかもしれない。勿論最愛はホテルではよくあるものだと言っている。

「エリカが超いるってことは、レオや美月もいるんですね」

「正解。二人ともキツチンで、私とミキがホール」

「ミキ？」

突如として現れた知らない名前。これは雫やほのかに限らず最愛も知らなかった。いや厳密には最愛は知っているが、その呼ばれ方は知らない。

「あ、そっか。ちよつと待っててね」

そんな雰囲気を察したのか、エリカは片手トレイに器用に小走りで何処かへと行ってしまった。待っているということだろう。ほのかと雫はお互いに顔を見合わせている。それから数分後、エリカは一人の白いシャツに黒のベスト、黒の蝶ネクタイという召使いっぽい男子を連れてきた。

「おまたせ。こいつがミキよ」

「僕の名前は幹比古だ！」

幹比古。その名前は雫やほのかも知っており、最愛に至っては顔も知っていた。当然

だろう。同じクラスであり、中間テストの理論で最愛よりも一つ上の順位を取っている生徒なのだから。

「ああ、なるほど。超吉田でしたか」

「こーやって喋るのは初めてだよね、絹旗さん。吉田幹比古、名字で呼ばれるのは好きじゃないから名前と呼んでくれると嬉しい」

「分かりました。私は絹旗最愛です。最愛って超気軽に呼んでもらっても構わないですよ幹比古」

「私はA組の光井ほのかです。よろしくお願いします」

「同じく北山雫。よろしく」

「オーケー最愛。光井さんと北山さんもよろしく」

お互いに自己紹介をした後は、二人の関係を教えてくれた。どうやら幼馴染らしく、幹比古はミキという呼び方が気に入らないらしい。お互いに言い合っているが、幹比古の言う事をサラッとエリカが流してそれに幹比古が嘯みつくといった感じだ。レオや幹比古から分かる通り、エリカは口だと敵なしらしい。最愛の前には屈するが。

その言い合いはエリカが達也と深雪の姿を認めてそちらに向かうまで続き、これには

さすがの最愛も苦笑するしかなかった。

それからほのかや雫目当てに人が入れ替わりでやってくるのだが、最愛はそちらのグループではないため気にしないにしても居心地はあまり良くない。

対してエリカや幹比古が去った司波兄妹は達也が深雪をクラスメイトの所に向かわせたため達也一人だ。

最愛は思考する間もなく達也のところへと向かった。

「相変わらず超無表情ですね、達也」

「そう言う最愛も変わらないな」

身長差が激しい二人は、並べば異色の雰囲気放つ。制服を着ていなければそれこそ兄妹だろう。

そして二人の制服は普段肩に刺繍がない二科生のものだが、今回は綺麗な花柄の刺繍が施されている。一高の代表に刺繍が入っていないのは不味いという考えからだ、最愛はともかく達也の刺繍姿は深雪の機嫌を非常に良くさせた。

「それでさつきは深雪が居たから超聞きませんでしたけど、あの時魔法を消したのは超

達也ですよね？」

「何のことだ」

急激に頭が冷えた。

別の人ならまだしも、最愛による発言となれば達也にとって大きな爆弾だ。

「まあ超利口な最愛ちゃんも踏み込み過ぎたことはしませんが、超面白い魔法を持っているみたいですね。物も超分解できちゃったりするんですか——というのは超ここの話ではないですね」

最愛のそれはあくまで確認であり、また物の分解については仮定の話だ。

だが何故だろう。本当に利口故に引き際を弁えているのか、妙に際どい所を突いてくる。そして言い方もなんとも嫌らしい。達也も認めるわけにはいかないのだ。しかし自身が魔法式を可視化できるだけでなく、分解させる手段を持ち合わせていることは隠さなければならぬが、その件において否定することもまた出来ない。

達也の頭は最近では一番と言えるほどの回転を見せていた。

「それは俺にだけできることではない。最愛もできる可能性は十分にある」

グラム・デモリッション
「術式解体のことですか」

「そうだ」

一応事実だ。

術式解体は起動式や魔法式を吹き飛ばす超高等魔法であり、最愛のように無理矢理魔法式を破綻させるのとは訳が違う。最愛の場合は魔法式の残骸が残るのだが、術式解体はその全てを想子の塊で吹き飛ばしてしまう。その性質上膨大な想子が必要であり、最愛がこの世界で初めて知った魔法にして、魔法を学んでから早々に諦めた魔法でもある。だが達也が使った魔法ではないと最愛は断定した。

「まあこれ以上超刺激するのは良くないので詮索はしません。でも今回は達也が超勝手に見せたものですから貸し借りにカウントするのは超なしですよ」

仕方がないとはいえ、最愛は別に使つて欲しいとお願いしたわけではない。勝手に見せて勝手に借りにされたらたまったものでは無いし、たとえバスに車が突っ込んできても最愛は必ず生き残る。

達也としては淡い希望を抱いてはいたが抜け目は無かった。

「そうだな」

その返事は短く、そしてやり辛さを感じさせた。

老師

最愛のさりげなくも際どい質問攻め——数は少ないが達也の神経をすり減らしたため文字通り攻めである——はタイミンクの良い無駄行事によって救われることになった。

来賓の挨拶だ。

それは賑やかだった高校生達が静まり返って真面目に、またはそんなフリをして聞くものであり、その結果最愛も口を閉じることとなったのだ。静かなところで話すようなことではないし、それは明らかにラインを超えることを最愛は分かっている。

正直最愛にとつては優位性を保ち続けることができたことにはできたのだが、あまりにも中途半端なため若干不満そうに壇上を見詰めている。

達也としては顔を知っている人が壇上に立っているのを無表情で見詰めながらも内心はホツとしていた。

際どい攻め程神経を使うものは無い。

入れ替わり立ち替わりで来賓挨拶が終わっていく中、恐らくこの来賓の中で最も注目を浴びる人物の名前が司会者によって紡がれた。

十師族の長老、「老師」の異名を持つ九島烈くどうれつ。

十師族という地位を確立した人物であり、二十年前までは世界最強の魔法師の一人として目されていた人物だ。最強の名を保ったままその座を引いたが九校戦だけは毎回顔を出しているらしく、勿論最愛も魔法を学ぶ上で知っている。

まだ半年しか関わりのない最愛にはあまり感動は無いが、他の魔法師にとつては歴史を作った人物が目の前に現れる訳であり、その感動は言葉で言い表せない程だろう。人が舞台上立つた気配がしたと同時に、暗転していた舞台にライトが照らされる。

会場が、どよめいた。

舞台上に立っているのはパーティドレスを纏った金髪的女性。

決して九十歳の男性などではない。

無数の囁きが交わされる中、最愛と達也も例に漏れず囁きを交わしていた。

「達也、女の人の超後ろにいる爺が九島烈ですかね」

「……そうか、最愛には精神干涉魔法も効かないんだな」

「精神干涉魔法？ あの爺が魔法を超使っているんですか？」

「そうだね。たぶん悪戯だと思う」

しかしその会話は例と違いその正体を見破るものだ。

女性がライトに照らされていることで視線が誘導されてしまうことに加え若干暗いため見えにくいのだが、女性の後ろには白髪の老人が立っている。

その老人は最愛と達也が視ていることに気が付いたのか悪戯が成功したような顔で意地悪く嗤っている。

「どんな偉そうな人かと思えば超クソ爺ですよ達也」

「そう言うな」

最愛は性格の悪い老人としか思っていないが、達也はその魔法の弱さに対しての影響力を見て感動に近いものを覚えていた。

ライトに照らされた金髪の女性という目立つ対象を用意して視線を逸らすという現象を意図的に、しかもこの何百人いる人間を対象に非常に微弱な魔法で成功させたのだ。

烈が女性へと囁いて、女性がスッと脇へ退いた。

会場が再びどよめく。

「まずは悪ふざけに付き合わせてしまったことを謝罪する」

その声は九十歳とは思えない程若々しいものだった。

「今のはちよつとした余興だ。魔法というよりは手品の類いだ。だが、手品のタネに気づいた者は、私の見たところ六人だけだ。つまり——」

烈の一言に大勢の高校生が耳を傾けている。

次に何を紡ぐのか、どんな仕掛けがまだ残っているのか、それだけが注目の的だ。

「——もし私達が君達の塵殺おうぎつを目論むテロリストで、来賓来賓に紛れて毒ガスなり爆弾なりを仕掛けたとしても、それを阻むべく行動を起こすことができたのは六人だけだ、ということだ」

烈の口調は特に強くなった訳ではない。

だが会場は、それまでとは別種の静寂に覆われていた。

この言葉も一種の現象と言えるだろう。

烈が出したのは仮定とは言えかなりの極論であり、この場においてはあり得ないことと言つても過言ではない。だが否定する要素もない。そして烈が言ったという事実。これらの要素が相まって強力な説得力を生み出していた。

基本屁理屈気味な最愛ですら納得をしまつた程だ。

烈の演説は更に続き、今使つた魔法の強度から関連して使い方を誤つた大魔法よりも使い方を工夫した小魔法の方が勝ること、九校戦はその使い方を競う場所であることを工夫という一言に表して括つた。

聴衆の全員が手を叩いたが、一斉にとはいかなかつた。

まばらに始まり、段々と音量を増していったのだ。

「そんなに超愉快的な演説でしたか？」

他の聴衆と変わらず拍手をしていた達也だが、最愛の指摘した通りその顔は非常に楽しそうなものだった。

「ああ。老師が言ったのは今のランク至上主義である魔法師社会に異議を唱えるものなんだ」

「その頂点に立つ人物がその在り方を実演をして否定したことが超楽しかった……とか？」

「その通り」

十師族を作った人物とだけあつてその影響力は絶大。口に出したただけなら反感を買ってしまうそれも、実演を伴ったものとなれば話は別だ。

——私は出来る。お前達はどうか。

演説が終わったと共に再び眼が合ったその老人の嫌らしい笑顔は、最愛にとつては本気ではないイラつきによって、達也にとつては面白いものを見せてもらったというものによって、それぞれやる気に火をつける結果となった。



「達也、仕上がりはどうですか？」

「最愛が言った通り俺のやりやすい様に改良はしてみたが、一回持ってみてくれ」

九校戦前々日に会場入りしたのは例の懇親会に参加することと、前日を休日に充てる

ためだ。そして選手やエンジニアにはそれぞれ部屋が割り振られており、最愛と深雪、ほのかと雫と綺麗に分かれてはいるのだが、達也のルームメイトは機材となっている。

そんな大きいことはできないが軽い調整ぐらいならできるようにはなっており、最愛は九校戦で使うCADの調整をしていた。

「まあさすがは達也と言ったところでしょうか。超使いやすいです」

「そうか。試合のとき俺はそっちに行くことはできないが応援はしてる。でも本当にあの作戦で行くのか？」

「練習でも超ハマっていたので大丈夫だと思いますよ。後は超使い方です」

「ラケットの方はどうだ？」

「ラケットの素材についてルールを見てみましたが超大丈夫でした。ただ普通のテニスみたいに打てないのが超苦労してます」

最愛は通常のラケットでは無いため真由美と克人に特注したラケットを使っている。そして能力があるためCADを必要としないが、最愛は現在拳銃タイプの特化型のCADを持つていた。

最愛はラケット主体は勿論のこと、CADとラケットの併用を以て桐原に全勝をして

いるのだ。加えるとCAD単体では最愛が対戦を拒否しているため無敗というのもある。

「そうだとしてもモノにしてるだけすごいと思うぞ」

「そうですか。まあ超優しい最愛ちゃんは今回の件で能力についてはもう触れないであげますよ」

「助かる」

最愛は元々もう触れないつもりではいたが、達也も明言してくれた方が安心はできるし最愛にとってもこれ以上は達也の返し方によって不利になりかねないため、決着を付けるという意味でも良い口実となった。

そして達也も最愛の能力について精神干渉も効かないという情報を予期せぬところで手に入れることができたため、お互い不可抗力ということでも無しにしようという気分になっていた。

「今日はどうするんだ？」

「とりあえずは超のんびりしてますよ。やることが超ある訳でもありませんし」

「そうした方が良い。最愛はクラウドだからな」

最愛の参加するクラウド・ボールは九校戦の中でも特にハードと言われており、体調管理が選手の責務となっている。最愛の能力を詳しく知らない達也でもあの能力が無尽蔵でないことぐらいは分かる故の心配だ。

CADを持って部屋を出ていった最愛を見送った後、達也はCADの情報と睨みあいながら九校戦前日を過ごすこととなった。

温泉

懇親会が前々日に催されたのは、前日を休養に充てるためだ。

夕食を終えた最愛は誰もいないベッドに再びごろんと横になり、寝るまでの時間を漫然と過ごしていた。雫やほのか、同室である深雪は達也の部屋に行っているため非常に静かな時間を過ごせ、心休まる時間だ。

今日は一日この調子のため考え事もその分多い。九校戦のことは勿論のこと、魔法のこと、そして嫌でも考えてしまうのがやはりこれからのことだろう。何度考えても答えは見つからないが、それでも考えずにはいられない。どうしてこの世界にいるのか、これからどうすれば良いのか、学園都市はどうなっているのか、そもそも最愛は本当に生きているのか——勿論、考えるのをやめてこのままこの世界で生きていくことも考えた。

だが今後最愛が暴走しないとも限らない。知られていないならまだ対処はできたが、達也や深雪、そして七草や十文字にもその異質性は認知されてしまった。いつかは話さなければならぬ時が来るのだろうか、それは最愛にとつて——
そこで不意にノックが三回鳴った。

恐らく深雪だろう。

身体を起ここして髪を梳かしながら返事をする。

「超開いていますよ」

「ただいま最愛。もしかして起こしちゃった？」

「起きていたので超安心してください」

「お邪魔します」

「お邪魔します」

どうやら達也のところには雫とほのかもいたようだ。時刻は八時前。

達也は明日からエンジニアとして動かなければならないため少し早めに切り上げたのだろう。その思考はほんの数秒だったのだが、いつの間にか最愛を含む円陣が組まれていた。あまりの早さに最愛は普通に驚いてしまったが、顔には出さなかったため何も突っ込まれることなく女子会というものが流れて始まった。

ほのかはともかく、最愛に深雪、雫といった面子では「普通」の女子会みたいに夜通しお喋りをするのが物珍しくも感じるが、そういう面では三人とも「普通」と評しても良いだろう。恋愛話も意外に得手としている四人だが、話題の方向性は最終的にやはり

九校戦、特に懇親会で出会ったとある人物に対する話題だった。

「昨日だとやっぱりあの人だよ！」

ほのかのそれは憧憬や尊敬とは違い、若干の嫌悪が混じった言葉だ。

雫は窘めているが意見には概ね同意と言った感じで、深雪はただただ苦笑いしている。

最愛はその場にいなかったため知らないが、どうやら三高の生徒が深雪に対して名家の出身だと思ひ声をかけたのだが結果として「ただの一般人」と認識されたようなのだ。

当然それを聞くだけあって質問者は師補十八家しほじゅうはつけという十師族を補佐する家柄、その中の「一色家」の令嬢で名前を一色愛梨いっしきあいりというらしい。実力も相応のものがあ、移動魔法を使った剣さばきの鋭さから「エクレールエクレール・愛梨妻」と呼ばれる程の実力者である——
——というのが雫からの情報だ。

「昨日も言ったけど実力は本物だよ。一年生ながら今大会ミラージュ・バットの本戦にも出ることまで注目を集めている」

「二年なのに上級生を押しつけて……?!？」

「確かに超凄い魔法師ですね。でも話を聞いている限りでは深雪が超負けるとは思えませんが」

他人事のように聞いて客観的に評した最愛。しかしこれは最愛にとつても重要なことだった。

「深雪なら私も勝てると思う。けど彼女の出場種目は本戦ミラージ・バットともう一つ

——新人戦クラウド・ボールだよ」

「——それは超面白そうですね」

本当に面白そうだという感情を多分に含ませたその笑みからは、全く動じていないところが良く分かった。最愛がそれくらいで怯むとは考えていなかったが、むしろ好戦的になってしまった点については流石の一言。そこでふとあることが気になったのかほのかかがそういうえげと切り出し、

「深雪と最愛ってクラウドの練習試合をやっていたよね。結果聞いても大丈夫？」

深雪の出場種目は新人戦のアイス・ピラーズ・ブレイクとミラージ・バットだが、最愛の練習相手という名目で何度かクラウドの相手をしていたこと、そして最愛は練習試合を人前でやることはないという二点は周知の事実だ。練習試合に関しては最愛が可能な限り見られないようなスケジュール管理を行った成果だが、あまりの秘匿性故に生徒会等が動いていると噂が流れた程である。

だからその質問はある意味必然的なものであり、

「……私の超全敗です」

「正直なところお兄様の力が無ければ勝てなかったわ」

深雪が目配せをした後、最愛が苦虫を潰したような顔で答えたことでその勝敗が明らかとなった。やはり、という感情が二人の脳内を支配したが、深雪が何も知らなければ本当に勝てなかったという真剣な顔を見て今度はまさか、という感情が押し迫る。

「深雪、それは——」

どういう意味という言葉は、小気味の良いノック音によつて発せられることはなかつ

た。

不意を突かれた雫は若干不満気にドアを見つめ、一番近かったほのかが立ち上がった。現在の時刻は十時前であり、消灯時間も無いため慌てるようなことはない。

「こんばんは〜」

「あれ、エイミィ。他のみんなもどうしたの?」

開いたドアから顔を覗かせたのはエイミィだった。その後ろには三人の同級生。第一高新人戦女子メンバーがほぼ揃っていることとなる。

「うん、あのね、ここって温泉があるの」

「超入れるんですか?」

「十一時までなら良いって言っていたよ」

「……すごい」

息びったりというか、最愛の欲と嘯み合ったというか、奇跡的に理由が判明したこと
にその場の全員が感嘆してしまった。いや普通のホテルならば温泉があるなら入りた

いし何も考えずに入るだろうが、ここは軍の施設。勝手に使つていいものでは無いため許可を得ているかどうか等の会話はあつていいものだろう。それを全て飛ばして全容が把握できてしまった。

「タオルも湯着も貸してくれるって。四人ともどう?」

「じゃあ、ご一緒させてもらおうかしら。着替えを取ってくるから先に行つておいて?」

そして最愛は元より、他の三人も温泉には興味があつたのだ。

深雪の快諾にエイミイは嬉しそうに頷いた。

「オーケー。急がなくても大丈夫だよ」

地下の大浴場は一高一年女子の貸し切り状態だった。偶然ではなく十時から十一時まで本当の貸し切りにしてくれたのだ。

貸し与えられた湯着は締め付ける部分が皆無のゆつたりとしたデザインであり、入浴という用途には相応しいが水着等と比べたら着心地が非常に心許ない。

「やあ最愛。こうやって喋るのは練習試合以来だね」

湯船に浸かって気持ちよさそうに目を閉じていた最愛に、ハンサムな声が届いた。

「スバルですか。クラウドの調子は超大丈夫ですか？」

一年D組の里美スバル。ハンサムな口調がとても様になっているボーイツシユな少女で、最愛と同じクラウドの選手だ。当然何度か対戦することがあったため、お互いに会ったら——基本的にスバルから——話すぐらいの仲にはなっている。

「おかげさまで万全だよ。最愛はどうだい？」

「超良い感じですよ。ただ相手もそれなりの実力があるみたいですから、慢心はしないように超気を付けています」

対戦相手は仮にも師補十八家の令嬢にあたるのだが、それをそれなりの実力と評するのはさすがというべきか。その胆力に最愛に尊敬の念を抱きながら、スバルも隣で湯船

に身を委ねた。

ここは大浴場というには少し小さく、人工的な温泉ということもありどちらかといえど個室サウナ付きの大きなお風呂という感じもあるが、実際は軍の療養施設。演習の筋肉痛や関節痛の療養を目的としており、医者者の指定した時間お湯に浸かるだけのもの。そのため身体を洗うのは手前のシャワーブースだ。

現状はシャワーブースを深雪が使っており、雫は個室サウナ、ほのかとエイミイがじゃれあっているため——ほのかが身の危険を感じ始める程には——それなりに騒がしくなっていた。

しかし普段の入浴よりも心地よい気がするこの場所は、二人のじゃれあいも含めて温泉と形容できるものだろう。その騒動もエイミイが満足したことで段々と収まってきた、再び温かな雰囲気漂い始めた浴場。だがその雰囲気は一瞬にして緊張感溢れるものへと変貌した。

「な、なに？」

シャワーブースで身体を洗い終えた深雪が現れたと同時に訪れる沈黙。その場の全員の視線は深雪へと注がれており、思わず深雪もたじろいでしまう程だ。

足を止めて紡がれた質問に答える者はおらず、注がれる視線の数も変わらない。

「ダメよ、みんな。深雪はノーマルなんだから！」

「ほのか？」

悲壮感たっぷりのほのかの言葉の意味も、深雪には理解ができない。だが先程のやりとりを見た後のこれでは、早とちり気味なほのかがこう言ってしまうのも無理はないだろう——というよりも、今回はあながち間違っていないかもしれない。深雪に集められた視線は、その魅力に惹かれてしまっている視線なのだから。

「いやあ。ごめんごめん。つい見とれてしまったよ」

湯船から出て浴槽の縁に腰をかけていたスバルに相変わらさずハンサムな口調でそう言われたことにより、ようやく深雪もその視線の意味を理解する。

「ちよつと……女の子同士で何を言っているの？」

「そうですよ。深雪の貞操が超危なくなったら達也がここまで飛んできますよ」

「最愛も何を言っているの!？」

目を閉じて相変わらず浴槽に身体を預けており、唯一この雰囲気飲み込まれていない人物だが、故にそこから放たれる冗談は鋭利なものだった。

視線の意味を理解して焦りを感じていた深雪を更に揺さぶる最愛の冗談。少し顔を赤らめながら否定してくるその姿もまた鮮烈な色香を醸し出しており、さらに奇妙な緊張が浴場に漂う。しかし普通なら冗談で済むのだが、この兄妹なら———と思えてしまうのは日頃の行いだらうか。

この緊張感は雫がサウナから出てくるまで続き、むしろ疲労感が生まれてしまったのはこういった場での愛嬌というべきだろう。

九校戦開幕

翌日、九校戦は無事開幕した。

直接の観客は十日間でおよそ十万人。この交通の便の悪さで一日に一人ものギヤラリーが競技を見に来る。有線放送の視聴者はその百倍以上にもなる。プロの試合も行われる人気スポーツに比べれば少ないが、これだけの人間が注目している大会はそうそうない。

開会式は華やかさよりも規律を強く印象付けるものだった。魔法競技はそれ自体がとても派手なものだから下手に飾る必要はないのだ。来賓の挨拶も無く、九校の校歌が順に演奏された後、すぐに競技に入った。

今日から十日間。本戦男女各五種目、新人戦男女各五種目の計二十種目の魔法競技大会の幕開けだ。

最愛は今回、基本的には達也と共に行動することに決めている。理由は単純であり、一つは雫とほのかが達也と一緒に回るから。もう一つは最愛には魔法の知識はあるが実際に見たことがないため、目の前の魔法が何かを理解できない点がある。最愛が聞かずとも達也が自発的に、または深雪や雫やほのか、一緒に回るだろうレオやエリカが達

也に尋ねることは明白。

加えて特定競技では普段お目にかかれない殺傷性ランクB、場合によってはAの魔法を見ることもできる。それはつまり対人戦闘において実際に使われる可能性のある魔法であり、使用者によって速度や威力が変わるとはいえ参考資料として扱える。最愛と達也の二人きり、または深雪を含めた三人ならそこまで達也が説明することもないだろうが、この状況は上手く使うべきだ。

まずはスピード・シューティングを観戦することとなった。

スピード・シューティングは三十メートル先の空中に投射されるクレーの標的を魔法で破壊する競技で、制限時間内に破壊したクレーの個数を競う。いかに素早く正確に魔法を発射できるかを競う、というのが名前の由来だ。

試合には二つの形式があり、予選は五分の制限時間内に破壊した標的の数を競うスコア型。同時に四つのシューティングレンジを使い、六回の試技で予選を終えて上位八名が準決勝に進む。準々決勝以降は、対戦型。紅白の標的が百個ずつ用意され、自分の色の標的を破壊した数を競う。

一戦目から新人戦から無敗の真由美が出場するということで非常に注目を集めている競技であり、会場は真由美目当てのギャラリィで溢れかえっていた。

最愛、雫、ほのか、達也、深雪という順番で、会場内の関係者エリアではなく、一般

用の観客席に陣取る。

「予選では大破壊力を以て複数の標的を一気に破壊する戦術も可能だが、準々決勝以降は精密な射撃照準が要求されるわけだ」

達也の言葉に熱心に頷いているのは雫。このメンバーの中で唯一新人戦スピード・シューティングにエントリーしている。

「従って普通なら、予選と決勝トーナメントで使用魔法を変えて来るところだが——」
「七草会長は予選も決勝も同じ戦い方をするので有名ね」

達也が言いかけた台詞は、背後に座った少女に横取りされた。

「エリカ」

「ハイ、達也くん」

「よっ」

「おはよう」

「おはようございます、皆さん」

達也の後ろに座ったのは、右から順番にレオ、エリカ、美月、幹比古。都合よく空いていたのは彼らの座席が最後列に近かったという事情がある。というよりもスピード・シューティングは前列程選手と同じ視力が必要になるため、基本は後ろで見るのがセオリーなのだが、前列の人達の目的はつまりそういうことだろう。

達也曰く、近くで見える価値はあるとのこと。

「エルフィン・スナイパー——の名前は超伊達じゃないということですね」

「……本人は嫌っているから、会長の前では言わない方が良いでしょう」

これは最愛にではなく、その他に向けて言ったものだ。エルフィン・スナイパーとは真由美の異名であり、九校戦の真由美のユニフォームが近未来映画のヒロインみたいな恰好に加えて、可愛らしさと凛々しさを元に作られたものだが本人はとても嫌がっている名前だ。それを最愛は雫から以前から聞いており、あろうことか真由美のことを敢えてエルフィン・スナイパーと——しかも半笑いのオプシヨン付き——呼ぶものだから、前回の件もあり真由美から苦手意識を持たれている。達也もそれを知っているから

忠告だけするのが精一杯だ。

しばらく真由美の姿に熱狂していた会場だが、それも開始が近づくにつれて静寂に染まっていく。ヘッドセットをつけているため観客が少しぐらい騒いでも選手には関係ないが、これはマナーの問題だ。

真由美の集中力と気迫、それを助長するかのような静けさに緊張感が漂う。

開始のシグナルが点った。

軽快な射出音と共に、クレールが空中を翔け抜ける。

「速………」

思わず呟いた雫の一言は、真由美の魔法に対する感嘆だ。

真由美は真つ直ぐに立ってCADを構えている。

銃身から弾を打ち出しているのではないのだから照星に視線を合わせる必要はない。CADには最初からマズルサイトもスコープもついていない。

その立ち姿はむしろ、弓の構えに似ていた。

射出数は五分間に百個。連続して撃ちだされるものもあれば、十秒以上間隔を置いて撃ちだされるものもある。縦横無尽に飛ぶ不規則なクレールを、真由美は一個のとりこぼ

しもなく個々に撃ち抜いていく。

五分の試技時間は、あつという間に終了した。

ゴーグルとヘッドセットを外し、客席の拍手に応える真由美。
結果はパーフェクトだった。

「ドライアイスの亜音速弾、ですよね？」

拍手を送りながら訊ねた深雪に、達也が笑顔で頷いた。

「そうだ。良く分かったな」

「……そのくらい、あたしにも分かったんですけど……」

「同じ魔法を百回も見たら、何かぐらいは超分かりますよね」

不満気なエリカに同意を示したのは最愛。最愛の言う通り真由美が使った魔法は一つで、しかも基礎的なものだ。決まりの悪そうに顔を逸らした人もいたが、それを確認しても誰も触れることは無かった。

「遠隔視系の知覚魔法『マルチスコープ』。実物体をマルチアングルで知覚する視覚的な多元リーダーの様なものだが、そこから入る情報を処理するのは自前の頭だ。余程マルチサイトの訓練を積んだのか、それとも天性なのか……十師族直系は伊達じゃない」「あれ私的には超気持ち悪いので使って欲しくはないのですが」

ずっと見られているという感覚は人によつては気持ち悪いと感じてしまう。最愛もその一人であり、悪意が無くとも嫌なものは嫌なのだ。達也もそれは同感であるが、風紀委員という立場やその労力を考えると口が裂けても言えない部分でもある。

次の会場へと向かうために最愛達は席を立ったが、腑に落ちていない表情のレオ。

「二つ気になるんだけどよ、この真夏の気温でドライアイスを作るのも、それを亜音速まで加速するのも相当なエネルギーが必要なはずだぜ？　いくら魔法がエネルギー保存法則の埒外だからといって、それだけの事象変化を伴う魔法の負担は大きいだろ」

「魔法はエネルギー保存法則に縛られず、事象を改変する技術だ。だが改変される側の対処物まで、エネルギー保存法則から自由になつているわけじゃない。物理法則つてヤツは結構頑固なもので、魔法という理不尽な力の干渉を受けても、何とか辻褄を合わせようとする復元力が働くんだよ。今回で言うならドライアイスを作つてそれを加速さ

せる魔法は、形成過程で奪った分子運動エネルギーを固体運動エネルギーに変換して物理法則を欺いているんだよ」

「魔法行使を『事象を改変する』とは超上手く言ったものですよね。達也の言っていることだと腑に落ちませんが、この一言があるだけで超説得力が増します」

「上手く騙されているような感じは抜けねえが、確かになあ」

全員で次に行われるバトル・ボード会場へと向かいながらも魔法の根幹にある理論についての話し合いは行われ続けた。

こういう哲学的な話は一人の有識者がいることによって深く掘り下げてしまうのは、やはり人間の好奇心から来てしまうのだろう。その議論はバトル・ボード会場につくまで絶えることはなかった。

初戦を鮮やかな白星で決めた一高。だが次のバトル・ボードもまた、本命だ。

バトル・ボードは人工水路の長さを百六十五センチ、幅五十一センチの紡錘形ボードに乗って走破する競争競技だ。ボードに動力はないため魔法を使ってゴールを目指す。水路に統一された規格はなく、九校戦は全長三キロの人工水路を三周するコースとなつ

ている。

水路には直線や急カーブ、上り坂や滝上の段差まで設けられているため、選手の純粋な魔法力は勿論、それを維持する精神力、集中力、コースの適応力、最大速度時速で五十〜六十キロの向かい風に耐える持久力、そしてバランス感覚が試される非常にハードな競技だ。予選は一レース四人で六レース。準決勝は一レース三人で二レース。三位決定戦は四人で、決勝レースは一对一で競う。

ちなみにバトル・ボードに限らず、モノリス以外の競技は全て二十四人で行われる。九校が三人ずつエントリーしたら二十七人だが、前年度の当該競技順位によって足切りにされるためだ。

スタートラインには既に四人の選手がスタートライン——ラインはひきようなものが——に横一列で並んでいる。四人並ぶと狭く感じる水路の中側に、摩利は位置取っていた。他校の選手が片膝や膝立ちで構える中、摩利は真っ直ぐに立っている。この時点でも摩利のバランス感覚がどれ程良いのかを物語っている。前年度優勝という話は伊達ではないということか。この時点で他校の選手は戦略で優位に立てない限り摩利に勝つことはできないことは、競技を見たことの無い最愛にも分かった。

前列には相変わらずの熱狂的なファンがいるが、真由美は少年色が強かったのに対してこちらは黄色い声援が大きい。摩利のボーイッシュな顔立ちに凛々しい立ち姿は、そ

れだけ同性を魅了していたのだ。

だが最愛の隣に座る少女は、真逆の感情を抱いているようだ。

「エリカ、摩利が超苦手ですか」

「……はつきり言って嫌いよ」

「まあ優しい最愛ちゃんは超偉そうな態度が気に喰わないということにしておいてあげます」

直球の質問に直球の回答。敢えて聞かなかった——達也は知っていたようだが——面々を他所に、いつも通りのテンションでふざける最愛。今日に限ったの話ではないが、この胆力には尊敬の念すら覚える。

『用意』

スピーカーから、合図が流れる。

空砲が鳴り、競技が始まった。

観察

第一レースは、圧倒的だった。

開幕四校が後方を爆発させて自分だけ推進力を得ようとしていたが、結果は自滅行為。一人だけ対応して見せた摩利が開幕から独走状態となった。初日のバトルボードは予選のみであり、一高の選手の出場は午後から。しかし午後からはスピード・シューティングの準決勝と決勝が行われるため最愛達はそちらを見に行ったが、真由美の技量が圧倒的過ぎて予選と同じ魔法で突破してしまったという点以外は特筆することもなく優勝を飾った。そもそも世界的に高水準である真由美は既に高校生レベルではないため、個人戦で負ける可能性は皆無だった。

ちなみに男子スピード・シューティングの服部も優勝を飾っている。

そして九校戦は二日目に突入するが、ここで最愛にとつて嬉しくないニュースが飛び込んできた。なんでも達也が今日行われる女子クラウドの副担当をすることが決まったらしいのだ。これでは魔法についての解説が無くて困る。加えて同時刻にピラーズ・ブレイクの試合もあるため新人戦の選手である深雪と雫はそちらに向かうこととなり、ほのかもついていくこととなる。残念ながら最愛の出場競技はクラウドであるためそ

ちらを見に行かなければならず——なんてことはなく普通にピラース・ブレイクを見に行った。

実戦的な魔法が多く見られ、さらには深雪や雫、ほのかと魔法に詳しい人が多いのだ。加えて深雪と雫はその眼で実際に魔法を見ているだろうし、それらの長所短所も知っているはずだ。つまり解説役として不足はない。

エリカやレオは「出場競技だし俺達も一緒に行くから見に行こうぜ」と誘ってくれたが解説者がいない競技など見る意味が無い。真由美のストレート勝ちなのは目に見える。そもそもどちらを見るかなど考える余地も無かった。

最愛の最優先事項は、生きることただ一つなのだから。

ピラース・ブレイクに出場する選手で優勝候補とされているのは二年生である千代田花音。先の事件で真っ先に魔法を発動して鎮圧化を図ろうとしていた残り二人のうち一人（もう一人は森崎）である。

応援も兼ねて見に来ているのだが、人はそれなりにいるといった感じだろうか。恐らく大半は真由美のクラウドを見に行っているはずだ。その点を考えたらこの人数は多いと評しても良いのかもしれない。

まずは一回戦。相手は四高の選手だ。

アイス・ピラース・ブレイク。通称ピラース・ブレイク、棒倒し等と呼ばれている。

選手は自陣奥に設置された高さ四メートルの櫓の上に立ち、十二メートル四方の自陣に配置された氷柱十二本を守りながら、十二メートル四方の敵陣の氷柱十二本を先に倒す、あるいは破壊するという競技だ。真夏に氷柱を用意することや広範囲のフィールドの關係上、競技フィールドは男女二面ずつの四面を確保するのが限界であり、一回戦十二試合、二回戦六試合の十八試合を行うのが一日の限界だった。

またこの競技性故に身体能力は必要なく、純粋な魔法力や駆け引きが重要となってくる。故に見栄えが良く、非常に人気の高い競技だ。

魔法の煌びやかな攻防戦、圧倒的魔法力から放たれる殺傷ランクAの魔法等魔法技能を見られるのも人気の一つだが、それ以上に公序良俗に反しないもの以外の制限が無いユニフォームの自由という点があるだろう。各々が自身の落ち着く衣装、気に入っている衣装等多種にわたり、九校戦のファッションショーとまで言われている。それを目的に見に来ている者も少なくは無いのだ。ちなみに最愛は九校戦期間ということもあり花より団子、服より魔法である。

「雫、あの人は超強いのですか？」

「うん。百家千代田家。振動系統・遠隔固体振動魔法の中でも地面を材質関係なく振動

させる魔法を得意としている。地面と言う概念を持つ固体に強い振動を与えられるという『地雷源』と、『地雷を作り出すもの』＝『地雷源』という二つの点から千代田家には『地雷源』という二つ名が与えられている。去年の新人戦ピラース・ブレイクの優勝者……始まる」

最愛の問いに雫はその詳細を話し終えた同時に、試合開始の合図が点く。

そしてその場の全員が、地雷源と呼ばれる所以を直に感じた。

正しく直下型地震。

上下の爆発的な振動に相手はすぐさま硬化魔法で地面と氷柱をくつつけ転倒を防ぐうとするが、そのまま十二本全ての氷柱が倒壊した。

圧倒的な魔法力での最短決着。

——有用な魔法だ。

ただ振動させているだけに見えるが、使い方は多岐に渡る。振動により建物を倒壊させる手法は勿論のこと、相手の直下を振動させて一時的に拘束することもできる。多数の侵略戦や少数での防衛戦、対陸上兵器等単純故に戦争での使い方も非常に幅広い。だが最愛はその魔法を、問題なしと判断した。

「為す術も無くつて感じだな」

「対抗魔法はそれなりにあります。変に氷柱を強化したり固定したりしたら逆に氷柱は壊れやすくなつてしまいます。今回は振動で転倒させないための硬化魔法が裏目に出ましたね」

「中途半端な魔法は逆効果ということね」

「ええ」

レオの客観的な眩きに深雪が理論的に返し、エリカがなる程と頷く。

このピラーズ・ブレイクにおいて防御した方が不利という状況はつまり短期決戦を意味するが、倒しても負けという条件の中、文字通りの直下型地震を無防備というのは得策とは言えない。対処するかやられるよりも早くやるか。ピラーズ・ブレイクにおいて厄介な魔法だろう。

そしてピラーズ・ブレイクも良くても悪くても高校生レベルというべきか、そこまで強力な魔法は見られないようだ。

陸上兵器に対して十師族並みの破壊力を誇ると評されている魔法を超えるような魔法は、雫から聞いた感じ出てこない。つまり新人戦前までの本戦で見るとべき競技は決勝戦のピラーズ・ブレイクのみであり、午後から見る競技が無くなったとも言える。むしろ

ろ新人戦の方が最愛の目的として見栄えが良さそうだ。

ここで、エリカが席から立ちあがった。

「さてと、私はちよつと行くところがあるから行つてくるね。美月も行こう」

「私も良いですが……吉田君もどうですか？」

「うん、良いよ柴田さん。レオも行こう」

「いいぜ。最愛はどうする？」

「超行きますよ」

「……結局行くのね」

「桐原の試合を超見に行くんですよね。もしかしたら良いものが見られるかもしれないので行きますよ」

「最愛ちゃん……」

まさかの二科生面子全員集合。

エリカが美月を誘い、美月が幹比古を誘い、幹比古がレオを誘い、ダメもとでレオが最愛を誘うという構図だ。最愛の言った通り桐原の試合を見るためだが、先程頑なに行こうとしなかったのに何故かいきなり乗り気になって、しかもその理由が何とも不穩――

——この場に在るものでは無く、桐原にとって——なのだ。苦笑するのが精一杯である。

ちなみにエリカが何故桐原と面識があるのか。それは例の襲撃事件に遡るが、最愛が聞いた雰囲気だと剣道や剣術の繋がりによるものらしい。その際に桐原の恋人となつたのが壬生紗耶香という二年E組の生徒であり、こちらは最愛も実際に会つたことがある。剣道を嗜んでいる麗人と評するに相応しい人物であり、彼氏と同じで非常にいじりがいのある人物だ。

紗耶香は競技場で席を確保しているらしい。行つたら分かるがクラウド・ボールは真由美が出ているため桐原の試合にはあまり人はいないため席の確保は他の競技と比べても容易だ。競技場に着くと、手を振つて居場所を伝えてくれる紗耶香の姿があつた。若干困惑顔なのは予め連絡が行つてあつたものの、予想以上に連れ人が多かつたからだろう。だがすぐに慣れたところに紗耶香の人の良さが伺える。

桐原の一回戦は席についてからものの数分で始まつた。

花音のピラーズ・ブレイクが初戦、桐原のクラウドが三戦目であつたこと、花音が最速決着だつたこと、男子クラウドの一戦目が第五セット、二戦目が四セットまで続いたことが挙げられる。花音が少し時間をかけていたり他の試合が長引いたりしていたら恐らく始まつていただろう。

ちなみにクラウドの試合は男女合計六面で行われており、今日中に決勝まで行う。試合と試合の間隔も短いため非常にハードな競技だ。

相手の選手は二高。

お互いにラケットタイプであり、魔法技能だけでなく壁や天井からも来る低反発ボールの軌道や何処を狙っているか、何処を狙うかという心理戦や状況判断も大事となる。

初球は桐原から。

自己加速術式を展開して素早く近づいた桐原は右の壁を狙って全力で振り抜いた。その軌道は右の壁から天井、正面の壁へとバウンドして相手のコートを狙うも、さすがに初球で落とす程相手も甘くない。

同じく自己加速術式で返してきた相手、という構図が出来上がれば後は心理戦となる。

何処を狙うのか、何処を狙われているのか、何処を狙わせるのか、その駆け引きが重要だ。

「速いな」

「まだ一球です。試合は超これからですよ」

ここで相手との駆け引きに勝てるかどうか。ペース配分も重要であるため動き自体は様子見だが、駆け引きで制したものが最初の流れを引き寄せる。

開始二十秒が経過。二球目が相手コートに射出された。

それが事実上の試合開始の合図だ。

駆け引きも五分だったため、まずは最初の一点。それを取りに来た相手は一球目を左へ、二球目を右へと放つ。左右に分けることで桐原の運動量を増やしつつ点数を取りに行く作戦だが、この競技の難点はテニスとは違い球速的に回転をかけてコートに落とすということができない。つまり一度は壁か天井を経由してしまうため、自己加速を使つた桐原はその打球に追いついた。

桐原は剣術部のためテニス経験者みたいなラケット捌きは持たないが、コントロールは付けられる。その二球を共に相手の正面へと返した桐原は、コートの中央へと駆け戻った。振り抜くことは出来ないが、それでも正面の打球というのは効果的だ。驚いて腰を引かせた相手は一球をラケットに当てただけであり、もう一球はコートに突き刺さる。

そして付け入る隙を見つけた桐原は甘く返ってきた球を一気に叩き付け、そのまま球が点々と転がり、桐原が一挙に八点を入れた。

「魔法の技能は桐原先輩が上。決まったね」

「むしろここで負けた方が超面白かったんですけど」

「絹旗さん、一応私もいるんですけど……」

「超安心してください紗耶香。超分かって言っています」

エリカの呟きはあまりにも早計だが、二球の時点で八点差の優勢。魔法も精神面でも勝った桐原には既に勝ちの一字が浮かんでいた。最愛と壬生のやり取りも勝利が確定しているからの余裕であり、その試合を桐原は三セット連取のストレートで勝ち進んだ。

根性勝負

桐原の二回戦の対戦相手は三高のエース。

実力面で見たら決勝戦レベルの好カードだ。

一高の選手は桐原ともう一人が二回戦に進んだが、一人は一回戦で敗退してしまっ
た。

桐原は相変わらずのラケットスタイル。

対して相手もまた、ラケットスタイル。

同じスタイルなら如実に実力差が浮き彫りになるため勝敗は五分——前評判から
言えば桐原が不利だ。

その不安感は拭いきれるものではなく、紗耶香の顔にも出ていた。

「まあ桐原なら超問題ないですよ」

「そう……ね。そうよね。桐原君だもん」

「へえ……」

「おっと……」

「なんですかレオ、エリカ」

「別に？ 最愛でもそんなこと言えるんだって思っただけ」

「ああ、いつもは煽^{おだ}ってばかりだから」

珍しいものを見たレオとエリカが笑う。

美月もハハハ、と困ったようにはあるが笑みを浮かべている。

そんな反応が不服だったのか、最愛はムツとしながら反論した。

「TPOは超弁えています。私も桐原の努力は知っていますし、普段は煽っていますが一定の超敬意を払っていますから」

「最愛が桐原君をそんなに評価していたなんて意外だね」

エリカは軽い口調の割に本気で驚いていたが、同時に納得もした。

それだけ相手の力量が高いということであり、この試合は前評判通り桐原が不利と最愛も感じているということ。

観客からしたらそれだけ見ごたえのある試合ということだが、相手はともかく桐原は勝つても余力を残すことができるかどうか。恐らくこの試合には勝つても優勝はおろ

か、三回戦を戦い抜くことも厳しい。

「……始まるね」

紗耶香の不安そうな声と共に、開始の合図が点った。

一球目は桐原の方へ射出される。

それをまずは様子見で返し、見誤ったことを理解した。

先手必勝。

一気にネットまで詰めた相手は桐原の打球をコートに叩き付けて先制されてしまった。

「超力押しタイプですね」

「力と力なら強い方が勝つ。単純だからこそ厄介だね」

相手同様、桐原も力押しスタイルだ。

故に実力で負けている桐原は不利というのがエリカの素直な感想。

しかし、最愛はそれを笑って否定する。

「前の桐原ならそうでしたが、今の桐原なら超純粋な力勝負でも優位に立つことができます」

「最愛。それはどういうことだ？」

「見ていれば超分かりますよ、レオ」

最愛の意味有り気な言葉は、すぐに現実となつて証明された。



戦える。

戦えている。

思った以上に、戦えている。

現在五個のボールが射出されており、点数は序盤を制して十点程上回っている。

実力差は開始早々から感じている。間違はなく格上の相手だ。

だが優勢に事を進められているのは練習の成果と言えるだろう。

試合中の桐原の胸中は思いのほか穏やかだった。

緊張していない訳ではないが、程よい緊張感でむしろ十全に力を発揮できるコンディション。だがそれ以上に相手のプレイスタイルが力押しスタイルだったのが功を奏している。

例えば真由美みたいな圧倒的魔法力で完全に抑え込むわけでもなく、技量によつて翻弄されるわけでもない。ただただ力による圧力。だが優勝候補の筆頭だけあつてその力押しも凄まじいものがある。

——以前の桐原なら、惜敗が関の山だった。

だが桐原は知っている。

一つ下に圧倒的なまでの力押しスタイルのプレイヤー、絹旗最愛を。球が見えず怪我防止のため『防壁の魔法』の使用が前提条件となるあの力業に比べれば、この程度の力押しなど可愛いものだ。

それにしても——

(防壁の魔法が無いと怪我をするとか、ラケット殺しにも程があるだろ)

思い出して、あまりの理不尽さに思わずニヤけてしまう。

『防壁の魔法』そのものは難しいものではないが、ラケットスタイルでずっと使用しな

ければならないのはとてつもないハンデだ。それに加えて自己加速術式の常時展開。それならいつそ魔法スタイルに変えようとすら思ったが、あまりにも非現実的だったため諦めた。

魔法スタイルで戦う場合は球の運動エネルギーを超えるだけの魔法力、そしてその魔法力を維持しながら最低限の魔法で対処するという荒業が必要不可欠。

練習では外野の一人が『防壁の魔法』を展開してようやく試合ができるレベルであり、唯一助力を必要としない真由美がガス欠を心配して短期決戦を挑む程といえはその難易度が分かる。

魔法スタイルよりもラケットスタイルの方がまだ勝算があるということだ。

思い出してみれば最愛との第一印象は最悪だった。

当初会った瞬間は怒りによって我を忘れていたが、改めて状況を見て恐怖を抱いた。これが人の手によって行われた惨状かと思えるほどの凄惨さ。いくら魔法師とはいえ、一つ下の二科生の女の子が行ったと言われても信じる者はいないと断言できるほどのことが、容易に行われていた。

そこからクラウド・ボールの選手として一緒になった時、雰囲気の違い過ぎて別人だと思つたが恐怖感には拭い切れなかった。それは向こうも理解していたはずだが、それでも最愛は気さくに話しかけてきた。

今でも恐怖感は抜けていない。

一人で抱え込むには重すぎて服部にうっかり喋った時、最愛の言葉は死神から余命宣告をされた気分になった程だ。

だがそれが今ではどうだろう。自身に活力を与えてくれる存在になっている。

(これは後で礼を言う必要があるな……笑えるぜ、本当に)

六個目のボールが射出される。

試合はまだ始まったばかり。

本来なら第二セット、第三セットの余力も気にしなければならないが、そんな戦い方ができるのは同程度の相手まで。格上の相手にできることではない。

左右前後に壁や天井を使って撃ち込みながら相手を揺さぶり、相手の狙いを予測して失点を可能な限り少なくなるように返す。

笑みを携えながら試合を行う桐原は、対戦相手にとって不気味に映っていた。



「正念場だね……」

エリカの眩きに誰も反応は無かったが、全員の共通認識だった。

セットカウントは二対二。最初の二セットは後を気にしているのか分からない程飛ばしたことにより桐原が取ったが、第三セットからは相手が追い上げをかけて二セットを取られた。

そして運命を決める第五セット。

五球目まで射出されており残り百秒。

点数差はわずかに五ポイント。

相手の追い上げを気力で止めているのが感じ取れるが、それでも短期決戦を逃した桐原は不利な状況に追い込まれていた。

紗耶香と美月は不安そうに、最愛とエリカ、レオは真つ直ぐとその勇姿を見詰める。

第一セットに比べたら両者共に動きが鈍くなっているが、放たれる気迫は点数を重ねるごとに増幅していく。

これ以上点数を重ねたら不味いというタイミングで、六球目が相手コートに射出された。

残り八十秒。

このタイミングで相手が自由に使える球が一つ増えるというのは非常に不味い状況だ。

たった一球。

その一球が勝敗を決する要因となる。

お互いに点数を重ねながらもポイント差は一向に動かない。

ここまで来たら氣力の勝負。

実力差は既にあつてないようなものだ。

——誰もがそう思っていた。

次の瞬間、競技場の一角が歓声に沸く。

それは第一高校の応援席。最愛達も例外ではなかった。

「吹き返したぜ！」

「まだあんな力が残っていたのね」

均衡を壊したのは相手でも追加された一球でもなく、桐原本人。

ラストスパートをかけるかのようにスピードを上げた桐原は、最小限の動きで次々とポイントを重ねていく。

これが最愛と幾度となく行われた試合で身に付けた、桐原の力。

「超予想通りですね」

「何々、どういうこと？」

最愛の反応に興味を示したのは、エリカだった。

「私とクラウドの試合をするには『防壁の魔法』の使用を超前提条件としているのですが、それでは超負担があまりにも大きすぎるということで『防壁の魔法』は別の方が発動して試合を行っていました」

突っ込みどころが多いが、ここで突っ込みを入れる程野暮な人はいない。

「そして桐原と私対戦成績は私の超全勝。しかし他の人と違う点が一つだけあります。それは桐原が『防壁の魔法』を自分で発動して、文字通り単身で超試合を行ったことです。最初は一セットすら持ちませんでした。最終的には女子の三セットまで超戦い抜ける程度には持久力と回復力を付けました」

桐原が身に付けた力は誰しもが持つ『持久力』と『回復力』という力。自身に厳しい条件で最後まで戦い抜いて手に入れた、努力の賜物だ。

「最初から飛ばしていたので心配していましたが、短期決戦に見せかけた長期決戦だったということですか？」

「その通りです、美月。それに気が付いた相手は第三セットから超追い上げる戦法に出ましたが、最初の二セットで思ったよりも力を使ったみたいです」

「それ一見作戦勝ちに見えるけどさ……」

「ただの根性勝負だよな……」

呆れたような眩きに反して、点差は十点、二十点と開いていく。

なんとか喰らいついていた相手も、九球が射出された時点でついに膝をついた。第二回戦にして優勝候補筆頭を倒すという快挙を成し遂げたのだ。

盛り上がる一高応援席。

紗耶香もホツとしたような表情を浮かべながら、健闘を称え拍手を送っていた。

これで桐原が一気に優勝候補筆頭に。

「紗耶香。桐原のところへ超行つてあげてください」

「うん！ それじゃあ皆先に失礼するね」

ずっと抱えていた不安が消えたのか明るい表情で控室に向かった紗耶香だが、そう勧めた最愛の表情はあまり明るくない。それはエリカも同じだった。

「最愛にエリカ。折角勝つたんだからそんなシケた顔すんなよ」

「……はあ」

「エリカ、超仕方ないですよ。レオですから」

「とりあえず馬鹿にされていることだけは分かったぜ」

ムツとした表情を浮かべたレオだったが、二人がふざけているわけではないと理解して真面目な表情に戻る。

美月も二人の表情を見て、首を傾げていた。

「勝てたとはいえ桐原は三回戦を超戦える程の力がありません。使い果たしたことに変

わりはありませんから。それは桐原本人が超理解しているはずですよ」

「勝てたは良いけどそれでも三回戦は棄権。決勝戦並みの内容だっただけに、くじ運が無かったとしか言いようがないわね」

少し考えれば分かることだった。

実力は相手が上なのだ。

勝つためには力を出し切らなければならない。

桐原も三高の選手も、本当にくじ運が恵まれなかったとしか言えなかった。

それから数十分後、桐原が三回戦を棄権することが戻ってきた紗耶香によって告げられた。

新人戦開幕

九校戦三日目。

今日はバトル・ボードとアイス・ピラーズ・ブレイクの決勝まで行われるが、今最愛がいるのは競技場ではなく訓練場。少し無理を言つてとある人物を呼び出していたのだ。

「よう絹旗。待たせたな」

「おはよう、絹旗さん」

訓練場に現れたのは桐原と紗耶香。最愛が呼び出した二人だ。

昨日の今日で呼び出したのに快く受け入れてくれた二人には感謝している。勿論、今からやることを手伝ってもらうことが前提の感謝だが。

「頼んだものは超持つてきましたか？」

「ああ、ラケットと低反発ボールだろ？　まだ練習が足りなかったのか？」

「そういうわけではありませんが、超試したいことがあります」

そう言って地面にサクサクと枝を突き刺していく。軍の施設だからもつと丁寧扱えと思わなくもないが、相手が最愛なら仕方ないかという謎の納得が感じられたためそのまま見守る。

最愛が今からやることは、簡単に言ってしまうえば手の内を見せることと同義。だが今の胸中は何でもいいやと思えるほどに、熱いものが込み上げていた。

「桐原、昨日は超頑張りましたね」

「お、おう。最愛のおかげでスタミナがついたからなんとか行けたって感じだな。それにしてもまさか褒められるとは思ってなかったぜ」

「超素直な感想です。桐原は九校戦に超勝ちたいですか」

「当然だ」

「私は正直、超どつちでも良いと思っていました」

驚いたような表情を浮かべる桐原と紗耶香。事情を知らない者は最愛も九校戦を勝ち抜きたいんだ、優勝したいんだと思われるだろう。だが実際は真逆。負けても良

いなら一回戦で負けたいぐらいだ。わざわざ能力を見せる必要はないというのが最愛の結論だった。

——昨日までは。

桐原の勝ちに対する執念は知らないわけではない。練習の時もそれは感じていた。だが第三者としてその光景を目撃して、絶対に負けたくないという執念と三回戦を戦えない桐原の無念をすっかりと感じ取っていた。

らしくないな、と最愛自身も思っている。

しかしたまにはこういうのも良いのではないかとも思っている。

「ですが今は、超優勝したいと思っています。対戦相手が師補十八家だとか『数字付き』とか超関係ないです」

「百家相手に関係ないと言えるお前が羨ましいよ……まあつまり本当は勝つ予定ではなかったけど、気が変わって勝ちに行くことにしたということか？」

「少し違いますよ桐原。勝ちに行くのではなく超勝つんです」

断言した最愛の目は今まで見たこと無いほどに本気だった。

サラサラと大まかにクラウドで使うコートと同サイズのコートを書いていく最愛。

「ネットはありませんが超仕方ありませんね。桐原は反対のコートをお願いします。紗耶香は桐原の後ろの方でボール拾いをお願いします」

「分かった」

「分かったわ」

桐原は籠に入れた低反発ボールを持って枝が刺さっている対面のコートへ、紗耶香がその後ろについて最愛を見る。だがその最愛の姿に、どうしても疑問を感じてしまう。

「おい絹旗。ラケットは使わないのか？」

「超使いません。百聞は一見にしかずですよ桐原。本気でコートに打ち込んでみてください」

「分かった」

それが桐原にとって地獄の始まりだった。

最愛の最終調整は昨日死力を尽くして戦ったことを知っていてなお、中断の着信音が鳴るまで続いたのだ。

◆ ◆ ◆
連絡を受け取った最愛達は訓練場を飛び出し、一高本部へと駆け込んだ。

最愛は深雪や雫、ほのかから。桐原は服部、紗耶香はエリカからそれぞれ同時に近いタイミングで状況を教えてもらった。それは摩利が準決勝のレースで七高の選手と衝突して肋骨骨折という重傷を負ったというもの。関りが薄い最愛はまだしも、桐原や紗耶香が見過ごせるものでは無かった。

真由美は搬送に付き添っているため不在で、克人が現場の混乱を抑えるべく冷静に対処を行っていた。桐原と紗耶香はその克人の元へ、最愛は克人がどちらかといえば苦手なためメールで状況を教えてくれた同級生を探す。

しかしその姿は何処にもない。
加えるなら達也の姿もだ。

達也ならこういったことに必ず巻き込まれると思っていた最愛のあては、全て外れてしまった。

考えられる可能性はいくつか挙げられるし、関わっていない可能性もある。だが深雪たちが観戦していたという事は、達也も同席していたということだ。ここまで深刻な状

況だということは単なる事故という訳でも無い。しかし本部に居ない。聞いた話では付き添いは真由美一人だ。つまり達也は最愛の知らないところで何かしら関わっているということだろう。あんな秘密主義なのにどうしてこんなに動くんだ……なんて思わなくもないが、よく考えれば不利益しかない勝利のために先程まで練習していた最愛が言えることでもなかった。

しかしこれで作戦スタッフは頭を悩ますこととなるだろう。

優勝確実とまで言われた摩利のバトル・ボードは結局三位。二位の三高は決勝レースまで残っており、加えて摩利はミラージ・バットの出場選手でもあったがそれも棄権。

さらに三高は全体的に高い順位を維持しているためポイントが縮まってきている現状がある。どちらにしろ最愛が考えても仕方のないことだ。

結局何もすることがないため何食わぬ顔でホテルへと戻り、何食わぬ顔で『衣食住』のイベントを済ませた最愛。全員が働いている中新人戦のイベントが近いという口実——使うことは無かったが——を建前に早々に寝る準備をしていたが、寝る前になってようやく顔を合わせた深雪によって深雪がミラージ・バットの本戦に出場することが決まったことを聞いた。

どうやらその後院した摩利と真由美、克人たちから通達があつたみたいだが、達也の深雪なら優勝することも可能だという後押しが余程嬉しかったらしく、嬉々として

伝えてくれた。

そうして迎えた翌日。

波乱を呼ぶ新人戦がついに開幕した。



大会四日目。

本戦は一旦休みとなり、今日から五日間は一年生のみで勝敗を競う新人戦が開幕する。

ここまでの成績は一位が第一高校で三百二十五ポイント、二位が第三高校で二百二十ポイント、三位以下が団子の状態だ。

一位と二位の差は百五ポイント。一高が大きくリードしている状況だが、新人戦の成績次第では三高が逆転する可能性も秘めており、逆に新人戦を優勝できなくてもポイント差をある程度維持できるなら一高が総合優勝できる可能性が高くなる。

新人戦の種目順は本戦と同じだが、本戦と違ってスピード・シューティングは初日で決勝まで行われる。その理由は開会式の有無によるものだが、選手としては本戦よりも力配分が大切になるためむしろハードな種目になっているとも言える。

そして同時並行種目にバトル・ボードがあるのだが、雫とほのかの種目は奇跡的に被らなかつた。大会側も同高校選手の種目は可能な限り被らないように調整しているようだ。

ちなみにただ被っていないという訳ではなく、雫は午前でほのかは午後の予選最終レースのように見に行ける猶予があるという意味で被っていない。

一高新人戦の初戦は雫が飾り、そこから知っている名前ではエイミー、Cクラスの滝川和美と続いていく。和美は以前温泉にも一緒に入ったが、他人以上友達未満という関係だ。いや最愛にとって大半が友達未満ということだからむしろ普通の関係と言えるか。

だが今から試合を行うのは数少ない友人である雫。

思惑や策略が大半であった最愛にとっては初めて応援しに来たと言えるだろう。

加えるなら今回達也がメインエンジニアとして戦う最初の試合だ。CADというものに全く触れてこなかつた最愛ですら卓越した技量を持っていると判断できたその力が、九校戦メンバーという実力者を伴って表舞台に現れる。

最愛はこの三か月、常に魔法の練習は行っていた。雫やほのかに教えてもらえる点や元がゼロのため伸び代しかない点を考えればその成長速度も領ける。だが魔法力はあくまでも二科生の範囲内だ。しかしそんな最愛でさえ、達也のCADと得意分野、そし

て相手が普通のCADを持つという断定的な条件ではあるが、ほとんどの一科生を完封できるといえばその技量が伝わるだろうか。

そんなCADを作る達也が九校戦メンバーのCADを担当、そして作戦の立案を行うとしたら——どんなに運が無くても三位入賞は堅い。

事故の要因も事前に取り除くはずだ。

深雪曰く昨日の事故は第三者によってレース場に仕掛けが施されていたらしく、それと七高選手のCADに細工が施されたことにより招き起こされたものらしいのだが、予選ではCADに細工をするか直接手を下さなければ邪魔は入らない。

しかし達也がCADの異常を見過ごすわけも無く第三者の横やりは不可能に近い。

つまり安心して試合を見られるという訳だ。

結論も出たことで多少の達成感を胸に、周囲を見渡す。

上段部には真由美や摩利、鈴音がいる。雫の、というよりは達也のエンジニアとしての腕前を見に来ている可能性が高い。理由は達也だからで案外納得がいく。

同列には幹比古、美月、最愛、ほのか、深雪、エリカ、レオという順番で座っているのだが、どうも隣人の様子がおかしい。

「どうしました、ほのか。超緊張しているみたいですが」

「う、うん。ちよつとね」

「ほのかのレースは超午後からじゃないですか。何のために雫の試合を超見に来たのですか」

「分かってるんですけど……」

「超ダメみたいですねこれは……」

どうやらこの場にいる面子では緊張をほぐすことは不可能に近いらしい。達也か雫の試合で紛らわしてもらうか、確実なのは前者だが現実は後者が一番手っ取り早い。

「最愛は……」

「どうかしました？」

「うん……最愛は緊張していないの？」

「少しはしています——と超言いたいところですが、全くしていませんね」

「凄いやね最愛は」

「超経験の差です。こればかりはほのか自身が超慣れるしかどうしようもありません」

「そうだね……」

「それに本番は達也が超見てくれると言ってくれたじゃないですか。それに作戦も達也

「が考えたらしいですし、超大丈夫です」

「うん、そうだね。達也さんが考えてくれたんだもん……」

本人がいなくても効果は絶大だった。

達也というワードそのものがほのかにとっては特別な存在というだが、恋というものはそのままで人を変えてしまうのか。最愛も年頃の女の子だからそういったことには前から強い興味を抱いていたが、中々機会に巡り合わない。

巡り合わないではなく、無縁の生活を送っていたただけだが。

「さあそのまま試合を超見ましよう。始まりますよ」

「そうだねっ」

ほぐれたというよりは抑え込めるだけの余裕が出来たという感じか。

これなら本番も大丈夫だろう。

ランプが一つずつ点っていく。

「ありがとうね、最愛」

聞こえてはいるが、聞こえていないフリで。

そのお礼は何故か素直に受け取れる気がしないのだ。

知らない実力

ランプが全て点った瞬間、クレーが空中に飛び出した。

得点有効エリアに飛び込んだ瞬間、それは粉々に粉碎された。

次のクレーはエリアの中央で、その次はエリアの両端で次々と粉碎されていく。

その豪快な範囲魔法に観客からは嘆声漏れる。

順調な滑り出しだ。

「……もしかして有効エリア全域を魔法の作用領域にしているのですか？」

「そうですよ。雫は領域内に存在する固形物に振動波を与える魔法で標的を砕いているんです。内部に疎密波を発生させることで、固形物は部分的な膨張と収縮を繰り返して風化します。急加熱と急冷却を繰り返すと硬い岩でも脆くなって崩れてしまうのと同じ理屈ですね」

「より正確には、得点有効エリア内にいくつか震源を設定して、固形物に振動波を与える仮想的な波動を発生させているのよ。魔法で直接に標的そのものを振動させるのではなく、標的に振動波を与える事象改変の領域を作り出しているの。震源から球形に広

がった波動に標的が触れると、仮想的な振動波が標的内部で現実の振動波になって標的を崩壊させるという仕組みよ」

「深雪とほのかは超当然のように言っていますけど、簡単に言っちゃえば各ポイントを番号で超管理していて、展開した起動式に変数としてその番号を入力するだけで魔法が超発動するというわけです。立ち位置、得点有効エリアとの距離、方向、エリアの広さが超同じだからこそ、起動式は不変。位置情報である番号を超入力すれば魔法が打てるというわけです。勿論色々な要素がある分起動式は超大きいので、雫の処理能力があつてこそですけどね」

美月の質問に深雪、ほのかが詳細に、最愛が要約する形で答えた。

つまるところスピード・シューティングの予選を絶対に突破する魔法と言っても差し支えないのだ。しかもこの魔法は『能動空中機雷』アクティブ・エアーマインという達也のオリジナル魔法。感情表現が乏しい雫が興奮気味にこの魔法について話してくれたのは記憶に新しい。

「わお、流石雫。パーフェクトじゃない」

「ただでさえ超突出している雫の力に達也が加わったら、パーフェクトも当然ですよ」

「それは言えてるな」

そのまま席を立てて競技場を出ようとしたのはエリカやレオ、美月、幹比古、深雪だ。恐らくに劳いの言葉を投げかけるのだろう。だがその必要はない。

「行かないの？ ほのか、最愛」

「いえ、この後の予選Bブロックに超気になる選手がいると雫が言っていたので、折角なら一緒に見ようと話していました」

雫のブロックは予選Aの始め、その気になる選手というのは予選Bブロックの始めだ。まだ時間があるとはいえ次に競技を行うのは男子の森崎だけだから別に見に行く必要はない。

「深雪達も良かったらどう？ 達也さんはエンジニアの仕事があるけど雫はここに来るって」

納得した様子で全員が席に戻る。

だがここで問題が一つ発生した。

席が足りないのだ。

雫によればエイミイも一緒に来るらしく、席は二つ必要とのこと。だが同列には席が残っておらず、少し後方に四人分の空きがある。

「席が空いていないなら超仕方ないです。行きましょう、ほのか。少し上の方に四人分の席があります」

迷っていても意味が無いと早々に立ち上がった最愛は、ほのかに声だけかけて階段を上がっていく。レオやエリカ等のEクラスはエイミイと面識が無いための配慮だ。少女探偵団の再結成——形だけ——である。

問題があるとするなら、二席が空くように両端にそれぞれ座ることになるのだが、変な輩が下心丸出しで言い寄ってくることだろうか。一応ほのかを内側に座らせて最愛は階段横に陣取っているが、それでもほのかが気になる。強気に出られたら委縮してしまいそうだ。

「ねえ君、横の席空いてる？」

ほら来た。

何処の高校かも分からない男二人組。

「残念ですが超先約がいます」

「ならその先約が来る間でいいからさ」

「少しだけ話そうぜ」

はあ、とため息をついてそつと手を差し出す最愛。

唐突な謎の行動に固まった男二人組だが、どうやら手を握れというジェスチャーであることは理解できたようだ。

さつと手を掴んできた男に対して、ゆっくりと、確実にその力を強める。

「私は超言いましたよね。先約がいると」

「は、はいでででで！」

「お、おい。どうしたんだよ」

「手が、手が！」

ミシッと手から音が鳴った。

男の悲鳴に近い叫び声に周囲の目も集まってくる。

そろそろ塩梅だ。

スツと手を放す。

「次は手加減しません。分かったらさっさとこの場から超消えてください」

「はいっ！」

良い返事と共に逃げ帰っていく男たち。これで最愛達に下手に話しかけるとどうなるかよくわかっただろう。

ほのかはどうしていいか分からずアタフタしており、深雪達は苦笑を浮かべていた。

これが最愛の答えだ。

ほのかに声がかけれられないようにするためには、話しかけてはいけないと分_から_せれ_ば良_い。

強引だが一番手っ取り早い方法だ。

事実それから一切声がかげられることは無く、非常にゆつくりと試合観戦ができた。

「お待たせ最愛……どうしたの？」

「パーフェクトを取った雫がいるから……という訳でも無いよね」

「最愛、何をした？」

Aブロックの試合が全て終わったタイミングで声をかけてきたのは、メンテナンス等の次の試合の準備を終えた雫とエイミー、そして達也だ。

周囲を見渡し、何があつたのだろうという困惑顔付きで。

「席を超取っていただけです。それ以上でも以下でもないですよ。超うるさい輩がいたと言えましたが」

「そうだが、これは少しやりすぎたんじゃないか？」

「軽く手を握ってあげただけです。むしろ超喜んで欲しいくらいですよ。あ、達也の席は下です」

「あの、達也さん。最愛は私に声がかけれないようになしてくれただけで……」

「……次からはもつと穏便に済ませてくれ」

「むっ、私は超穏便に済ませようと思いましたよ。向こうがしっこかっただけです」

達也と最愛の受け答えで、雫やエイミイにも何が起きたか大方察しがついてしまつた。

最愛が見せつけるように一人を生贄を捧げて、強硬手段で席を確保したのだろうと。だが理由が本当にほのかに声をかけられないようにするためであり、方法は確かにそれしかなかったのかもしれないという気持ちもある。

雫は無表情で、エイミイはあははと苦笑しながら、死守して取つてくれた席に有難く座つた。

下の列に座っている深雪達はこちらに手を振りながら雫に祝辞を送つており、達也はその輪の中へと入つていった。

「雫、予選突破超おめでとうございます」

「雫、おめでとう！ 凄かつたよ！」

「流石雫つて感じだつたよね」

「三人ともありがとう」

珍しく満更でもなさそうにはにかむ雫。

九校戦愛が止まない雫にとって初戦突破は何よりも嬉しい結果だ。

「次はエイミイの番」

「うわあ思い出させないでよ雫！ 考えないようにしてたのに！」

「エイミイ、もしかして超緊張してきました？ まあ当然ですか。雫がパーフェクト取ってエイミイが超予選落ちなんてしたら……」

「やめてやめて！ 魔法師にとってイメージは現実そのものなんだから！」

「冗談ですよエイミイ。エイミイなら予選ぐらい超余裕で行けます」

うがあと反応するエイミイのなんと微笑ましいことか。本当に緊張しているはずなのだが、その緊張を一切感じさせない。

試合が始まっていたら白い目で見られていたところだが、今はブロックとブロックの境目。少しだけインターバルがある。

「始まる」

だが多少の談笑時間にしかならないような本当に短い時間だ。

Bブロック最初の選手。

三高、十七夜葉。

百家に連なる十七夜家の令嬢でスピード・シューティングとアイス・ピラース・ブレイクの優勝候補の一人だ。そして順調にいけば、零と準決勝で戦う相手でもある。

見ておきたいという気持ちは当然だ。

静まり返る競技場には、少しずつ緊張感が生まれていく。

ランプが一つずつ点つていき、その全てに光が宿った。

同時に、クレーが発射された。

クレーの一つに振動魔法が発動し、破裂。その飛び散った破片が次のクレーへと当たり、その破片がまた別のクレーへと当たる。破壊したクレーの破片がクレーを破壊する連鎖が、完成していた。

『アリスマテイククチェイン数学的連鎖』。

その異様な光景に、観客が騒めく。

「二つ目のクレーを壊したのは振動魔法として、どうして破片が他のクレーに飛ぶんだろう」

エイミイの疑問に明確に答えたのは、最愛だった。

「移動系魔法ですね。それぞれのクレーの破片に移動魔法がかけられていて、それらが原子配列みたいに超綺麗に繋がるようになっていきます」

「え、待って。最愛あれ見えるの？」

「完全ではありませんが、ある程度は見えます」

驚愕。ハッキリと言って、最愛の空間把握能力と演算能力がここまで高いと雫たちは知らなかった。

三人にはただクレーの破片が意思を持っているかのようにぶつかり合っているようにしか見えないが、最愛はその全てが原子配列のように綺麗に繋がっていると聞いたのだ。つまり破片の数を正確に把握し、更には移動する物体の位置まで把握しているということに他ならない。しかもそれをコンマ秒で、この遠距離から認識している。

しかしそんな三人を意に介した様子も無く、最愛は淡々と試合の批評を始めた。

「確かに超優勝候補と言われるだけあります。雫も超苦戦するでしょう。しかしあの連鎖は一度外せば必ず一つのクレーを逃してしまう魔法です。場合によっては外した場所から連鎖が一気に崩れてしまうような超脆いところも多々あるので、確実にクレーを

破壊すれば雫なら勝てると思いますよ」

試合終了。

栞のポイントは100点。

つまり雫に引き続きパーフェクトとなる訳だが、そんなことどうでも良かった。

確かにその片鱗はあった。

魔法の覚えが早かったり、理論の成績は優秀だったり、達也のオリジナル魔法である『能動的機雷』の理論をすぐに理解していたり、頭が非常に良いという事は理解していたつもりだった。

だが最愛は、頭が良いという次元を超えている。雫たちは友人の全く知らなかったとてつもない能力を目の当りにして、試合どころではなくなってしまうていた。

快進撃

雫、エイミー、和美の三人は順調に準決勝まで駒を進めた。

そして栞もまた、準決勝に駒を進めている。

対戦表は雫対栞。エイミー対和美だ。

前評判では雫対栞は五分五分。エイミー対和美はエイミーが数歩優勢となっている。

その勝った方が決勝、負けた方が三位決定戦を行うことになり、それでスピード・シューティングの順位は確定だ。

あれから雫やエイミーも時間の都合上選手控室から出ることができなくなったため、最愛とほのかは深雪達の席にまで戻っている。

その際に最愛の絡まれた時の行動が話題のタネになったことはご愛敬だ。

準決勝からは試合が同時に行われる。

エイミーや和美を知らないエリカ達は迷わず雫の試合を見ることにしていたが、ほのかはどちらに行くかかなり迷っていた。結果的にエイミーと和美の後押しで全員が雫の試合を見ることになったが、後押しがなければどれだけ時間がかかっていたか。

「あの十七夜^{かの}つて人、本戦二つともパーフェクトだけどクレーを逸らす魔法を使う雫なら案外あっさり勝てるんじゃない？」

「それは超あり得ないですよエリカ。雫の魔法は自分のクレーだけ超狙いやすすするため空間に対する自分のクレーの密度を高める収束魔法であつて、クレーを逸らす魔法ではありません。あれぐらいの妨害では超修正されてしまいます」

「もしそうだとしたら雫さんはかなり不利ということですか？」

「いえ、そうとも限らないわ美月。それに関しては試合を見れば分かるわよ」

熱気は十分。

盛り上がりで言えば本戦よりも増している。

今大会一番のカードとも言えるだろう。

サツと静寂が競技場を支配していく。

開始のランプが一つ、一つと点灯していくにつれて、二人の気迫が高まっていく。
全灯。

同時にクレーが発射されていき、それら全てが二人の魔法によつて次々と打ち抜かれてく。最愛の予想通り、多少クレーが逸れる程度では連鎖が途切れることは無かった。

「凄い。お互いに一步も引いていない」

「いや、これは十七夜さんの方が優勢だ」

感嘆を漏らすエリカと、客観的な情勢を口にした幹比古。あらゆる方向に逸れるクレーに全て対応して見せる雫。雫も撃ち漏らしは今のところないが、一つの撃ち漏らしがミスに繋がる。そして今までの雫のスコアを見ると、最低でも二個は撃ち漏らす計算だ。

つまり確実に勝ちを取るには五個は連鎖を外して貰わないと困るのだ。

「それにしても雫は特化型CADのはずですが、九つの起動式とは思えない超多彩な逸らし方をしていますね。連鎖が超不規則なものになっています」

「違うわよ最愛。雫が使っているのは特化型ではないわ」

汎用型CADと特化型CADの違いは格納できる情報量を重視しているか、起動式の展開速度を重視しているかだ。汎用型CADは魔法系統の組み合わせを問わず最大九十九種類もの起動式をインストールできる代わりに使用者にかかる演算の負担が大きく、特化型CADは同系統の起動式を九種類しかインストールできない代わりに使用者

にかかる負担を軽減し、より早く発動できるように照準補助システムと一体化しているのが主流となっている。

抜け道も存在しており、たとえば能動空中機雷みたいに収束魔法と振動魔法を一つの起動式にインストールすれば扱うことはできるが、個別に発動することはできない。

スピード・シューティングやクラウド・ボール等特定の競技においても基本的に特化型を使うことが多い点、照準補助がついている点、小銃形態という特化型CADの特徴的な形をしている点で最愛は特化型CADだと断定していたのだ。

「まさか汎用型ですか？　でもあれは照準補助が超ついていますし、小銃形態の汎用型なんて存在——」

しない、という言葉は出なかった。

まさかの可能性が、だが達也ならあり得る可能性が脳裏に浮かんだからだ。

「——まさか達也は超作ったんですか?!　照準補助がついている汎用型を!」

「その通りよ最愛。雫は準々決勝まであえて九つの収束魔法だけで戦ってきたの。本当は決勝戦で使うはずだったのだけど、相手が相手だからここで使うことにしたのね」

納得がいった。

九つの起動式だけ使っている割には準々決勝よりも動きが加わっていると思つたら、実際は九十九種類の起動式を使っていたのだ。

だが当然雫にもリスクがある。特化型CADで補っている演算を自分で行わなければならぬ点だ。しかし見ている限りではその点は全く問題ない。特化型CADを持つ百家の令嬢と五分の対決を見せている点からも、雫の魔法力が九校戦の中でも高水準であることが良く分かる。

対して栞はそれらを全て計算しながらたった九つの移動魔法と振動魔法で対応しなければならぬ。今はまだ大丈夫でも、時間が経つにつれてそれは顕著に表れてくる。両者ともに五十点を超えた頃、ついに栞の連鎖が一つ途切れた。

「外した!」

「まだ繋がります」

エリカから上がった歓声は、最愛の否定と軌道修正して再構築された連鎖によつて抑えられる。だが栞が演算能力を酷使しているのは間違いない。今のミスが致命的など

ここで起きれば、確実に連鎖が成り立たなくなる。最早線と線がただ繋がっているかのような連鎖になってしまっており、いつ途切れてもおかしくないような不安定さだ。

しかしその不安定さとは裏腹に葉の点数は雫よりも先に八十点に到達。それと同時に、ついに致命的なミスが起きた。

「また外した!」

「今度は完全なミスだぜ!」

連鎖の構築が上手いかず一つのミスが命取りになっている葉と、着実に点数を積み重ねていく雫。観客のボルテージは最高潮だ。

そして、ついに決着がついた。

葉が膝から崩れ落ちる。

絶対に外してはいけないクレールを、ついに葉が外してしまったのだ。
九十六対九十二。

新人戦準決勝らしからぬ激闘の末に、雫は決勝へと駒を進めた。



結果として一位から三位は一高が独占する形となった。

決勝戦は雫対エイミィで雫の辛勝、三位決定戦は和美対栞で、準決勝までの栞から考えればあり得ないミスを連発して和美が圧勝という形で幕を閉じた。

達也がメインエンジンニアとして行われた最初の競技は、上位独占という快挙によつて幕が落とされたのだ。

恐らく一高天幕では真由美や作戦スタッフから称賛の嵐が飛んだことだろう。

だが知り合いが出場する競技はまだある。

バトル・ボード。

陽も西に落ち始めている時間に何故まだ予選をやっているのかと言えば、一レースにつきおよそ十五分の競技時間、ボードの上げ下げや水路の点検、魔法により損傷があればその修復作業等競技時間以上に時間がかかってしまうためだ。

だがスケジュールも組まなければならぬため、バトル・ボードは一時間おきに試合が行われる。

そしてほのかは最終の第六レース。

本日は一高最後の選手というだけあって、一高生の多くがその勇姿を見に来ている。

ほのかの場合は緊張で普段の実力が出せないことが一番不安視されているが、幸いに

も達也がいる。そして達也が作戦にも一役買っていることから、遠目で見たところは表に出る程の緊張はしていないみたいだった。

「いよいよですね、雫」

「うん。ほのか昨日からずっと緊張していたから心配だったけど、これなら問題なさそう」

実は雫と最愛は自分の競技よりほのかが大丈夫かどうか心配だった。

もしバトル・ボードで予選敗退にでもなってしまうと、その後のミラージ・バットにも大きく影響していたことだろう。

だがほのかを安心させているその作戦が気になる。

「達也。どんな作戦を超考えたんですか？」

「作戦、とは言っても本当に単純なものだよ。単純だからこそ、とても効果的だ」

「……超性格の悪い作戦ということだけは分かりました」

達也の悪い顔に最愛はジト目で返す。

だが達也はそんな最愛の表情を気にすることも無く、最愛と深雪、そしてほのかのエンジンニアを担当している二年生で生徒会書記の中条あずさに遮光性の高いサングラスを配り始めた。

ちなみにレオと幹比古はエリカと美月に連れられて男子スピード・シユータイングの観戦に行った。エリカはその理由を一切話そうとはしないが、恐らくエリカなりの配慮なのだろう。バトル・ボードは水上競技のため、ウエットスーツとスイムシユーズの着用在認められており、基本的に全員が着用している。だがそれらは身体にフィットするように作られているもので、ほのかのような高校一年生とは思えない刺激的なプロポーションをしている女子にとってはその視線に委縮してしまう可能性もあるのだ。

それが知り合いなら顕著になるかもしれない、という判断でこの競技場にはいない。元々彼らは観戦に来てただけであり、達也に見られても問題ないなら問題ないのではないと思わないでもないが、少しでも不安要素を取り除いてくれるなら感謝すべきだろう。

新人戦バトル・ボード女子予選最終レースのスタートが切られた。

その直後、観客は水路から一様に視線を背けた。

視界が眩むほどの光が水面を照らしたのだ。

その中を颯爽と走りぬける、見慣れた顔の友人。

作戦は成功のようだ。

「単純故に対策がなければ超強力な妨害になる訳ですか」
「そういうことだ。だが——失敗したかもな」

作戦は成功したが、達也はその作戦を組み立てたこと自体を後悔し始めた。

序盤に大差をつけて走り抜けるという手法としては順当なものだが、序盤に広がった差がさらに広がり始めたのだ。

そんな作戦が無くても自力でほのかは勝てたという事になる。

「作戦があつたから超リラックスできたんです。差がついたかどうかは結果論ですよ」

「ああ、確かにそうだが、準決勝からは三人一組だ。一対二の構図になるのはあまり好ましいことじゃない」

「そんなことでしたか。一高は元々全校からマークされているので、気にしなくていいですよ」

それは慰めなのだろうか。

あずさが小動物のような可愛らしい笑顔と共に紡いだ言葉に達也は苦笑するしかない。

それにしても圧倒的なレースだ。

ほのかは普段以上に力を出せているのだろう。

後方から放たれる僅かな妨害を諸共せず突き進んでいる。

一周目が終わった時点で、予選突破は確実なものになっていた。

クラウド・ボール

新人戦も二日目に突入した。

本日は九校戦のメイン競技でもあるアイス・ピラーズ・ブレイクと最愛が出場するクラウド・ボールが開幕する。

アイス・ピラーズ・ブレイクは予選のみ、クラウド・ボールは午前で決勝まで行われる。

新人戦は男女ともに三高の実力が高い。

十師族である一条将輝いちじょうまさきを筆頭に、加速・加重・移動・振動・収束・発散・吸収・放出の作用力そのものを定義した魔法式、『基本コードカディナル・コード』を解明した秀才、カーディナル・ジョージこと吉祥寺真紅郎きちじょうしんくろう、雫と接戦を繰り広げた十七夜葉、バトル・ボード予選を圧倒的大差で勝ち抜いた四十九院杏子つくし いんとうこ、そして最愛とクラウド・ボールで戦うことになる師補十八家の一色愛梨。

名前だけなら九校戦でも圧倒的だろう。

クラウド・ボールは午前で終わるといふ事もあり、過密スケジュールだ。

エンジニアは中条あずさ。

昨日バトル・ボードと一緒に見ていた二年生で、最愛と身長が同じで親近感が湧く見た目をしている。あずさもあずさで何か近いものを感じているのか、親しい関係を築けている。

「絹旗さん、ついに本番ですね。作戦はまだ話してくれないんですか？」

「見てのお楽しみです。信頼していいのではなく、一つのショーとして超楽しんでください」

「絹旗さんがそう言うなら構いませんが……」

最愛は作戦を誰にも話していない。

作戦スタッフの鈴音は勿論、摩利にも、真由美にも、あずさにも、達也や深雪、ほかや雫にも言っていない。本当に誰にも話していない。

一高的には真由美に勝つ可能性を持つ一年生。

身内的にはそれに加えてようやく最愛の実力が見られる機会。

そんなこともあり、一高の主要メンバー全員がアイス・ピラーズ・ブレイクよりもクラウド・ボールを見に来るといふ異常事態が起きていた。

「注目されているねえ、最愛」

「……よく考えたら私、最愛の魔法について全く知らない」

「え、ほのかも最愛の魔法は分からないの？」

エリカの質問はもつともだろう。

それ程ほのかの眩きはとても意外なものだった。

「うん。最愛の魔法は私も雫もあまり詳しく知らない。おおまかにどういう魔法なのかぐらいしか分からないよ」

そういう顔色はあまりよろしくない。

ほのかにも思うところがあるのだろう。

気落ちしそうなところにすかさず深雪がフォローに入る。

「でも仕方ないと思うわ。最愛、全く魔法を見せようとしらないもの」

「そうだね。私も最愛の魔法見たこと無いかも。このバカが手を握られて痛がつているのはよく見るけどね」

「あれマジで痛いからなあ。俺じゃなければ手が粉々になっているぜ、本当に」

魔法師にしろ魔法師ではないにしろ、レオの体格は高校生という枠組みを超えている。

そのレオをあの小柄な体格でねじ伏せるといふ所業は、やはり魔法なのだろうかという魔法なのか皆目見当もつかない。

「そういえば深雪は向こうに行かなくても良いの？」

「私は予選の最後。最愛のクラウド・ボールが見てみたいのは勿論あるけど、雫やエイミイに変な気を使わせないというのもあるわ」

気を使わせないというのは嘘ではないが、雫やエイミイよりも達也にといふ面が大きい。

それに、最愛の魔法はやはり気になる。

「それにしても凄いね最愛は。生徒会長に風紀委員長、作戦スタッフに部活連会頭まで直接会場に来るのは間違いなく異常だよ」

幹比古の眩きは当然だろう。

真由美や摩利、鈴音はともかく、克人が会場にやってくることは滅多にない。

他には桐原や紗耶香もいる。

一高三年生勢揃いに観客席はざわつき、最愛に対する期待はどんどん高まっていた。

その最愛は片手にラケットを持ち、腕にブレスレット型の汎用型CADを携えている。

汎用型CADという面以外はクラウド・ボールにおいてラケットスタイルの基本スタイルとも言えるだろう。

対する相手は魔法スタイル。

「最愛はCADを使うつもりなのかな」

「たぶんフェイクだよ。最愛に自己加速術式は必要ないもん」

「まあお手並み拝見ってやつだな」

レオの言葉はこの場に限らず全員の共通認識だ。

開始時間になり、会場は静まり返る。

ランプが一個ずつ点っていき、三つ全てが点灯した。

それと同時に低反発ボールが射出。

対戦相手はそれがコートに侵入すると同時に、真由美が使用したダブル・バウンドを用いて撃ち返した。

刹那、ボールライン上に現れる人影。

一振りのラケットから放たれた、迅速の球は相手の真横を通り過ぎ、壁に反射してネットにまで転がる。

その状況を飲み込めたのは、深雪、真由美、克人等最愛のクラウド・ボールを見たことがある者のみ。

対戦相手ですら、茫然としていた。

0・5秒ごとに加算されていく点数。

ようやく復帰した対戦相手は加重魔法でボールを飛ばし加速魔法で最愛のコートを狙うも、即座に身体横を通り過ぎた剛速球に完全に恐怖を感じている。

クラウド・ボールはその性質上、特化型のCADを用いることが主となる。

そして特化型CADにインストールできる起動式はたった九つであり、その魔法一つ一つがとても重要だ。

そんな重要なリソースを裂いてまで防壁の魔法を入れている選手が、一体どれほどい

るだろうか。

正解は一人もない。

プロテクターを付ける程度で、当たっても死にはしないの精神が基本だ。

しかし最愛の打球は、そんな精神を軽く脅かした。

外野から注意してみてもようやく影が視認できるレベル。

あんなのがもし顔にでも当たったら、痛いで済むのだろうか。

だが相手も九校戦の選手。

恐怖を振り切りなんとか返球をしようとするも、最愛はその勇氣すらも粉碎した。

最愛の撃ち返した打球が、右腕に当たったのだ。

CADを落とし、あまりの痛みにうづくまに蹲る相手選手。

そこで試合終了のブザーがなった。

これ以上は危険だと、大会委員が判断したのだから。

真由美や克人が立ち上がり、足早に競技場を出ていく。

あまりにも衝撃的な内容は競技場全体を騒然とさせるに十分だった。



最愛の二回戦が始まる直前に真由美と克人は戻ってきた。

真由美のまだ何か納得していないような雰囲気からしても、最愛の控室に殴りこんだことが容易に想像できる。

魔法師にとって恐怖という存在は非常に大きい。

恐怖によって魔法が行使できなくなることも珍しくない。十師族としてそのような行為は容認できなかったのだろう。あそこまで私怒っていますアピールは今まで無かったのではないか。

一回戦から二回戦の間隔は他の競技と比べれば非常に短いですが、最愛の一回戦はあつという間に広まり、一目見ようと観客が大勢押し寄せてきていた。

最愛がコートに姿を現す。

観客がどよめいた。

「あれ、最愛ラケットは？」

「持っているのは特化型CAD……だね。何するんだろう」

最愛が持っていたのは小銃形態の特化型CAD。

クラウドは魔法かラケットで相手のコートへ落とせば良いというルールだ。

試合によってラケットスタイルと魔法スタイルを切り替えてはいけないという規則は無いが、最愛は二科生。一高としてはBS魔法では無くCADを使った普通の魔法でどこまでやれるのか、観客としては次にどんなビックリショーを見せてくれるのか。そこでふとエリカが気付く。

「待つて。相手のCADが汎用型になっている」

「本当だ。でもあれを見せられたら特化型CADは持てないよ。あれが魔法によって起こされたものである以上、その魔法に対応するのが選手でありエンジニアの役目だ」

厳しいことだが、幹比古の言う通りだ。

未知の対応力も九校戦メンバーに必要な力。

観客のボルテージは既にマックスだ。

その熱気に流されるがままに、二回戦の火ぶたが切つて落とされた。射出された低反発ボールは最愛のコートへ。

それを最愛は圧縮空気弾で弾き返す。

弾き返されたボールはネットを越えたと同時に追隨する圧縮空気弾により加速。相手の魔法が発動する前に上方から新たに生成された圧縮空気弾によって、ネットを越え

る直前にネットに叩き付けられ、白帯に一回バウンドしてからネットを伝い相手のコートに転がる——ことはなく、コートに着くと同時に張り付くように静止した。

そして動きが消えるコート上。

相手の選手が魔法を発動しようと試みているが、その魔法が発動する兆候はみられない。

ボールに魔法が発動しているのは分かるが、何を行っているか傍らからでは全く理解できない。

「ねえほのか、最愛の得意魔法は収束魔法だったよね」

「そうよ、エリカ。九校戦に出場することが決まってから最愛はとにかく収束魔法の練習をしていたの。元々収束魔法だけなら一科生にも負けないレベルの干渉力があつたから、長所を伸ばすことにしたらいいのよ。たぶんネットに硬化魔法を使っていると思うんだけど……」

その尻すばみは硬化魔法を使っているかどうかというものではなく、信じられないと聞いたものだ。

最愛はネットに硬化魔法をかけてボールとネットの座標を固定しているのだ。そして相手はその硬化魔法を突破できずにいる。

だがその流れに持って行く技が、ほのかの尻すぼみになった原因だ。

「……圧縮空気弾で打ち返して、追撃で加速させたボールをネットの白い帯に直接叩き付け、相手コート側のネットに落としたりしたこと？ それって口で言うのは簡単だけど実際やるなんて無理じゃない？」

「私もそう思う……けど最愛は空間把握能力が異常に高いの。数学的連鎖を全て把握する程適性があったなんて私も昨日まで知らなかった」

「げ、あれを全て把握していたのかよ」

「確かに最愛は連鎖が見えていたとしか思えない発言をしていた……あれを把握できるほどの空間把握能力があるなら、確かに可能……なの？」

未だ引っかけが取れず信じられない様子のエリカ。

だが昨日の発言でも確かに連鎖を見切っていた節があったため、信憑性は高い。しかしまだ腑に落ちない点もある。

「でもそれって一球目だけにしか使えないよね。二球目以降はどうするつもりなんだろう」

魔法を同時に発動するマルチキャストは高等技術であり、当人の演算能力に大きく依存する。基本的に二科生にできるような芸当ではない。

「それは……私にも分からない」

「見ていれば分かるわよ、エリカ、ほのか」

「なにに、深雪は知っているの？」

「ええ、クラウドで最愛と対戦したことがあるもの」

そんなに言われたら期待するしかない。

二十秒が経過し、二球目が射出される。

二球目が射出されれば再び圧縮空気弾で対応しなければならぬ。

そうなればボールをコートに留めている魔法は解く必要がある。

その魔法が解かれれば最愛は圧縮空気弾で二球、三球と対応することになり、一球目で三十点獲得したとはいえ巻き返されかねない点数だ。

射出されたボールは移動魔法によって不規則な弧を描きながら最愛のコートへと侵入し、圧縮空気弾によって打ち上げられた。

それを待つていたかのように相手は魔法を発動させようとするも、魔法が発動しないのだ。

そして圧縮空気弾によって打ち上げられたボールは再び上方から飛来する圧縮空気弾によってネットに叩き付けられ、再び相手のコートとネットに固定される。

その一連の流れを見て、観客全員が、いに最愛の作戦を理解するに至った。

「最愛ってマルチキャストもできたのね」

「ええ。私もクラウドで対戦するまで知らなかったわ。お兄様が手掛けた特化型CADを使い、飛び抜けている収束魔法の干渉力と圧倒的な空間把握能力。そして相手は汎用型CADで魔法速度も負けている。全てが後手ね」

「相手のコートや選手に干渉する魔法はレギュレーション違反だが、ネットなら問題ない。それを利用してネットとボールの相対座標を固定した結果コートにボールが固定される状況を作ったということか？」

「正解よ、西城君」

深雪は正直、これを見た時にうすら寒いものを感じた。

頭が良いとかそんなレベルではない。

演算能力だけなら最愛は自身よりも秀でている可能性がある。

最愛の魔法力が弱かったが故に深雪は完勝できたが、最愛にもう少し魔法力があつたら深雪も今のような状況になっていたかもしれない。

B S魔法だけでなく純粋な魔法技能の面においても、その使い方という面においても底知れない実力を垣間見た気がしたのだ。



「こんな短期間でここまで精度を上げていたなんて……」

「どういふことだ、真由美？」

真由美の心底呆れたような声に摩利が反応する。

摩利は圧縮空気弾でボールを正確に操りネットに硬化魔法をかけて固定するという驚愕の作戦に冷や汗を流していた。その要因の一端を真由美が握っているというのだろうか。

「摩利は私が絹旗さんの魔法を定期的に見てあげていたのを知っているわよね」

「ああ、十文字と真由美に教えられている奴なんて当然知りたくもなる。まさか絹旗だとは思わなかったがな」

摩利の好奇心は本当にどうしようもない。

「絹旗さんは収束魔法に素晴らしい適性があったわ。けど圧縮空気弾は知識として知っているだけで、魔法そのものは使えなかったの」

「何?! この短期間で使えなかった魔法をあんな精密射撃ができるようにまでなっただっていいのか!」

「そうよ。しかもサイオン量は決して多い方じゃないし他の魔法も平均以下。でも収束魔法に限って言えば、一科生並みの干渉力を持っている完全特化型。しかも私は絹旗さんがあんなに空間把握能力に長けていたなんて知らなかったし、マルチキャストが出来ることも知らなかったわ」

考え込むような仕草で試合を見詰める摩利。

一セットも終盤だというのに試合は膠着状態。

だが両者の点数は今まで見たことも無いような点数になっている。

ボールは相手コートネットのネットにびったりとくっついていてるのが四個、最愛のコートに転がっているのが四個。

両者共に毎秒八点ずつはいる計算であり、それを序盤から行っている最愛の点数は四桁を突破していた。

「最初ネットに硬化魔法でボールを固定させて、硬化魔法の干渉が一試合保てながらも試合に勝てるラインを見極め、絶対に勝てるまで来たら自陣のボールも放置して硬化魔法に集中。絹旗さんは動かなければネットの位置は常に一定という利点を生かして最速で硬化魔法を撃てるように設定しているため、速度さえ勝てれば干渉力でどうにでもなる。ネットまでは圧縮空気で相手の虚を突く軌道を描きながら自身の演算能力を頼りにネットまで運ぶ……はつきり言って何もかもがめちゃくちゃですが、それ成り立たせてしまったという事ですな」

鈴音も呆れたように今起こったことを端的にまとめた。

第一セットが終了。

少しの休憩を挟んで、第二セットへ移行する。

「さて、相手は特化型CADの調整もしつかりと行っていたかな」
「もしかしたらやっているかもね」

だがこの試合は既に最愛のシナリオ通りに進んでいる。
何をやっても結果が覆ることは無いだろう。

「お、どうやら特化型CADを準備してきていたみたいだな」
「ええ。でも無駄よ」

結果は覆らなかったみたいだ。

出てきた最愛はラケットを握り、汎用型CADを腕に付けている。

ここからでも選手が絶望した顔になっている。

対して最愛は口角を吊り上がらせて仁王立ちしている。

そこで、ブザーが鳴った。

第二セット開始では無く、対戦相手が棄権して試合終了を表すブザーだ。

「なんかラスボスみたいだな……どうした真由美」

「……ううん、何でもないわ」
「そうか」

チラツと沈黙を貫いている克人を見た真由美。

克人はただ首を振るだけだった。

最愛を九校戦に出したのは失敗だったかもしれないなんて、真由美が言えるはずもなかったのだ。

決勝トーナメント

クラウド・ボールは六面同時進行で試合が行われる。

一回戦は選手二十四人計十二試合を六面で行う。

九校のうち六校は選手三名が出場しているため一回戦目はサブエンジニアが必要であり、一試合目と二試合目のインターバルが多く取られている。また二回戦に三名とも残った場合は三名同時進行で試合を行うことになるため、一回戦第二試合と二回戦の間にもインターバルが存在する。

つまり時間が被る以上選手以外が相手の情報を集めることになるのだが、最愛はそれを善しとしなかった。それ故に今回立てた作戦が、とにかく試合時間を短くしてある一人の情報を集めること。勿論あずさや作戦スタッフから情報は集めていたが、最愛は自分の目で見ることに拘った。

ここまで圧倒的勝利で勝ち進んできた最愛がそこまでの人物は、当然だが三高一色愛梨の存在がある。以前最愛は愛梨の実力をそれなりと評したことがあるが、内心では良くて拮抗、気持ち的には格上だという認識を持っていた。

慢心は絶対にならない。

それは競技に限らず物事において通ずる頭の片隅に置くべき考え方だ。

一試合目は真由美と克人に怒鳴り込まれたことに加えて試合時間も被っていたためほとんど観戦できなかったが、二試合目はセットの途中から、三試合目は一セットしつかりと観察することができた。

そして実際に見て、確信した。

——格上だ、と。

稲妻エクレールの異名を持つだけあり、彼女はとても速かった。

目で追えないという訳では無いし、最愛もかなり速い自負がある。

だがそれ以上に愛梨が速いのだ。

この競技は競技者の速さが攻守共に大きく関わっており、特にラケット対ラケットでは速い方が勝つと言っても過言ではない。勿論球速も大事だ。大事なのだが、明確に愛梨が速い以上最愛は手を打たなければいけなかった。

そのために昨日桐原を呼び出して練習台をして貰ったのだ。

このままでは愛梨に勝てない。

そのために決勝トーナメントにまで残した、最愛の切り札。

公の場では決して見せたくないものだが、それでも良いから勝つという決意の表れだ。

決勝トーナメントの枠は最愛とスバルが決めており、残りは一枠。

その一枠はたった今、確定した。

肩で息をして座り込む敗者と、一切疲れた様子は見せずにそれを見下ろす勝者。

勝者は勿論、愛梨だ。

全試合三桁得点一桁失点のストレート勝ち。

万全の状態で、決勝トーナメント進出を決めた。



決勝トーナメントの試合順番は試合が終わった時間を考慮して、最愛対愛梨、最愛対スバル、スバル対愛梨の順番となった。

最愛としては一戦目に愛梨と戦いたかったため非常に有難い順番ではあるが、果たして二戦連続でスバルに勝てるかどうか。スバルも決して弱くない。BS魔法の『(認識阻害)』で自身の位置を悟らせずに立ち回るプレイスタイルは相手のペースを着実に崩していく。そうじゃなくても一科生である彼女は魔法で優位に立つ力がある。ゴリ押しのプレイスタイルで最愛に軍配が上がっているだけであり、愛梨との試合の後でそのゴリ押しができる程の余力が残っているだろうか。

そこまで考えて、最愛は頭を切り替えた。

今は最後の調整の時間だ。

目の前の試合にだけ集中して、確実に勝利を取ることだけ考える。

「いよいよ決勝トーナメントですね、絹旗さん。作戦は順調ですか？」

「やれることはやりました。後は超本気でやるだけです」

「それなら大丈夫ですね」

調整し終わったCADを最愛に渡し、よしつと息巻くあずさ。

CADも調整してもらいここまで何も言わずに付き添ってくれたのは本当に感謝している。真由美と克人が怒鳴り込んできた——怒鳴り込んだのは真由美だが威圧感的な意味で克人も——時にも小動物のように縮こまりながらも理由があることを告げてくれたし、九校戦において一番寄り添ってくれていた人物なのかもしれない。

「それでは超行ってきます」

「はい、頑張ってください」

腕に汎用型のCADを携えて、ラケットを握りなおしてコートへと向かう。控室から出ると、歓声が最愛を出迎えた。

全く注目されていなかった選手がまさかの本命を喰うかも知れないという興奮と、快進撃を止められるかという興奮。その両方の興奮を一身に受け止めてコートに立った。

コートにはネットを挟んでプロンドの綺麗な長い髪を後ろに結わえた、モデル並みのプロポーションを持つ少女一色愛梨。

こうやって面と向かって会うのは初めてだが、対峙してみると今までの選手とは格が違うことが分かる。

今までの選手は恐怖を抑えながら最愛と対峙していた。

だが愛梨は違う。

必ず勝つという明確な自信を持って最愛と対峙している。

だがそれは最愛も同じだ。

試合時間短縮という暴挙に出てまで自分の目で愛梨を見ることに拘り、切り札まで持ってきた。それは絶対に優勝するという最愛の意志の表れ。

そんな二人の意志の強さを表すように、会場のボルテージは留まるところを知らない。

開始の合図が点り始めた時に歓声によるボルテージは下がるも、雰囲気というボル

テージは最高潮だ。

一つ、二つと点り、三つ目。

始まりの合図とともに、ボールが射出された。

射出されたボールは愛梨のコートへ。

ネットを越えたと同時に素早く叩き切った愛梨に、即座に反応して力任せに振り切った最愛。全くコントロールがついていない球にも反応しきった愛梨は万全の態勢でその球を撃ち返す——が、初球よりもその勢いはない。

球速は最愛が上、選手の速さは愛梨が上。

その評価通り、序盤は最愛が相手の動きを封じる形で優位に立つ。

しかしまさか序盤から明確な優劣が付けられると思っていなかった観客は、ワツと歓声を上げた。

一球という勝敗が付きにくい球数でも猛攻を仕掛ける最愛と、球が予想以上に重かったのか踏み込みをしつかりとしながら打ち返す愛梨。

「すっげ」

「最愛さんも凄いです、一色さんもよくあれに追いつけますね」

「流石稲妻エレクトリックと呼ばれているだけはあって速いけど、最愛の球が予想以上に重かったみた

いね。しっかりと踏み込んで返している」

「いくら稲妻エクレールでも力任せの打球はどうしようもないってことだね。これはもしかしたら、もしかするかもね」

どう見ても最愛が押している。

レオ、美月と目の前で起きた驚愕に眩き、エリカと幹比古は冷静に状況を判断していた。

実際に彼等達以外にもジャイアントキリングが起きるかもしれないという事実にも場は沸く。十秒、二十秒、三十秒と経ち、球数も一球から二球へと増え、球が増えても最愛が明らかに押ししている。押ししているのにも関わらず、しかし会場は統一感のある歓声から不規則なざわめきへと変化を遂げた。

両者の点数が一向に動く気配を見せないのだ。

四十秒経ち、更に一球が増えた。

二球が増えたことで最愛の勢いは更に増していき、目に見えて愛梨が劣勢になった。

「流石は師補十八家……ということかしら」

「あそこまで最愛ちゃんが攻めて一ポイントも取らせないなんて、流石大本命ですね」

だがそれでも依然として点数は動かない。

この球速に反応できる反射神経と魔法発動速度、付いていける程高度な自己加速術式、そして魔法を維持するサイオン量。

真由美とも善戦できるだろう彼女が新人戦に出るとなれば、当然優勝候補筆頭になる訳だ。

「最愛も球数が増えるに連れてあの威力を保ったまま撃つのは不可能なはずだ。このまま時間が経つと今度は最愛が辛くなるから可能な限り序盤で点数を取っておかないといけないと思うんだけど……」

「最愛は全く焦ってないみたいだな。本当にすげえ胆力だ」

だが現在その下馬評は完全に覆っており、それを示すような試合が観客の眼前に広がっている。愛梨によってなんとか保たれている均衡。

四十秒が経過。

三球目が愛梨のコートへと射出された。

壁や天井を使い二球同時に来ないよう工夫していた愛梨。

その工夫を打ち破る球数もまた、三球。均衡はついに崩れた。



三球目にしてようやく点数が入った。

だが最愛としては予定通り、いや予定では二球目で点数を入れる予定だったのだからむしろ予想以上に相手が上手であると言えよう。

魔法師としての実力に加えてボールを恐れない度胸、ボールに食らいつく根性、そして勝利への執念。才能に溺れない努力家であることはよくわかる。

だが均衡は崩れた。

最愛の打球に対応が追い付けず、一点、また一点と着実に点数を重ねる。

最大限の威力を出すために壁や天井は使わず直接コートへと打ち、相手が壁や天井を経由して時間稼ぎしているのを許さない追撃でさらに点数を重ねる。

最愛が攻勢に出られるのは四球まで。

四球目でも何回かは最速で打てないし、五球目からは段階打球の速度を落とさない。と最愛が対応できない。そして七球以上は愛梨の独壇場へと変化。序盤と完全に真逆

の展開になることは最愛の想定済みだ。

(それにしても超強いですね。これは私も体力どうこう言っていられないです！)

最愛は決して体力がある訳では無い。

試合時間も一分が経過し、四球目が最愛のコートへと射出された。

最愛に点数が入る間隔も短くなり、しかし最愛は未だ無失点。

さらに押し込まれる状況に無だった愛梨の表情に若干の焦りが見え始めた。

それでも尚、最愛に油断は無い。

愛梨からしてみればこの状況が九球目まで続く可能性があるかもしれないという考えが過る時間だが、最愛は何処までこの状況を続けられるのかをしっかりと把握している。

四球目が射出されてから二十秒後。

点数差は二十点。予定では三十点以上突き放す予定だったが無理だったようだ。ここからは最愛が徐々に押しされ始める時間になる。

五球目が愛梨のコートへと射出された。

まだ最愛は無失点。

だがゆっくりと、点数の入るテンポが遅れていくのが分かる。球も追いつけるは追いつけるのだが、先程みたいな球威が出せる回数は徐々に減ってきている。対して愛梨のスピードは徐々に上がっていた。

試合が始まってから一分四十秒が経とうというころ、点数差は三十点へと広がるも愛梨の表情には既に焦りの表情はない。

攻守交替。

二人の認識が一致した瞬間に、六球目が射出された。



決勝トーナメント第一試合はお互いが一步も譲らない大熱戦となっていた。

今回の九校戦において一、二を争う程の接戦。

五球目までは最愛が持ち前の力技で優位を取り、六球目からは愛梨が持ち前の速さで巻き返す。点数差は少しずつ、しかし確実に縮まり始めている。

「踏ん張りどころだね」

「ああ、手に汗握る良い試合だぜ」

しかし縮まっているとは言っても、最愛が得点していないわけではない。

取れるところは確実に取り、取れないと判断した球は見捨てて失点を最小限に抑える。それにより縮まった点数はわずか五点。そういう意味では最小失点と言えるだろう。

「それにしても上手く失点を抑えているわね。無理に取ると大量失点の可能性があるところは拾わないで、点数が取れるところはしっかりと取りに行く。こんな時でも冷静に状況を分析できる肝の据わり具合は流石最愛って感じ」

エリカの評価は本当に客観的なものだ。

明らかに追い上げられているこの状況下でも最愛は冷静に対応していた。

そう、対応していたのだ。

七球目が射出されるまでは。

七球目。

完全に優劣が逆転するこの球数で、二度目の均衡が崩れた。

耐えられていないわけではない。

最愛が完全に後手に回るようになったのだ。対して愛梨は自分のプレイスタイルを思い出したかのようにコート内を駆け回っている。打球の速さは最愛程ではないにしろ、最愛の打球の速さが落ちていたため愛梨は自身の最速を常に撃ち続けられる状態になった。

こうなるとスバルよりも少し速い程度の最愛では対応しきれなくなる。

「ちよつとヤバいんじゃないか？」

「押され気味……というよりも完全に押されていますね」

それはもう、傍らから見てもハッキリと分かるような劣勢。

残り五十秒。

点数差は二十点。

このまま八球、九球と増えていく現状でこの点差はあつてないようなものだ。試合時間は残り四十秒。

八球目は、最愛を追い詰めるかのように最愛のコートへと射出された。

完全に追い詰められた最愛。

観客の誰もが愛梨の逆転する姿を想像した。

愛梨も一気に畳みかけるように三球、二球、四球と塊になるように返球する。今までの返し方では大量失点は免れない。そんな予想を、だが全てを上回り。最愛は、全球返球してみせた。

戦略

第一セットが終わり、両者共に控室へと戻った。

準備されていた飲料水を手に取り、喉の潤いと身体の冷却を一気に行う。

ふうと一息ついて椅子に座ると、

「お疲れ一色。これで腕も冷やしておいたら？」

「あ、ありがとうございます、水尾先輩」

スツと渡されたアイシングを有難く受け取り、疲労が蓄積された右腕へと当てた。

三高三年、みずおさほ水尾佐保。

今大会では本命が二人不慮の事故に見舞われたとはいえ本戦の優勝をしており、人当たりの良さから後輩たちに慕われている女子生徒だ。

「ボール重そうだったね。あそこまで押される一色を見るのは初めてだよ」

「はい。ただの自己加速術式ではないですね。しっかりと軸を作らないとラケットが押

「……気にしているね。最後のはどうしようもないよ。あんなことできるなんて誰も知らなかったんだから」

「……気にしているね。最後のはどうしようもないよ。あんなことできるなんて誰も知らなかったんだから」

結果的に一セット目を取ったのは最愛だった。

点数は四十二対三十三。

本来ならあのまま追いついて十点は差を付けられる予定だった。

だが結果は一度も追いつくことができなかった。

「手で返球なんて芸当、初めて見た」

「私もです」

完全に背中を捉えたと思った八球目。

最愛はCADに触れる動作をした後、右手はラケットで、左手は素手で返球するとうる暴拳に出た。CADによるマルチキャストと言われればそれまでだが、魔法の兆候を最愛からは感じられないしそもそもその話CADは操作したのかどうかも怪しい。だがそれが魔法であると、その場の全員が断定した。

「左手を翳^{かき}すだけで打球速度は変幻自在。コントロールも悪くありませんでした」
「BS魔法の可能性か……もしかしたらボールの威力もBS魔法が関係しているかもしれないね」

クラウド・ボールは魔法またはラケットでボールを返して得点を競う競技。

はたく仕草をして返球したのならまだしも、翳^{かき}しただけであそこまでの打球速度を生み出すのは魔法でしかできない芸当だ。

それ故に厄介極まりない。

そんな魔法など二人の知識の中に存在しないのだから。

「仮にBS魔法だとしても、絹旗さんは普通の魔法も卓越しているわ。圧縮空気弾をあそこまで精密にコントロールできるのは脅威ね」

「実際に撃ち合った感触からして、もしかしたら圧縮空気弾を手から直接出しているのかもしれない。ただその場合汎用型CADに見えるアレは実は特化型であったという可能性が出てきます」

実体験や情報から考察を落とすも要素が多すぎて逆に手がかりが掴めない。

愛梨はアイシングを腕から離し、身体をあまり冷やさないようにストレッチを始めた。

「それもあり得るけど今のところ断定は危険だね。全てを警戒して戦うしかないよ」「そうですね。どちらにしても向こうが圧縮空気弾で攻めてこようがBS魔法で攻めてこようが、私がやることは一つです」

時計を見上げ、立ち上がった。

休憩時間の終わりだ。

「相手より一点でも多くとって勝つ。もう不覚は取りません」

「うん。一色なら勝てるよ。いってらっしゃい」

絶対に負けられない。

強い決意表明を残して、愛梨は控室を出た。

蒸し暑い熱気の中コートで向かい合う二人。

出迎えるのは、その蒸し暑さを吹き飛ばすような熱狂的歓声。

第一セットは完全に愛梨勝利ムードだった流れを最愛が断ち切って勝利を収めるといふ波乱の展開を起こし、競技場は大いに盛り上がった。

競技場の注目は最愛へ向けられる。

一回戦、三回戦、先程の試合とラケットを使った最愛だが、魔法主体の試合も二回戦で行っていたのだ。

視線は最愛から、その手に持っているものへと転化される。

コートに立ち試合開始を待つその右手に握られているのは、一セット目同様のラケットと汎用型CAD。そして、左手には二回戦目で使用した特化型CADが携えられていた。

本日何度目かのどよめきと困惑が徐々に競技場を支配し、しかし最愛ならもしかしたらという期待へと変換されていく。

そんな競技場の雰囲気に対して、最愛と愛梨はただお互いを見つめ合っている——愛梨が一方的に睨んでいるようにも見えるが、本人にその意思はない——だけだった。

苦汗を舐めた者と、舐めさせた者。

巻き返しを狙う者と、逃げ切りを狙う者。

両者の思惑と熱気が渦巻く第二セット開始のランプが、点った。



開始のブザーと共に最愛のコートへボールが射出された。始まったのは、一セット目と同じ最愛の力押しプレイ。だが先程とは違って最愛はCADを左手にも携えている。CADバラレル・キヤストの同時操作。

魔法を行使する際に自然発生する想子波動サイオンというものが複数のCADから発せられることによつてお互いが干渉を起こし、魔法が発動できなくなるために高難易度の魔法技術とされている。

本当にそれができるのかどうか。

その答えは、すぐに分かった。

二球目が愛梨のコートに射出された。

それを最愛の打球と被らないように音速でラケットを振り抜いた愛梨だったが、細かな変化しか見せなかつたその表情がついに大きい驚愕へと変わった。

最愛が初球を振り抜いたと同時に窒素装甲オージェス・アーマーを解除、圧縮空気弾を用いてネットを越えた瞬間に愛梨のコートへと叩き付けたのだ。

これが真由美達と特訓した中で得られた一番大きな収穫。

まだ窒素装甲を使っている時は魔法が使えないが、その切り替えの早さは実戦でも通用するレベルだ。残念なのは実戦で通用する魔法を使えないことだろうか。

最愛からしてみれば窒素装甲を解除して魔法を発動しただけだが、何も知らない人から見ればどうだろうか。

右腕の汎用型CADでBS魔法を発動しながら、左手の特化型CADで圧縮空気弾を生成した。

つまり、パラレル・キャストを成功させたように見えるのだ。

ボールはまだ二球。

窒素装甲を解除して圧縮空気弾を行使しても、ラケットの打球とランダムでやられたらそのカラクリには気づくことができない。

ネットを越えた直後に相手コートに叩き付ける魔法スタイルと打球速度で押し切るラケットスタイル。その両立が可能だと一セット目で理解した最愛は作戦に移した訳だが、いざやってみるとやはり穴はいくつか存在していたことが分かった。

まず点数は早い段階から確実に入るようになったが、ボールが軽いため愛梨にカウンターを貰う事が多々ある。基本的に走らされるようなボールを魔法で対処しているのだが、その判断は球数が少ないからこそできることだ。そもそも最愛の魔法は連発して

返球するのではなく、硬化魔法と合わせて併用して初めて力を発揮するもの。加えて、愛梨に読まれれば全力のカウンターが至近距離から放たれることになる。そうやってしまつては最愛も返球のしようが無く、失点してしまう。

それは三球目になれば顕著に表れた。

最愛の演算ミスにより圧縮空気弾がボールに当たらなかつたり、逆に一個外してミスに見せかけて得点をもぎ取つたり、愛梨も最愛の打球に慣れてきたのかセツト目よりも返球の精度が上がつていたり、先程とは一変して序盤から点数が次々と加算されていく乱打戦へ切り替わる。

得意の序盤に得点できなかつたから失点をしてでも得点を取りに行く。

先程の試合を思い返すならそれは正しい選択と言えるかもしれない。

だがその戦法に何とも言えない違和感を覚えるのは何故だろうか。

「……荒いな」

「ええ。序盤に得点を取りに行くのは良い考えだけど、あんな使い方をしては先に絹旗さんが力尽きてしまうわ」

「それに効率も良くない。聞いたところ絹旗の本来の戦い方は先程見せた素手による謎の魔法なのだろうか？」

「そうね。CADはフェイク。BS魔法は使っているからマルチキャストは使っているけど、はつきり言って使う意味も理由も分からないわ」

「敢えてマルチキャストを使っているようにも見える。九校戦で使う可能性があるから、とあんなに練習をしていたのだ。絹旗は最初から使う予定があったということは分かるが、理解はできません。たまに使うことで相手の集中力を散らすものだと思っていたがそうではないようだ」

克人の言葉で、摩利と真由美は違和感の正体に気が付いた。

最愛は自分の想定量が多くないことを知っている。知っているのにも関わらず魔法をあそこまで行使している。それが最愛の作戦なのだろう。

だからこそ彼等にはその作戦の意図が分からない。

たとえば魔法を警戒させることで先程よりも序盤を有利に進めて確実にストリート勝ちを狙う、というのならよく分かる。むしろそんな戦術を最初から考えていたのかと称賛を送っていたことだろう。

だが魔法を使い続けることにどういった利点があるのか、何故それを狙っているのか、それら全てが不明なのだ。

「だが絹旗がそこを見落とすと思えん」

「ふむ。つまりまた何かしてくれることに期待という事か」

「……一色さんを変に追い詰めないといいけど」

真由美の心配は尤もだ。

最愛には前科がある。愛梨のような優秀な魔法師にもしものことがあれば、それは国としての損失と言つても過言ではない。

だがそんな心配をよそに球数は四球、五球と増えていった。

その度に最愛の魔法精度は落ちていき、ラケットでの打球速度も落ちていく。

想子量や演算は大丈夫だろうが、単純な魔法技能が試合の進行についていけなくなっている。

「まさか本当に作戦が無いとか言わないよな」

摩利の眩きを現実にするかのように点数差は徐々に縮まっていく。

七球目が射出される頃には一桁まで、そしてものの数秒で点数はひっくり返された。

また何かするのだろうかという秘めた期待に応えることも無く。

そのまま点数を積み重ねられた最愛は、ダブルスコアで敗北を喫した。



コート上で向かい合う二人。

両者共にラケットを持ち、片や一環としてネットクレス型の特化型CAD、片や両腕に汎用型CADというまたしても新しいスタイルで。戦略を持たず一途に勝利を掴もうとしている愛梨か、戦略を持って多彩な技で勝利を掴もうとしている最愛か。

注目の一戦もついにクライマックス。

泣いても笑っても、策が成功しても失敗してもこれが最後だ。

競技場内は謎の緊張感に包まれている。

コート上の二人。

一切緊張感を表さなかった最愛と愛梨から発せられていたものだった。愛梨は最愛の実在した策に気が付き、最愛はその策が本当に成功しているのかが量れないでいる。

それ故に放たれている三種類の違う緊張感。全ての作戦を打ち砕いて勝つという決意の緊張、全ての作戦が上手く行っているのかどうかという懸念の緊張、それに触発さ

れた観客の二人とはまた別の何とも言えない多種多様な緊張。

その全ての緊張が集約する第三セット。

先の二試合とは異なり、静寂に包まれて幕開けとなった。

意地

始まった最終第三回戦は、第一回戦と全く同じ様相を呈していた。

両者一步も引かない撃ち合いながらも、序盤は愛梨が失点をしないように守備偏重で試合を展開している。今後の乱打戦を容易に想像できる始まりには二回戦で収まりかけていたボルテージを最高潮にまで引き上げ、最愛と愛梨の一振り一振りに歓声が飛びかっていた。

一球目、二球目共に一回戦を踏襲するような試合展開。

熱狂渦巻く競技場内で冷静に眺めているのは、一高の首脳陣たちだ。

「吹き返した……というわけでもなさそうだな」

「最初から二回戦は捨てる気でいたようですね。ここまで短期決戦を仕掛けていたため、ここで何かしてくると思わせての長期決戦狙い、ということでしょうか」

摩利の呟きに鈴音が肯定を返すも、それを今までの『答え』というには形容し難い違和感があった。

短期決戦に見せかけた長期決戦。

それだけの策で勝てる程、愛梨は甘くない。

「策があるとするのならそれ以外にもあるのは間違いない。問題はその策が何かが三回戦が始まっている現在いまでも分からないことだ」

だが、と続けようとした克人の言葉を真由美が引き継ぐ。

「ここまで来ると策がそもそもなかった、という可能性もあり得るわね」

「そうだ。我々が分からない以上向こうの作戦スタツフも絹旗の策は分からないはずだ」

「つまり一色はそんなあるかも分からない策を気にしながら、策があつたらその対応を強いられるということか」

これらは全てが可能性。

つまり等しくあり得る訳で、等しくない場合もある。

そこまで含めて全てが一つの作戦だというのであれば、

「性格が悪いじゃ済まないぞ」

「全く、本戦で戦うことが無くて本当に良かったわ」

背筋を伝う薄ら寒い感触に摩利と真由美が思わず肩を竦めた。

特に真由美は同じクラウド・ボールに出ている競技者として、心の底からそう言っているのが分かる。

四人が話している間も試合は進んでいき、球数は二球から三球へ、三球から四球へと

増えていった。

そんな大接戦の模様に競技場のボルテージはマックスまで引き上げられる。

本来であれば、そうなるのが普通だ。

「待て、どういふことだ？」

摩利の呟きは、戸惑いを隠せない競技場の雰囲気正しく表していた。

激しい乱打戦が行われている。

それは間違いない事実なのだが、お互いが無得点の一步も引かない激しい乱打戦、と枕詞が付けばどうだろうか。

「おい、どういふことだ？」

「……一色さんが耐えているわね」

「それは見れば分かる。そうじゃない」

「言いたいことは分かるわよ、摩利」

摩利の言いたいことは真由美も理解している。

だがそれを加味しても、そういうしかなかったのだ。

観客も理解はできないが、一回戦で追いつけていなかった打球に必死の形相で食らいついている愛梨に刺激されたのか、競技場内は徐々に三高のムードになってきている。

「既に三回戦目ですから。絹旗さんにも疲れが出ていますのでしよう」

「一色もあの打球の返し方にもだいたい慣れてきたはずだ。最初さえ耐えきれれば一色が優位に立つこともできる。何より体力も日頃からスポーツを行っている一色の方が上手だろう」

「そうかしら……打球の速さは全く同じように見えるんだけど……」

策はあるのか、体力は残っているのか、愛梨に勝てるのか。

何を考え、何を思いあの場に立っているのか。

結局、全てはあの場に立ってみないと分からないことだ。

「今俺達にできるのは、絹旗が勝つのを祈ることだけだ」

克人の言葉に、彼女たちはただ頷き見守ることしかできなかつた。

五球目が射出されるのを見て、愛梨の表情が猛獣のような笑みに変わった。

ここまで無得点。

それは愛梨が最愛の打球に慣れたとか、最愛が疲れて打球が軽くなったとかでは決してない。

体裁なんて構わずただがむしゃらにしがみついた結果だ。

戸惑いを見せる観客も、数秒後には今までにない大歓声で愛梨を後押しした。

その中から僅かに聞こえてくる実況には、一色選手が優勢とまで言われている。事実を知らなければ、確かにそうだろう。

だが実際は真逆。

(本当に強いわね、絹旗最愛)

実在した策とその恐ろしさを認めて、愛梨は試合開始前から内心歯噛みしていた。

一回戦と同じ内容で、一回戦とは違い無得点だから優勢。

確かに客観視したらそうかもしれない。

だがそこに、愛梨の過度な疲労は考慮されているのだろうか。

第一回戦。

愛梨は見せられた打球速度から予想して振り抜くことを意識したが、それでもラケットが押されるという感覚を受けたために軸足を意識した打ち方をするしかなかった。

だがその打ち方で対応できるのは壁や天井を使っても二球まで。

三球目からは均衡を崩されながらもなんとか耐え続け、六球目から反撃を開始。

順調に点数差を縮めていったが、それでも最後は『手での自由自在な返球』によつて逃げ切りを許してしまった。

一回戦で奇襲を受けたことによりあらゆる可能性の対策を強いられた第二回戦。

序盤から魔法の同時発動、そしてCADの同時操作という高等技術のお披露目、さら

に打球を即座に圧縮空気弾で叩き付けるといふ荒業に大きく失点を許してしまい、そこで最愛が短期決戦を仕掛けていることに気が付いた。

だからここそこを耐えきれれば勝てる可能性が大きくなると考えた愛梨はとにかく攻めの姿勢を崩すことなく、最早意思を持つているかのように軌道を変える打球に食らいつき、結果見事に二回戦をモノにした。

二回戦を勝利で飾り、その短期決戦の策を潰したという自負があつた愛梨は最愛の方を一瞥して——固まつた。

策を打ち破られ、短期決戦も失敗。

このままで敗北濃厚だという場面なはずなのに、愛梨の目に映つた最愛の顔は笑つていた。

そして改めて我に返つて見た愛梨は、そこで初めて最愛の策の全容を理解したのだ。

第一回戦の最後、そして第二回戦開始直後に行われた二つの奇襲は勿論のこと、短期決戦を仕掛けていると愛梨が思うその全ての流れが、ただの布石に過ぎなかつた。

気が付くことすらも許されなかつたのだ。

あそこまで頑なに魔法を使うのには何か理由があると、まだ何かあるに違いないと、勝手に思い込んだ。

そして気が付いた時にはもう、全てが後手に回つていた。

一番深刻な問題は身体面に限らないありとあらゆる疲労の蓄積。

愛梨に知る由も無いが、あの真由美がガス欠を起こす心配をして短期決戦を挑む程の打球をあらゆる可能性に考慮しながら常に受け続けていたのだ。

特にラケットが持つて行かれる程の重い打球はしっかりと振り切らなければ甘い球になつて返つてしまうため相対的に腕の疲労が凄まじく、休憩時間にアイシングで熱を抑えても雀の涙程度の効果しか望めなかつた。

さらに二回戦では圧縮空気弾による四方八方への打球と隙間に入れられるラケットによる打球という緩急も疲労の蓄積が大きい理由の一つ。

二回戦の序盤で最愛が仕掛けたことにより短期決戦だと思わせ、最後まで結局気の抜ける場面がなかつたのも一つ。

そこまで魔法を行使してなお戦える最愛の想子量の多さが一つ。

一つ、また一つと原因を数え始めれば、結局全てが原因として当てはまつてしまう。

愛梨は体裁を捨てているのではなく、気が付いたら捨てなければどうしようもない程にまで追い詰められていたのだ。

それでも負けられない理由が、愛梨にはある。

一の家系でトップ、つまり十師族の一員となるため。

三高の九校戦女子エースとして。

そして何よりも、零にスピードシューティングに惜敗し期待に応えられなかったと失意の底にいる親友、十七夜葉の再起のため。

——絶対に負けられない。

そんな強い意志を見た最愛は、この試合何度目かの驚いたような表情を浮かべた。最愛としてもここまで粘られるのは完全に想定外のこと。

希望的観測の中ではあるが、棄権してくれないかなと思っていたほどだ。

何より驚かされるのは、師補十八家一色家の令嬢という肩書には見合わない胆力。そこに自分と似たような何かを、最愛は感じた。

(絶対に引けないという超強い意志を感じますね。ああいう人間が一番厄介です)
本当ならこんな大観衆の前で見せたくはない。

だが自分の能力がBS魔法で通るなら、絶対に勝ってみせると意気込んでしまったのなら、持てる最大限を以て勝利を手に入れたい。

だから最愛はその五球目を一つの指標にした。

壁に天井とあらゆる手段でなんとか失点を防ぎながら愛梨から放たれた五球目。それを最愛は、左手を翳すだけで対応してみせた。

(それも取りますか！ 超面白いです！)

完全に虚を突いたはずの一球は、得点に繋がることはなかった。

切れかかっているはずの集中力を意地で保ち、動かないはずの身体を自己加速術式で強引に動かす。

本来なら危険なプレイであるそれを、愛梨はゾーンとも呼べる状態で強引に成立させたのだ。

六球目からは最愛が全力で振り切れない。

つまりここからは最愛と愛梨の根性比べだ。

どちらが力尽きるのが先か、その勝負。

——そんな勝負を、最愛が挑むはずがない。

何処かのシスコンがこれから言いそうな言葉を思い浮かべながら、最愛は不敵に笑った。

ついに得点板に、0以外の点数が表示されたのだ。

どよめく会場に、一瞬動きを止めてしまった愛梨。

その光景を見ていた誰もが何をしたのか理解できなかつただろう。

それは極限まで集中していた愛梨ですら、一瞬その集中を切らしてしまう程の出来事。

しかし可能性としてはあり得た、必殺にして最愛の通常形態だ。

(ラケットを捨てた……やっぱりその魔法は両手で使えたのね)

そして愛梨にとっても予想通り。

だがそこまで予想できていても失点を重ねている理由は、そこから放たれる緩急のあたる打球は予想以上に厄介だったからだ。

ただ翳すだけ。

たつたそれだけの工程で、正確無比な打球が緩急を伴って押し寄せてくる。

しかもラケットという足枷を失ったからか一回戦で最大限の力を発揮できる限界だったはずの五球ですら難なく返してくるのだから悪夢でしかない。

だがその中でも愛梨の中でたつた一つだけ光明が差していた。

たつた一つだけだが、スポーツというジャンルにおいてはとても大きな光明であり、自身がつくに限界を迎えているそれ。

一回戦とは異なり、最愛の動きにキレが無くなってきたのだ。

愛梨としては二回戦であまり動かなかったとはいえ、ここまでやれることがそもそも異常なのだが。

（想子が切れた？ それとも体力切れ？ ……どっちでも良いわ。あれだけの魔法をずっとマルチ・キャストで発動しているんだから、向こうも当然疲れている。それだけ分かれば十分よ！）

実際はそんなこともないのだが、一般的に見た最愛は一回戦、三回戦で自己加速術式

とBS魔法のマルチ・キャストを常時発動しており、二回戦ではそこに圧縮空気弾のマルチ・キャストとパラレル・キャスト、三回戦では追加でBS魔法のマルチ・キャストを併用で行っている。

言葉通りなら想子量は魔法師の中でも間違いないくトップクラスの実力。

最愛の自己申告によって想子量が少ないと分かっている者ですらそう思ってしまった程の戦い方をしているのが、今の最愛だ。

自己加速術式で無理矢理動かすだけでは緩急についていけない愛梨は失点を重ね、しかし愛梨の睨んだ通り体力の底に見上げられている最愛も表情は硬い。

六球目、七球目と増えていくにつれて失点を重ねているのは愛梨。

その差は段々と広がっていながらも愛梨は意地で失点の速度を一定に保っており、しかも最愛も失点を許し始めた。

最愛の予想以上に愛梨の執念が凄まじく、そして予想以上に最愛の消耗が大きいのだ。

(それでも返球が正確無比なあたり魔法の練度が異常な程高いわね。ここまで練度の高い魔法は『数字付き』でも滅多に見られないわ)

一種の化け物。

だがそれを超えなければ、愛梨の悲願は夢のまた夢の話だ。

だからこそ愛梨は引けない。

家のために、友人のために——。

そんな傲慢な考えで勝てる程、最愛は甘くない。

まずは自分のために。

(ただ目の前にあるボールを——叩き切る！)

その瞬間、音が消えた。

時が止まったような静寂が訪れた訳でもない。

ただ大きすぎて、一瞬間こえない程にまで音が爆発したのだ。

爆発を起こした張本人である愛梨は笑みを溢し、最愛は完全に虚を突かれたのか思わ

ず手を止めてしまった。

その最愛の行動に、お互いの表情は更に対を歩む。

隙を見逃すまいと猛攻を繰り出す愛梨と、この試合で初めて焦りを浮かべた最愛。

ここに来ての攻守交代を誰が予想しただろうか。

八球目。

体力の限界を迎えた最愛はラケットというハンデを捨ててもなお追いつけない。

得点差は大きく開いて24点だが、今の愛梨の前にはそんな得点などあつてないよう

なものだと最愛自身が理解している。

意地で耐え抜いた愛梨に代わって、今度は最愛が意地で耐え抜く番だが……。得点を詰められていくたび顔に影を落とし始める最愛は、ふと愛梨の顔を見て、そのまま固まった。

その眼に映るのは、勝ちを確信して笑みを浮かべている愛梨の表情だ。

浮かべた笑みは強敵に勝てたことに対する嬉しさか、全ての策に対応し結果的に上回ったという愉悦か、友人にその威を示すことができた安堵か。

一瞬できた謎の間に違和感を覚えながらも、隙を逃さないとばかりに猛追する。

しかし、そんな愛梨の勢いは早々に衰えた。

「何笑ってんだア？」

「え？」

正確には、衰えさせられたというべきか。

目の前の少女からそんなドスの利いた言葉が出てくるなんて、誰もが聞き間違いを疑うだろう。

しかしこの大歓声の中、最愛の呟くような声は正確に愛梨の耳へと届いていた。

「まさかその程度で私に勝てるとか超寝ぼけたこと思っただけじゃねエだろうなア！」

聞き間違いではない。

その食い殺さんと言わんばかりの表情を携え、殺気を伴いながら確かにそう言ってい

る。

しかし問題はそこではない。

(動きが……戻っている！)

急に得点板の動きが平行線になったのだ。

その事実在先程の笑みは何処へやら、愛梨の頬に疲労によるものとは別の汗が流れた。

そんなに簡単に勝つたとは言わせないと、何よりも最愛がそう言っている。

つまりこの勝負は——

「残念ながらここからが本番だア。覚悟しやがれ超クソ野郎」

突如として変わった雰囲気、競技場の熱は戸惑いと共に急激に冷めていった。

決着

得点板が再び沈黙した。

終盤の凄まじい攻防戦に本来なら競技場は盛り上がりを見せるはずだが、現実はその真逆で戸惑いと少しの畏怖が大半を占めている。それは最愛の変化に何処か不気味なものを感じたからだ。

「なんというか……凄いわね、絹旗さん」

「ああ。魔法師というよりはまるで戦場で戦っている兵士だ」

真由美と摩利もその異様さには困惑の表情を浮かべている。

真由美も摩利も、その最愛を知らないのだ。

現在この競技場で今の最愛を知るのはたった三人。

深雪と桐原、そして克人だ。

「七草。以前の絹旗の話覚えてるか。あの時のことだ」

「ええ、覚えてるわ」

あの時という単語に、真由美の目が少しだけ細められた。

「今の絹旗がそれだ」

摩利は質問をしない。

好奇心はあるが、詳細な場面の話をしない以上自分が関われる範囲ではないと分かっているから。

真由美も答えない。

その話はまさしく最愛が惨殺をした時の話。

気軽に話していいような情報でもなければ、現在完全に十文字家によつて秘匿されている情報でもある。

だが真由美はそれを聞いて、絹旗最愛という人間に関するピースがカチリとハマった気がした。

普段のようなクールとお茶目の両方の側面を持つ最愛でもなく、秘密を暴かれないよう警戒する最愛とも違う、今の最愛。

考えられる可能性は一つだ。

解離性同一症。

通称、多重人格。

この試合中に何かが琴線に触れてしまい引き起こされたことは想像できる。

問題はそれが何かだ。

もし学校生活内でそのトリガーが引かれてしまった場合、状況次第では最悪の可能性

も想定しなければいけない。

例の件のこともあつてそれほど事をやってしまうと思える程、今の最愛は傍らから見ても怖かった。

今も突然愛梨に襲い掛かるかもしれない、と内心では肝を縮ませている。

「……困ったわね」

「同感だ」

最愛について何か分かるかも、と思つて出した九校戦で分かつたのが、起爆スイッチが何処にあるかも分からない大きな爆弾を抱えていること。

むしろ分からないことが増えることになってしまい、心労で頭痛がしてきたのか真由美はこめかみを抑えるような仕草でため息を吐いた。

追い込み切れない。

その事実が愛梨の気持ちに焦らせていた。

最愛の動きが戻っている。

今まで以上に速くなっている。

しかしそれ以上に、形容し難い圧力が愛梨の気力を奪っていた。

その正体が殺気であることに、愛梨は気づかない。

気づけないからこそ先程のように動くことができない現状が、愛梨の焦りを加速させていった。

八球目が射出されてから二十秒間。

その間に得点板が動くことは無かった。

そして最後の九球目が、ついに射出される。

残りは二十秒。

得点差は二十点。

必ず追いつけると、必ず勝てると思っていたその得点差は、いつの間にか絶望の平行線を辿っていた。

重たい身体も魔法で無理矢理動かしていたからか、想子も底を尽き始めている。

だがそれでも得点に変化が起きないのは、愛梨の絶対に諦めないという執念の為せる業だ。

タイムリミットは刻一刻と迫っている。

不気味な笑みを携えながら今まで以上に正確に、今まで以上に緩急を付けて押し寄せ、打球に全てを追いつくも、そこに反撃の糸口は全くない。

時計は無情にも一秒、また一秒と過ぎていき。

競技場内では戸惑いによるざわめきが多くを占める中。

その得点板が点数を動かすことは、二度となかった。

新人戦クラウド・ボール女子決勝戦第一試合。

第一高校絹旗最愛と第三高校一色愛梨の試合は、第一試合からクラウド・ボール史上でも例を見ない乱打戦が繰り広げられた。

第一セット。

お互いがラケットスタイルで始まったこの試合は、序盤に絹旗最愛がその圧倒的力業で優位に運んでいくが六球目からは一色愛梨が持ち前のスピードを生かして巻き返すというこれから先のセットの雰囲気が決まりかけた試合展開だった。

その展開がひっくり返されたのが、第八球目。

絹旗最愛はラケットと魔法の二刀流という前例のないスタイルで積み重ねた試合展開を破壊し、序盤のリードを保ったまま逃げ切り勝ちをした。

第二セット。

今度は絹旗最愛が魔法を器用に行使して序盤から点数を積み重ねていくという先行逃げ切りの短期決戦を仕掛けたが、球数が重なるにつれて魔法の粗さが目立って行き七球目で逆転、最終的にはダブルスコアで一色愛梨が勝利を収めた。

第二セットが終了した直後には短期決戦に失敗した、と言われていたが、その全容が

明らかになったのはこのクラウド・ボールの全過程が終了した頃だった。

第三セット。

第一セット、第二セットと策を仕掛けてきた絹旗最愛の動向に目が向く中、再び両者がラケットスタイルで相まみえたこのセットは、序盤第一セットを踏襲するような試合展開が続いたが、第一セットのように絹旗最愛がラケットと魔法の二刀流を解禁したにも関わらず五球目まで無得点という驚異の粘りを一色愛梨が見せていた。

しかしそこで再び、絹旗最愛の策がさく裂する。

絹旗最愛はラケットを放り投げ、魔法のみで返球を始めたのだ。

この策は絹旗最愛の講じることができる最後の策であったが、第一セット、第二セットと魔法の連続使用による疲労からか勢いに乗ることができず、得点は重ねていながらも一色愛梨が追従していくというこれまでとはまた違った試合展開になった。

しかし、本当の運命の分かれ道は別に用意されていた。

追い上げムード、そして一色愛梨の勝利ムードが漂い始めた八球目。

突如として不気味に嗤い始めた絹旗最愛はそのキレを取り戻し、追い上げムードをバツサリと断ち切った。

流れを完全に断ち切られてしまった一色愛梨は何とかしがみ付いていくが既に力を出し切ってしまったっており、そのままタイムアップ。

最終スコア2対1で緞旗最愛が劇的な勝利を飾った。

その内容は九校戦クラウド・ボール史上最も白熱したと言われる試合であるとともに、九校戦史上最も不気味で、最も狡猾な試合と評されるものだった。

「お疲れ、一色」

「水尾先輩……すみません、負けてしまいました」

「一色が謝ることじゃないよ。ただ相手が強かった」

三高の控室で愛梨は熱を持ち少し赤みを帯びている右腕にアイシングを押し付けながら、その敗北に悔しさを滲ませていた。

クラウド・ボールが始まる前は自分が勝つと、絶対に負ける気がしないと思っていたのにも関わらず、全力を出し切ってもなお届かない相手がいたのだ。

そして何より、最初から最後まで最愛の手の平の上だったような感触。

その事実が普通の敗北以上に愛梨のプライドを傷つけた。

「相手の揺さぶり方が上手かったね。BS魔法の隠し方も、それを出すタイミングも、心理戦の仕掛け方も、その全てが一色のペースをかき乱していた」

「それでも最後、八球目までは付いていけていました」

「八球目……あれは何と言うか、凄く不気味だったね」

水尾が同じ感想を抱いていたことに内心ホツといつつ、愛梨は今まで感じたことのないような形容し難い感覚を思い出して少しだけ身震いした。

「不気味というか、怖かったです。心臓を鷲掴みにされているような変な感覚で、そこから足が鉛のように重くなってしまつて」

「魔法、ではないだろうね。競技場の雰囲気からしても、気圧されたつて言つた方がまだしつくりと来る」

競技場全体が最愛によつて掌握されていた。

そう言つても良い程に、競技場の温度差は凄まじいものがあつたのだ。

「本当に自分が不甲斐ないです。三高のエースと呼ばれて、新人戦の枠に収まらないと皆から持ち上げられて、私は負けないと豪語して、結果は完敗」

口に出せば出す程、悔しさが滲み出てくる。

悔しさは自責の念となつて、愛梨へと重く押し掛かつていた。

それほどまでに最愛に負けたという事実が愛梨にとっては大きい出来事だつたのだ。

パンツ！

何かが破裂するような音が、控室に響いた。

愛梨は驚いたように音の発生源に目を向けると、そこには思いつきり手を叩いたとのだと分かる水尾の両手が耳元に置かれていた。

反省ばかりしても仕方が無いと、切り替えを促す音だ。

「ほら一色。あんたがそんなんでどうするの。まだ完全に負けた訳じゃない。絹旗さんも疲れているのは間違いないし、その疲れている状態でも十分強敵だよ。でも第三セツトまで持つかと言われたら、流石に持たない」

「……そうですね」

「でも一色は少しだけ休む時間がある。里美さんも強敵とはいえ、絹旗さんと試合した後ならそれなりに疲れているはず。まだ一色にも勝機はあるよ」

まだやれると、まだ優勝することはできると激を飛ばす水尾に、愛梨もその顔を上げる。

水尾の言う通り、優勝は厳しくなったがまだ負けている訳では無い。

休む時間が少しでもあれば体力の回復はできる。

元々運動ができる愛梨にとって体力が少し戻るだけでも勝率は大幅に変わってくるのだ。

何とか沈んだ気持ちから決起した愛梨。

だからそのアナウンスが聞こえてきたときは、何を言っているのか一瞬理解できなかった。

『クラウド・ボール女子決勝戦第二試合は、第一高校の絹旗最愛選手の棄権により同じく

第一高校の里美スバル選手の不戦勝とします。よって第三試合の時間を繰り上げて開始致しますので、関係者の方は第三試合の準備を宜しくお願い致します」

最愛が棄権した。

愛梨以上に魔法を行使しており、その愛梨ですら全く想子が残っていないのだから当然と言えば当然かもしれない。

「……おかし」

その眩きは、そこに違和感を覚えたため。

最愛は第三セットの終わりまで愛梨以上の動きを見せていた。

愛梨以上に体力が残っているのは間違いようの無い事実であり、試合を放棄するには早計としか言いようがない。

「……思ったよりも体力が残っていないなかったみたいだね。二人とも一高だし、変に試合をして里美さんの体力を減らさないようにするという一高本部の——」

「そうじゃないです水尾先輩」

「え？」

だからその違和感の原因が分かった時には、驚愕を通り越して恐怖を感じる程だった。

「絹旗最愛の目的は私に勝つことじゃなくて、最初から最後まで私に優勝させないため

だったんです」

「え？ どういうこと？」

水尾の理解が追い付かないのも当然だろう。

だがそれが理由ならば、不自然だった第二セットも合点がいく。

「絹旗最愛が優勝するのを目的としているなら、第二セットも最初からBS魔法を使っているはずですよ」

「でもそれは短期決戦に見せかけた長期決戦を仕掛けるための布石でしょ？」

「私もそうだと思います。でもその短期決戦、本当なら絹旗最愛は可能だったはずですよ」

「可能だった？ 本当なら絹旗さんは第二セットで一色に勝てたってこと？」

これは実際に最愛と試合をしなければ気が付かないことだ。

何かが見え隠れしていながらも、一向に正体を見ることがない違和感。

その全てが、この棄権で一つの線として繋がったのだ。

「マルチ・キャストもパラレル・キャストも使えるなら、両手打ちはその時から使えたはずですよ。体力が残っていたら九球まで撃ち合えるという事実がある以上、一時的に第三セットよりも得点差の開いていた第二セットで使えば決着はついていました。でもあえて短期決戦で決着を付けなかった。私の体力を限界まで削るために」

「——まさか!」

水尾も愛梨と同じ結論に至ったのか、驚愕に目を見開いた。

「その作戦通り、私は見ての通り想子も使い果たしている状態です。私は絹旗最愛に負けているため、たとえ里美スバルに勝てたとしても全員が一勝一敗。全員が優勝でもポイント山分けでも、決勝戦に二人参加している一高の一人勝ちです」

「でも待つて。それなら一色にストレート勝ちすれば余力を残したまま里美さんと戦えるはず。絹旗さんが優勝した方が一高としては確実性がありそうな気がするけど」

「そこまでの理由は分かりません。里美スバルとの相性の問題なのかそれともそれ以外の問題なのか。もしくは里美スバルの体力を減らしたくなかったのかもしれない。そこについては憶測でしかありませんが、ただ一つ確実に言えるのは私の体力を奪うため意図的に長期戦を仕掛けていた、ということですよ」

本来ならばあり得ない。

だがここまで策を講じてきた最愛ならば、あり得ると思えてしまうような話だ。

「……もし今言ったことが全て事実だとして、一色はこれを一高本部が考えた作戦だと思おう?」

「思いません。絹旗最愛が全て独断で行ったことだと思えます」

「そうだよね……」

愛梨は立ち上がり、次の試合の準備をする。

棄権が確定した以上、ルール通り時間は繰り上げられて次の試合が行われる。

大会側に重大なミスが無い限り、そこに例外はない。

「でも……まで来た以上、諦める訳にも行きません。できる限りのことはやります」
「一色……」

控室から出ていく愛梨の後ろ姿には覇気が感じられなかった。

口では勇ましいことを言っていたが、現実は無常だ。

その後ろ姿を見送りながら、水尾は拳を強く握りしめた。

真実と虚実編

もう一つの決着

クラウド・ボールの決勝戦はスバルの優勝で幕を閉じた。

結果だけを見ればジャイアントキリングと呼ぶに相応しい一高の大金星なのだろう。しかしその内容を詳しく見ていけば当然の結果だったと言わざるを得ないものだ。

決勝戦の初戦。

突如として優勝候補として名前を連ねたダークホースの最愛と当初の優勝候補である愛梨がいきなり激突。

過去に類を見ない程の乱打戦を繰り広げた彼女等はお互いに想子サイオンを使い切ってしまった。最愛は第二試合を棄権、第三試合も愛梨の健闘も虚しくストレート負けで里美スバルが優勝となった。

スバルが2勝0敗、最愛が1勝1敗、愛梨が二敗という訳になる。

大本命とダークホースは眠れる獅子によって破れた、というストーリーがあるならこの結果も納得の行くものだろう。

しかしそんなことはなく、この結果に納得がいかない高校がある。

当然のことながら三高だ。

第三セットの動きを見た限り、第二セットの最愛の動きは誰が見ても明らかにおかしいものだった。それこそ、談合をして愛梨を陥れようとしていたという言い分が通る程度には不自然なもので、勝つための作戦が失敗したという言い分もまた通る自然なものだ。

以上のことから三高は大会運営に最愛とスバルの両名が談合をしていたのではないかと、レギュレーション違反ではないかという抗議文を出し、大会運営は三高の抗議を受け入れて再審議を行うことを発表した。

つまり運営としても一高側に不正がある可能性があるかと判断を下したのだ。

当然そうなれば一高も抗議を出すことになる。

今回両名が談合をしたという事実はなく、また一高作戦本部も指示をしていないため仮に談合をした事実があるのなら証拠を提示して欲しいという証拠の提出を求めたのだ。

一高としては取り合う必要も無いことなのだが、真つ当に勝利をしていると納得してもらおう為にも姿勢を崩すことはしなかった。

当然三高側に両者が談合をしたという明確な証拠はなく、両者の折り合いを付けるためにも一先ず当事者から事情聴取をするというながれになったのだが、

「そう……やっぱり絹旗さん何処にも居ないのね」

クラウド・ボールの決勝戦直後から、最愛は忽然とその姿を消した。

一切の連絡はなく、まるで九校戦に最初からいなかったかのように全ての荷物を部屋から持ち出している状態でいなくなつてからもう二日が経とうとしている。

競技は順調に進んでいるが渦中の人物が消えたことよりも生徒一人が姿を消したということもあつて、一高本部も穏やかではない。

「同室の深雪もこの二日間は一度も部屋に戻つた様子が無いと言っていました」

「北山さんと光井さんも何処に行つたのか見当が付いていないようです」

「最愛にここらへんの土地勘があるとは思えませんし、部屋の荷物が全て消えている点から連れ去られたということは無いと思います」

「本当にあの子は……」

取り繕う必要もないと判断したのかそれとも思わず溢してしまつたのか、珍しく悪態をつく真由美に達也も僅かに驚きを感じた。

だがその気持ちは分からなくもない。

最愛が姿を消したということも併せて先の件はいつの間にか噂として広がっており、事情聴取もできないため大会運営と一高、三高の協議は泥沼化し、結局曖昧なまま結果通りに事は進むこととなつた。

達也は今回の件を間違いなく最愛が想定して行ったものだと言っている。

それは真由美も同じなのだが、それは最愛のことを他の人よりも多少深く知っているからであって、最愛を知らない者の大半は最愛の勝利を讃えた。

事実最愛は談合などせずとも愛梨に勝てる程の実力があり、最愛側から申し出ることは勿論最愛が談合を受けるメリットもない。

故に談合をした黒幕として一高本部に白羽の矢がたった訳だが、事実として談合を示唆したことは無いので結論は付けられないという結果に落ち着いた。

ここまでのシナリオを最愛が行ったとして問題になるのは何故それを行うに至ったのかだが、そこは本人のみぞ知ると言ったところだ。

だから一高本部が気にしているのはその部分ではなく、クラウド・ボールで優勝したスバルの方にある。

「里美さんは大丈夫ですか？」

「本人は本当に気にしていないと言っていたし私から見ても変に抱えている様子はないから、そこは私たちがこれ以上何かする必要は無いと判断したわ」

今回のクラウド・ボールで一番の批判を集めたのは最愛でも一高本部でもない。

優勝をしたスバルだ。

誰がどう見ても最愛、愛梨とスバルの間には大きな力量の差が存在している。

だが結果はスバルの圧勝。

そういった現象は九校戦では良くあることなのだが、如何せん二人の激戦とその後の試合の差があまりにも大きすぎた。

その内容の差が落胆の差であり、そして観客の不満度合いの大きさでもある。

「折角二人で優勝と準優勝ができたのに、どうしてここまで頭が痛くなるのかしら」

「これ以上目立つような真似はしたくない、関わるなという意思表示なのだろう」

真由美の溜息を遮るように、威厳溢れる声が一高本部に響いた。

空気が張り付き、全員の背筋が自然と伸びる。

達也としては特に姿勢が変わったわけではないが、背筋が張り詰めるような感覚と緊張感を感じていた。

「十文字くん……」

今回の件、対応に追われているのは真由美よりも克人だった。

今も大会運営から帰ってきたところであり、真由美にその報告を行いに来たところだ。

「元々絹旗を九校戦に出したのは我々——というよりも、俺だ。絹旗の魔法は十文字家の魔法に非常に近いものであり、その詳細を確かめる必要があるという十文字家としての判断を下したのだが、結果として悪い方向へと進んでしまった。申し訳ない」

普段からもうこういった問題に積極的に動く克人ではあるが、今回積極的に動いている最大の理由は自責にあった。

魔法とは魔法師にとって生命線であり、魔法について言及するのはマナー違反と言われている中で克人は公に見せることを強要した。

最愛は納得していた、というのは通じない。

それは克人側の言い分であって、最愛側の言い分ではないのだから。

「私も賛成したのだから十文字くんだけの責任ではないわ」

「だがここで何をしようと言旗は戻らないだろう。出場する競技が終わった以上ここにいる意味もなくなっている」

「だからっていきなり居なくなる必要は——」

「我々にはもうどうすることもできない。我々が絹旗を探すために人員を割いたとして、絹旗がそれを監視行動と捉えてしまえば最悪のケースも考えられる。もしかしたら、あの約束を交わした時から既に今の事を想定していたのかもしれない」

そこを頭ごなしに否定できないのが厄介なところだ。

最愛の能力がどういふものなのかを知りたい。

そのために交わした約束が、こんな形で押し掛かってくるとは誰も想定できないだろう。

達也もその条件を受け入れた身であり、同様の理由で無闇に動くことはできない。

エレメンタルサイト
精霊の眼を使えば探すことは容易なのだろうが、八雲の監視にすら気づいた最愛なら

ばそれすらも勘付く可能性があるだろう。

今まで築いてきた関係も一瞬で瓦解してしまうことは必然であり、深雪にも害が及ぶため現時点でできることは何も無い。

つまりこの場で打つ策などただ最愛を煽動するだけの愚策にしか成り得ないのだ。

「ここで考えたところで何か手が打てる訳でもない。まずは選手のケアが最優先だ」

「そうね。達也くんは光井さん、引き続き里美さんのケアをお願いしても良いかしら」
「勿論です」

今日は新人戦四日目。

ミラージ・バットの予選から決勝と、モノリス・コードの予選が控えている新人戦の華となる日だ。

ほのかもスバルも優勝という大きな結果を残しているが、昨日行われたほのかのバトルボード決勝はメンタル面に不安定なところが垣間見えていた。

そのケアをするのもエンジニアの仕事の一つであるため達也としては言われるまでもなくケアをするつもりなのだが、同時に完全にケアをするのは無理ではないかとも考えている。

今回の件はそれほどまでにほのかと雫に重く押し掛かっているのだ。

「それでは自分はこれで失礼します」

「時間取らせちゃってごめんね、達也くん」

真由美と克人に見送られながら、達也はあの高校生に見合わない少女——自分のことは柵に置いて——を思い浮かべた。

達也はその場にいなかったため映像で確認しただけだが、最愛が居なくなった根底にあるものは簡単に想像が付く。

いつもの最愛とは全く異なる、例の顔。

冷徹で、暴力的で、狂乱的なあの時の最愛ならば、現在の状況を作り出したとしても不思議ではない。

しかしたとえそれが事実だと仮定して、達也には分からないことが二点あった。

一つ目に、現在の状況を作り出そうと考えた時の最愛の心境だ。

先述の暴走している最愛ならば意図は分からなくともこの状況を作り出したところが驚きはない。だが最愛はクラウド・ボールの決勝まで変わった様子はなかった、というのが試合を見ていた全員の見解だ。

そして達也が映像を見た限りでも異常があったのは第三セットからであり、この状況に持ってくる準備段階である第一セット、第二セットはあくまでも普段通りの最愛だっ

た。

いつから考え、何のために実行したのかは最愛にしか分からない。

断言できるのは、この状況は意図して作られたものだということだけだ。

二つ目に、最愛が暴走するトリガーとなったものが何なのかということ。

今までのことから、最愛が暴走するのには何かしらの原因がある。

最初は見えない何かから身を守るかのように、次に襲われていた友人を見捨てようとして——これは誤解だったのだが——していた深雪に対して、そして最後に人を殺めたことで。

ある一定のラインがあつて、そのラインを超えた時に最愛は暴走するというのが達也の見解であり、注意して何とか超えないようにしていたラインでもあつた。

しかし今回の最愛には一切の前兆が無い。

突然豹変したという表現が正しいだろう。

(最愛……)

ミラージ・バットの控室へと向かいながら、達也は行方知れずの最愛を再び思い浮かべた。

特段仲が良いというわけではない。

むしろ未だに警戒はしているし、お互い軽口を言い合いながらも何処か牽制しあつて

いるという不思議な関係だ。

しかし同時に興味深い存在でもあった。

明らかに高校生には見えない体格、達也の異質さに入学当初から気がついていながらも積極的に関わってくるという矛盾、そして何より高校生とは思えない程の実戦経験と未だかつて見たことも無いような魔法とその魔法熟練度の高さ。

多分の警戒と興味を含みながら接していくうちに、いつの間にか有事の際には手を貸せると断言できる程度には友と呼べる間柄になってしまっている。

だから達也は、強硬手段を取ることはできなかった。

あくまでまだ友人として関わっていたいから。

これ以上動くようなら、最悪のケースも考えられるから。

(どうしたんだ、本当に)

せめて災いの予兆ではないことを、最愛を完全な敵として認知することがないよう切に願った。

数か月後。

とある山奥の盆地にある、地図にも載らない小さな村に似つかわしくもない壮観な屋

敷。

そのある部屋にて三つの人影が対峙していた。

男女比 一対二。

片や初老の男性と見た目三十代前半の異性を惹きつけずにはおけない大人の可愛らしさが同居した妖艶な女性で、片やこの場には似つかわしくもない中学生と思わしき少女。

「まさか自力でこの屋敷に辿り着く人がいるなんて思いもしなかったわ。もし良かったらお茶でもどうかしら？」

「超いらぬですし、案内したのは超そつちです」

「あらつれないわね。折角息子と姪の友達が来てくれたのだから私としては是非歓迎をしたいのだけど」

「超ゆつくりするつもりはないです、四葉真夜」

『極東の魔王』『夜の女王』という異名を持つ、当代における世界最強の魔術師の一人と目されている四葉家当主、四葉真夜と絹旗最愛が四葉家本宅にて対面していた。

触^アれ^ンて^シは^タな^ッら^ンな^イ者^ヲと^ル魔^ル法^ブ師^ノ中^ニで^テ畏^レ怖^サれ^テい^ル四^ツ葉^ノ家^ノ総^ノ本^ノ山^ニに^テ何^レ故^ノ最^モ愛^シが^来て^いる^のか、そこには当然理由がある。

「貴女の魔法や異常性は興味があるのだけれど——良いわ、用件を聞きましょう」

その理由とは、一度折り合いをつけたはずのもの。

しかしどうしても切り離すことができなくなってきたもの。

「超単刀直入に聞きます——」

それは、この世界に最愛が何故いるのかという根幹に関わる話だった。

虚像と現実

時は戻り、クラウド・ボール決勝戦の翌日。

最愛は荷物を持ちながらとある場所に来ていた。

「……が富士の樹海ですか。本でしか超見たことがありませんでしたが、何と云うか超雰囲気がありますね」

そこは九校戦の会場から程近い富士の樹海、通称青木ヶ原樹海。

以前からあまり良い噂は聞かない場所でそれを示すかのように人無き物を見かけることはあるのだが、聞いているよりはだいぶ少ない。

思ったよりも普通の森だな、というのが最愛の素直な感想だった。

そもそも最愛が何故こんなところに来ているのかと言えば、もう何もかもが嫌になつて自らの命を——なんてことはなく、ただ外側から見た富士山とその樹海の景色が綺麗だったため実際に見に来ただけだ。

生まれも育ちも学園都市の最愛にとつては学園都市の外そのものが非常に物珍しいものであり、実際に見られる機会があつたから見に来たという単純な理由に過ぎない。ただ、そういうことにしている。

「超どうしたんでしようか、本当に」

ぼつりと、最愛が呟いた。

その呟きは、この世界に来てからずっと感じていた違和感だ。

想子サイオンという未知の力があり、魔法という超能力に近い物があり、魔法が恒常化している。

学園都市というものがそもそも架空のものなのか、それとも自分が作り出した虚像なのかという思考も過った。

だがもしそれが虚像なのだとしたら、絹旗最愛という人格は生まれたその瞬間から破綻していることになる。

自身の人格が破綻しているのはどうしようもないことなのだが、学園都市によつて形成されたものだからこそ何とか受け入れているのだ。

しかしその枕詞が無くなった時、今まで自分が何をしていたのか、何のために身を粉にしてきたのか、今までの全てが瓦解してしまうのは明白。

何よりもあんな経験が自身の妄想の類と言われる方が耐えられないため、最愛もそれ以上は考えることを止めた。

でも考えることを止めようとしたところで、自身の異常性を認識させられる機会は無数にあるため否が応でも考えることになる。

最早呪縛だ。

その呪縛から、最愛は逃れたかった。

磁石がおかしくなる、迷ったら出られなくなるという話を聞いたため多少期待したが、特段何が起こることも無く青木ヶ原樹海を走破した。

いつそのことそのまま富士山にでも登ろうかと思っただが、流石に冗談が過ぎると思いついて適当に散策することに決める。

良く考えたら折角外に出る機会があつたのに学校ばかりに縛られているのもどうかとは前から考えていたし、最愛には魔法を学んでいく中でこの現象になる要因として一つ心当たりが生まれたことも理由に挙げられる。

正直、その可能性は考えたくなかった。

だが完全に捨てきれぬかと言えば、それも無理な話だ。

だから今のうちにこの世界を楽しんでしまおうと決めて、最愛は高校の生活を捨てた。

その可能性がもし事実だった場合、最愛がこの世界に居られる猶予は長くないと予想ができたからだ。

今回何故あんなことをしたのかと言えば、高校に自分の居場所を無くすためと答える。

最愛にとって一つのケジメみたいなのだが、帰る場所があるという感覚が最愛にはなかったこともあって非常に不器用かつ迷惑を置き土産にするやり方になってしまった。

ただ、自分の本性を公の場で見せたこともあつてもう退くことはできない。

人格が変わる魔法など精神魔法以外は存在しないし、自分の人格が変わるだけの魔法など意味はない。

つまりあれが本性であることは明らかであり、達也や深雪、克人がそれを知れば最愛がいなくなったこと理由は勝手に説明してくれるだろう。

そして以前の九校戦に出る条件から探すことは不可能ということも含めて、無理矢理ながらも納得させてくれると分かっている。

しかしそれでも、彼女達は納得いかないだろう。

「ほのか、雫はどうして私なんかを超気にかけてくれるのでしょうか」

雫の父親曰く、最愛と雫は遠い親戚にあたるという。

しかし本当に遠い親戚にここまで親切にしてくれるのだろうか。

いや確かにほのかや雫はそういう親切にしてくれる部類の人種ではあるが、少なくとも実業家である北山潮きたやまうしほが最愛に対して毎月の支払いと称してお金をポンと出すことはあり得ないだろう。

だからそこに一つのヒントがある可能性が高いとは分かっていたのだが、それを聞いてしまえば保たれていた安寧が崩れてしまうような気がして踏み出せなかった。

今の生活がたとえまやかしだったとしても、かつて焦がれるほどに渴望していたものだ。

そう簡単に捨てきれぬはずがない。

最愛は徐にCADを取り出して、自己加速術式を展開した。

最初のころに比べれば見違える程素早くスムーズに発動し、想子の量も増えていることは分かる。

そして何より、空素装甲を展開しながらでも魔法の効果が多少は残るようになってきた。

恐らく無意識下で『自分パーソナルリアリティだけの現実』が魔法という概念に少しずつ浸食されているからだ。最愛は推察している。

そしてこの事実こそが最愛にとって最大の不安要素だった。

時期は分からない。

ただ魔法と超能力が実戦レベルで扱える程度にスムーズに切り替わることはクラウド・ボールで既に証明されている以上、そこに間違いはない。

そしてもしこの進化が意図されているものだとしたら。

この世界は当初疑っていた魔術サイドの攻撃ではなく科学サイド、つまり学園都市が行っているのではないのだろうかという仮説が浮上した。

そしてその仮説から思い浮かび上がるのは、暗闇の五月計画。

最愛が今の超能力を植え付けられた実験であり、当時頓挫したと思われる計画が改悪を経て再び始動したのではないかというもの。

全てはあくまで仮定でしかない。

だがその仮定ならば、起きた時に準備されていた家や資金等の環境も、雫やほのかという高校生活を鮮やかに彩る親友の存在も、親戚がいるという今までこの世界に最愛が居たのかのような根拠も、そして魔法という分類に超能力という分類があることも、自身の能力が事実上の進化を遂げていることも――。

その全てが嫌という程綺麗に繋がってしまい、逃れられない虚像となつて押し寄せていた。

クラウド・ボールの決勝戦で本性を見せたとは言つたものの、あれはあながち演技ではないのだ。

それ程までに今の最愛の精神状態は擦り減り始めている。

閑散とした山道をただ歩き続け、住宅街へと抜けていく。

魔法や能力を使って高速での移動もできることにはできるが、今はただゆっくりと歩

きたい気分だった。

今最愛に立ちほだかるのは、かつて折り合いをつけたはずの精神的に大きい壁だ。

最初は気にする余裕も無くただ生き抜くために、安全性が保障されてからはその現実を見ないように目を逸して、そして今再びその大きな壁が立ちほだかっている。

そしてその壁はもう無視できないところにまで来てしまっていた。

潮と最愛は既に面識を持っており、携帯端末やCADを買ってもらったこともあつて連絡先も交換している。

だからと言ってこの用件のためにすぐ連絡できるかと言えば、最愛は間違いなくノーと答える。

もし今すぐ連絡できるくらいの心構えがあるのだとしたら今こうやって住宅街を歩きながら現実逃避を敢行していかないだろう。

「今までどちらかといえば詐欺を越やる側でしたが、詐欺をやられる側は超こんな気持ちだったのでしょうか」

絶対にあり得ないとは思いつつも少し甘い蜜を吸ったら本当にあるのかもしれないと考えてしまう、まさしくそういった思考を利用した詐欺があることを最愛は知っている。

当初はこんなものに引つかかるなんてと嘲笑っていたものだが、こういう心理が働い

た時から疑うということができなくなるのだと確認することができたのは良い体験なのだろうか。

でもやはり今の状況で良い体験というのも違うので、やはり何かと動かなければならない状態なのだろう――。

こうやってとめどない思考の海へと迂回しても、結局は壁にぶつかってしまふ。完全に壁に囲われていると言った方が正しいかもしれない。

そして人は壁に囲われている時、安心感を覚えると同時に外の世界へと出たくなる。たとえば家の中に居る時人は安心感を覚えるだろう。

しかしずっと家に居るといことは何も変化が起きないと同義である。

次第に退屈し、変化や知的好奇心を求めて外へと出たくなるというのが人の性だ。

そのまま外に出て変化を確認し、知的好奇心を満たせるならそれに越したことはない。

しかしもし外の世界が危険で外に出られない状況の中で外に出たらどうなるか、その結果は容易に想像ができるだろう。

要は外の世界を知っていれば出ることはないのだ。

だがその家がいずれ安全では無くなる可能性がある場合はどうだろうか。

それがいつなのか、どういう危険があるのかを確認してその対策を講じようと危険を

顧みずに外へ出ようとするはずだ。

完璧な安全を求めるために危険を冒す。

それは人としての本能的な部分であり、その状況こそまさに今の最愛だ。

加えて最愛は高校、つまりは壁に囲まれている家を絶った。

帰る場所が無い以上、最愛はもう壁の外に出るしか道は残っていない。

「一先ず超自由ではあるので色んなところを超回ってみましようか」

魔術師がいないと判明してからは可能な限り切り替えて、ずつと魔法の練習を行ってきた。

能力が魔法に適応し始めて再び脳裏に不安が過った。

その不安を心の内に秘めながら、それでも魔法を練習した。

九校戦に出場してクラウド・ボールの優勝と準優勝を勝ち取った――。

十分頑張っただろう。

一度脱力した最愛は溜息を一つ吐き、グツと伸びをする。

魔術師を警戒していた時やブランシュの時もそうだが、やはりオフの日は必要だ。

九校戦でしっかりと成果も残せたのだから多少の休暇も許されるだろう。

内心で社畜のようなことを思い浮かべながら、夕陽が富士山を真っ赤に照らしていくのを背に最愛は完全に消息を絶った。

九校戦は新人、総合共に一高の優勝で幕を下ろした。

二位の三高との差は圧倒的で、真由美達三年生の代は全戦全勝という称号に相応しい華を添えられる結果となった。

しかしそれは表向きの話。

前夜祭の時とは打って変わって和やかな雰囲気で行われている後夜祭の一端に、表情の冴えない一団があった。

「結局戻ってこなかったね、最愛……」

「……うん」

その集団は今回の一高優勝に大きく関わり、初めての九校戦という緊張と重圧から解放されて後夜祭を最も楽しむはずだった一高一年生の集団だ。

特にほのかと雫の表情は暗く、ダンス用に奏でられているはずの管弦の音の後押しもあつてより哀愁漂う雰囲気醸し出している。

手を尽くしたのか達也、深雪、幹比古、美月は一步離れたところからそれを眺めていることしかできず、レオとエリカが何とか元気付けようと言葉をかけているところだった。

「大丈夫よ雫、ほのか。最愛が何も考え無しにいらなくなったりするはずないじゃない。今は何か言えない用事があったて、それが済んだらきつと帰ってくるわよ」

「そうだぜ！ それに前も一度いきなり居なくなつた時があつたじゃねえか！ 今回もその時みたいにな——痛ッ!?」

「あの時とは状況が違うでしょこの馬鹿！」

ほのかと雫が心配をしている最たる理由として、今回は居なくなる理由が全く見当たらないという点にある。

ブランシユの件みたいにテロに巻き込まれて何かしらの休養を取っていた——内情はただのサボタージユ——という理由付けが可能ならばまだ納得はいくのだが、エリカの言う通り今回は全く状況が違う。

ただただ居なくなつただの。

しかも九校戦の真つ最中に。

「うん、ありがとう二人とも」

「でも本当に帰ってくるのかな……私、最愛が居なくなるような気がしてならないの」「帰ってくるわよほのか！ 用事を済ませたらふらつと帰つて来て、レオがデリカシーのないことを言つてまた手を握りつぶされる未来が私には見えているもの！」

過去に実際起きているため反論しようにもできないレオは渋い顔を浮かべ、目線だけ

でも反抗しようとエリカを睨みつける。

だがエリカも構っている余裕はないのか、レオの行動に珍しく反応を示さなかった。普段の快活な様子からは想像がしにくいのが、エリカは理論でも上位に入る程には頭が良く、洞察力も優れていて非常に聡明だ。

内心ではほのかと近しいことを考えているのにも関わらず、それでも二人を元氣付けるために励ましの言葉をかけ続ける。

それだけ事が重大だと感じているのだ。

「達也は最愛のこと、どう思う？」

他方で、幹比古が達也に意見を求めていた。

達也たちですら判断しかねているのだから達也たちと比べて親交が浅い幹比古にとって最愛の行動は理解し難いものだろう。

あくまで他方的な見方をして何か助力ができないか、という申し出だ。

「正直なところ俺にも分からないが、これが前々から計画されていたということは間違いない。そしてこうなった以上最愛から連絡がこない限り探しに行くこともできない」
「七草会長や十文字会頭も動いているんだよね？ それなら早く見つけたりそんなものだけ」

「それがかなり動きを制限されているらしい」

「制限？ それは家からつてこと？」

「いや、最愛からだ」

「最愛から……？」

そして思わぬところからの抑止力を確認して、幹比古は猜疑深い表情を浮かべた。

「確かにそれなら計画的なものだということとは間違いなさそうだね。でも十師族二人の動きを制限するのって並大抵のことじゃないよね」

「俺も気になって聞いてみたのだが、九校戦を打診した際に最愛とある約束をしたらしい。その約束が理由で下手に動けないみたいだ」

「……それは穏やかじゃないね」

「俺も詳しい理由を聞いた訳じゃないから分からないが、確かに穏やかではないな」
実際に穏やかではない。

九校戦に出る際にいくつか条件をつけていたが、唯一監視するような行動だけは脅迫に近いものだった。

前例が無ければもし事実だったとしてもただのハツタリだと退けることは可能だ。

しかし最愛には躊躇なく人を殺めた前例がある。

そして危害が生徒に及ばないという保証がない以上、真由美たちも下手に動くわけにはいかないのだ。

「でも雫とほのかをあのままにしておくわけにもいかないな」

しかし最愛の影響で雫とほのかが気落ちしていくのを眺めていくのは達也としても許容ができない。

何とかして、二人には踏ん切りを付けてもらわなければならないのだ。

だからこそ二人には聞かなければならないことがある。

離れていた距離を数歩で縮めて、達也は二人の前へと出た。

「雫、ほのか。二人に聞きたいことがあるんだけど良いか？」

「達也さん……大丈夫ですよ」

「達也さんどうしたの？」

「これを聞いていいのか迷っていたんだが——雫と最愛が遠い親戚にあたるとは聞いていたが、実際最愛と二人は前から交流があったのか？」

それはこの九校戦が始まってから全員が気になっていたことだった。

達也たちから見て雫とほのか、最愛は基本一緒にいることが多く、雫と最愛が親戚にあたるということもあつて以前からとても仲が良いものだと思っていた。

しかし実際聞いてみれば雫とほのかは最愛についてあまり詳しくはなく、どちらかといえば達也の方が詳しいと思えるような程度のことしか最愛のことを知らなかったのだ。

その歪さと言及される度に気落ちする二人がこの九校戦ではかなり目立っていた。対して雫とほのかもいつかは言及されると分かっていたのだろう。

特段反応を示すことも無く、雫は淡々とその答えを提示した。

「うん。私と最愛は遠い親戚。だけど——」

しかしその答えは、淡々と答えるにはあまりにも不釣り合いなものとしか言いようが無いものだった。

突然の来訪

結果から言えば、雫とほのかは何とか持ち直すことができた。

九校戦が終わった直後とまではいかないが、夏休みに行った雫主催の旅行やその間の達也たちの尽力が非常に大きいと言える。

しかしあれから最愛は完全に消息を絶ち、携帯も繋がらずに音信不通になってしまった。

家にも帰っている様子も無いため何処に行ったのか、何をしているのか、いつ帰ってくるのかなどの手がかりも全く残っていない。

むしろその徹底ぶりのおかげで雫とほのかが最愛を信じると踏み切ることができたとと言えるのだから皮肉だろう。

しかし最愛の居なくなったタイミングが悪かった。

最愛が居なくなった数日後、九校戦の大会委員にスタッフが紛れ込んでいることが一部の人に知られることとなった。

その理由は単純に達也が現行犯で犯人を捕らえたからなのだが、それを他校の生徒がいる前で行ったため「一高の生徒が暴れた」という一文だけが広まったのだ。

九島烈の登場や達也の暴力行為の正当性が認められたこともあってこの件はすぐに収束したのだが、第三者の介入が分かったとなれば一高として放つてはおけない人物が一人いる。

それが最愛だ。

最愛は第三者目線で見た場合、新人戦クラウド・ボールの決勝戦にて『数字付き』^{ナンバーズ}で『師補十八家』でもある一色愛梨を下し準優勝を果たした優秀な生徒だ。

第三者が一高の優勝を邪魔しようとしているのは明確である以上最愛へと干渉が及んでいる可能性、具体的に言えば何かしらの交渉材料として使うために人質にしている可能性も一概には否定できなかった。

故に真由美と克人の間では最愛の捜索について緊急会議を行った。

全く考えていなかった最愛が連れ去られたという可能性は、大会委員に工作員が居たという事実から一気に現実味を帯びてしまったのだ。

もしこの仮説が是ならばすぐにでも行動に移さなければ手遅れになる。

二人が出した結論は、当初最愛と交わっていた約束を破棄してでも捜索に行くべきというものだ。

しかしこれは結局実行されることはなかった。

実際に一人の魔法師を救うために最悪の場合実力行使も辞さないという姿勢を見せ、

それを約束の場にいた達也にも伝えるところまでは確かに進んでいた。

そこまでいって実力行使に及ばなかったのは、とある情報筋から最愛が捕らえられている事実は無いことが判明したからだ。

その情報筋は以前ブランシュのアジトを見つけ出しているという実績もあることから真由美と克人はその情報を信用して落ち着くことにしたのだが、結局その情報筋からも最愛が何処で何をしているのか、何を目的としているのかの情報が入ることはなかった。

またその第三者は香港系国際犯罪シンジケートの『無頭竜』ノーヘッドドラゴンという魔法を悪用する犯罪組織の日本支部が大本だったのだが、無頭竜は達也が秘密裏に手を下している。

以降は妨害が起きることも無く一高が優勝を飾ることができた訳だが、それに伴う事故——摩利の事故だけとは限らない——で同時に煮え切らない結果になってしまったとも言えるだろう。

だからという訳では無いが、新学期初日の生徒会室の空気は稍重だった。

「本当に困ったわねえ……」

その真由美の眩きからは疲労の色が濃く見える。

普段から公の場では毅然と、身内中では明朗快活な彼女がここまで明確に弱音を溢す姿は珍しい。

しかし実情は確かに困ったものではあった。

「達也くん、結局絹旗さんは学校に来ていないのよね？」

「教室にはいませんでした」

「そりやそうよねえ……絹旗さんなら何か考えがあると、そこは間違いないと思つて今日まで来たけど、本当に考えがあるのかどうか、そもそも何がしたいのかももう分からなくなつてきたわ……」

「同感です」

達也の同意を得て再び嘆息をする真由美。

そこに鈴音から、恐らく最近感じていたのであろう疑問が提示された。

「会長も司波くんも絹旗さんのことを以前から高く買っているようですが、良ければその理由を教えてください」

その疑問とは、真由美たちが最愛を高く買っている理由だ。

真由美や克人、達也、深雪は最愛の見た目にそぐわない異常性やその思慮深い様、そして何より最愛の本質の一部を確認しているが、鈴音やあずさはその片鱗を九校戦で垣間見た程度でしか知らない。

つまり第三者視点から見た最愛は理論が出来る一部の能力に特化した二科生というだけであり、鈴音からすれば九校戦新人戦モノリス・コードで起きた事故により達也や

レオと共に代理で出場して大金星を勝ち取った幹比古と大差はないのだ。

「そうねえ……達也くんが何かした場合、絶対に考えがあるとリンちゃんは思うでしょう？」

「そうですね」

「方向性は違うけどそれと似たような認識で大丈夫よ」

大丈夫ではない、と達也は言いたいところだが、真由美が至って真面目に言っていることから頭ごなしに否定することも話の腰を折ることも達也にはできなかった。

「確かに絹旗さんは司波くんと同様に二科生でありながら理論が得意で、評価項目には無い部分が非常に秀でています。特に空間把握能力とマルチキャストを実現させる演算能力、BS魔法の練度、そのBS魔法を決勝まで隠し通すための計画性やその全てを通した実行力など目を見張るものはいくつかありました」

鈴音が提示したのは最愛がクラウド・ボールで見せた力の全てだ。

改めて並べてみればその異常性を再確認できるのだが、納得できる理由としては十分な功績でもある。

故に真由美も妥協点はそこであると踏んでいた。

「それだけでも十分じゃないかしら」

「そうですね。しかし私が聞きたいのは実際に確認できたものではありません。会長た

ちは以前から絹旗さんに肩入れしているように見えました。それだけ目にかけていたということとは、そこではない部分での理由があると思っと思っています。特に絹旗さんを九校戦に選出した理由を私は聞かされていないまま押し通されてしまいましたから」

「ええと……そうだったかしら？ でもいいじゃない！ 絹旗さんはちゃんと結果を残したのだから！」

「九校戦の結果だけを見れば確かにそうです。ですがそれ以外のところが芳しくないから今悩んでいるのではないのですか？ その原因の一つに絹旗さんを九校戦の選手へ選んだ理由があると考えていますが、違いますか？」

「そ、それは……そうだけど……」

凶星だ。

しかしこの場で一番突かれたくない部分でもある。

真由美としても生徒会には最愛について話を付けておきたいところではあるのだが、事情が事情だけに話すなら一だけではなく十まで話さなければならぬ。

つまり真由美や克人が最愛に出し抜かれてしまった九校戦へと参加することになった経緯やその際に交わした約束は勿論のこと、そして最愛に目を付けた経緯となればブランドシユの件で最愛が人を殺め嬉々として拷問を行っていたところまで掘り下げる必要も出てくる。

魔法師となればいつかは人を殺めることになるだろう。

しかしそれは魔法師の卵である魔法科高校の生徒が行うことではないし、拷問などそもそも行っていいものではない。

「……そうよ。私も十文字くんもそう考えるに足る理由があるの。でもその理由については絹旗さんの許可が必要だからその時になったらまた話すわ」

「しかしその絹旗さんは現在行方不明ですが」

「それだけ重要なことなの。理解して頂戴」

「そういうことなら」

毅然とした態度で要求を突っ撥ねた真由美にはまだ話したくはないという意味がはつきりと見て取れる。

鈴音も明確な理由がある以上は追及する意味もないと判断してあっさり引き下がるも、実際これは時期を延ばしただけのものだ。

いつかは話さなければいけない時が来る。

それも、卒業前までには必ず。

「ごめんねリンちゃん。ありがとう」

「いえ」

言い終えるなり真由美はハア、と今日何度目かの溜息を吐く。

最愛に関しては以前からやりにくいと思つてゐるのだろう。

そこは達也も同意見なのだが、最愛と達也が似ていると評されてゐることから立場が違えば達也も今の最愛の位置になつていたかもしれない、と考えると少しだけいたたまれない気持ちを感じてしまう。

「今月は生徒会選挙もあるし論文コンペの準備もしないといけないのにどうしてあんな手紙を寄こしたのかしら……」

そして何よりもこの最愛から送られてきたという手紙。

どういうルートなのか十師族七草家本宅の真由美を名指して宛てられた手紙で、差出人の名前は一切書かれていないという如何にも怪しいものだった。

本来ならば一考の余地も無く廃棄されるような代物なのだが、重要機密と記されてゐる点や検査をしても不審な魔法が無い点、何よりも七草家本宅まで直接送られてきてゐるといふ点から一人の人柱を介して当主の眼前で真由美に読み伝えられたものだ。

当初はその人柱が文章を訂正していたがためにただただ丁寧な煽り文句が綴られてゐるだけの何とも心象が悪い手紙だったのだが、そこに綴られた最後の一文は決して見逃すことはできないものだった。

「始業式の日には顔を出すから超丁寧に出迎えてください——手紙には確かにそう書いてあつたんですよね？」

「そうよ深雪さん。私も直接手紙を確認したけど、ところどころ『超』と付いているのを確認したわ。超をわざわざ付ける人なんて一人しかいないじゃない」

この手紙が送られてきたのがつい昨日の話。

しかし問題はこれが最初は真由美に読み伝えられたということだ。

それも、七草家当主の前で。

「お父様にも問い詰められたわ。この手紙の送り主は誰なのかって」

「それで、会長は何と?」

「勿論絹旗さんについて説明したわ。答えない方が変に勘繰られるからんだけど、凄いい興味を持たれちゃってね。生徒に——絹旗さんを変に詮索はしないで欲しいとは頼んで一応了承は貰っているけど……」

何かを言い淀んだ真由美に事情を知らない鈴音とあずさは違和感を覚えるが、先程の関連性からそこが最愛を認める要因の一端と理解して追及することは無かった。

しかし今の鈴音の質問に対する答えで鈴音とあずさの視点は一変したとも言える。

真由美の言い方はまるで危険物を扱っているような程丁重なものであり、先程から最愛に刺激を与えないようにしているのは明瞭だ。

少しでも刺激したら周囲を巻き込む大爆発を起こしかねないともいうようなその慎重さは、そのまま最愛を危険人物だと明言しているのと同義でもある。

良く言えば最愛を尊重して何とか約束を果たそうとしていた律義さが故、悪く言えば下手に話し過ぎてしまったが故。

(変な認識を持たせるよりは説明させた方が無難か)

今回の件、経緯はどうであれ種を蒔いてしまったのは真由美だ。

克人というもう一人の当事者が居ない以上、真由美の後押しできるのは一人しかない。

「会長このままでは誤解を生む可能性もあるのでやはり話した方が良いと思います」

「達也くんもそう思う？ 私も変に誤解されるなら話した方が良いと思っていますんだけど……」

「最愛の話をするには何も問題ありません。むしろ自分たちが最愛について話すことで最愛への詮索を止められるのですから、最愛としては有難いことだと思えますが」

達也の言う通り、最愛は詮索について制限を課しているだけで最愛については話すことは制限していない。

実際は達也が最愛について話すのは色々リスクが伴うため話したくないというのが本音なのだが、達也の知らないところで約束を交わしていない限り達也の言っていることは事実だ。

真由美も今一度最愛と交わした条件をよく咀嚼しているのか考え込むような仕草を

見せる。

数秒の沈黙が生徒会室に流れた。

「そつよー！」

そしてその沈黙を破つたのはやはりというべきか真由美だ。

「盲点だったわ！ 確かに話をすることに許可なんていらぬじゃない！ 流石よ達也くん！」

華を咲かせたかのように表情を明るくさせているその姿は長年の悩みが晴れたとでも言うように清々しくなっており、それだけ最愛が真由美にとって大きな足枷になっていたことを表していた。

そして達也に他意のない純粋な賞賛を向けられたからか、深雪は誰もが見とれる笑みを携えているのを達也だけが確認した。

「それでは絹旗さんについて話していただけるといふことですか？」

「ちよつと待つてね—— ええ、今十文字くんにも確認したけど話しても問題ないと返事が来たわ」

他言は無用よ、と付け加えて真由美は一度椅子に座り直した。

変に意識しすぎていたところもあると真由美自身思っているが、それぐらいが丁度よいのも事実だ。

座り直したことにはそういう意識から切り替えるという意味も含まれていた。

「会長の気持ちは俺も良く分かります。俺もその現場を見ていなければ信じていなかったかもしれないから」

実際は達也と最愛は例の件よりも前からお互いに牽制しあっていたのだが、この場において達也の言葉を白々しいと捉える者は一人もいない。

さらに言えば達也の今の一言によってこれから話されることが普段の最愛からは信じられないものであることの裏付けにもなった。

以上を踏まえた上で、さらに真由美が警告をする。

「先に言っておくけど、今から話すことはかなりシヨツクの大きい事よ。リンちゃんもだけど、あーちゃんも大丈夫？」

「私は構いません」

「私も大丈夫です。絹旗さんのそういう部分も受け入れてこそ本当の友達と思っていますから！」

「あーちゃん……」

最愛の人間性もあって、最愛とあずきの仲は意外と——二人の容姿で目立つという意味でも——知られている。

特に生徒会で深雪以外に仲が良い人物がいるというのは真由美としても都合が良い

ことであり、来年からの一高を引つ張っていくことになるはずさにとつても重要なパイプだと感じているからこそこの即決は非常に有難いものだ。

この場にいる全員の同意を得られたことで、真由美は早速知っている限りの情報を開示した。

ブランシユで独自にアジトを見つけていたこと、単身でアジトへ潜入してリーダーである司一を除く全ての工作員を惨殺したこと、その場に居合わせた克人が最愛の残忍性と十文字家の魔法に通ずるものがあることを確認したため直接対話を試みた結果、二人して最愛に主導権を握られてしまったこと、しかし練習試合の約束を取り付けることはでき、その練習試合で九校戦選手として相応しい実力があると判断したため選手として出場させるのを決めたこと、練習試合の約束を取り付ける際に交わした条件の中に『監視行為などを全面的に禁止すること、守らなかった場合は場所や手段を問わずに最大限の抵抗を行う』という文言があったため、突如としていなくなった際に捜索隊を出せなかったこと、強引にでも捜索隊を出そうとしたが、直前に確かな情報筋から生存の確認がされているため断念したこと。

「——以上が私と十文字くん、絹旗さんの間に起こった顛末よ」

鈴音もあずさも、何も言葉を発することは無い。

鈴音は本当にそんなことが有り得るのかという驚きと、だからこそ歪な信頼関係が生

まれているのだという納得。

あずさは友人だと思っていた人物の残忍性と狡猾性を知った衝撃と、それを知っても尚以前のように接することができるとかという葛藤。

達也も真由美も深雪も、その二人の様子をただ黙って見ていた。

そして復帰が早かったのはやはりというべきか、鈴音だ。

「そういう経緯があつたからこそ、会長は絹旗さんが考えも無しに行動することは思えないと考えているのですよね？」

「そうよりんちゃん。だからこそ送られてきた手紙の意図が理解し難いんだけど」

「確かに今の話だと絹旗さんの行動には矛盾がありますが、絹旗さんを信じている根拠は理解できませんでした」

真由美がまだ何かを隠していることは鈴音も理解している。

しかしここが引き際であることもまた理解しているため、それ以上の深入りをすることはしなかった。

その見極めこそが十師族と関わるうえで重要な能力であり、鈴音に限らず摩利も身に付けている能力である。

「しかし会長たちが一杯食わされるなんて絹旗さんは相当頭がキレるみたいですね」

「そうね。絹旗さんの長所と短所、そして私たちが絹旗さんに何を求めているのかを把

握する能力がズバ抜けているのだと思うわ。判断力、対応力、適応力、反射神経とか言
いは色々あると思うけど、とにかく普通に過ごしていてあんな力が身に付くことな
て絶対ないわね。それと——」

そこで途切れた言葉と共に、視線はある一人の人物へと向けられた。

話を聞いてからずっと俯いているこの場で唯一の二年生、中条あずさだ。

覚悟があつたとはいえ、今まで親しく話していた友人が実はそんな残忍性を持った人
でしたと言われてすぐに折り合いが付けられる方が間違っている。

むしろこうやって悩んでいるあずさの姿は好ましいとすら言えるだろう。

それから数十秒と時は流れて、

「私は……」

ぼつりとつぶやくように、あずさは続けた。

「私は、正直に言えばその話を絹旗さんから聞きたかったです。すぐには無理な話です
が、近い未来に本人の口から直接。でもそれが無理な話だということも分かっています。
私は九校戦で初めて絹旗さんとお話したのですから、そんな大事なことを話せる
間柄ではありません。だから……だから、次こそは絹旗さんからそういう話を話して
くれるように努力します」

「あーちゃん……」

最初は呟くような音量から、しかし顔を上げて強い意志でそう言い切ったあずさに真由美は優しい微笑みで迎えた。

普段はオドオドと小動物のような様子を見せる彼女とは似ても似つかないその姿は、十師族や三巨頭と言った面々に並ぶ生徒会の看板を担うに相応しいものだ。

少なくとも達也は、あずさの話を聞きながらそう感じた。

「よし、とりあえずこの話はここでおしまい！ まだやることは沢山あるんだからね！」
「そうですね。まずは月末に行われる生徒会選挙についてですが——」

話し合いの結果、次期生徒会長はあずさが今まで渋っていた態度を一変させて立候補という形で決着がついた。

本来なら副会長である服部と競争という形になるのだが、服部は次期部活連会頭入りが決まっていることもあって選挙は信任投票という真由美の思惑とは別にあっさりとした結果だとも言える。

論文コンペについては以前から決めていた通り鈴音が主体的に行うとして決定し、今日は解散。

帰路についた達也と深雪だったが、校門の前で見知った顔を見かけたために足を止め

た。

「あれ、ほのかと雫じゃない。誰か待っているの？」

「あ、深雪。うん、あのね……」

「何かあったのか？」

何処か様子がおかしいほのかに達也は事情を聞くが、何か理由でもあるのか口籠った様子を見せる。

その代弁は、雫が行ってくれた。

「今日、最愛から連絡があった」

「……学校に来るってやつか？」

「え？ 達也さんにも連絡が来た？」

「俺には来てないが会長の元には来ていたらしい。そのことで今日少しだけ話をした」

「そうなんだ」

「それで、最愛は何て言っていたの？」

「聞きたいことがある。今日の夕方七時に校門の前で——これだけ」

聞きたいこと。

雫とほのか、最愛はいつも一緒に行動していたため改まって聞きたいことがあるというのは些か違和感がある。

何か裏があると考えた方が良いのか、それとも本当に聞きたいことがあるのか。それに約束の時間までは、もう五分も無い。

「お兄様」

「そうだな——ほのか、雫。俺達もここに残ろうと思うが大丈夫か？」
約束の時間も近く、そして何より最愛の意図が読めないこともある。

最悪の事態を想定するならばのかと雫では最愛に勝てないという達也と深雪の思考の一致で、そう二人にお願いしたまさしくその瞬間だった。

「そうですね。お願い——」

「私は二人が居て良いなんて超言ってませんけどね」

「——ッ!?!」

聞き慣れた声で、でも内容は否定的で。

今回ばかりは浅慮だったかもしれないと、達也はその声を聞いて断じた。

ターニングポイント

「そこまで超警戒しなくて良いじゃないですか。まあ達也と深雪がどうしても私と遊びたいというのなら超構いませんが、どうしますか？」

夕日が差す日常的な学校のページが一触即発の張り詰めた雰囲気へと切り替わる。あまりの急な展開に雫とほのかは付いていけず、達也と深雪はCADに手をかけようとしてしまっていた。

それ程までに今の最愛は怖いと、達也と深雪は直感したのだ。

同時に最愛が本当にその気であるのなら既に戦闘が始まっていても可笑しくはない状況下でもある。

その選択肢を達也に託している以上は、話し合いをするのが得策なのは間違いない。た。

「すまない。俺達に争う意志は無い」

「そうですか。まあこちらとしてもそっちの方が超有難いですから」

最愛と戦うのはあくまでも最悪の状況になってから。

それは初めから決めてある以上、達也と深雪も自ら吹っ掛けるようなことはしない。そこは最愛も同じ考えだ。

「まあ達也と深雪にも後で用事がありますから超安心してください。校内にも用事があるので、ほのかと雫にはここで超待っていて欲しいです」

「分かったけど……校内？」

「俺達はどうすれば良い？」

「時間があるなら私が超戻るまでは一緒に居て欲しいですね。私達の話聞いても良いという意味ではなく、通り魔から超守って欲しいという意味で」

「……変な意味じゃないよな？」

「通り魔という言葉と通りかかりの魔法師を超冗談っぽく言っただけなので気にしないでください。超追われるようなことはたぶんやっていませんから」

「たぶんって……」

手をヒラヒラと振りながら校舎へと向かう最愛の態度からして通り魔が来るというのは冗談だということは分かるが、それにしてもその冗談を使うタイミングは非常に悪い。

しかもたぶんと付け加えている以上、現在は足が付いていないにしても何かしらに追われることをやったことも推察できる。

そうなると達也としては何をやったのが気になるどころだが、後で話す時間を作るというのならその時まで待つしかない。

「最愛が無事で本当に良かった……」

「うん。心配だったけど元氣そうで何より」

ただほのかや雫のように、心の何処かで最愛の無事に安堵している自分がいるというのも確かだった。

達也としては非常に不思議な感覚だ。

これが感情なのかと問われれば否と答えるが、これが何かと問われれば答えることができない。

答えが出ないもの程好奇心をくすぐられるものだが、そちらに気を取られては万が一ということもあるため今は思考の端へと寄せなければならぬ。

最愛の言っていた通り魔が本当に来ても対処できるように目を光らせながら、四人で最愛の帰りを待つ。

「そういえばほのかと雫は最愛に呼び出されたことに心当たりあるのかしら？」

「心当たりがあると言えはあるよ。でもありすぎてどれのことを指しているのかは分からない」

「心当たりがある中で一番可能性が高いのはどれだ？」

「たぶん最愛の家族についてだと思う。でもそれを私たちに聞いても意味がないことは最愛も分かっているはず」

それは達也も雫から聞いたことだ。

雫が知っていることは本当に表面上のことだけであり、それ以上のことは本当に何も知らない。

達也の情報入手経路の異常性を考慮したとしても、少し探れば知ることができても知らないのだから相当だろう。

そしてそれは当然最愛も分かっているはず。

だからこそ目的が分からないのだ。

雫とほのかに何の用事があるのか、校内に何の用事があるのか。

何故姿を消して、何故このタイミングで姿を現したのか。

全てが謎であるが故に話題の種は尽きることはない。

それこそ最愛の用事が終わる程度の時間、あつという間に過ぎる程だ。

薄暗い校舎から分かりやすいシルエツトが三人分確認できた。

「あれは十文字会頭と七草会長……ですよね？ どうして最愛と一緒にいるのでしょうか」

「分からない。ただ、最愛の用事というのはあの二人で間違いないな」

達也としては関係性もあつて意外と見慣れてしまった組み合わせでもあるが、雫やほかからして見れば全く理解できない組み合わせだろう。

達也たちの存在に気が付いたのか、真由美も少し険しかった表情を柔和にさせて小走りに近寄ってきた。

「あら達也くん。まだ帰ってなかったのね」

「ええ、校門でバツタリと最愛に会っちゃいまして、ここに居て欲しいと言われたので待っていました」

「そうか。なら俺達は先に帰るとしよう」

「ええ、そうね。達也ちゃんと深雪さんはまた明日。北山さんと光井さん、絹旗さんもまたね」

あくまで対立した様子は見せないのは流石というべきか、それとも本当に対立が無くなったのか。

判断を付けることはできないがヒラヒラと手を振りながら帰路についた真由美と克人を見送って、校門で待っていた四人が最愛へと視線を向ける。

「校内への用事というのは会長たちか？」

「それはまた後で超話します。達也たちは先に帰っていてください」

「深雪や達也さんには聞かれたらダメな内容なの？」

「私は達也と深雪のために超言っているんです。二人がほのかと雫に聞かれても良いと言うのなら二人の用件もここで超済ませちゃいますけど——」

「そういうことなら分かった。深雪、帰るぞ」

一瞬、深雪がハツとしたような表情を浮かべ、達也の雰囲気が変わったのがほのかや雫にも分かった。

本当に僅かながらの、しかし普段の二人の冷静さからは想像もできない程の動揺と警戒。

最愛が達也と深雪に関して何かしらの情報を掴んでいると理解するのは容易だった。

「それが超賢明です。また後日連絡を入れるので、その時に超ゆつくりと話しましょう」
「そうしよう。ほのか、雫。また明日」

お互いに別れの挨拶だけ済ませて、達也と深雪は長い一本道を下って行った。

校門の前に残ったのは、ほのかと雫、そして最愛の三人だけ。

達也、深雪の二人と一瞬不穏な雰囲気になったことから言い様も無い緊張感が漂う中、

「二人とも超久し振りですね。相変わらず仲が良くて安心しました」

最愛の第一声があまりにもいつも通りで、それこそ夏休み前に並んで帰っていた放課後のような声音で声をかけてくれた最愛に、ほのかは勿論のこと普段は表情に乏しい雫

でさえもその表情に安堵と涙を浮かべた。

「私たちも安心した。本当に元気で良かった」

「急に居なくなっちゃって本当に心配したんだからね！ 七草会長も十文字会頭も全く探そうとしないし、私たちが探しに行こうとするのも止められるし！」

「それは超申し訳ありません。あの二人とは九校戦関連で超色々あったのは二人とも知っていると思いますが、そこを超詳しく話すと長くなりそうなので居なくなつた理由とかも含めて今度、近いうちに必ず話します。それで超大丈夫ですか？」

「分かった。最愛は約束を必ず守るからそれでも良い」
「超助かります」

言いたくないことは絶対に言おうとしないし、気に入らなければ目上の人だろうがそれこそ十師族であろうが関係なしに突つかかる。

良くも悪くも最愛はハッキリとした性格であり、それをほのかと雫も良く分かっている。

だから最愛が何かをずっと抱え込んでいると分かっているても、最愛から話さない限り二人から聞くことはない。

当然時と場合、内容によっては問い詰めるときもあるし、今回も問い詰めようとは思っていた。

しかし最愛が近いうちに必ず話すというのであれば、それを信じて待つだけだ。

「今回二人を呼び出したのは二人に超聞きたいことがあったから、というの二人も分かっていると思いますが——あ、超安心してください。詳しいことはともかく、絶対に答えられる質問ですから」

呼び出した理由を改めて話し始めた瞬間に二人から若干の身構えを感じた最愛は、その警戒を解くかのように宥める。

恐らく二人も無意識だったのだろう。

最愛に言われて驚いたような顔をしながらも、申し訳なさそうに最愛を見た。

しかし二人が無意識に身構えてしまったのも仕方ないだろう。

それほど今の最愛は優しく、そして不安にさせられるような雰囲気も携えていたのだ。

「なんか今の最愛を見てると心配する」

「うん。何と言うか、危なっかしい……みたいな感じがする」

「二人の感覚は超間違っていません。状況によりますが、これから超危険なこととする可能性がありますから」

「……それはやらないといけないことなの？」

「やるかやらないかで答えるのなら超やらないといけないことです。そしてそれをする

かしないかを判断するための超材料となるのが、今からほのかと雫に聞くことですね」
「もし答えない場合は、どうするつもりなの？」

「勿論その超危険なことを行います」

最愛にとつて今から行う質問をする意味は本来ない。

二人に質問をしても納得の行く回答が得られる可能性は低く、何よりこの質問をするべき人物は本来別にいる。

二人に質問をしているのは最愛なりの気遣いという面も大きく、場合によつてはこれが二人と会える最後のチャンスになるかもしれない可能性があつたからだ。

もしここでその道を辿るような回答が出るのであれば、最愛はここで未来永劫に渡る絶縁を言い渡すつもりでいる。

それだけ最愛の決意は固く、別れをしっかりと口にするのが二人に対する最大限の誠意だと感じているのだ。

「それでは超本題に入りましょう。先程も言つたように質問は超単純で間違いなく答えられるものなので安心してください」

危険なことをやると言われて身構えるな、とは最愛も言わない。

ただ求める答えが来るように、予想している答えが来ないように願ひながら——。
「二人共、入学式の時を超覚えていきますか？」

「私と雫で最愛の家に行つたけど誰もいなくて、一高に向かったら校門を過ぎたところに一人でいたよね。もちろん覚えてるよ」

「会つたことは無かつたけど——写真では知つていたよ」

そしてその瞬間はついにやってきた。

「そこです」

最愛はこの世界に存在していない。

どれだけこの世界に最愛が存在していたという証拠が揃えられていようと、心の奥底まで刻まれた傷は過去の記憶は消すことができない。

しかしそれは最愛だけが認知できるものであり、最愛以外が認知できるところでの大きな矛盾は存在していなかった。

今、このときまでは。

何度も言うが、最愛はこの世界に存在していなかった。

それなのに、ほのかと雫は入学式の際写真を頼りに最愛だと判別したのだ。

つまりその写真に写っているのは最愛本人に間違いないのだろう。

だが問題は学園都市とこの魔法の世界の両方がパラレルワールドのように存在していると仮定した時、つまり最愛がこの世界にいることになるのは入学式直前からということになる点だ。

それこそがこの世界に残る明確な矛盾。

一体いつ、何処で撮られたものなのか、そして何処から手に入れたのか。

たとえそれらがわからなかったとしても、最愛を認識できた以上その写真に写っているのは間違いなく最愛なのだろう。

しかも幼少期ではなく、最愛だと分かる直近の姿が写し出されている可能性が高い写真。

二人とも質問に答えられることの確認も取れたことで、最愛は意を決して質問を祈り紡いだ。

「二人が見ていた写真。その写真がどういうものだったのかを超教えてください。それが聞きたかったことです」

「どういうものかって、最愛が写っていた普通の写真だったよ?」

「その写真は超いつくらいですか? 背景は超どうでした? 他に誰か超写っていますか?! それにその写真を見たのは——」

「ストップストップ! そんなに一気に聞かれても答えられないよ!」

ほのかに言われて、ハッとする。

動揺が悟られないように努めてゆったりと話していたはずなのに、いざ蓋を開けてみれば無様にも余裕がないことを露見させてしまっている。

と、ここまで考えて、再び最愛は首を振った。

「すみません。二人の前では超冷静でいようと思っていました。やっぱり私は超焦っているみたいですよ」

ただ親戚というだけ、北山潮に仲良くしてほしいと言われただけ。

写真でしか姿を知らず、明らかに問題しかないような人物にここまで無償の友誼を結んでくれたのだ。

最後までいいは、弱い自分を見せるぐらいはしても良いだろう。

「もしかしたら気が付いているかもしれないかもしれませんが、私は自分が生きるためなら人を殺すことすらも超簡単にできてしまうほどには超自己中心的で、都合が悪いことから目を逸らす超薄情者で、自分のことを誰かに話すのが怖いほど超臆病者なんです」

「違うよ——と言つてあげたいんだけどね」

「それを否定できるほど私たちは最愛を知らない。映画が好きだったことも、BS魔法師であったことも、そして強いと思つていたのに臆病な性格だったことも、本当に何も知らなかった」

「おかしいよね。三か月間ずっと一緒にいたはずなのに」

あれはいつ以来だろうか、人の嘘偽りのない本音というものを久しぶりに聞いた気が

した。

——今考えてみればアイツも、ずっとこんな気持ちで接してきていたのかもしれない。
い。

——だから、アイツが好ましかつたのだろうと。

「私が言おうとしていなければ分からないのは超当然です——話が超逸れました」
思えば、最愛は今までずっと逃げ続けていた。

この能力を手にした時からずっと死と隣り合わせの世界で、ただ死にたくない、生にしがみついた。

それは人として当然だとは、今も思っている。

しかし、こんな自分を好いてくれている人がいる。

心配してくれている人がいる

それがどれだけ心地の良いもので、どれだけ渴望していたもので。
どれだけ、心苦しいものだったのか。

「一つずつ質問をするので、分かる範囲で超答えてください」
だからもう、最愛は逃げない。

それが絹旗最愛という一人の少女がつけた覚悟だ。

絹旗最愛

「はあ~~~~~!」

最愛と別れてからというもの、真由美の調子はずっとこんな感じだった。

原因は勿論最愛にあるのだが、純度百パーセント最愛に原因があるかと言われればそうでもない。

むしろ、今回に限って言えばとある人物と折半と言ったところか。

思い出すのは数分前の出来事。

音信不通の状態からついに学校へと顔を出した最愛から聞かされた、七草家の者としても生徒会長としても看過できない内容だ。

「お父様は一体何を考えていらっしやるのかしら」

真由美の父、七草弘一ななくさこういちが最愛に取った行動は本来監視のみを目的としたものだった。

しかし監視行為は真由美と結んだ契約の違反にあたる。

監視行動をとられた場合の最愛の行動は一つで、その言葉通り監視者は最愛の手によって抹殺された。

弘一も真由美の契約のことを知らない訳ではない。

ただそれを聞いた上で子供じみた脅しだと嘲笑をもつて断定し、反抗期の娘でも見るかのように嘲りながら興味本位で手を出したに過ぎないのだ。

まさか本当に抹殺されるようなことになるとは思つてもいかなかった。

だが反対に、容赦なく手を出す口実ができたとも言えよう。

事の顛末は当事者である最愛から、全て聞かされた。

最初は人気がないところに限定して比較的友好的に——勿論拘束が目的なので友好的も何もない——接してきていたが、最愛が断れば待つてましたとばかりに強硬手段へと出始めたのだ。

そして強硬手段に出られれば、最愛も当然容赦はしない。

どれだけ人を出しても成果を得るところか人員を失うばかりで、余裕だと思われていた最愛拘束の任務はいざ蓋を開けてみれば被害のみ甚大成果零。

七草家の面子は完全に丸つぶれだ。

既に退くことの出来ない状態にまで行っているらしく、完全に抗争状態へと突入しているらしい。

らしい、というのは真由美もそんなことになっているというのを生徒会室で最愛によつて初めて聞かされたからだ。

少し前の記憶を遡り、強烈な寒気を感じて小刻みに震えている身体を軽く抱きしめ

る。

生徒会室では話が進む度にゆっくりと心臓を握りつぶされていくような感覚に陥っていた。

要は最愛の行動一つで真由美の命運は決まるも同義だったのだ。

実際生徒会室では克人と一緒に居たのにも関わらず生きた心地は全くしなかったし、克人ですらも最大限の警戒を以て対話に参加していた。

もしここで最愛と敵対したとして、果たして自分は勝てるだろうか。

それは真由美だけではなく克人にも問われていた自問。

克人がどういう答えを持ったかは分からない。

ただその場で言えたことは、最愛の実力は今尚未知数でありながらも十師族の刺客達を無傷でいなす程度には強いということ、そして最愛は現状克人や真由美を同時に相手取っても勝てる可能性があると思わせるような力量を示しているということだ。

結局、最愛は手を出さなかった。

今この状況は、自分たちの落ち度で七草の令嬢を人質に取られてしまったと思わせる向こうにとって超心臓に悪い時間です、と悪戯っぽく笑う少女。

本来の目的は雫とほのかに会うことだが、七草家からしてみればその目的は真由美にあると思うだろう。

最愛がそう思うように仕組んでいるのだから当然と言えば当然だが——。

その笑みには何処か儂さが携えられており、より真由美の罪悪感を増幅させていく。

どうして姿を晦ましたのか、どうして七草家に手紙を送りつけたのか、そもそもどうやって手紙を送ってきたのか、最愛はどういう意図で今回のことを引き起こしたのか、罪悪感やその場の雰囲気から一切聞くことはできず、克人ですらもついで聞くことはできなかつた。

真由美には理解ができない。

七草の威信にかけて最愛の行方を追っているのは分かるが、そもそも最愛を拘束しようとする理由が分からない。

真由美には意味が分からない。

最愛はどうして九校戦の時に姿を晦ましたのか、七草家に手紙を送りつけたのか、そこにどんな意味があるのか分からない。

しかしできない、分からないだけではもう済まないところまで来ているのだ。

今この時間も最愛は七草家の刺客に狙われているのだろう。

いくら強いとはいえ、既に一月以上も狙われ続けているこの状態ではいつ最愛に限界が来るかは分からない。

だがどうやって自分の父親を止めれば良いのか、それもまた分からない。

分からない、分からない、分からない。

こういったイレギュラーな状況下で全く動けない自分に苛立ちを隠せないが、それでも黙ってみていることなどありえないことだ。

(頼るならやはり、十文字くんね……)

まずは協力者を募るところから。

先ほど別れた許嫁を思い出しながら、真由美は早速連絡を取り始めた。



最愛は後日、とは言っていたもの、雫とほのかの話で何か得るものがあつたのかすぐに家に何う旨を伝えられた。

急な展開ではあるが、別に予想していなかった訳でもないため変なものがないかだけ念のため確認しつつ、達也は予定通りに来た最愛を出迎える。

「思ったよりも早かったな」

「ええ、超スムーズに家に送り届けることができたので問題はありません」

「問題はない、か」

違和感は一瞬。

最愛の言葉にではなく、その背後だ。

ただ結論はその違和感を覚えた瞬間には出ている。

これはあくまでも確認に過ぎない。

「……つけていた三人はどうした。一高の前では手を出す素振りがなかったしこちらに敵意もなかったから何もしなかったが、奴らが最愛の言っていた通り魔なのだろう?」
「ああ、その三人は超片付けておきましたよ。そちらの方が達也たちにとつても都合が良いでしょう。そんなことより、超早く中に入れてください」

「——ああ」

片づけた。

文字通り、この世から消し去ったのだろう。

分かり切っていることを詰めるのは時間の無駄であることは明白であり、周囲に誰もいないことを手早く確認した達也はその光景を見られたくないとばかりに手早く最愛を招き入れた。

本来、達也たちが最愛を家に招き入れることなど絶対にあり得ないことだ。

しかし今回に限って言えば達也たちの家の中こそ話し合いの場所として最も適当な場所であり、事実として最愛も達也と深雪のために申し出ている。

多少手の内を明かすことにはなるかもしれないが、最愛の含み的に間違いなく達也と

深雪の闇の部分に触れてくることだろうと確信に近いものを得ている以上下手に聞かれるよりはデメリットが少ないのだ。

案内されるがままにソファアーへと座った最愛は、深雪が用意した冷たいお茶を半分程度まで飲み、二人へと向き合う。

「それで、まずは何から超話しましょうか」

「そうだな。まずは最愛を追いかけていた三人についてだ。賊——という訳では無さそうだが、あの三人が何者なのかは見当ついているのか？」

「ああ、そいつらは七草家の刺客ですよ」

「……なんだと？」

最初ということもあり軽いジヤブのつもりで聞いた質問だったが、早々にとんでもない地雷を踏みぬいてしまった。

まさかの大物に達也は大きく眉を顰め、深雪は口元を抑えながら目を見開く。

十師族が個人を狙って動いている。

そして十師族を相手にしながらもその全てを最愛は退けている。

その二つの事実だけでも、確かに外では話せない内容になるだろう。

「心当たりはあるのか？」

「超心当たりしかありません」

「それは七草会長と何か関係があるものなのでしょうか？」

「半分関係があつて半分関係はないです。ただ、超利用させてもらっているのは間違いないですね」

利用させてもらっている、というのが何を指しているのか二人には分からない。

最愛の行動については達也ですら読み切れていない部分があり、達也が知らないところでのいつの間にか罠に嵌められていた、ということも少くはなかった。

その最たる例が最愛が九校戦に参加する理由となつた練習試合だろうか。

あの時達也はまんまと最愛に嵌められ、最愛のCAD作成に関与することになつただ。

そしてそのCADは今現在も最愛の手元に、それこそ刺客達を撃退するために使われてきているのだろう。

敵に塩を送つてしまったのかもしれない、という考えが久方振りに蘇ってくる。

「今日学校に来たのは何が目的なんだ？ 雫やほのかに改めて聞くななんて回りくどいことをする理由も分からない」

「それを答える前に、今度はこちらの質問に超答えてもらいます」

流れは渡さない、とばかりに最愛も反撃に出た。

そもそもの話として達也の家で密談することを認めてしまつている以上、会話の主導

権は最愛が握っている。

質問をされたら答えなければ達也たちに不都合が生じるのは目に見えているのだ。

「答えられる範囲なら可能な限り答えさせてもらう」

「達也は以前私と約束したことを超覚えていますか？」

「……すまない、どれのことを指しているんだ？」

数が多いから分からない、という訳ではない。

ただ、蜘蛛の糸に縋る気持ちで惚けてみせただけだ。

「ブランシユのアジトです。忘れた、とは超言わせませんよ」

——不味い。

達也の直感がそう告げていた。

蜘蛛の糸はいとも簡単に千切れてしまったのだ。

深雪もその場にいたため、表情が一瞬で硬くなっている。

あの時最愛の「裏」を止めた達也の一言を最愛はしっかりと覚えていたのだ。

「……可能な限り融通する、だったな」

「ちゃんと覚えてくれてるように超安心しました」

冷静さを欠いていたためにもう忘れてしまうものだろうと思っていたそれを、まさかこ

こで蒸し返してくるとは思わなかった。

主導権どころか先手すらも取られてしまい、達也の頭は急激に冷え切っていく。

融通を利かせる範囲内は可能な限り、と言っているが、現在最愛が握っている情報によつては絶対的な効果を発揮するだろう。

「俺も言われるまで忘れていたのに、よく覚えていたな」

「私がどうという人間か、そして元々はどうという関係性だったのかを超考えた方が良いでしょうよ」

言外に「惚けるのもいい加減にしろ」と言われているのがよく分かるような口調でそう告げられ、今度こそ身の振り方を弁える。

達也と最愛の関係性。

今でこそ友人と言うに足るほどの関係性になってきてはいるが、それでも最初は犬猿の仲と言つても差支えがないものだった。

実際に二人とも警戒心を緩めていたのは事実だ。

しかし再び暗闇に身を置き始めた最愛とずっとその関係が続けていきたくった達也とでいつの間にか認識の相違が生まれてきてしまった。

そこを達也は突かれてしまったのだ。

「私の質問は一旦終わりです。私の次の質問は超最後にしますので、他に超聞きたいことがあつたらどうぞ」

最後にする。

つまりその質問をした時、達也と深雪、そして最愛の立場が明確になる時であり、それ以上話すことができない状態に陥る時でもあるのだろう。

質問を慎重に選ばなければ、強制終了ということもあり得る。

「それならこちらも容赦はしない」

「ええ、超立場を弁えたうえで、いくらでもどうぞ」

「留意している。あくまでも話し合いで———だろ？」

達也の脳裏には実力行使で最愛を黙らせる手法も浮かんではいた。

はつきり言つて達也が本気を出せば最愛を抹殺することなど容易にできることだ。

そして今最愛は司波家に来ているわけで、現場の証拠から犯人が達也たちであると断定できる要素も何一つない。

残さない自信もある。

身元もはつきりしない人が相手なら卓につくこともなく情報だけ絞り取つて存在を消すところだが、そこは最愛、しっかりと手を打っていた。

最愛が雫とほのかに会つた直後をあえて選んで司波家に来ている、という点からも想像が付くが、最愛は二人に次に行く先をしつかりと伝えているのだ。

それだけでも達也は最愛に手を出すことができない理由に繋がる。

達也と深雪の元へ行くとだけ言ったのならまだ言い訳が通るが、用件が終わり次第筆とほのかに連絡をする、などという生存報告の約束をしていたらそれだけで達也と深雪の立場は危うくなる。

ここからどう動けば平穏な生活が送れるのか、そんなことは最早考えても無駄だ。ならばこれからはどうしたいのか、最愛との関係をどうするのか、そこを考えていくべきだろう。

そのためにも最愛が何をしたいのか、何をしようとしているのか、それを知るためにはここで聞くべきことを聞いておく必要がある。

「雫とほのかとの話で成果は得られたか？」

「確証というほどでは超ありませんが、一先ずは良い成果だったと思います」

「その良い成果というのは、俺や深雪にとって都合が悪いもの——いや、回りくどいのはやめようか」

ここまで来てもお互いに話せないことはある。

しかし、ある意味では腹を割って話す良い機会だろう。

「結局お前は俺たちにとって、敵か、味方か、どっちだ」

達也にとって、一番重要なのがそれだ。

味方と言うのならとりあえずは信じるが、もし敵だというのなら次会う時は間違いな

く——。

「現状は超中立です。その選択肢の一端を超握っているのがこれからする質問——というよりは超お願いですか。まあどちらでも良いのですが、それ次第です」

「敵になるのも味方になるのも俺たち次第、という訳か……」

中立。

なんとも困る言い回しだろうか。

ただし最愛としても事実なのだからこうとしか言いようがない。

「敵か味方か、そこが超気になっているようですね」

「当然だ。深雪を害する奴はたとえ知人だろうと容赦しない。俺にとっての最優先は深雪だ」

「お兄様ったら……」

そこで照れるのは超違いますよ深雪、とは流石の最愛も突っ込まなかった。

それにしても——と、改めて最愛は達也の目を見る。

たった今達也は最愛を知人と称した。

そう、友人ではなく知人だ。

二人の間にあつた溝が再び広がってきている証拠であり、再び空いてしまった溝は埋まりかけていたという余波もあって以前よりも大きくなっていく。

「次だ。七草家に何をした」

「手紙を送りました。ここが先ほど真由美を利用した部分に超あたります。具体的な内容は——そうですね、どういう形であれ全て終わったら超お話ししましょう」

「内容やその手紙を送る行動理念については理解できないが、七草家の行動はだいたい予想は付く。その手紙を読んだ七草家当主が最愛に興味を持ち、監視しようと手配を行った結果最愛と七草会長の契約に抵触、そこから抗争に発展したという訳だな」

「流石は達也ですね。超ご明察です」

「……いつからだ？　こうなることを予測していたのは」

「最初から——と言ったら、超信じますか」

有り得ない、などと断定できないのが怖いところだ。

最愛の行動にはちゃんと目的がある。

今までの行動全てがその布石だとしたら——。

流石にそれはない、と思いたい。

そこまでできるのなら最早未来予知と同義であり、もし敵対することになったら外間を捨てて本気で挑まなければならなくなるだろう。

そしてその時に対峙するのは、絶対に達也一人でなくてはならない。

それ以外の人が、たとえば深雪であったとしても殺し合いという面において絶対に最愛

に勝てるという確証をおけない程度には、最愛のことを評価しているのだから。

「最愛の対処法について思考を動かす達也はふと、隣に座る妹の雰囲気はどこかおかしいことに気が付いた。

「それじゃあ最愛は……」

「はい、なんですか深雪」

最愛に促されて、どこか躊躇するかのように顔を伏せる深雪。

「どこか不安げな様子は、この質問が最愛にとつて意味のあるものだとは分かっているからだろうか。」

「最愛は、私やお兄様はともかく、ほのかや雫、他の皆とも打算でお付き合いをしているということなのですか？」

「そんなこと、ある訳ないじゃないですか……」

間違いなく、今時が止まっていた。

そして時の歯車が動く合図は、プチッと最愛から幻聴してきた音だ。

「深雪には超分かりませんよ……いつ死ぬかも分からないような場所で、敵も味方も、依頼主ですらも超信じられないような環境にいて！　ようやく手に入れられた光を打算一つで簡単に捨てられる訳がねエだろオが！」

その質問こそ、最愛にとって最大限の地雷だ。

「何も怯えるものがないなら最初からオマエらとこんな関係にならねエンだよ！　ああ、一高に入学してからの毎日は確かに楽しかったよ！　間違いなく毎日が充実してた！　不覚にもずつとこのまま時間が続けば良いとすら思った！　ああ、柄にも無く思ッ

たよ！ でも毎日が充実して行く度に、自分がオマエらと関わる資格なんてないクズ野郎だつて嫌でも自覚させられンだよ！ こツちだつて出来ることならツ——」

その先の言葉を、最愛は無理矢理飲み込んだ。

それ以上は何かを言つたところでもう変わることがない理想。

まだ捨てきれない苛立ちを、しかし他人の家ということもあり物に当たることもせずただ握りこぶしを作つて何とか発散している形だ。

それでも苛立ちを抑えることはできず、中途半端に吐き出してしまつたが故に様々な想いが込み上げ始め、ついにはその頬に一筋の光が伝う。

「最愛……」

今までとは違う自身の弱みを全て吐き出すような激昂に、達也は静かに尊敬の念を最愛に向けた。

彼女はずっと一人ぼっちだったのだと、嫌でも理解させられたのだ。

表だけを見れば皆が言うだろう。

ほのかがいる。

雫がいる、と。

でも彼女たちは本当の意味で最愛を知らない。

ただ親戚だけで、怒ると口調が変わるようなことすらも知らないのだろう。

誰に追われているかは分からない。

だが七草家の刺客すらも振り切る最愛をして、いつ死ぬかも分からないような場所と形容されるところにいたとするのなら、歳不相応の駆け引きや警戒心、からめ手の練度にも納得がいく。

達也ですら知らない危険な世界を、最愛はたった一人で生き抜いてきたのだ。

全員が思う、絹旗最愛という少女。

孤高で、唯我独尊で、才色兼備で、ユーモアもある。

しかしそれはただの虚像にしか過ぎないものなのだ。

本当はとて臆病で、自己中で、そんな世界に身を置きながらも仲間想いな優しい少女。

それが本当の、絹旗最愛。

「……質問は超終わりです。今度はこちらをお願いを超聞いてもらいます」
「ああ、分かった」

能力や魔法など、詳しいところは結局のところ分からない。

それでも達也と深雪は、今の最愛が本当の最愛であることを理解した。

歳相応の弱さを抱えた少女。

歳不相応に抗って見せている少女。

勿論それで深雪を害するのを容認するかと言えば絶対にあり得ないことだ。

しかし、もし最愛との仲を取り戻すことが可能ならば――。

「四葉家。その当主である四葉真夜に超連絡を入れてください。絹旗最愛が四葉家に接触してきた、と」

「もう、そこまで知っているんだな」

——その時は、お互い包み隠すことがないかけがえのない親友として迎え入れられるだろう。

過去

願い事が聞き入れてもらえたと分かった最愛は、早々に司波家から離れていった。

それは最愛がこれ以上司波家にいたくなかった、という個人的な理由などでは決してなく、長居しては達也と深雪にも七草の手が及ぶ可能性がある、という至極真つかな理由によるものだ。

事実最愛はここに来る前に三人の追っ手を始末している。

追加投入されるのは時間の問題であり、それは達也たちとしても避けたいものだ。

それでも達也たちは、せめて最後まで最愛の姿が闇夜に紛れるまで背中を見送った。

全てが終わった時に次はお互いが胸を張って再会できるように、そう願って――。

最愛の姿が闇夜に紛れたのを確認した二人は先の話し合いと同様にソファーへと腰を掛け、嘆息する。

「申し訳ありません、お兄様……」

「どうしたんだ深雪。何かあったのか」

「実は私、最愛が一人で戦っていたのを知っていたのです」

静寂を破ったのは、謝罪の言。

あまりにも脈絡が無かったがために達也としても何を謝っているのか分からなかったが、その続く一言によつて閉口せざるを得なかった。

「実はブランシユの一件がある少し前に、最愛が先生のところに来たんです。その時最愛は魔術師なるものを知らないかと先生に聞いていました」

「魔術師……魔法師ではなく魔術師と最愛は言つたんだな？」

「はい、先生も同じように聞き返しましたが、魔術師で間違いないと。それで魔術師は知らないと先生が言つた瞬間、最愛は何かから解放されるかのように崩れ落ちました。今の最愛を見ると、今回の件も恐らくその魔術師というものに何か原因があるのかと思ひます」

「……基礎単一系魔法を使つたコンパイル制御の授業の日の前日か。その日から最愛に棘が無くなつたし、深雪も何か知つていたようだったからな」

「流石はお兄様ですね。どうやら魔術師というのは戦う前に魔法名というものを名乗るそうなのですが、お兄様は何かご存じでしょうか」

「そこまで明確な情報があるなら存在はしているのだろうか……聞いたことがないな」

相も変らぬ称賛を一身に受けた達也は、そうつぶやきながら思考の海へと向かつた。

魔術師、という名前には達也も一切の耳馴染みがない。

慢心するわけではないが最愛ですらも恐れるような相手を自分たちが知らないはずがなく、少なくともそのような危険人物を八雲が知らないなどということは絶対に有り得ない。

ただ最愛が魔術師という幻を見ている可能性もまたないだろう。

それに戦いの際に名乗るといふ魔法名がどういふものなのかも気になる。

「答えは最愛のみぞ知る、という訳か。さつき聞いておきたかったな」

「……もしかして最愛はその魔術師を探すために行動をしているのでしょうか」

「いや、探しているというよりは存在しているかどうかを確認するための行動だろう。探しているのなら師匠にする質問も違っていたはずだよ」

そう考えれば歪ながらもピースは繋がる。

こうやって目立つ行動をしているのは存在しているかもしれない魔術師を誘き出すため、または存在していないことを確定させるための行動。

矛盾しているように聞こえるかもしれないが、魔術師の存在が未確定な状況下においてはその二つが成り立つ。

「残念だけど、ここで考えていてもこれ以上の結論を出すことは不可能だな」

「そうみたいです」

「こうなったら後で本人に聞くしかない」

達也の一言に一瞬驚いたような表情を浮かべた深雪は、そのまま微笑みに変えて、

「そうですね、お兄様。最愛は必ず戻ってきますから」

「その時は俺たちのことも——」

こうなったら良いなという幸せを、二人で共有しあつた。



ほのかと雫に何を話したのか結局達也と深雪に言うことが出来なかつたが、写真についてには保留となつた。

その理由として見た写真は幼少期だつたらしく具体的に容姿について聞くことはできなかつたが、ほのかと雫が違和感のない背景だと言っていることから直接見ない限り情報は得られないという判断をしたのだ。

そうなれば頼れるのは物ではなく人だ。

では誰に頼れば良いのか。

魔法に関しては深雪や達也たちに聞けば良いだろうし、情報で言うなら八雲は力に

なってくれる。

しかしこの問題に関して言えば頼れる人物など一人しか浮かばない。

最愛を遠い親戚だと言い、何故か幼少期の写真を持っており、今もなお毎月多額のお金を振り込んでくれる友人の父親。

北山潮。

いつでも聞ける相手だったにも関わらず、核心を突く答えを持っている可能性が高かったために気持ちが付いてこなかったため聞くことが出来なかった人物だ。

彼なら何かしらの答えを持っているだろう。

そう確信しているからこそ、気持ち的に遠ざけてしまっていた。

今思えば、最短距離ならこの問題も数日かかることなく何かしらの答えは得られていただろう。

本当に遠回りしてきたものと、何と小心者だろうと最愛も思わず苦笑してしまったものだ。

そうやって物思いに耽れば、様々な記憶が蘇る。

その記憶は混乱と焦燥から始まり、喜怒哀楽や憧憬へと続き、八割の恐怖と二割の絶望へと変わった。

しかし思い出してみればやはり——

(全部超楽しかった……ですね)

見慣れたドアの前に立ち、ピンポンとボタンを押す。

記憶の中でも日常として記憶されている玄関のドア。

最愛にとつては始まりの象徴とも言えるそのドアノブが、ガチャリと音を立ててクルリと回った。

「……自分の家なんだからインターホンを鳴らす必要はないと思うよ、最愛ちゃん」

「私は超貰っただけですから。本当の家主がいるなら私は超お客さんですよ、潮」

最も見慣れたであろう自宅の玄関のドアから出てきたのは雫の父親にして最愛のこゝとを最も良く知るであろう人物だ。

何故最愛の家にいるのかと問われたら最愛が呼んだから以外の理由はないのだが、何故呼んだのかと問われたら北山家では雫やほのかと鉢合わせる可能性が高いためのも急処置案と答える。

潮も最愛が二人に聞かれたくない話をするを察して、こうやって一人で会いに来てくれたのだ。

普段なら女子高生の家に中年の男性が、などとからかいの一つでも言うような状況で

はあるが、今回に限って言えば冗談を言えるような精神状態でもない。

「登記簿謄本でもここは最愛ちゃんが所有権を持つているのだから、本当の家主も最愛ちゃんだ」

「そこは超気持ちの問題です。とりあえず玄関では超話も出来ないの奥に行きましよう。お金を貰っている側が超言うことではありませんが、おもてなしはさせていただきますよ」

「今日はいつになく礼儀正しいね。いつもなら「お金は沢山あるんだから良いものご馳走してやる」程度のことはい言いそうだけど」

「それだけ超真面目な話ということですよ」

「勿論知っているよ、最愛ちゃん」

最愛にとって潮とは、日頃の感謝もあつて非常にやりにくい相手だ。衣食住を提供してもらつており、一番近い友人である雫の父親で、一般人ながらも魔法師社会で権威を持つ実業家。

その才覚はやはり本物であり、上記の要因や感情論も相まって話し合いという場において最愛が主導権を握ることが非常に難しいのだ。

潮がソファーに座つたのを確認して、お湯を沸かしながらササツといつものパーカーへと着替える。

さらに甘味やお煎餅などのお茶請けを準備しながらお湯が沸くのを待ち、あつという間にお茶の席を完成させた。

「手際が良いね」

「普段からやっていましたから」

「そう、普段からね——良いお茶だ」

「潮の口に合うならやはり超良いお茶なんです。深雪に超教えて貰いました」

「司波深雪さんだね。雫からよく話は聞いているし、九校戦は私も見たが——」

「超異常、でしたか」

「——最初からそう評するつもりはなかったのだが、聡明なのも考え物だね。本音の先読みをするのはオジさん感心しないな」

「親睦を深めるのなら潮の建前を超聞いても良かったですが、今日はそういうつもりではないですから」

潮としてはあくまでも最愛と話をしたかったのだろうが、最愛も雑談をするために潮を呼んだのではない。

ただ緊張によって心が急いでいるのは最愛も分かっていた。分かったうえで、急かしているのだ。

そんな最愛の様子を見ながら再び一口含んだ潮は、ただただ真っ直ぐと最愛に目を向

けている。

「肩の力を抜きなさい。そんな状態では大事なものも取りこぼしてしまうよ」

値踏みされている、というのは最愛も良く分かった。

潮は上に立ち、人の上に立つ者たちと渡り合っている人間だ。

そのような人が相手に値を付けることは至極当然のことであり、最愛としても不快感はない。

だがそれでも、凶星を指されたことに対して最愛の表情は少しだけ歪んでしまった。

「急ぐなどと言わないが、普段のような掴みどころがない姿の方が交渉の場においては正装だ。今の最愛ちゃんはただ自分が求める答えだけを知ろうとしている子供ではない」

「……潮のそういうところはやりづらくて超嫌いです。正論なのが超頭に來ますね」

「その調子だ。性格上斜めに構えていた方が交渉事は上手く進むことは最愛ちゃん自身がよく分かっているはずだ」

「超丁寧にありますがどうございます。潮は親戚のオジさんとしては超良い人ですが、テーブルの席では超苦手ですね」

「私は最愛ちゃんのそういうところを買っているんだよ。雫には最愛ちゃんのような強かさが足りていないからね」

その話は聞いたことがなかったな、と思いつながらも今度は表情に出すことはなくポリポリと煎餅を食べる。

潮は最愛の事情をある程度察していて、それなりに腹を割って話してくれるだろう。

そう思えるほどの判断材料が今の会話の中にはあつた。

「まあ前戯はこれぐらいにしておこうか。折角こんな席を用意してくれたんだ。こちらからもいくつか質問したいことはあるが、君の質問には可能な限り答えさせてもらおう」

相対してみて感じる。

北山潮は歴戦の猛将だということを。

本来ならば無下にしたところで文句を言えないほどの立場の差があるのだ。

それでも最愛を一人の相手として、対等に向き合ってくれている。

可能な限り、というのがどれくらいの範囲を指しているのか分からないが、最愛が抱えている大半の答えは出してくれるだろうという確信を持てた。

「それならお言葉に超甘えて——」

だからこそ、最愛は最初に一番気になっていたことをぶつける。

「——私と雫って、本当に親戚なんですか？」

「全くの他人だよ」

予想外の即答に、最愛の中で時が止まったような気がした。

「別に予想外というわけではないだろう。君が色々と動いているのは雫から聞いている。どこで何をしているのかも分からないけど、危険なこともしているよ。だがまさか私が何も知らないとは思っていないだろうね？」

「……超秘密裏に動いていましたが、七草に追われている時点で隠し通せるとは超思っていないです」

「それは重畳だ。それでどうして七草家が一個人である君のために動いているのかは分からないが、その原因となるようなものが私にあると雫からの話を聞いて直感したよ。」

私をこの家に呼んでいるということは、やはりそういうことなんだろう」

果たして何処までが彼の作戦なのだろうか。

そう邪推してしまう程度に、一気に流れを持っていかれてしまった。

これはもう駆け引きなどではない。

完全に上下関係が確定してしまっただ。

「今までいろんな人を見てきましたがその中でも超聡明な人ですね、潮は。超尊敬します」

「そんなことを高校生に言われるとは思わなかったが、君に言われると悪い気はしない。非常に様になっている。達也くんといい、本当に高校生なのか疑いたくなるよ」

「達也を高校生とは超思いたくありません」

「同感だ、そしてやはり君もね」

「そんなことは超どうでも良いんです。どうして嘘をついたのですか」

「君を一目見たときに私の直感が引き込んだ方が良いと叫んでいたんだ。それなら遠い親戚だということにした方が色々と都合が良い」

「今みたいにね、とその恩恵の一つでもあるカップを持ち上げながら潮が言うと、最愛はごまかすようにポリポリと煎餅を食べ始めた。

そんな姿を微笑みながら見つめる潮は、娘と同じ年頃の女の子と似合わない駆け引き

を楽しんでいるようにも見える。

別に困っている姿を見ているのが楽しいとか加虐趣味があるという訳ではなく、一人の実業家として渡り合おうとしてくるチャレンジャーを歓迎しているかのようだった。

「それは超失敗しましたね。見ての通り私は超問題児ですから」

「いやいやそんなことはない。君の存在は雫とほのかに良い影響を与えたと思っているよ。だが——」

一つ言葉を区切った潮の目と会った時、最愛は初めて潮の本当の感情というのを垣間見た気がした。

「——私だけならともかく、雫に危険が及ぶ可能性が出てくるとなれば話は変わってくるかもね」

潮が雫を溺愛しているのは知っている。

故に今日までの最愛の行動は看過できないのだろう。

その秘められている怒気は凄まじく、改めてテーブルについてくれたものだと感心してしまうほどだ。

「先ほども言ったが、個人に対して十師族が総力を挙げて動くことなど通常はあり得ないことだ。私のところにも不審な動きがいくつも見られている。雫に指一本触れさせるともりはないが、魔法師では無い私だと十師族を相手取るのは難しいだろう。故に私

は問わなくてはいけない。君の何に対して七草は興味を持つているのかを」

「過去の清算です」

「過去の清算？　孤児だった君の過去に十師族が興味を示す何かがあるというのか？」

孤児。

その言葉を聞いた最愛は内心小さくガツポーズをした。

ベッドで起きる以前の記憶がない最愛にとってはこの世界の自分も孤児だということすらも知らなかった。

怪しまれないように欲しい情報を抜き取ったあたり、先ほどのショックからいつもの強かさが少し戻ってきたとも言えよう。

「その過去の産物から生まれた今の私に超興味があるようです。そして私は過去の清算をするために超動いています」

「それは大変興味深い話だな。勿論私には聞かせてくれるのだろうか？　その過去の清算とやらを」

勿論言えるはずなどない。

そもそも魔術師に殺された結果、起きたらこの家のベッドにいましたなんて言ったところでふざけるなど怒りを買うだけだろう。

だから最愛は手札を用意してきているのだ。

過去の清算という曖昧な表現を有耶無耶にする、最強の一手を。

「それはこちらで超解決するものです」

「その言い分が通らないことぐらい君も分かっているだろう」

「それを超通すためにこちらから出せるものが一つあります」

訝しげな表情を浮かべる潮を見ながら、その最強の手札を切る。

「アレン触れてはならない者たち。チャプ四葉家と北山家の橋渡しを私が超してあげましょう」

それが、最愛が潮から主導権を奪い去った瞬間だった。

愛

四葉家と北山家の橋渡し。

要は北山家が四葉家の庇護下に入るように最愛が取り計らうというのだ。

最愛の過去によって雫とほのかに危険が及ぶというのなら、それから守ればこちらが何をしようと思わなくても問題ない。

そんな無茶苦茶な理論を通すだけの商材を、最愛は持っていた。

「……………ふむ」

その提案には流石の潮といえども真偽を見極めかねている。

そこらへんの学生が今の言葉を言ったとしたら潮は笑い飛ばしていたことだろう。

時と場合によつては叱ることだつてあつたかもしれない。

しかしこれが最愛から発せられたものとなると話は別だ。

現実として十師族に目を付けられている彼女ならば、或いは四葉家との関わりを持つていたとしても不思議ではない。

「潮はこちらの動向を超見していたようですが、それでも一つだけ見破られていない事実があつたんです」

「それが四葉家との繋がりとでも言いたいのかい？ 俄かには信じられないな」
実際のところ嘘だ。

最愛の隠密の程度も素晴らしいものがあつたとはいえ、七草との衝突が起きている以上は情報落ちるわけで、潮は不足はあれど大まかに状況は把握できていた。

事実として姿を消していた期間に四葉との繋がりは一切なく、家に帰る直前によく手に入れることができたものだ。

しかしそんなことなど潮が知るはずもなく、四葉という嘘としてはあまりにも大きすぎる対象にその言葉が全て真実を前提として刷り込まれる。

信じられないというのはあくまでも方便でしかない。

「信じるか信じないか、それは潮に超お任せします」

本来この状況下において決断を急ぐのは悪手でしかない。

先ほどまでの立場がある以上、最愛が潮の胸を借りている現状に変わりはないのだ。
しかし――。

(あえてここで選択させるか……急かしている訳でもない。面倒だな)

謂わばこれは信用問題だ。

証拠を提示させる程度に最愛を信じているのか、それとも証拠がなくても最愛を信じるのか、もしくは単なるブラフか。

安定思考の経営者であれば、ゲーム理論に基づいて証拠を提示させるだろう。しかしこれはそんなに簡単な話でもない。

最愛に焦りの一つでも見れるようだったら、提示された相手が四葉家じゃなかったら。

どちらか一つでも当てはまれば潮もふっかけてみる場面だ。

嘘にしろ本当にしろ現状を一変しかねない切り札を出してきた最愛には、素直に称賛を送るしかない。

……実際のところ最愛の意趣返しでしかないのだが。

『近いうちにそちらへ超行きます。その時は超丁重に迎えてください』

突如として聞こえてきた音声は、最愛の携帯から発せられたものだ。

音質としては良くない部類のものだが、内容は鮮明に聞こえてくる。

『良いわ。もし入口にまで来られたら人を寄越します。貴女に四葉の本邸を見つけれ
る技量があるなら、正式な客人として丁重に迎え入れましょう』

『追って連絡します。それまで超楽しみにしてください、四葉真夜』

『ええ、楽しみに待っているわね、絹旗最愛さん。それで——』

プツツと止められた音声は、先ほど達也の家で録音してきたものだ。

この先は達也と深雪の名前が出てくるので切らざるを得なかったのだが、これでも内容としては十分。

「……………」

潮に言葉はない。

ただただ驚愕に目を見開き、情報を整理するのに全てのリソースを割いていた。

せいぜい四葉家の末端とコネクションがある程度だと思っていたのに、その通話相手は世界にも名を轟かせる『極東の魔女』、四葉家の現当主四葉真夜だ。

通話の音声が偽物という可能性もあり得るだろうが、その可能性は限りなく低いと潮は考えている。

ブラフにしては出てくる相手があまりにも強大だ。

「証拠を提示しないなんて超無粋なことはいけません。これが証拠にならないと言いたいのなら、この話は超無かったことにしますよが」

「…………いや、十分だ。十分すぎるが故に、即決ができない」

それは敗北宣言にも等しいものだった。

今潮の天秤には、二つのものが載っている。

一つは現状維持。

現状経営は良好であり、不安材料と言えば最愛により愛娘である雫と娘と言つても差し支えないほのかに危害が加わる可能性があるかどうかだ。

元々最愛を預かるにあたって最初から厄介ごとが生まれることは理解していた。

潮に足りていなかったのはその厄介ごとの規模だ。

そこらへんの企業相手ならともかく、十師族レベルとなれば想定外としか言いようがない。

現状維持というのは即ち、今後訪れるかもしれない厄災全てを自力で対処しなければならぬという意味でもある。

もう一つは最愛の話に乗って四葉家の後ろ盾を貰うこと。

どうやって手に入れたのかまで詮索をするつもりはないが、四葉真夜と連絡が取れるという事実は最愛の提案の現実味を大きく向上させた。

あとは北山家と四葉家の橋渡しを最愛が上手くやるかどうか。

もし交渉決裂の場合、北山家は最悪存在そのものを消されるだろう。

その見返りは、最強の後ろ盾。

最愛を引き取る際に潮が期待した部分だ

潮が直接交渉できないという点も含めてハイリスクではあるが、それに見合ったリターンもある。

I FはI Fだと切り捨てて現状維持を取るか、破滅か繁栄の狭間へ向かうのか。これは最早娘たちだけの問題ではない。

北山家そのものの問題だ。

——最愛によって、北山家存続の問題にさせられたのだ。

「……迷惑な娘だ」

「孤児院から引き取った時点で、こうなることは超必然です」

「ああ、そうだ。その通りだとも」

最愛は潮に合わせてそれっぽいいことを言っているだけだ。

しかし潮にとってその返答は、最愛の言葉を借りるのなら過去の清算である。

最愛には可能な限り不自由なく生活を送るように尽力してきたが、その程度で最愛という存在を抑えようなど甘すぎる考えだったのだ。

潮の目には、そう映っていた。

だがこれが過去の清算というのであれば——

潮は、自分の目を信じたい。

この娘（こ）は北山家の命運を握るかもしれない。

昔直感したその感性こそ、叩き上げの経営者が信じるに足る根拠だ。

「こちらの要求は二点だ。一つは北山家と四葉家はあくまでも対等であること。どちらが上でも下でもない」

指を立てながら、潮は条件を述べていく。

ただこれはむしろ最愛が提案している条件だ。

橋渡しをするのだから、そこに上下関係を生んではいけない。

「そしてもう一つは有事の際私が四葉家当主に直談判できる権利だ」

有事というのが何を指すのか最愛には分からない。

今後四葉家との関係が上手く行かなかつた時か、それとも北山家に危険が及んだ時か、あるいは最愛についてか。

しかしそれを抜きに考えれば、今の返答は最愛の誘いに対する是の答えと言って差し支えないだろう。

「潮には超感謝しています。雫とほのかも同じくらいに。恩を仇で返すぐらいなら、自

分の人生ぐらい超賭けてみせますよ」

人生を賭けるという重みを、本質を知らない潮も正確に測っていた。

生に執着し、死から逃げ続けている最愛が自らの命を天秤に賭けたという事実を最愛を知るものが見たら驚愕することだろう。

最愛の決意には、それほど重さがあった。

それを理解した潮は、今までの堅い雰囲気を通して温和な笑みを浮かべる。

「それならもう、何も言うことは無い。頑張っておいで——」

ポンツと乗せられた手の感触を、最愛は素直に受け入れた。

最愛は生まれてから親というものを知らない。

姉も妹も子分みたいな奴もいたにはいたのだが、気分一つで崩壊してしまうような関係性だった。

だから最愛には、分からない。

どうして潮の手の感触がこんなにも気持ちの良いものなのか、どうしてここまで安心してしまうのか。

困惑交じりに受け入れたその感触は、今までに最愛が受けたことのないものだった。

——君も大事な娘むすめなのだから。

それを人は、愛と呼ぶ。



全国高校生魔法学論文コンペティション——通称論文コンペ。

一学期が九校戦に向けて力を入れていたように、二学期は各校論文コンペに力を入れている。

派手な魔法による選手たちの舞踊もなければ表立つ人数も少ないため九校戦よりも地味な印象を受けるが、それでも力の入りようは本物だ。

特に九校戦で結果を出せない高校にとつての花形であり、意味合いとしては学習発表会よりも研究成果を世に出す学会の方が近い。

九校戦が「武」の象徴であるなら、論文コンペは「文」の象徴。

またあくまでも九校戦に比べて地味という評価を受けているだけであり、実演を伴うプレゼンテーションはやはり派手という他ない。

一高も例に違わず論文コンペに向けて元生徒会会計市原鈴音を主体に準備を進めており、多少のアクシデントは有りながらも何とか研究の完成形を作ることになった。

本日、10月30日は論文コンペ本番だ。

9時から開始であり、一高の出番は15時。

内容は、重力制御魔法式熱核融合炉の技術的可能性。

加重系魔法の技術的三大難問の一つである重力制御魔法式熱核融合炉を実現するための技術的可能性についての発表であり、たった今、達也はその発表を終えたところだった。

発表成功の証とも呼べる拍手喝采の中達也は壇上の端からホールの中を目当ての少女を求めて見渡し、そして会場内に行かないことを確認して僅かに嘆息した。

もしかしたらいるかもしれない、という曖昧な根拠で探しているのではない。

誰でもない最愛本人が今日この場に、論文コンペがやっている時間に姿を現すと言ったのだ。

姿を見せると言った日には必ず姿を見せている以上その信頼は大きいものだが、相変

わらず時間を提示しないのは最愛の悪いところか。

気持ちで言えば遠距離恋愛している彼女が待ち合わせ場所に来るのを待っている彼氏だろう。

勿論そんなことを言えば底冷えするような未来が待っているし、そもそもそのような感情を持ち合わせていない達也にとっては知識での気持ちの代弁になる、と一言付け加えられるが。

とりあえず、今この場にいないのならどうしようもない。

18時半までは論文コンペの時間だ。

たとえ18時半直前に最愛が来たところで、「論文コンペがやっている時間内には超間に合っています」とかなんとか言ってはぐらかすのは容易に想像できるし、何よりも気長に待った方が自分のためでもある。

ついでに確認したが、雫とほのかもかなり落ち着いた様子だった。

同じく最愛に今日来ることは知らされているようだが、二人が静かに待っているのに達也がソワソワする理由もない。

らしくない、とばかりに達也は壇上を後にした。

それから数分後、グレネードの爆発により達也たちはテロリスト襲撃の事実を知ることとなる。

横浜騒乱

後世において人類史の転換と評される「灼熱のハロウィン」。

その発端とも呼ばれる「横浜事変」が、10月30日15時30分にて引き起こされた。

一高発表終了と同時に横浜港にある管制ビルに車両が突っ込んだことを開戦の合図に海に面している港や要所の大半がテロリストに占領され、各地でゲリラ戦が勃発していた。

その中でも一つ、横浜国際会議場にほど近い港にてミサイルの雨に遭遇したのは、十文字家であり共同警備隊の隊長を務める克人だ。

偶然というわけではなく、そこに強大な魔法の気配があったため急ぎ駆け付けた訳だが、不幸か幸か駆け付けたと同時に携行ミサイルの歓迎を受けることとなった。

克人の反応は条件反射の域に近く、気体も通さない対物障壁と二万度の高熱にも対応可能な耐熱障壁の多重防壁を瞬時に構築する。

しかしその障壁にぶつかっただけなのは、爆発の余波だけだった。

克人はミサイルを爆発した衝撃波の飛来元へと振り向き、軍用車両に乗った国防陸軍

の姿を認める。

「スーパー・ソニック・ランチャー……」いちまるいち「〇〇の方ですか？」

克人の敬語は同じ一高に通う者なら些か不自然なものではあるが、彼とて一介の高校生。

大人の、しかも軍人を相手には敬語だつて使う。

「国防陸軍第一〇一旅団独立魔装対大隊大尉、さなだしげる真田繁留であります。我らのことをご存知とは、流石は十文字家ご当主、恐れ入りました」

克人の眉がピクリと動いた。

それだけで済ませたのは流石の精神力というべきか、伊達に十師族ではないということだが。

今回で言えば、二人とも場所が悪いというのが答えだ。

「へえ、克人つて十文字家の当主だったのですか。それは超良いことを聞きました」
その声を聞いて、今度こそ克人の瞳は大きく見開かれる。

どうしてここに彼女がいるのか、一体いつからそこにいたのか。

少なくとも、今こちらへ向かってきた戦車の後ろから出てきて良いはずがない。

「いつからそこに居た、絹旗」

「ずっと居たと言えば、超信じますか？」

絹旗という名前に覚えがあるのか、真田も最愛へと目を向けて何処か納得したように頷いている。

最愛の名前は今や知る人ぞ知る地下アイドルに近い知名度を誇っており、それこそ七草が総力を挙げて尚捕えきれないという事実と共に各所へと散らばっていた。

七草から見れば汚名が服を着て歩いているようなものだが、最愛から言わせてみれば逃げられる方が悪い。

視線は克人から、ミサイルランチャーのようなものを担いでいる真田へと向けられる。

「貴方達が噂の一〇一ですか」

「奇遇ですね、我らも噂は聞き及んでいますよ、絹旗最愛さん」

「それは達也からですか？ それとも上官からですか？」

今度は真田の眉がピクリと動く番だった。

そしてそれは克人にとつても見逃せない名前でもある。

「どういうことだ絹旗。何故そこで司波の名前が出てくる」

「私よりその真田とかいう軍人にでも超聞いてみたらどうですか？ どうせ情報統制

は超解除する予定でしょうから」

「なるほどなるほど、これは特尉とくゑいが気にかけているのも良くわかる——十文字家次期

当主殿、参りましょう」

行く先は同じ、とでも言いたげな様子の真田に克人も頷きを返す。

しかし問題児をそのままにしておくほど、克人も悠長ではない。

「絹旗、お前も一緒に来い」

「超断ります」

「拒否権はない」

「なら実力で超通してみてください。そんな余裕が克人にあるのならですが」

勿論そんな時間も余裕もないし、ここで実力行使をして逆上などされようものなら目も当てられない。

それを知ってか知らずか、挑発するかのように克人の真横まで歩み寄ってきた最愛は、

「ボソリと克人にしか聞こえない声で何かを呟き、ただただ真剣な眼差しで克人を見据えた。

予想していなかったのだろう。

その言葉に克人は目に見えて戸惑っていた。

「……そのまま伝えれば良いのか？」

「超お願ひします。私は今から超行くところがあるので」

それ以上の返答など必要ないのか、内陸の方へと歩みを進める最愛の背を一瞥しながら克人も行動に移る。

切り替えたように真田へと顔を向け、本題へと戻った。

「行きましょう、大尉」

「良いのですか？」

「問題ありません。貴官も話したいことがあるのでしよう」

「確かに。参りましょうか」

目的の一致。

二人は最愛と反対の方向、ホールの入口へと歩みを向けた。



横浜国際会議場から素早く脱出した一高の生徒は、現生徒会長であるあずさと元生徒会長である真由美の二手に分かれて避難をしていた。

あずさの方は多少のアクシデントがありながらも無事地下シエルターまで避難でき

たが、テロリストの攻撃により地盤沈下が発生、地下シエルターに閉じ込められてしまっている。

幸いなのは怪我人がいないことか、事態が収拾すれば問題はない。

一方一般市民の避難も同時に受け持っている真由美の方では現在、救助の飛行船を待っている状態となっていた。

桜木町駅前広場では現在避難民が一か所に集められており、依然としていつ襲撃に晒されてもおかしくない状況に置かれている。

鈴音指揮の元テロ部隊が来そうな二つの経路に迎撃部隊を配置して警戒に当たっているため現状被害はないが、やはり相手はテロリストということもあり気は抜けない。

事実、1チームの迎撃部隊の元には直立戦車が押し寄せていた。

その迎撃部隊は二部隊。

レオ、エリカ、深雪、幹比古、美月と、桐原、紗耶香、花音、五十里にエリカの兄である千葉^{ちばとしかず}寿和という編成だ。

鈴音の言葉を借りるなら、間違いないテロリストは攻撃を仕掛けてくるということなのだが――。

「……なあ、流石におかしくないか？」

桐原の眩きは、その場の全員が同意するところだった。

もう片方の部隊には直立戦車が姿を現し迎撃にあたっているというのに、桐原たちの元へは人影すらも見えないのだ。

全兵力を向こうに割いているとは思えないし、この道を知らないという路線も低い。寿和も警部という立場から逐一情報を仕入れているが、人命救助と護衛が優先のため戦線の情報は思うように手に入らなかった。

「もしかして本当にいないんじゃないの？」

「それはないよ花音。この道の先で間違ひなく誰かが戦っている気配がある」
「戦っている？」

それは警察ではないというのはよくわかる。

もしそうなら寿和に連絡が入ってくるだろうし、何より民間人から離れたこの地に過剰な人数を割く余裕などない。

一体誰が、と続きそんな桐原の疑問に答えられる者はこの場には居なかった。

「でもわざわざ俺たちが待ち構えるような場所に来るかね」

「それは一理あるが、それを知ったところで俺たちは下手にここを動けない。一応部下には警戒するよう伝えてあるし、七草家のご令嬢もいるなら俺たちはここを死守するべきだ」

不安の種はある。

しかしそんなものはテロという現在の状況を鑑みればいつでも植ええられるものであり、取り除くことなど不可能だ。

寿和の言う通り任された仕事は絶対順守だ。

さらに言つてしまえば、他所事にかまけている状況下でもない。

「……何体が抜けてきたみたいだ！ 来るよ！」

それは臨戦の合図。

もしこれがレオやエリカなら喜んで対応しただろうが、生憎ここにいるのは普通の魔法師と現役の警察官一人だ。

変な慢心もなければ高揚もなく、適量の緊張感を持つて相手を迎え撃つだけだった。

同時刻、異変に気が付いたのは幹比古だった。

「おかしい……」

その違和感は、攻めてくる敵があまりにも少なすぎるといふ点。

レオやエリカは来た直立戦車を倒すだけという単純な仕事のみを任されているので特に気にした様子もないようだが、深雪は後方支援に徹しながらもその違和感に気が付いているようで周囲を警戒している。

地下で遭遇戦があったことから桜木町駅付近には一般人魔法師関係なく集まっているということは明らかだ。

今回の標的が何であれ日本の武力を減らせるならやらない理由はなく、そういう意味では桜木町駅は格好の餌食なはず。

「幹比古、これで終わりか？」

「何かパツとしないわね。もう少し暴れられると思つてたのに」

エリカとレオも気が付いていたことに対して、幹比古は内心謝罪を入れてから答えた。

「ちよつと待つてて。もう少し奥まで見てみる」

幹比古が扱う古式魔法は現代魔法に比べて発動速度が遅いという難点を抱えているが、改変に対する抵抗を受けないことや威力の高さ、隠密性は現代魔法よりも優れており、九校戦のバトル・ボードで設置型の古式魔法が使われていたことから有用性はあるだろう。

今幹比古は風にはらまいた呪符によって喚起された精霊から情報を読み取っている。

自分たちが構える道の先、その角、さらには他方の警戒チームへと視点を向けていき

——さらなる不審な一報が送り込まれた。

「どういふことだろう。もう一つのチームには全く敵が来ていないみたい」

幹比古の言葉にエリカやレオ、美月は勿論のこと、深雪までもが首を傾げた。こちらに兵が来ていないだけならまだ分かる。

それだけ向こうのチームの負担が大きいのというだけであり、こちらから適宜応援を送れば済むだけの話だ。

しかしもう一方のチームに関して言えば今戦っている直立戦車二体が初戦闘と来た。

これを異常と言わず何と言おうか。

すぐさま視点を変え、先へ、さらに先へと視覚を伸ばしていき、直線距離にして2キロほど。

「これは一体……」

「吉田くん、どうかしたのですか?」

戸惑いを隠せずに呟いた幹比古に、深雪も異常事態を察知した。

しかし実際に聞いてみればなるほど、戸惑うのも無理はない。

「この先で大規模な戦闘が起きているらしい。直立戦車の残骸があちこちに広がっている」

「大規模な戦闘……ですか?」

「もしかしたら国防軍の人ではありませんか?」

「あー、そうかもな」

美月の問いかけにレオは納得した様子を見せているが、これを深雪は否と断言でき
る。

根拠がある訳ではないが、横浜国際会議場のVIPルームにて確認できた勢力図から
テロリストは横浜港から上陸して魔法協会横浜支部へと主力を傾けていた。

もう片方は桜木町駅や横浜国際会議場などがある北側に向けられているのだが、北側
の主力は海岸沿いに侵攻している。

つまりある程度内陸に位置するこの場所ではゲリラ戦こそ起きてても大規模な戦闘が
起きるはずがないのだ。

そもそも大規模な戦闘があれば音なり想子の波長なり、何かしらの情報がこちらに落
ちてくる。

「ねえねえ、そっち行こうよ！　ここらへん一帯に敵はもういないんでしよう？」

「駄目よエリカ。ここを動いたら後ろにいる皆が危険だわ——でも援軍は必要かもし
れないわね。吉田くん、今どれくらいの規模で戦っているのかわかりますか？」

「ちよつと待つて。今戦闘場所を探してるから」

距離的に戦況が不味いのであれば加勢も考えられる。

戦況を把握するという意味でも念入りに状況把握に努めていた幹比古は、ものの数秒
でついにその前線を見つけ出し、

「……まさか」

そのあまりにも見知った姿を見て、驚愕のあまり絶句する。

誰もがすぐに異常事態だと気が付ける程の反応にピリッと空気が張り詰め、幹比古が
どういう異常を口に出すのか、肅々と待った。

幹比古にとって彼女もまた過去の自分を変えてくれたうちの一人。

行方不明となっていた彼女が何故今この場にいるのか、何故たった一人でテロリスト
に相対しているのか。

そして何故、魔法が使えない彼女がたった一人でテロリストを圧倒しているのか。

その全てが幹比古には処理しきれない情報だ。

その全ての感情を簡易に、簡潔に、整理しきれる範囲で、幹比古は呟く。

「……最愛がどうして」

「えっ!？」

「最愛がいるのか!？」

「最愛ちゃん……」

「……そういうことなのね」

その反応は様々だ。

エリカ、レオ、美月は最愛がいることそのものに対しての驚きが占めており、深雪は何処か納得した表情を浮かべている。

そもそも幹比古が驚いているのは何故そこに最愛がいるのかより、何故最愛がここままで強いのかという点だ。

最愛が普段からレオをねじ伏せている点やクラウド・ボールのバカげた打球からも分かる通り、ある程度強いというのは周知の事実としてあった。

だがそれはあくまでもじゃれ合いやスポーツの中の話であり、実戦で考えるならレオやエリカみたいに得物が無い限り直立戦車と真向からやり合うのは自殺行為でしかない。

それが当たり前なはずなのに。

どうして対魔法師用のハイパワーライフルを真正面から無効化し、素手で一方的に蹂

躓っているのか。

恐らく達也という前例がなければ完全に脳の処理が追いつかなかつただろう。

幹比古が思考停止に陥るのはこの場で最もやってはいけないことだ。

まずはそう、これを伝えるべきだろう。

「とりあえず援軍は必要なさそうだね」

「ちよつとミキ！ 援軍が必要ないってどういうことよ！」

「そうだぜ！ いくら最愛が強いからって——」

「もう、敵は全滅したよ」

全員撲殺するという一部始終を見た幹比古は冷や汗が止まらないが、その様子を知らなくても敵軍壊滅の報は十分驚愕に値する。

素直に思ってしまった。

今年の二科生は達也があまりにも目立ちすぎていたため流されがちだが、九校戦とい
い今回の件といい本当にヤバイのは最愛なのかもしれないと。

そして一人の少女は最愛の報を聞き、安堵していた。

『これからも超よろしくお願ひします』

VIPルームにて達也と共に克人から告げられた、最愛の伝言を反芻させながら。

呂剛虎

今回のゲリラ戦は横浜にある魔法協会のメインデータバンクを目的としたものだ。

戦争に限らず、情報とは武器である。

たとえば現在の位置情報。

敵味方関係なく位置情報を正しく把握できているのであれば、敵が何をしたいのか、こちらは何をすればいいのかが明瞭になる。

たとえば偽の情報。

敵に正しい情報だと誤認させて偽の情報を送ることができれば、こちらは敵の動向を把握しながら敵にこちらの情報を掴ませることなく立ち回ることができる。

たとえば魔法。

国にとっての魔法とは軍事力だ。

戦略級魔法の軍事的価値、抑止力を考えれば特記するまでもないだろう。

魔法一つで戦況、情勢の優劣が一変することもある。

そのメインデータバンクとなれば当然最優先防御対象であり、敵としては最優先攻略対象でもある。

つまりそこには敵の最大戦力が投入される訳であり、例に違わず魔法協会関東支部にも少数精鋭が送られていた。

一小隊にも満たないその部隊は、幾重にも重ねられているバリケードを突破して魔法協会へと侵攻している。

その小隊の長を務めるのが、世界屈指の近接戦闘魔法師・呂剛虎。リュウカンフウ

そしてその前に立ちはだかつたのは、一人の少女だった。

「そこまでだ、呂剛虎。お前はここで倒す」

凜とした声で告げた彼女の名前は、渡辺摩利。

一高三巨頭の一人であり、呂剛虎にとつては一度敗北と二度の屈辱を与えられた相手でもある。

猛獣は本能に忠実だ。

呂は本能のまま欲求に従い、獰猛な笑みを浮かべながら摩利へと襲い掛かった。

世界屈指の近接戦闘魔法師と相對するだけあつて摩利の武装は完璧だが、呂の「ガシシ剛気功」は装甲車の機関砲すらも跳ね返す鉄壁の要塞。歩く装甲車とも呼べる呂に一人で勝てるか淡い幻想を持つほど摩利も未熟ではなく、何も対策無しに相對している訳でもない。

魔法協会支部に援軍に来た一高生は合計五人。

障害という障害もなく、一切の滞りもなく市民全員の避難は済んだのだが、魔法協会支部を守らなければならぬという使命の下集まった精鋭だ。

そのうちの一人、真由美は小隊の残党を相手しており、もう一人の深雪は魔法協会最後の砦として中を任されている。

故に呂に向けられた戦力は摩利含めて三人だけだ。

真由美を後ろに付けられたら盤石だったのだが——というのは摩利の談である。

摩利に突撃していく呂の真横から、一筋の影が伸びる。

普段ならその影にも即座に反応を見せていただろう。

ただ雪辱に燃える呂は視界しかいきようさく狭窄に陥っており、横合いから来た長大な刃によって身体を切り裂かれた——と、思われた。

横から袈裟斬りで放たれたエリカの一撃は重量10tにも及ぶ破壊力を誇り、普通の近接魔法師であれば両断される程の一撃を誇る。

しかしここにいるのは、世界屈指の近接戦闘魔法師だ。

呂はその長大な刃に向かつて両腕を掲げ、10tの圧壊を真正面から受け止める。

足元の舗装された路面が捲り上がり小さなクレーターを作る程度には威力に押されながらも、完全に受け止めてしまうのは流石世界屈指の近接戦闘魔法師と言われるのか、それともその世界屈指の近接戦闘魔法師に防御態勢を取らせたエリカを褒めるべき

か。

ただこの場合は明確な隙を作ったという意味でもエリカを褒めるべきだろう。

「せやあ!!」

エリカを敵だと認識した呂は、咆哮を上げながら近づくとレオに対しても反応が遅れた。

レオが握っている得物は薄羽蜻蛉^{うすばかげろう}。

名匠が作り上げた名刀——という訳ではなく、刃渡り約2メートル、厚さ5ナノメートルという黒く透き通った極薄の刃を硬化魔法で固定させる武装一体型CADだ。

その薄さから切れ味は他の追隨を許さない程鋭利ではあるが、刃を動かす術式は組み込まれていないため術者の技量によって左右されるCADでもある。

もし仮に縦に振り下ろされていたのであれば認識することすらできずに切り裂かれていたことだろう。

しかしレオの狙いは両足を刈り取るため下段に水平方向。

対格上に対しての戦術としては妥当な狙いどころだが、薄羽蜻蛉の使い方としては未熟としか言いようがないだろう。

水平に振られたその透き通るような黒い刃を、呂は視認することができた。

呂の身体が宙を舞う。

見た目からは想像もできないような機敏さに、しかしレオは即座に斬り上げることで対応を見せた。

しかし、その反応速度を持つてしても砲弾のような飛び蹴りを回避することは敵わない。

人体から鳴ったとは思えない異音を鳴り響かせ、レオは蹴り飛ばされた。

咄嗟に防御態勢を取っていたが硬化魔法による強化はされていない。

つまりレオは生身で大砲のような一撃を喰らってしまったのだ。

間違はなく重傷。

即死はしていないだろうが、いくらレオが頑丈だとは言っても安心できる材料など何処にも無いほどに、その威力は鮮烈だった。

その行方を目で追ってしまったのが、致命的な隙を生んでしまう。

レオを蹴り飛ばした呂はそのまま反転し、エリカに掌打を放った。

一瞬呂を意識外に飛ばしてしまったエリカは反応が遅れてしまい、左腕にその掌打を受けてしまう。

訝し気な表情を浮かべたのは、呂だった。

明らかに直撃したのにも関わらず手ごたえが全く感じられなかったのだ。

しかしバリケードに衝突したエリカの身体が起き上がらないことを確認したため、呂

はすぐさま最後の一人へと視線を向ける——と同時に、バックステップで退避を選んだ。

「ちっ！」

その舌打ちは摩利の思惑が失敗したことを意味している。

すぐに離れたため呂が感じることはないが、先程までいた場所には酩酊感を与える香りが漂っている。

これはかつて自身がやられた戦術であり、意図返しにもなっていた。

摩利も同じ戦術を取ったわけではないが、それでも距離を取られてしまえば意味を成さない。

しかし距離を取ってくれるのは摩利としても有難い状況だ。

超近距離戦が主戦場の相手に同じ土俵で戦うのは自殺行為にも等しい。同時に一度苦渋を舐めさせられている呂にとっても同じことだ。

故に呂はただ自身の強靱さを武器に突撃を繰り出す。

それに対して摩利は三節刀を取り出し、「へしき圧斬り」でそれを迎え撃った。

先ほどメスシリンダー三本分のガスを消費した摩利ではあるが、まだストックは残っている。

問題は呂にガスを完全に警戒されてしまっているため、一対一の状況下においてそれ

を使うタイミングが訪れないことだ。

対して圧斬りは刀に沿って極細の斥力場を形成して接触したものを切り裂く加重系統魔法の近接術式だ。

その切れ味は薄羽蜻蛉に並ばずとも迫る程であり、強度は光に干渉する程。

しかし圧斬りのみでは役者が足りない。

最早その巨体からでも何の違和感もない程俊敏に躲す呂を見て、内心苦笑する。

もし真由美がいたなら——そんな考えは、一瞬で捨て去った。

レオとエリカが倒れた今、摩利は自分で隙を作るしかない。

圧斬りを避けながらも加速してくる呂に対して取り出したのは、四本のメスシリンダー。

蓋を開けて漏れ出たガスは摩利の気流操作によって呂の鼻孔に向けられるも、最大限警戒をしていた呂はそのガスを飛び越えて摩利へと迫った。

それを待っていたとばかりに、摩利は圧斬りを放つ。

メスシリンダーのガスはあくまでもフェイク。

勢いを殺さずに突撃してくる姿から横に飛ぶことは無いと判断したもので、そのまま突っ切ってくるなら重畳というだけのものだ。

タイミングも完璧。

空中に投げ出されている状態であれば避けることもできない。

相手の警戒心を逆手に取り回避不可能な一撃を生み出したのだ摩利の手腕は見事という他ないだろう。

ただ唯一誤算があつたとすれば、それは高水準の近接魔法師にまでなら通用していたという点か。

「ハアツ！」

「なっ!？」

完全に虚を突いたと思われた一撃を、呂は無理矢理身体を捻じること回避した。

あまりにも人間離れた動きに硬直した摩利は、回避と同時に放たれた力だけの蹴りを脇腹に受けてしまう。

力だけ、とは言つてもその力はバリケードすらも破壊する怪力だ。

咄嗟に身を引いたことである程度威力は軽減されているとは言え、摩利の身体を吹き飛ばすには十分な威力となっている。

そして呂は以前のように油断しない。

両手を地面についてバク転の要領で体勢を立て直した呂は、トドメを刺すべく摩利へと肉薄した。

摩利は吹き飛ばされたまま体勢を立て直しておらず、しまったと顔を上げれば目の前

には寧猛な虎が自らを食い殺さんとばかりに猛追を仕掛けているところだった。最早回避も間に合わない。

援護射撃無しで挑むのは流石に無謀だったのかと思わず諦観すら浮かべる。

だがそうやって諦めたことで視界が開けたからだろうか。

摩利はその異変に気が付くことができた。

油断も慢心もなくそのままトドメを刺そうとした呂の目が突如として見開かれ、身体を直角に反転させて防御態勢を取る姿を。

そしてそのコンマ数秒後に爆音が鳴り響き、その巨体はいとも容易く吹き飛ばされる。

一瞬真由美が助けに来てくれたという思考が過るが、視線を向ければ真由美も新たな援軍に驚愕の表情を携えているようだった。

それでは一体誰が——その答えは、摩利自身の目が教えてくれた。

茶髪のポブカットに同じ高校生とは思えないほどの小柄でありながら、その実一高でも屈指の近接戦闘魔法師。

「超久しぶりですね、摩利。苦戦しているみたいなので超助けてあげます。何故私がここにいるのか、なんて超野暮なことは後にしてください」

そしてその特徴的な喋り方をする少女。

最近は一高で見かけることもなかったが、その少しの時間で忘れられるほど彼女のインパクトは小さくない。

本来ならこの場にはいないはずの少女、絹旗最愛が笑みを浮かべながら摩利を見ていた。



最愛は今、とても清々しい気分だった。

それこそそれだけ銃撃されようと、どれだけ魔法を撃ち込まれようと一切気にならない程度には気持ちが高揚している。

全てを破壊したくなるような衝動に襲われる度し難い激昂とは違う、最愛だけの感情。

それだけ四葉真夜との会談は最愛にとって大きい意味合いを持っていたのだ。

北山家は四葉家の後ろ盾を貰い、最愛も条件付きではあるが四葉家の後ろ盾を貰うことができた。

つまり最愛と達也、深雪はお互いを警戒する必要がなくなり、何の憂いも無く堂々と交友関係を深めることができるようになったのだ。

それだけでも今回の件は大成功としか言いようがない。

次いでこちらが本当の目的、四葉真夜が権限を持つ『フリーズスキャルヴ』を使った魔術師や学園都市の存在の有無。

最愛はこれがどういうものなのか、どういう原理で情報を集めているのかなど全く知らないのだが、八雲がこの数か月で集めてくれた情報の中で一番信頼が出来るだろう情報筋であり、最早これでヒットしなければ何をしても無駄だという八雲からの確証まで得られる一品だ。

それを使わせてもらうための、直談判。

支払った対価は決して少なくないが、それでも持ちうる手札全てを開示して得られた情報は――。

何もなかった。

普通ならがっかりすることだろう。

しかし最愛にとつてこれが意味することは、もうこれ以上魔術師のことを気にしてもどうしようもないということだ。

手がかりもなければこの数か月間接触もなし。

ここまでしてダメならもう何をしても無駄だと踏ん切りがつく程度には動き回ったのだ。

それならもう良い。

壁の外は壁の内側の延長線でしかなかった。

何も無いというのなら、それが答えだ。

完全にやり切ったと言える程にまで自分を追い詰めて一つの答えを見つけられた最愛は、本当の意味であの世界から解放された。

あとはもう気楽な——仮にも四葉家当主の面前ではあったが——ものだった。

最愛の能力やその知識に前々から興味を持っていたこともあり真夜との交渉は終始

最愛の主導で——真夜が譲ってくれた——進んでいき、七草家の面子を潰してくれていることを大層嬉しそうに嗤ったり、あとは達也や深雪との学園生活を微笑ましそうに眺めていたり——。

いざ終わってみれば、徒労にもほどがある道のりだ。

しかし後悔はしていない。

あの瞬間から少女はレベル4「オフエンス・アーマー空素装甲」の大能力者ではなく、北山家の養子絹旗最愛になったのだ。

もし人生で特別な日を作るのであれば、間違いない今日この日を選ぶ。

どれだけ戦車を叩き潰しても、どれだけ銃口を向けられても、それらを全て黙らせた後でも、一切心に陰りが落ちることはない。

そして今後もし陰りが生まれるかはどうかは最愛次第だ。

だからまずはその、瓦礫の中からこちらを射殺さんとはかりに睨みつけてくる知らない敵_虎を倒すことから始めてみるのも良いだろう。

周りを見てみれば、バリケードに蹲っているレオとエリカ、そして蹲りながらも一番余力が残っているだろう摩利の姿がある。

見たところエリカも意識は戻ったようだが脳震盪を起こしているのか起き上がれないでいるだけのようだ。

問題はレオ。

衝突したバリケード、そしてその付近に散らばる鮮血から分かるように、明らかに重傷だ。

それでも苦悶と驚愕を携えた表情を見せているあたり、命に別状は無いといったところか。

「……もしかして絹旗か？」

摩利の声音には、驚愕7割と苦悶3割が混じっていた。

余力があるとは言ってもかなりのダメージは受けているらしい。

「超久しぶりですね、摩利。苦戦しているみたいなので超助けてあげます。何故私がこ

こにいるのか、なんて超野暮なことは後にしてください」

「私もそこまで野暮ではないさ」

立ち上がりCADを構えた摩利はまだ戦えるという意思表示でもあった。

最愛の強さは摩利も聞いている。

猫の手でも借りたい現状にライオンが来てくれたのならそれほど心強いものもないだろう。

「とりあえず摩利は超休んでください。あいつは私が超倒します」

「無茶を言うな。私もサポートぐらいならできる」

摩利の言葉を聞いた最愛の表情が、微笑から嘲笑いへと変わる。

「あの程度一人でやれるって超言ってるんです。摩利が超出るまでもありません」
あえて聞こえるように言っているその言葉は、既に最愛の駆け引きが始まっていることを意味している。

その嘲笑も当然、呂剛虎に向けられたものだ。

呂も言葉は分からなくても煽られたという事実は正確に受け取ったのだろう。

「ウオオオオオオッ!!!」

その雄たけびが最後のゲリラ戦開戦の合図となった。

親愛なる友へ、最上の愛を込めて

側面から突っ込んでくる少女を見たとき、驚きはしても冷静に対処したつもりだった。

その肉薄してくる速度から並みの近接戦闘魔法師ではないと即断したため、無理に力ウンターを合わせることはせず防御の構えを取ったのだ。

既に回避不可能だから防御態勢を取ったというのもあるが、防御に絶対の自信があるからこそその行動だ。

しかし結果として、呂は蹴り飛ばされた。

エリカの山津波を無傷で受け止め、バリケードをもともせず壊す程の強靭さを持つ呂が小さい少女の蹴りに対して踏ん張ることもできずに吹き飛ばされたのだ。

呂のプライドを傷つけるには十分すぎる一撃だった。

「ウオオオオオオオオッ！」

呂は咆哮とともに自身のプライドを傷つけた少女、最愛に向かって突撃した。

それもただの突撃ではなく、最愛と摩利を直線上にした突撃だ。

最愛が来た時の摩利と真由美の表情から、最愛は本来この場にいるはずのない人物で

あることは容易に想像ついた。

エリカとレオの連携は素晴らしく、摩利の対応力の高さは身に染みて分かっている。しかしいくら摩利の対応力が高くとも最愛がいる以上ガスや圧斬りは使えない。

その二つが使えない摩利は脅威になり得ないため、真つ先に狙うべきは目の前の小柄な少女だと、呂の本能は結論付けた。

そしてこれは呂の魔法師としてのプライドの問題でもある。

傷つけられたプライドを癒すのは、その要因を真正面から叩き潰すことのみだ。

最愛の胴体と同じ太さであろう剛腕が最愛の眼前まで迫る。

呂を迎え撃つメンバーの中で魔法が無くても一番頑丈だったレオが一撃で戦闘不能に陥る程の拳だ。

摩利は元々距離を取る戦い方を好むため即座に身を引いていたが、最愛は未だその直線上に身体を残していた。

「避ける絹旗！」

摩利の怒号が飛ぶ。

今から回避行動に入ったところで既に手遅れだが、それでも叫ばずにはいられない。いくら最愛が強いと聞いていても、結局は高校生のレベルでしかないのだ。

真由美や克人はともかく、摩利とて三巨頭と呼ばれていながら世界規模で見れば何と

か上位勢に片足を突っ込めるか程度。

それは呂との戦いを見ても明らかだろう。

故に最愛のレベルは己よりも下だと無意識化で判断していた。

小隊の対処を終えた真由美も摩利の怒号で意識を向け、その瞬間を目視する。

目にも止まらぬ速さで繰り出された拳は寸分違わず最愛の頭上へと振り下ろされる。

何かを押しつぶすかのような鈍い音が周囲に響き渡り、舗装された道路が捲り上がった。

砲弾と遜色のない一撃をまともに喰らっている姿を、摩利と真由美は見た。

見てしまった。

「——ッ!?!」

その破壊力を示すかのようにアスファルトが捲り上がり、ドンツという衝撃波が砂煙を伴って摩利を襲った。

思わず声にならない悲鳴が二人から漏れる。

いくら最愛とは言え、あの一撃を前に無事だと過信することはできない。

最悪の想定を前に動揺を携えながら二人同時にCADを操作し始めるが、最愛の安否確認は予想外の方向で為された。

再び衝撃波が近くにいた摩利を襲う。

その発生源は摩利の眼前——捲れたコンクリートの真ん中。

砂煙を払うその衝撃と共に、人影が一つ飛ばされていった。

その人影は、見間違いでなければ呂剛虎だった。

「今のをまともに受けたら超危なかつたですね」

捲れたアスファルトの中からゆつたりと歩き少女は、呑気にそう呟く。

まるで交通事故に遭いかけた歩行者だとも言うような言い草は、日常の散歩風景だと言われても納得できるぐらいに自然だった。

だからこそ、その光景を見ていた二人は戦慄する。

あの一撃をまともに受けてなお、その姿は無傷。

摩利と真由美の額に、うっすらと冷や汗が浮かんだ。

圧倒的なまでの防御性能。

それはもしかしたら、『鉄壁』の名を冠する十文字家にすら比肩しうる——。

「ボケッと突っ立ってないで超加勢してください」

「……ッそうね」

「……すまない」

思考の海に入りかける直前に飛んできた最愛の非難により、真由美と摩利はすぐにC
ADを操作した。

最愛が来たことにより瓦解していた前衛と後衛の機能が復活したのだ。

ドライブブリザードで追撃を行う真由美を横目に、摩利は最愛の近くへと寄る。

「大丈夫か、絹旗」

「超問題ありません」

「そうか……よくあの一撃を耐えたな」

マルチ・キャストで魔法を発動させながら、摩利は思わずそう口にした。

それは本心からの称賛でもあり、一体どうやったのかという質問でもある。

「まさか。超受け流しただけです。あれをまともに喰らったらいくら私でも超ヤバいですよ」

最愛の口から出た答えは、否定だった。

ロケットランチャーよりも超強くないですか、と笑う最愛に、摩利は多少の納得と少量の畏怖を覚える。

あの衝撃は最愛が攻撃を受け止めたことで起きたものではなく、受け流された攻撃がアスファルトに当たったことにより起きたものという訳だ。

だが少量の畏怖はその納得した部分に含まれている。

最愛は果たして、理解しているのだろうか。

受け流すということは、受け止めることよりも難しいということを。



ゲリラにとって今回の侵略は想定外のことばかりが起きていた。

上手く行ったことと言えば最初の奇襲だけであり、次点の横浜国際会議場の制圧から魔法協会横浜支部制圧までの全ての作戦が失敗に終わっている。

最早ゲリラ鎮圧は時間の問題であり、後はどれだけ日本の戦力を減らせるのか、どれだけ戦力を残して本国へ帰還することができるのか、その二点に集約されている。

——だから何だと言うのだ。

自身の任である魔法協会制圧により完全孤立してしまった呂は、三人の少女に追い詰められながらも寧猛に啗う。

十師族にして世界でも高水準の遠隔精密射撃魔法を扱う七草真由美、過去二度対戦し、一度は撤退、そしてもう一度は敗北という苦渋を舐めさせられた渡辺摩利、そして最後に——

「があッ！」

「超うるさいですよ！ それと馬鹿力が過ぎますよ！」

近接戦闘という自分の領域で真正面から挑んでくる少女、絹旗最愛。

今回のゲリラにおいて最も報告が上がっており、素手で人間、直立戦車問わず全てを破壊する様から悪魔だと恐れられている少女であり、最も呂が戦いたいと願った少女でもある。

何人たりとも寄せ付けない鉄壁の防壁力と全てを破壊する攻撃力の両方を備えたB

S 魔法師。

ある意味、呂と全く同じタイプの魔法師と言ってもいいだろう。

だがそれは間違っていたと、今の呂なら断言できる。

「ぐおっ!!」

最愛の強さはその力よりも圧倒的戦闘センスにある。

全ての攻撃を受け流し、その合間に反撃を行い、さらに真由美と摩利の援護を一番受けられるよう上手く立ち回っている戦闘技術は高校生が得られる経験では成し得ない程の高度なものだ。

特に最愛の受け流し技術は歴戦の猛者と言っても差し支えの無い程洗練されており、身体が触れる前に受け流されるという不可思議な状況に呂が慣れていないのも一因となっている。

真由美と摩利の手札の多さが呂の攻撃を阻害しそこで生まれる隙を最愛が攻撃するという凄まじい連携に、呂は為す術もない——というわけでもなかった。

「ハッ!!」

「……ッ!」

最愛の受け流しは正確ではあっても完璧ではない。

受け流された力を利用して連撃を加えていけば対応は遅れていくし、力もスピードも呂の方が一枚上手だ。

付け入る隙はそこにある。

真由美と摩利の援護は鬱陶しいが、それでも無視しようと思えば何とか無視できる範疇だ。

だがチャンスは一回きり。

その一回の攻防で真由美と摩利の攻撃を受けながらも最愛を倒し、真由美と摩利に専念する。

それが呂に残された唯一の勝ち筋だった。

戦況の移り変わりは、呂から始まる。

「——なッ!?!」

右の拳を上手く受け流された呂は勢いそのままにタックルを仕掛け、最愛の見えない

鎧ごと驚掴みにした。

真由美と摩利を完全に無視した動きに一瞬最愛が動きを止めたのを感覚で察した呂は、そのまま地面へと叩きつける。

その凄まじい衝撃はアスファルトを陥没させ、最愛の全身から空気を奪い去った。

「このツ―」

「駄目よ摩利！ 絹旗さんに当たったらどうするの！」

呂が予想していた摩利と真由美の攻撃は、まさかの形として止んだ。

二人の目には今、最愛が人質として捕られていることになっている。

無暗に攻撃しては最愛に攻撃が当たってしまうリスクが非常に大きい、という嬉しい

誤算によって戦況が一変したのを呂は明確に感じ取っていた。

それならば、溜めに溜まった鬱憤をここで発散させよう。

思い浮かんでくる先のことを考えて獰猛な笑みを浮かべた呂は、時の流れがゆっくりになっていくのを感じた。

感覚が研ぎ澄まされて行くような、そんな感覚。

最愛という人質を取った以上、攻撃するべきは後衛の二人だ。

狙いを付けて一步を踏み出そうとしたその瞬間。

上から降ってくる影が目に入り、驚愕に瞠目する。

ゆつくりと過ぎる時の中で目にしたものは、既に栓が抜かれている手榴弾だった。

一体何処から——という思考には反して、その視線は迷うことなく自身が抱えている少女へと向けられた。

野生の勘が告げているのだ。

この少女が、何かをやったのだと。

見誤った、とは思わない。

視界の中で苦悶の表情を浮かべていた少女の口がゆつくりと吊り上がるのを見て確信した。

この一体どのタイミングで投げたのかは分からないが、この手榴弾は間違いなくこの少女が投げたものだ。

手榴弾は既に目と鼻の先。

その爆発プロセスが完了すれば、肉体は無事でも視覚はしばらく使い物にならない。

そしてこの三人を相手に視覚を封じられて勝てるかと言えば、流石の呂も否と答え

る。

あまりに呆気ない終わりだった。

まさか最後の決着が魔法ではなく銃火器の類になるとは、誰が予想しただろう。

何故手榴弾なんかを高校生の魔法師が持っているのか、何故このタイミングで使おうと考えたのか、一体いつ使ったのか。

疑問は多く浮かぶも、その答えを得ることはもう叶わない。

不完全燃焼な虎の眼前で、終幕の合図が光り輝いた。



視覚を奪われた呂は、あまりにも呆気なく最愛たちの手によって捕虜となった。

勿論抵抗しなかった訳ではないが、視覚を奪われた状況でこの場にいる三人を相手にするのはいくら呂剛虎といえど不可能だ。

捕虜になった呂は近くで飛行していた黒いスーツを纏った集団——一〇一旅団によつて引き渡しが行われた。

その際に何人からか強い視線を受けたが、別に最愛が何をしたという訳ではなく最愛の所業を知っているが故の興味本位の視線だ。

ただ一人、別の意味で視線を送つてきた人物はいたが、その視線に最愛が首肯を返せば何も言わずに空へと去つていった。

「それにしても絹旗さん、怪我はない？」

「怪我は超有りませんが、打撲はしているかもしれません」

「あれを受けて打撲で済むこと自体がおかしいんだが……」

「ああ、全くだぜ。俺なんて一撃で死にかけてたつてのによ」

摩利の言葉に同意を示したのはレオだった。

レオは最初から、エリカも軽い脳震盪が起きていただけで意識はあつたため途中から戦いを見ていたのだが、その言葉には多分の悔しさが滲み出ている。

特にエリカは立ち上がつてからずっと空を見上げて拳を握りしめており、口を真一文字に閉じたまま一言も喋らない。

「私は超能力で受けてるのでまだ問題ないです。どちらかといえば生身で受けてるはずのレオが無事なのが超驚きなんですけど」

「そりゃあまあ、頑丈だからな」

頑丈、で済ませてはいけないレベルだとは思いますが、そこは突っ込まない。

「それで、何でこの四人だけが超ここにいるんですか」

「私が魔法協会支部に行くつて話をした時に護衛として来てくれたのよ。他の皆は先に到着した北山さんのへりに乗って避難したわ」

十師族の一員として魔法協会支部は守らなければならない拠点だ。

最小限かつ最大の戦力がこの四人だったと最愛は解釈した。

実際は最愛が暴れまわったことで救助がより円滑に行われたためこの四人しかいなかった、というのが答えなのだが、それを知るものはこの場にはいない。

「そういうえば最愛よお、夏休み明けてから一度も学校に姿を見せていないけど、もう辞めちゃうのか?」

レオのその言葉で、エリカを含めた全員の視線が最愛へと注がれる。

最愛の復学。

今ここに最愛がいるからこそ問うことができる質問だ。

「私自身戻れるとは超思っていないのですが、実際今の状況つて超どうい感じなんですか」

「……十師族に関連することで登校が難しいと私と十文字くんが直接校長に交渉してる

から退学にはなっていないわ」

実際に真由美と克人の尽力は大きく、加えて最愛には九校戦の新人戦クラウド・ポールにて優秀な成績を取めたこともある。

この二つによってギリギリを彷徨っているだけであり、これ以上休みが続くようなら自主退学という処理が為されてしまうのは自明の理だ。

むしろよく退学になっていないとすら思ってしまう。

「だけど百山校長は権力とかを嫌っているから、これ以上は無理よ。だから絹旗さん。私ができることではないのだけど、私は絹旗さんに戻ってきて欲しいと思っっているわ」

真由美の言葉の真意を他の三人は知らない。

だがこれは真由美の本心でもあった。

苦手意識は相変わらず残っているが、それ以上に最愛を苦しめてしまった。

真由美の預かり知らぬところで起きていたこととはいえ、学校に來れない一因を作ってしまったのも事実だ。

それを糾弾されたとしても、真由美には真摯に受け止めることしかできない。

だがその心配は、晴れた声によって杞憂に終わる。

「真由美が超気にする必要はありませんよ。私が超やりたかったことは全て終わりましたから」

「で、でも絹旗さん……」

「全てのが超綺麗に片付きました。それならもう、過去のことは超どうでもいいじゃないですか」

すんなりと出たその言葉に最愛は多分の驚きを覚えるが、それも一瞬のこと。

かつて潮に言っていた過去の清算が全て終わったことの証だと思えば、それ以上に嬉しいことはないだろう。

今の最愛には本気で心配してくれる先輩や友人がいて、本気で怒ってくれる親友がいる。

いつでも帰ってきてねと見送ってきてくれる仲間がいるのだ。

「帰る……場所ですか」

「どうした？ 絹旗」

「超何でもないです」

そう、今の最愛には帰る場所があるのだ。

どれだけ無茶苦茶なことを言っても、どれだけ我儘なことを言っても、正面からぶつかりあって、それでも最後は背中を押してくれる、そんな大切な人たち。

ブロロロという音を立てながら、ヘリが遠くから飛んできていた。

そのヘリは、北山家から追加で送られてきた迎えのヘリ。

その迎へのへりで手を振る二人の姿を認めて、最愛はふつと笑った。本当にどこまでもお人好しな人達だ、と思わずにはいられない。

だがそれが非常に心地よかった。

だからこそ、この言葉は最初に届けたいと思った。

二人のために、この言葉はずっと取っておいたのだ。

それは、親愛なる友へ捧げる最上の感謝の言葉。

「ただいま、雫、ほのか」

ダイジエスト

来訪者編～邂逅と吸血鬼～

「こちら、アンジエリーナ・クドゥ・シールズさん。もうお聞きのこととは思いますが、今日からA組のクラスメイトになった留学生の方です」

そうほのかから紹介された少女は、一言で表せば金髪で深雪にも匹敵するほどの美少女だった。

留学生制度というものに最愛はあまり馴染みが無い。それでもどういものかは知識として理解している。勿論、この世界において留学生という存在は異質だということも。

魔法師とは、身も蓋もないことを言ってしまうば武力だ。いくら留学で一時的とはいえ魔法師の流出は軍事力の流出であり、日本でも非公式ではあるものの実質的な制限を掛けている。

では何故今回留学生がいるのか。それは、交換留学だからだ。

それも、雫との交換留学。

期間は三ヶ月。最愛も前日までそのことを知らず、突然アメリカに留学すると言われ

た時には驚いたものだが、達也たちはそれ以上に留学の許可が下りたことに関して驚いているようだった。それだけ今回の留学は異例なことであり、今回交換留学できた生徒の見目も相まって食堂の視線は最愛たちに注がれていた。

「タツヤにエリカ、ミツキ、レオ、ミキヒコね。私のことは『リーナ』と呼んでください」と以外は恙つがな無く終わった。

あと自己紹介をしていないのは最愛だけ。

ほのかに紹介をして貰ったのにこちらがしない選択肢はなく、全員からの視線を集めているのもあまり心地の良いものではないので前に倣なまってリーナへと向き合う。

「絹旗最愛です。超気軽に最愛と呼んでください」

「……よろしくサイアイ」

ほんの一瞬身体が揺れたのを、最愛は気付かないフリをした。



レオが襲われて病院に搬送されたとエリカからメッセージが届いたのは、一月も下旬に差し掛かる朝のことだった。

襲撃者は最近噂となっている吸血鬼。

達也たちにもメッセージが届いていたようだが、命に別状はないとのことから放課後にお見舞いに行くとのことだ。

それなら、と最愛は着替えようとしていた制服をしまい、私服へと着替える。夏休みが明けてからそのまま秋休みに入っていた最愛だったが、九校戦の活躍や保護者である潮からの口添え、克人や真由美から十師族関連で登校できない点が予め告げられていたこと、更に論文コンペ後の試験の結果を踏まえて無事復学することができた。つまりその件は完全に終わったことだ。復学に際して特段条件付けをされていない以上、最愛を縛るものは何も無い。元々休むことに対して忌避感も無ければ今更感もあるので、最愛はレオのお見舞いに行くことを即決した。

何より一緒にお見舞いに行く人数は少ない方が良い。言うまでもないが、病院に大勢で押し掛けるといふ常識の部分に関しての良いではなく、最愛にとつて都合が良いという意味だ。

病院に行つてメッセージにあつた病室に向かうと、その部屋の前にはよく見知った美少女が座っていた。

「おはようございます、エリカ」

「おはよう最愛。学校は——なんて聞くのは野暮よね」

「別に良いですよ。レオのお見舞いという建前の超サボりなんで」

「認めるんだ」

口調は軽いが、その表情に笑みはない。メッセージで聞いていた容態は命に別状はなく重体でもない、とのことだが、それにしても雰囲気も重い。

友人が入院しただけではない、何かに怒っているかのような表情。見る人によっては般若とも表現するだろうその顔は、まさしく美人が怒ると怖いを体現していた。

だがそれ以上に気になったのは、そのエリカの椅子の下。

急にしゃがみ込んで椅子の下を覗き込んだ最愛に対して、エリカが零したのは不審でも疑問でもなく感嘆だった。

「凄いね。どうして盗聴器があるって分かったの？」

「超勘です。敢えて理由を挙げるとするならエリカの雰囲気ですね。今のエリカの雰囲気は以前超感じたことがあります。その時もエリカの実家が関係していたので、今回レオが襲撃されたこととエリカの実家は超無関係ではないと考えました。つまりは警察関係です。警察はここに来る人の情報が超欲しいはずですから、隠すなら椅子の下と思いました」

「……凄いな、本当に」

最愛の推理は当たっていた。

今回レオが吸血鬼に襲撃された要因の一つとして、エリカの実家が関係している。聞いてみればエリカの兄がレオに対して吸血鬼事件に関して捜査の協力をしていたらしく、その結果がこれらしい。

実家関連で友人が入院したとなればエリカが怒るのも当然だ。

「中にある盗聴器は超壊しても良いですか?」

「最愛なら当然中のも分かっちゃうか……壊さないで、と言ったら残してくれる?」
「超構わないですよ」

「あらありがと? アイツは横にはなっているけど、起きているわよ」

「そうですか。エリカはまだ超見張っています?」

「一応ね」

見張りの許可——この場合は招かれざる客への見張りだ——も得られたことで、コンコンコン、とノックを三回ならして部屋へと入る。

返事を持たずに入るのは流石最愛と言うべきか。当然レオも準備が出来ていなかったようで、エリカの言った通り横になっていた。しかし最愛が部屋に入ると同時にすつと起き上がっているあたり、容態は思ったよりも軽いものだということが分かる。

「最愛か。学校休んでまで来てくれたんだな」

「サボりの口実としては超上等でした。ありがとうございます」

「おいおい、と苦笑するレオ。だが吸血鬼事件の被害者は基本亡くなっていることを考えると今こうやって笑っているのは奇跡と言つて良いのか、それとも何かしらの策を工リカの実家から授かったことによる必然なものか。確認したいこと、聞きたいことはいくらでもあるが、その前に一つやる必要がある。」

「何とも無さそうで超安心しました」

「恥ずかしいところを見せちゃったな」

「いえいえ、むしろ襲われて生きてるだけ超十分です」

「そりゃあ俺も無抵抗つて訳じゃなかったが……何でずっとキョロキョロしてるんだ？」

最愛の言葉だけ見ればレオの安否を気にしているととても友情にその実情は部屋に入った直後から部屋の中をキョロキョロと見渡すただの不審者。言動の不一致を体現していると言つても良いだろう。

徐に靴を脱ぎ始めた最愛は、そのままレオのベッドへと乗り込んでそのまま立ち上がった。最愛の私服は冬ということもあり上半身は多少着膨れしているが、下半身はミニスカートに黒のタイツとこの世界においてはあまりにも大胆なものだ。

そしてミニスカートという状態で立ち上がれば元から見えそうなものがさらに見えそうになる訳で、顔の前に突然現れたクラスメイトの脚に対してレオは「ちよっ!？」と焦りながらすぐに顔を背けた。そんなレオの配慮に気が付きつつもスルーした最愛は、カーテンレールの上にあるものを確認して一言。

「盗聴器はここですか」

「そうだけど!・とりあえずベッドから降りてくれ!」

「……へえー?」

その声音から何か妖しい雰囲気を感じ取ったレオはこれから起こりそうな面倒事に思わず顔を顰める。今までの経験則から、最愛のこの声音は何かヤバい警鐘を鳴らしていたのだ。しかし現実はもつと物騒(?)なものだった。

「盗聴器、もう一個ありますよね」

「いや、オレも一個しか場所を聞いていないな……」

「なるほど——超失礼しますね」

納得しながらベッドから降りた最愛は、レオに断りを入れてから今度はベッドの下に潜り込んでいった。そこまで広くは無いはずだがその体型故すんなりと入っていた最愛は、お目当てのものを見つけたのかもの数秒で出てきた。

「やっぱりベッドの下は超鉄板ですね」

「まさかベッドの下にも盗聴器があるのか？」

「はい。でもこの感じだとこれ以上は超無さそうですね」

「いや、それは知らないけど」

むしろなんで分かるんだよ、というのはレオだけが思った感想では無い。

「それで盗聴器はどうするんだ？ 外すのか？」

「いえ、ただ盗聴器を仕掛けるなら場所を超考えた方が良くないとエリカのお兄さんに超言っておこうと思って。どうせどこかで超聞いているんですよね」

「……オレは改めて最愛の恐ろしさを痛感したぜ」

レオの声色には少量の呆れと多分の本音が混じっていた。しかし当の本人はというと、まるで心外とばかりに驚いた表情を作っている。

「吸血鬼に頭でもやられたんですか？ 私はそこら辺にいる超普通の女子高校生です

よ」

「普通の高校生……？」

その瞬間レオの脳裏に過ぎる、世界屈指の近接魔法師と互角に戦いを繰り広げる自称普通の高校生——の姿。流石にそこまで口にするという野暮なことはしないが、それでも最愛には何を言わんとしていいるかが理解出来たのかムスツとした表情を浮かべる。

「そもそも、普通の高校生に見つかるような場所に超置いてあるのが悪いです。超定番

じゃないですか、椅子やベッドの下にカーテンレールの上って。要は超音が拾いやすい場所ですよ。そんなところに置いてあるなんて超見つけてくださいって言うてるよ。うなものです」

「普通の高校生はそもそも盗聴器なんて気にしないだろ」

「超うるさいですよレオ。病院送りにされたいんですか？」

「もう病院送りにされたんだよ。恥ずかしいから言わせなしてくれ」

そういうえばそうでした、とケラケラ笑う最愛にレオはため息を吐く。病み上がりはこのテンションはきつい物があるのだろう。それでも付き合ってくれているあたり、レオの優しさが伺い知れる。

「まあ冗談は超これぐらいにして——レオ、吸血鬼と超戦闘になった時、他に誰か居ませんでしたか？ 覚えている限りで超大丈夫です」

スーツと空気が張り詰めていくのを、レオは感じた。最愛の雰囲気が変わったのだ。見た目上は笑みが消えたただけなのにも関わらず、病室内の空気が急変したことにレオも思わず表情を硬化させる。ここが最愛の凄いところなのだ。あれだけ冗談を言い合っていたのにも関わらず、本題に入った瞬間しつかりと雰囲気が出ている。公私の分別が出来すぎているのも考えものだな、とは達也の言だ。

「吸血鬼を除くなら二人だな。一人はベンチで倒れていた女の人。たぶん吸血鬼にやら

れた魔法師だと思う。警部さんに聞いたらこの病院に入院しているらしいぜ」

警部さん、というのはエリカの兄のことだ。最愛も知識としては知っていたし、先程エリカから聞いたばかりなので敢えて聞き直すことはしない。

「もう一人はどうでした？」

「オレも意識が落ちかけてたから詳しくは覚えていないけど、赤い髪に金色の目以外は仮面で隠れていたような気がする」

「赤い髪に超金色の目をした仮面ですか……」

夜には結構目立つな、というのが最愛の所感だ。

「吸血鬼は超特徴がありましたか？」

「目の部分だけ切り抜かれた白い覆面で、何回か殴りあつてただけど、掴まれた瞬間に何故か力が抜けたな」

「力が抜けた、ということは何かしらの超魔法ということでしょうか」

「そこまでは分からねえ。だけど——」

一旦言葉を止めたのは、思い出せないというより確信が持てないという感じが強かった。

「——女だったと思うんだよな」

「レオと超殴りあつてたのが女ですか？」

信じられない、とばかりに最愛は驚いた。

レオといえは呂剛虎ルーガンフーの攻撃に素で耐えられる、魔法師全体でも屈指のフィジカルを有した近接戦闘魔法師だ。そのレオと殴りあえたとなれば、総合的な強さはもしかしたら呂剛虎に届くかもしれない。

特に今回は詳しい情報がないため、非常に厄介な相手だ。

「……………？」

ふと、部屋の雰囲気様が異様なことを最愛は感じた。

張り詰めた雰囲気様がホトホトと解れていくような、そんな感覚。誰かが襲撃に来た訳では無いだろう。エリカが入口にいる以上、滅多なことで出し抜かれることはないし、何より臨戦という雰囲気ではない。

では大本は何処だろう、と視線を移していけば、その雰囲気を醸し出している大本は最愛の目の前にいた。

「……………」

なんとも言えない表情で最愛を見るレオ。

その顔には「お前がそれを言うのか？」と書かれているのがよく分かった。

最愛は女性がレオと殴りあえていたという事実^{事実}に結構本気で驚いていたのだが、そのなんとも言えない表情を見て意を察し、目尻を下げる。

「何ですか。超何か言いたそうじゃないですか」

「……いや、なんでもない」

今のレオに「俺と殴りあえる女なら目の前にいる」等と言う口は存在していない。そんな口が存在しなくなる程、痛みを身体に教えこまれてきたのだ。最早最愛には下手なことを言わない、というのがレオの中で鉄則化してきている。

被食者と捕食者。

あつという間に構築されてしまったその関係性は、病室に嫌な沈黙を引き起こす。

その沈黙の外側から、足音が遠ざかっていった。

ドアの前から聞こえ始めたそれは、恐らくエリカのものだ。

予期せぬ来客か招かざる客か、それとも招待客なのか。

その答えは、三度のノックと共にすぐに部屋へと入ってきた。

「話し声がすると思つたら絹旗さんだったのね」

「学校はどうした、絹旗」

高校生とは思えない威厳を持った敵のような男性とフワフワした巻き毛のコケティッシュな女性。レオの病室に姿を現したのは、前部活連会頭の克人と前生徒会長の真由美だ。

「学校は超休みました。学校と友人なら友人を超取りますから」

「……そうか」

何故ここにお前がいる、と言外に告げられた最愛は、しかし敢えて素直に答えることで突き返した。

克人も言葉だけ聞けば納得しているように聞こえるだろう。しかし克人の表情は最愛の言葉に全く耳を貸してないのが分かるほど最愛を睨んで——見た目からそう見えるのではなく、本当に睨んでいる——おり、信じていないことが簡単に分かった。根拠がない以上本人が言ったことでしか判断ができないため、言及を控えているだけなのがよく分かる。克人から視線を外して真由美に向けてみると、こちらは逆に一切表情を変えておらず、病室に入った時の笑顔を携えたままだ。

外面だけは超相変わらずですね、と心の中で毒吐いた最愛は、ふと視線を下げて真由美の右手を見た。見たというより、何故か右手に視線が吸い寄せられて行つたのだ。

その右手には左手が添えられており、まさしく淑女のような立ち振る舞いをしてい

る。しかしよく見てみると、左手が添えられているのは手の甲ではなく手首の上だ。その下には、既に起動済みの汎用型CAD。

笑顔のまま、真由美は起動済みの汎用型CADを操作する。

同時、最愛も起動済みの特化型CADを取り出し、カーテンレールへと向けた。

両者の魔法発動はほぼ同時。

亜音速のドライアイスがカーテンレールの上にある盗聴器へ向けて発射されるが、盗聴器に当たる直前でキラキラと輝きを残しながら霧散した。

その様子に苦言を呈したのは克人だ。

「……どういふつもりだ、絹旗」

「どうも何も、私はエリカに盗聴器を超壊さないと約束をしたのでそれを超守っているだけです。逆に超聞きますが、病室でいきなり魔法を使うなんてどういふつもりですか」盗聴器が破壊されることまで読んでいてどういふつもり、なんて聞くのはなんとも白々しいことだろう。レオですら克人と真由美が来ることを予想し、盗聴器を壊されることまで予想して処理速度を補うように普段は使わない特化型CADを持ち込んでおり、さらには起動済みにしていた最愛が一步上手だったと思っっている。

だが現実には、もつと単純だ。

最愛はレオが襲撃されることを警戒して特化型CADを起動済みにしていただけであり、真由美の魔法に対処出来たのは脊髄反射に等しい。

つまるところ、偶然だ。

しかしその偶然すらも必然に思ってしまうほど、最愛の実績は凄まじいものなのだ。

「あまり人を巻き込みたくはないの。絹旗さんなら分かってくれるわよね」

「言いたいことは超理解していますよ。でも今回の件、そちらから見たら私も超関係者じゃないんですか？」

グツと真由美の口が強く結ばれたのは、誰の目から見ても明らかだった。だからこそ、今回の被害者であるレオは口を挟まずには居られない。

「横入りしてすみません。最愛、どういうことだ？」

「また今度説明します——まあ、別に壊したいなら超壊しても良いですよ。その場合こちららも盗聴器の憂いが超無くなるので、友人の誼でつついっつい色んな事を超喋ってしまうかもしれませんけど。次壊そうとしても超止めませんよ」

「……本当に貴女って人は嫌な性格してるわね」

「真由美に言われるのは超心外です」

「そこらへんにしておけ。今話すべきはそんなことじゃない」

売り言葉に買い言葉とはまさにこの事だろう。終わりが見えないと判断した克人はCADを操作し、障壁魔法を展開する。当然カーテンレールは障壁の外側にある。

「ベッドの周りに障壁魔法を張った。これで盗聴器に聞かれる心配もないだろう」

「ありがとう十文字くん。これで本題に入れるわね」

障壁魔法は音に限らず物理的な障壁にもなる。つまり最愛のことは諦めたのだろう。居て欲しくないのは事実だが、七草家にとって今回の間接的な理由の一つに最愛がい

るのもまた事実。実際のところ真由美は被害者と言っても過言では無いのだが、それは真由美も知らない事であり今後も知ることがない真実だ。

最愛のことはまた後にするとして、今は間近の話題からと話を切り出そうとした真由美は、しかしまたもや話を遮られた。

「ああ、いえ。超手間取らせてしまいました。別に居座るつもりはありません。超収穫はありませんでしたし」

「……え？」

その言葉に、その場にいた全員が一定の反応を示した。

真由美は思わず聞き返してしまいうぐらいに驚いており、克人は最愛が得た収穫という言葉に目を細め、レオは話の流れが掴めていないのか頭に疑問符が浮かんでいる。

最愛の言う通り手間取らせたのは最愛の方なのだ。

しかし最愛が出ていくというのなら、克人と真由美に止める理由などない。

「その方が超都合が良いですよ。居て欲しいのなら超残りますけど」

「いや、気遣い感謝する。邪魔をして悪かった」

「それは超お互い様ですよ克人」

本当は克人が謝る筋合いなど無いのだが、形だけでも謝礼を述べるところは流石十師族に名を連ねる者と言うべきか。

また来ます、とレオに一言告げると、克人は障壁魔法を解除。カーテンレールの上に
ある盗聴器は壊しても良いことを伝えると、今度こそ最愛は病室から出ていった。